
デュエリスト アシュマ 第十話 無想剣

高岡 佳司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デュエリスト アシユマ 第十話 無想剣

【Nコード】

N5744F

【作者名】

高岡 佳司

【あらすじ】

野望、陰謀、権謀術数。アシユマは殻兵器の光の中で命を失ってしまう。アーチェルは立ち上がることが出来るのか？人類は予言の書通りに滅亡してしまうのか？SF剣戟冒険アドベンチャーここに完結。デュエリストアシユマ『第十話無想剣』ただ今参上！

主な登場人物

アシユマ・アトー

この物語の主人公。

本名をアシユマ・アトー・ショアク・アシユオン・ヒョウエ・シバと言う。

イレギュラーナンバーと呼ばれる人造人間で、七賢人によって造られた。

年の頃は二十三丁四。

生年月日がはっきりしない為年齢があやふやだ。

ザンバラにきられた、少し濃い目の栗色の髪の毛。

しなやかで猫科の動物を連想させる鍛えられた肉体。

彫の深い端正な顔立ちに、髪の毛と同じ色で、深い影と虚無感を湛えた瞳。

どこか暗い影を刷いている、美形の青年。

謎の多い刀、『万人殺しの妖刀・鬼虎』を遣う。

先のイルドリア武道大会で非公式ながら優勝し、先日ドラステイ
ス共和国主催の武芸大会の優勝者と対戦し勝ちをあげ、これも非公
式だが、武器を扱う武芸者としては世界一となった。

世界屈指の剣士である。

アップルトン王家のアーチエルとは将来を誓い合った仲。

恋人同士でもある。

アーチエル・アップルトン

栗色の長く伸びた髪の毛に、栗色の潤んだ大きな瞳と、濡れたよ
うな桜色の唇を持ち、黙っていれば人形かと思まごうばかりの美形

の少女。

レキシタニア王国の王女である。

ただ、人形のようにと言われれば冷たい印象を与えがちだが、見てみれば温かみがあり優しい感じのする少女で、事実、その通りの物を持つ少女である。

破壊の権化『バヴェル』のキー。

それが故に様々な勢力からその身を狙われる。

弱点といえば、戦いにおいて敵味方構わず、極端なほど血を見るのと死人が出るのを嫌う事。

最近では自分も戦闘に出る機会が多くなった為か、多少皆の行動も、分からないではなくなったが。

また、アシユマと恋仲であり、将来を誓い合った仲でもある。

オルバニアン・マグマイヤー

本名をルーラン・ノリトレアと言う。

ノリトレアの正式な王位継承者なのだが故あって今は黒龍号で寝起きをしている。

刀と銃、両方にいいセンスを発揮し、また、魔導機兵に乗らせれば右に出るものがないほどの腕を見せる。

また、好むと好まざるとに関わらず、喜怒哀楽のはっきりした性格である。

ヨデイ・ヨフル

サイコ・フライヤー『黒龍号』の艇長。

年の頃は二十六。

紺碧のストレートのロングヘア、細面でどこか人懐こい顔立ちを

している。

この若者普段は馬鹿なことばかり言うが、時々剃刀を思わす鋭い事を言つては皆を驚かす。

その正体は、盗賊『ダスト・モンキー』。

しかしのみならず本当の顔はアルステイン・ノリトレア。

ノリトレア王国の王子であり、オルバニアンの義兄に当たる。

しかし正体を知っているのは、アシュマとオルバニアン、そしてアベニ爺のみである。

アルミナ・ラ・シア

言いたい事は、はっきり言う。

口の悪いのが玉に瑕。

戦利眼なる特殊な能力を持つ、身の丈程の大剣使いの少女である。顔かたちは目鼻立ちがはっきりとしていて、きりつとした美少女である。

眼帯を取つて両目が開けば赤い眼と黄金に光る眼が見れるはずである。

女賞金稼ぎで、別命『隻眼のアルミナ』

リイナとは喧嘩友達でもある。

エファール・ソーフア

年齢は二十三。

アシュマを好いていた事もあるが、今はヨデイの事が好きで好きでたまらない様。

恋人同士でもある。

剣の実力は折り紙付き。

最近密かに鞭使いだった事が判明。
ただし実力の程は分からない。

玉に瑕なのが怒りに任せると周りが見渡せなくなると言う事。
借金癖があること。

そして酒癖が悪い事。

これさえなければ優しく美しい女性であると言えよう。

『閃光のワルキューレ』とは彼女の事である。

キュポア・アップルトン

レキシタニア王国の第二王女。

アーチェルの実妹。

姉のアーチェルより二つほど年下。

姉に似ているところは少ない。

ただし目鼻立ちにははっきりしている、これもまた美形。

特に特徴的なのが大きい栗色の瞳。

髪の毛はいわゆるプリンセスカットと呼ばれるボブヘアで色は
姉より濃く、黒に近い、栗色。

常にお転婆だが、時に弱い部分も見せる。

物事をずばずば言うが、心根は優しい少女である。

多少我侭な所もある。

リイナと歳が近い事もあり、彼女とは非常に仲が良い。

リイナ・アナン

アーチェルの級友。

体に似合わず大振りで鉈の様なククリを使う。

正体はアシユマと同じイレギュラーナンバーでコードネームは『

蜘蛛』。

それ以外はまだ幼さの残る美少女で、とてもそんな事が出来るとは銀龍スタッフのなかでも、思っていないだろう。

この少女、二重人格であり、優しい可憐な少女の時もあれば、寡黙でそのくせ口を開けば口が悪く性悪に見えることもあるが、性根はとても優しい。

アルミナとは喧嘩友達でもある。

アールヌー国のレンヌ王子とは中々良い仲であるが、そのことからかわれると泣く。

アン・デボン

アーチエルより三つ年上。

いわばアーチエルの姉的存在。

元々はアップルトン家のメイドとして働くが、数奇な運命からかアーチエルと共に戦場にも付いて回る不遇な人。

ただし本人はアーチエルのお側にいられるだけで幸せらしい。

アベニ・ロー。

以前はどこぞの国で草スパイをしていた。

歳は老いているが、腕は確か。

今は、故あって黒龍号にいて、ヨデイ付きの間者になっている。皆に言わせれば影が薄いのだが、それが忍びの者にとっては眼目であるといって喜んでいいる。

色々と重宝しているようだ。

最近アシユマ直伝の秘剣・朧霞と秘剣・空蝉を使い多大なる戦果を上げている。

アリシアナ・コクレト

黒龍号の整備士。

メカニックのスペシャリストである。

程よく鍛えられ、引き締まった肉体を持っている。

鼻筋の通った中々の美人でもある。

軍曹。

リン・シャオリン

オロ・エバス、クーロン支店の総責任者。

エドス・アップルトン

レキシタニア王国の国王。

アーチェルの父。

エースティール・アップルトン

レキシタニア王国の第一王子で第一位王位継承者。

アーチェルの実兄。

オロ・エバス

汎用型電脳装置などの基本OSを作って財を成し、今では、鉄鋼や貴金属、造船や飛行機、果ては魔導機兵の様な兵器なども取り扱っている豪商。

今や世界の五パーセントは彼の財力とまで言われ、唯一七賢人と対等に渡り合っていける数少ない人間。

アリア・エバス

濃い黒で少し巻き毛で光沢を放つ髪の毛を持ち、瞳は黒く二重の瞼には長いまつげを湛え、唇は濡れたような光沢を放ち、エキゾチックな感じのする美少女。

オロ・エバスの実妹。

テロリストに拉致され陵辱されるといふ悲しい過去を持つがアシユマの治療を以って記憶を消された。

オロはいたく彼女を可愛がる。

ルーラン・ノリトレア

ノリトレア王国前国王。

実際はガルマインに仕立て上げられた偽りの王。

顔かたちがオルバニアンに似ているものの線の細い少年である。

が、その実は、オルバニアンとは双子の妹、本名は『サーナリア・ノリトレア』。

女性であり中々の美形。

モ二八・ノリトレア

齡十歳のノリトレアの女王。
ガルマインの道具となり果てている。

フェリア・ファソーイ。

ノリトレアの名家ファソーイ家の姫君。
レキソタニアのファソーイ家といえば、王家に忠実な事で知られているが、いざと言う時には命を懸けて王に諫言する家訓で知られている。

アラタ・ファソーイ

ノリトレア王国の元老院の議員。
ガルマインに反抗。
フェリアの父親。

ディーヌ・アデュニ

アールヌー国の第一王子。
王位継承権は自ら放棄。
未来を見通せる特殊な力を持っている。

レンヌ・アデュニ

アールヌー国の第二王子。
王位継承権は第一位。

年齢以上に子供っぽい。

サーズー・ウィー

アールヌー教の師父。

また、アデユニ、レンヌの師。

クララテリア・アルサ・エミルトン

修理船『トーガイア』の管理官。

ベビーフェイス、見事なボディライン、豊かなバスト、三つ編み、メガネとロリコン趣味の者達には堪らない姿形をしている。

規則にうるさい。

23歳、大佐。

ラフェア・アモン・トーフイア

27歳、大佐。

修理船『トーガイア』の艦長。
職人気質。

よくクララテリアと衝突する。

ミアネ・コースティア・イチモンジ

補給間『ゴハク』の管理官。

24歳、大佐。

程よくだらけてる。

クララテリアとは幼ない頃からの付き合い。

エメティア・レノン・プロフィール

補給船『ゴハク』の艦長。

おっとりしている。

22歳、中佐。

ミス・ケリー・サトウ

学園都市スコラの校長。

敏腕だが規則に厳しい。

ミカ・タキオ

アーチェルの級友で親友。

心根の優しい少女。

ノブ・タキオ

ミカの父親。

ちよつと助平。

ヨシ・タキオ

ミカの母親。
良識派。

ミカの祖母

ミカの祖母。

サクラコ・セタ

アーチエルの級友。

イーハンの家老の娘。

エミル・フォルテ

アーチエルの級友。

エディアード・ウルフィ

キャサフローレン付きのナイト。
大剣を遣う。

イレギュラーナンバー零号参考。

ドクワント・ネルゼイ警部、

国際警察機構の警部。

下はジーンズにスニーカー、上はTシャツにミリタリージャケットと警部と言うわりには意外とラフな格好をしている。

怪盗『ダスト・モンキー』捕縛に情熱を燃やす。

ビッシュ・ノマン

アシュマの古い剣友。

今回アシュマをイルドリアに誘ったのは彼。

フィナ・エマル

ビッシュ・ノマンの弟子。

アーヌ

鬼虎でも斬り裂けぬ硬い鎧を身に纏い、アシュマを付けねらう七賢人配下の剣の達人。

その腕はアシュマと拮抗する。

七賢人四人衆の内の一人。

アシュマ最大のライバル。

ウルク

七賢人四人衆の内の一人。
大剣遣い。

カフィール

七賢人四人衆の内の一人。
細身の剣を遣う。

カシア

七賢人四人衆の内の一人。
女性型。
鞭を使う。

アビス

イレギュラーナンバーズ統括者。
権謀術数に長ける。

蝙蝠

イレギュラーナンバー 零零四号。

蠍

イレギュラーナンバー 零零五号。

蛇

イレギュラーナンバー 零零九号。

ムラサキ

ガルマイン配下、暗殺集団『影の者』の内の一入。

序節

人の戦い。

神人の戦い。

血脈を同じくする者の争い、大地を血で染める事になるだろう。
これは嘆かわしい事である。

招かれざる者に蹂躪される事、これは辱められる事に等い事である。

人の血を天秤で量り売る。

これは人の所業にあらず。

この間、偉大な龍はその眼を潰される。

祝福されぬ命の者、地上に災いの黒い太陽を以って大地を抉る。

大変多くの者を亡者にさせる。

なんと恐ろしい事か。

おお、神よ、私はそれも見た。

嘆かわしい事である。

この世にあつてはならぬ光である。

これで終わりではない。

これが始まりである。

円形の大陸に住まうもの、既に幸福では無い。

その都に住まうもの、半分はもう福音を聞けない。

人々は炎によって半分を失う。

また、その人、巨大な亀に乗って神の都を潰そうとするだろう。

これ、はなはだ不忠な事である。

一時、地上に黒き光を見る。

私はそれを見た。

これはちいさいこそすれ人々を覚めぬ悪夢に導くものである。

その光こそこの世に有ってはならぬものである。

太陽の影で

我らが故郷、戦場になるであろう。

我らが故郷をそれはまさに土足で踏みじめる行為である。

一頻り蹂躪された後、悲しきかな、兄弟と相見えなければならぬ。

その間、祝福されぬ命の者、敵の軍勢の半分を押さえる。

祝福されぬ命の者、既に鬼を携えており、対になる者、鬼を携えて来る。

この時、祝福されぬ命の者と対になる祝福されぬ命の者相見えるだろう。

この一対、空に予兆を残す。

私はそれを見た。

はなはだ不吉である。

このとき知恵の半球が出現するのを見た。

これにより我らが兄弟の諍い一旦は治まるだろう。

されど将来にわたり禍根を残すものである。

美しい処女の獵人と、愛と美の女神と、軍神と、大神と、農耕の

神。

それらが一つに重なる時、それは秘密が明かされる時。
対の鬼の秘密が語られる時。

しかしその秘密を語る時はあまりに短い。

その前後、龍は相反する痛みに身を囚われ、聖廟、鷲、鎌等は、
祝福されぬ命の者による辱めを受けるだろう。

この日、又、天空に大地があつて、地上の人々、大層恐れ戦き混
乱する。

あの黒き太陽がこの世を救うとはこれ皮肉である。

嗚呼、私はそれを見た。

幾夜に渡りあの黒き光の正体を掴まんと、黒き卵を欲するものが
いる。

幾つかその黒き卵奪われる。

私はそれを見た。

祝福されぬ命の者、黒き卵を潰す為、世界中を捜しまわる。

その間、聖なる学び舎、鷲に襲われる。

学び舎の者、祝福されぬ命の者に助けられ大事には至らない。

この間一人の黒き野心家一人大地に立つ。

私はこの人を見る。

甚だ傲岸不遜な人である。

鷲、これを認めず爪と嘴でこれを喰らわんと欲するだろう。

此処に祝福されぬ命の者、壁になり、盾となり、矢となる。

その後、もう一人の黒き野心家、鷲の為に敵を打ち倒す剣になる。

私はこの人も見る。神の人に近い間柄である。

聖廟もこれに立つが、頭を射抜かれ大事に至る。

嗚呼、なんと私はそれを見た。

聖廟の信徒激しく怒り、世界を震撼させる。

二人の黒き野心家相容れず、ぶつかるだろう。

この時も祝福されぬ命の者、一方の野心家の盾となり、矢となら
ん。

病に伏せるもその役目は果たすだろう。

その働き悪魔の如し。

私はそれを見た。

その後一人の野心家もう片方を追いかけてこれを撃ち滅ぼす。

黒き野心家鷲の巢の中からひとり立つ。

ついに月へと至る道を人は見つけるであろう。

祝福されぬ命の者、われの僕の末裔どもを襲う。

祝福されぬ命の者の勝ちとなるだろう。

その後、黒き卵世界に散らばる事になるだろう。

嗚呼、これは有ってはならぬ事である。

祝福されぬ命の者、その光に飲み込まれこの世より消えさせる。

驚くかな、もう一人の祝福されぬ命の者現れし時、祝福されぬ命
の者この世に出現す。

私はそれを見た。

世界に散らばりし黒き卵の所為により、世界より戦船集いて争う。

これ世界の行く末占う戦である。

しかしこれの勝者なし。

この間に龍は頭がすげ替わる。

またこの間に日もまた頭がすげ替わる。

この前後に天変地異あり。

祝福されぬ命の者と、祝福されぬ命の者との戦いがある。

私はそれを見た。

破壊の権化と祝福されぬ命の者との戦いがある。

その間、神人、天高く月におられる。

私はそれを見た。

神人、祝福されぬ命の者と月にて相見える。

祝福されぬ命の者、さながら悪鬼の如し。

私はそれを見た。

巨大な閃光が見えた。

是にて新生人類は滅亡する。

私はそれを見た。

我が予言もこれを以って成就する。

神は全てを見通せたり。

かくあるべし。

ターシャーン。

アヘイビアとの戦いから一月あまり。

オロは、オロ・エバス国として独立を勝ち取った。

国元連もこれを認め、晴れて独立国としての権利を得た。

オロは結局敗戦国アヘイビアに何をしたかと言つと、多額の賠償金の要求と、アヘイビア中に散らばる社員（国民）の生命の保証、店舗等の土地のオロ・エバス国への帰属、インフラ整備等はアヘイビアに賄って貰う事などを要求した。

ユニークなのは社員が国民と言つことだ。

これからは、オロはワンマン会長ではいられなくなった。

社員が一挙手一投足を見ている

下手をすれば選挙で会長職を下ろされかねないのだ。

しかしそれ以外は代わり映えがしなかった。

オロ・エバスの何かしらの店舗での治外法権化などは、以前から半ば暗黙の了解としてあったし、その店舗の防衛の為の警察等の武装も以前から大っぴらにしてあった。

お互い昔からいい意味での不干渉、非介入が暗黙の了解であったのだ。

兎にも角にもオロはその点大らかだった。

だから、アヘイビアの月着陸船計画も黙認してきた。

そして、いまそれが実現されようとしている。

相変わず、裏に七賢人の臭いをふんぷんとさせていたが、オロは意に介さない。

例え何があっても、勝つ自信が出来たからである。

だが、あからさまにオロに挑戦してくるとなれば、話は別だ。

どんな勢力であろうと叩き潰す。

それが、今のオロの信条だった。

それにしても随分と早急な計画実施である。

まだ敗戦から二週間とたっていないのに、である

それだけに、この有人宇宙船計画はその様な規模の物ではない事が伺える。

全てにおいて桁が違っていた。

その企てもこれまでにはないスケールの物となっていた。

が、その全容を知るのは少し後になる。

そして、『サイコ・フライヤーを着陸船』とした有人宇宙船は発射された。

オロは知らない。

それがルーンの黙示録の最終章にある、

『ついに月へと至る道を人は見つけるであろう』

と、言う一節がこの有人宇宙船のことであると。

これが、最終章の始まりである事を。

そして、とあるカタストロフィーに向けて大きな流れが動き出し

たことを……。

第一節 鬼虎とアシユマの正体

アーチエル達はこの年末年始をミカの実家で過ごすことになった。
ミカの厚意からである。

ミカの実家は農業を営んでおり、屋敷だけは大きかった。

これなら大所帯で押しかけても大丈夫そうであった。

裏手には山が広がっていた。

家族構成は両親に祖母である。

『おどさーん、おかさーん、ただ今あ』

『……はい、はい、はい、はい、あんね、ミカ。便りもよこさねで、
帰るなら帰る、帰らねえなら帰らねえで連絡さよこさんと駄目っし
よ』

ミカの母親らしき女性が対応に出た。

『おかさん、今日は友達連れて来ただ』

『ともだち？』

『アーちゃん、どうぞ』

「どうも、お初にお目にかかります。アーチエル・アップルトンで
す。本日はお招き頂き有難う御座います」

『おかさん、アーチエル・アップルトン様だべ。初めましてっ』

『アップルトンってレキシタニアのお姫様の？』

『んだ』

『ひえっ！』

そういつと、母親は腰を抜かし、その後いったん奥に引っ込んで
しまった。

しばらく奥で何か喋っていると思ったら、すぐさま中年の男性と
年老いたがまだまだ元気そうな老女が出てきた。

『こ、これはまた、アーチエル・アップルトン様で？ 申し遅れま
しただ。ワスが、この家の主ノブ・タキオにご座えます。本日はこ
んたらこ汚ねえ家さ来ていただいて、きよ、きよ、きよ、きよ………』

『恐悦至極に御座います』

『それだ！ その恐悦至極に御座えますだ』
そう言って這いつくばった。

「うふふ」

ミカは笑った。

「お父様はなんと？」

アーチエルが訊いた。

「恐悦至極に存じますってさ」

「まあ！ こちらこそ、この忙しい中、無理を言って申し訳ありません。しばらくご厄介になります」

『なんだって？』

『無理言ってすみません。しばらく厄介になりますだと』

『なあにそつたらことねえべ。いつまでも好きなだけ泊まってってくんろ！ それにしてもめんこいなあ』

『おどさん！』

ミカの父親は母親に注意された

『しっかし、めんこい娘よのう。まるでお人形さんみてえだ』

ミカの祖母は言った。

「なんと？」

「好きなだけ泊まってってイイって。おばあちゃんの方はアーちゃんのこと可愛い、お人形さんみたいだって」

「まあ、有難う御座います」

『おどさん、実はまだいるだあ』

『オウ好きなだけ呼べ』

「お邪魔します」

「お邪魔します」

オルバニアンとアルミナがそれぞれ挨拶をする。

『お友達のオルバニアン・マグマイヤー君とアルミナ・ラ・シアさん』

『こりやまた凜々しい男っぷりの子と愛らしいお嬢さんだっぺやな』

あ
』

ミカの祖母が言った。

「邪魔するぞ」

「邪魔致すぞ」

『この偉そうな二人はリイナ・アナンちゃんとキュポア・アップルトンちゃんだべ。こつちのお方は、アーチエル王女の妹さんだあ』

『なんと我が家にお姫さんが二人も来るたあ、前代未聞の事だあ』

「なんと言っておる？」

キュポアは訊いた

「お姫様が二人も来るなんて前代未聞ですって」

ミカが返した。

「苦しゅうない。楽にせよ」

キュポアがそう言った。

「どうも〜お邪魔しますう〜」

「お世話になります」

『この人たちは私の学校の先生でヨデイ・ヨフル先生、エファール・ソーフア先生だあ』

『おお、おお、先生方よう来られた。ゆっくりしていっておくんなせえ』

「失礼致します」

「こんにちわ」

『そして先生たちの身の回りをお世話している、アン・デボンさんと、整備士のアリシアナ・コクレトさんだあ』

『これはこれはまたいい女子ばかりで……』

『おどさん！』

ぺしっと、ミカの父親はミカに頭を叩かれた。

『いでっ！ どこに実の父親の頭さ叩く子がいるだ！』

『私の友達の前で恥かしい事しねえでける！』

『なんもしてねえべさあ』

「あ、あの……アシユマさまの紹介がまだなんですけど……」

アーチエルがミカに言っていた。

その当のアシユマはどこかばつが悪そうだった。

『アシユマあ?』

ミカの父親はどこかで聞いたような名前に怪訝な表情を浮かべた。

『あ、おどさん、おかさんまだ紹介する人がいた。あ、私のがこの先生で……』

『ご無沙汰してます。親父さん、お袋さん、おばば』

アシユマが挨拶していた。

『え?』

ミカの頭に疑問符がついたところで……

『お前はあの悪たれアシユマかッ!! 山向うの!! ようも、どの面下げてここへ来ただ!!』

『あらまあ、アシユマちゃん、良い男になって帰ってきて』

『かあちゃん話の腰を折らないでける』

『アシユマ先生っておどさんとおかさん知り合いだったのけ?』

『ああ、一応な……まさかこう言う形で再会するとは……とはいっても小さいこのタマン島知り合いがいてもおかしくないがな……』

『わ、ワシの事は?』

一人取り残されたアベニは身をどう処してよいか分からずにいた。

『さあ、どうぞ』

ミカのお姥様に促された。

『お、相すまぬ。お邪魔致す』

『この悪たれ小僧はなあ、夜な夜な山向うからやってきて、作物をかじるわ盗むわで大変だったわ』

父親がまだ大声でアシユマを罵っていた。

『もう十年以上前のことですよ。お前も小さくて覚えてらんじよ。母親が話を付け足した。』

『ふ~~~~ん……』

ミカが興味深げに訊いていた。

『なあに? ミカさん一人で訊いていないで、アシユマさまの過去』

を教えて？ ねえ」

アーチエルがずるいと言わんばかりに訊いていた。

『おどさん、あんまりアシュマセンセの悪口ばかりさ言ってるぞ、アーチエル姫様の不興さ買うつしよ』

居間に来て、ミカはそう言った。

『何で？』

父親はコタツに入りながら訊いた。

『アシュマセンセさ、アーチエル王女の婚約者だあ』

『何い〜〜！！』

「なに？ なに？ 面白いお話？ わたしにも聞かせて！」

アーチエルはもう居てもたっても居られなくなった。

『すまねえだ！ 悪気は無かったんだ！ 許してける！！』

ミカの父親はその場で平伏した。

「え？ なになに？ 何でミカさんのお父様が平伏するの？」

もう、アーチエルは何がなんだか分からなくなっていた。

「ふ〜んアシュマさまってミカさんのお父様の知り合いだったんだ」

アーチエルが言った。

アーチエルはコタツと言うものに脚を入れミカンにお茶にオセンベイとすっかりもてなしを受けていた。

男衆は予備のコタツの準備を女衆は料理の準備をしていた。

「そうなの。その頃のアシュマ先生って、相当な悪ガキだったみたいよ。瓜はかじる、大根は盗むで山に居るサルのほうがよっぽど行儀がよかったみたい」

「うふふ」

アーチエルが笑う。

『おい、ミカあんまり俺のこと悪く言つなよ？』

アシュマがイーハン語で言った。

「アシュマさまは何と？」

「あんまり悪く言うなって。ばつが悪いのね」
『しかしあの悪たれが先生とはなあ……未だに信じられん』
「お父様は何と？」
「しかしあの悪たれが先生とはなあ……ですって」
「ぶつ。あは、あはははは！！」
『おい、頼むよ、ミカ……』
アシユマが泣きを入れてきた。

ミカの家の大晦日、夕食は年越し蕎麦だった。
夕食の食卓には蕎麦だけではなく他にもおかずがあった。
「わあ、これがトシコシソバね？」
アーチエルは喜んだ。
「美味しそうじゃのう、姉様、リイナ」
キュポアも喜んだ。
「うん、美味そうだ」
そしてリイナも喜んだ。
「さあ、召し上げれ」
ミカは勧めた。
「いただきます！」
三人が声を揃えて食べ始めた。
「じゃあ、アタシも頂きま〜す！！」
アルミナも食べ始めた。
「年越し蕎麦は『細く長く』って縁起を担いでいるのよ」
ミカは解説した。
「ふ〜ん。何にでも謂れって言う物はあるのね」

アーチエル達はTVで大晦日の歌番組を見たりして寛いでいた。
「ミカさん。そういえばニネンマイリってどうなったの？」

「ああ、そうね。そろそろ用意しないとね」
ミカが言った。

「着物を着ましよう?」

「キモノ?」

「ええ、着物」

「じゃあ、お願いしちゃうかなあ」

『お婆ちゃん、着物お願い』

アーチエルはミカの祖母の助けを借りて、着物に着替えた。

そして、アシュマ達の眼の前でお披露目をした。

アーチエルの姿は髪を上にとめ、櫛で髪を止めた。

着物は藤色に撫子の柄が入り、大人し目で控えめな、だが品のあ
る柄だった。

それでも存在感があるように見えたのは、アーチエルの可憐で清
楚で儂げな印象がそうさせていた。

ミカとアルミナも着物に着替えていた。

ミカは紅地に楓柄で華やかさを出していた。

アルミナは黒地に扇と、やはり楓の柄で、引き締まった大人の女
性を、イメージさせていた。

皆それぞれに美しく男たちの目を和ませていた。

『アーチエル姫も美しいけども、あのアルミナツちゅう娘っこも
中々めんこいな』

ミカの父親が言う。

『アルミナは俺の女だ。誰にもやらん』

なんと、オルバニアンがイーハン語を喋った。

「オルバニアン、今のつてもしかして……イーハン語?」

アルミナが驚いて訊いた。

「ああ、そうだよ」

「凄い! なんて喋れんの?」

「ノリトレアは元タイーハンと同一民族だからイーハン語を覚えさせられるのさ」

「そうなんだ。で、何て言ったの？」

「……なんでもねえ」

「何でも無い訳無いでしょ？ 教えてよ」

「なんでもねえよ」

「『アルミナは俺の女だ。誰にもやらん』だそうですね」

ヨデイが言った。

「なっ！ ヨデイ……何を言ってる……イーハン語分かるのかよ？」

「何せイーハン出身ですからね」

「きゃーっ、オルバニアン！ アタシアンタのそう言う所、好きよ」

そう言ってる、アルミナはオルバニアンにキスをした。

『あんれ、ま。最近の若えモンは進んでいるだなあ』

ミカの祖母が目丸くした。

「そういえば、貴方、イーハン出身って言ってたわね」

エファールがヨデイに言った。

「あれ？ 覚えておいてくれたんですね？」

ヨデイが嬉しそうに言った。

「それにしてもいいわねえ、着物姿つてのも」

本当に羨ましそうにエファールが言った。

「ホンにそうじゃなあ」

キュポアも言った。

「いいなあ。わらわも着せてもらえばよかった……」

ミカが父親に何かを囁いている

父親もミカに何かを言っている。

「キュポア王女、宜しかったら来年もいらしては如何ですか？」

ミカがキュポアに言った。

「よ、よいのか？ 姉様、来年も来て良いそうじゃぞ？」

「これ！ キュポア！ あまり人様に甘える物ではありませんよ」

「いいのよ？ アーちゃん本当に。キュポア王女も来年来るといい

わ

「本当？ 有難う！ 本気で来ちゃうけれどいいの？」

「勿論よ」

「さて、そろそろ行くべえか」

ミカの父親が腰を上げた。

ミカの父親は外に出て開口一番、驚いていた。

「なんだべえ、ありやあ！」

ミカの父親は畑に着陸しているサイコ・フライヤーを見て驚いていた。

「ミカ、何だべありやあ！ お前のしわざだべ！？」

「だってしょうがないっしょ！？ 置く所ねえだし。今あそこは何も作ってねえからいいっしょ！？」

「土さ傷む！」

「まあまあ、おどさん別にいいでねえか。また、友達の手前、恥かかせちゃ可哀相でねえか」

ミカの母親が父親をなだめていた。

「……まあ、いいっしょ。」

「わあ、やったあ！ おどさん、大好きだあ」

「お、おだてても何にも出ねえべ」

皆揃って、そろそろと近くの神社に向かって歩いていた。

ミカの家とジンジャは比較的近い。

裏の山に神社があるからだ。

「おい、悪たれ坊主。オメエはそのカツコで寒くねえべか？」

「いえ？ 特には？」

言ったアシユマの着衣はうえはタンクトップに丸首の革のジャケット。したはジーンズに革のブーツと側から見ればいかにも寒そう

な格好をしている。

『そうだか。別に寒くねえんだっただらそれでええ』

一応ミカの父親に心配してもらえたようだ。

アーチエル達は最前列でミカやアルミナ、リイナにキュポアとはしゃいでいる。

『あんまりはしゃいで、転ぶでねえぞ！』

ミカの父親が注意した。

『わかってるだ！』

ミカが返答してきた。

アシユマはその様子を最後尾から眺めていた。

が、アーチエルは何か気配を感じたのか、ととと、とこつちに来て、

「少しお話、しましよ？ アシユマさま」

口を開いた。

「お話？ いいよ」

二人は少し話をした。

「アシユマさま、迷子になったらどこで待ち合わせをいたします？」

「そうだなあ。レキシタニアの城の道を隔てて直ぐ出た所に小麦畑があるだろう？ あそこが良いと思うんだ。夕方には黄金色に輝いて……道の上に腰掛けてパン食べて……」

「違いますう、アシユマさま。この『ジンジャ』で迷子になったらですう。センスずれてますう。アシユマさま」

そう言われ、アーチエルにどんどん先に行かれてしまった。

『かっつ、ふられてやんの。だめだあ、そんならことじゃ』

『親父さん……』

アシユマは少し呆れた。

『おめえとあんのめんこい姫様とじゃあ、釣り合わねえって……』

まだその話題をするミカの父親。

ふと、アシユマは殺気を感じあたりを警戒した。

するとアシユマの横合いから男がそつと寄り添ってきた。

(流石だなアシユマ・アトー。全く隙が無い。刀剣の王者よ)
その男はアシユマにだけ聞こえるように低い声で囁いてきた。
壮年のその男は、修羅場を潜ってきたものだけが持つ、独特の気配を漂わせていた。

(今日は神聖な日だ。こんな日ぐらいゆっくり過ごさせてくれ)

(貴様は武道の道を歩む者。それは無理な話だ)

(貴様は?)

アシユマは男の名を尋ねていた。

(名ぐらいは知っておるかもしれんな。ゴルグ・ローンだ)

アシユマはその名を知っていた。

これまで、二十五年間にわたりクーロン人民共和国主催の武道大会の優勝者を悉く葬り去ってきた男だ。

一人も逃してはいない。

半ば伝説化されてきた男だ。

人は彼を無冠の帝王とも呼ぶ。

そのせいで近年同国の武道大会は盛り上がり欠けている。

また、同国の武道大会は武器の所持を禁止されている。

この男、察するに体術の相当の使い手かもしれないかった。

(ゴルグ・ローンか。厄介な相手に目を付けられたな)

(否やは言わせんぞ。もし拒めば……)

(分かっている)

(賢明だ。では、境内の裏で)

そう言っつてゴルグ・ローンは気配と共に消え去った。

そして、アシユマもそつと皆の前から姿を消した。

『どだ? 村娘でよがったら紹介してやつても……あれ?』

ミカの父親は、いなくなったアシユマを、眼で追って捜したがいなかった。

『ま、いいか……』

アシユマは境内の裏へとやって来た。

「待ち侘びたぞ」

ゴルグは先に境内裏に来ていたらしい。

「一つ訊く。貴様はガルマインの刺客として雇われたのか？」

アシユマは訊いた。

「そうだ」

ゴルグが答える。

「だが安心せい。俺で刺客は打ち止めだ」

「貴様が俺を倒すからか？」

「それもあるが、俺で最後にしてもらわねば、俺の矜持が廃れる」

「そうか。分かった。では始めるか」

アシユマはそう言っただけでジャケットと鬼虎を地面に置いた。

「何と俺を前にして素手で来るか！」

「鬼虎で来ると思ったか？」

「剣の王者だからな。噂の剣さばき見てみたかったわ。刀で来ると
思ってたが……。何たる甘さ！ 何たる侮辱！ 必ずや殺してくれん
！」

「俺は礼儀を尽くしたつもりだがな」

「いくぞ！」

ゴルグはゆっくり間合いを詰めると、身体を半身にして拳で突い
てきた。

アシユマはそれを難なく避ける。

アシユマも掌底で牽制をする。

ゴルグはかなり鍛え抜かれた体つきをしていて、中々手ごわそう
である。

不意に突然ゴルグの体が沈んだかと思うとアシユマの腰目掛けて
突進を囓ましてきた。

アシユマは咄嗟に膝を出し、ゴルグの頭に当てに行った。

「ごん！」

と、鈍い音がした。

見事ゴルグの目の上に当たった。
暗くてよく分からないが瞼を切ったようである。
相当の出血のようだ。

そしてゴルグはそのままアシユマに体当たりを噛ました。
アシユマは堪らず身体を倒された。

ゴルグはこのくらい経験は何度と無くあるようで

「この位屁でもないわ」

そう言い切った。

ゴルグはアシユマに馬乗りになり頭部を殴ってきた。

アシユマは一応ガードしたがどこまで効果があったやら。

だが、ゴルグはそれに苛つき身体を密着させてアシユマの即頭部を打ち付けた。

普通だったら堪らないだろう。

だがアシユマにとっては勝機だった。

右左、両の掌に気を溜めてゴルグの両脇腹に発気の術を掛けた。
かなりまともに食らったはずだ。

内臓の数箇所、肋の五、六本は「いった」筈だ。

かなりの激痛の筈だ。

だが本人は何が起きたか訳が分からないようだ。

それでも攻撃をしてこようとす。

アシユマはゴルグを跳ね除けた。

アシユマは立ち上がって、

「勝負はあった。まだやるか？」

そう言った。

「まさか、あそこまでの発気の術をこなせる奴がいるとは思わなかったぞ。俺の完敗だ。だが、俺とて無冠の帝王とまで言われた男だ。

このまま負ける訳にはいかん」

そう言ってゴルグは低く地を這うように走り始めた。

だがその走りには力が無かった。

が、気力は衰えていなかった。

(何かをするつもりだ！)

アシユマはそう思った。

ゴルグの掌が光っている

(発気の術か！ 今は押さえ込んでいる筈だ。それなのにあんなに溢れている。相当でかい発気の術だぞ！)

アシユマはどうしようか迷った。

いなすか受け止めるか。

いなせば周りに被害が及ぶ。

受け止めれば自分に害が出る。

迷っている時間が無い。

アシユマは受け止めることにした。

ただし、ただでは受け止めない。

こつちもそれなりの発気の術を嚙まさせてもらう。

アシユマは臍下丹田に気を練り始めた。

ゴルグが来る。

アシユマが待ち受ける。

ゴルグが腕を伸ばして掌底を嚙ましてきた。

アシユマも掌底で合わせる。

二人の掌底から眩い光があふれ出す。

二つの気と気がぶつかった！

ドオン！

大きな音があたりに響いた。

アシユマの左腕とゴルグの右腕は骨が折れていた。

特にゴルグのほうは、腕が粉碎骨折をしていて骨が皮膚外へと露出しており、かなりひどい状態だった。

そして、ゴルグは瀕死の状態になっていた。

「ふ……普通は……あれだけの……発気の術をすれば……これぐらいに……体と気が消耗するの……お前は……平然としていやる……化物だな、おまえは……」

アシユマはゴルグが長くないと見て、

「止めがいるか？」
鬼虎を持ってきた。

人は直ぐにやって来た。

周りに人だかりが出来始めていた。

直ぐに宮司がやってきて、ゴルグの死体を見て、

『何をしとるのかぁ！！ 神聖な領域さ血で穢しおつてえ！！』
と、怒っていた。

『宮司、相すまぬ。ここで、立ち会っていました』

『立ち会っていたじゃと！？ ……！！ ……お主……アシユマか！

！ あの悪たれ坊主の！！』

『はぁ、悪たれかどうかは知りませんが、アシユマです』

『こんなら事して、充分、悪たれじゃあ！』

『ちよつ、ちよつと、通してくんろ！ ……宮司さん！』

ミカは人垣をかき分け宮司の前に出てきた。

『なんだ、タキオのこのミカでねえか。こんなとこさ来るでねえ。
いま大変な所だあ』

『でも、アシユマ先生さ、家のお客さんなんだべ。それにアーチェ
ル・アップルトン王女の婚約者なんだあ！』

『何？ 何ややこしい話を持ってくるだ、おめえは……全ぐ……と
ころで悪たれ。これは尋常な勝負だったんか？』

『はい。と、言うより刺客です』

『なぬ、刺客とな！ ……まあた、こつちはこつちでややこしい…
…』

『すい……ません。通してください……いっと！』

人垣の中から今度はアーチェルが出てきた。

『アシユマさま……ひどい怪我……。どうして何の処置もしないの
！？』

『む。すまん……。忘れていた』

アシユマは骨折しているのに、本当に治療を忘れていたようだった。

「忘れていたって……呆れた」

「アーチエル、ここへ来て表情が生き生きしてるな。言葉にもそれが出ている。俺はそれが嬉しいよ」

「あ、アシユマさま、こ、こんな時に、な、何を……」

「アーチエルはこんな時に何をと思いなから照れた。」

「アシユマさま。鬼虎を」

「ん」

「アシユマさま、いきます」

アーチエルがそう言っただけで鬼虎に手をかざすとアシユマは青白い光に包まれてアシユマの傷は癒された。

しばらくすると警察がやって来た。

現場検証とアシユマ、宮司などの事情聴取した後アシユマに手錠を嵌め連れて行くこととした。

「ちょっとまつたあ、その警官！」

ヨデイが警察を呼び止めた。

「アシユマ君を連行するのはちと早い」

「ん？ なんだあ？ なーに言ってるだあ、おめはあ。連れて行くですよ邪魔すんなあ」

「ま、見てなさい」

その時、警官の無線機に音声が入ってきた。

「はい、はい……はい？ 警察庁長官！？ ……はい、はい……はい？ 釈放！？ なんでえ？ ……え？ 訊くな？ 首が飛ぶ？」

『にひひ』

得意顔のヨデイである。

「ヨデイ、貴方、何をしたの？」

エファールが訊いた。

「うん、オロに頼んで圧力掛けてもらった」

「オロ、そんなに顔が広いの？ ここの警察も？」

「無いけど、武力行使をちらつかせて、天秤に掛けてもらった。死んだのは冷酷無比な殺人鬼、ゴルグ・ローン。片や生き残ったのは今や稀代の剣豪アシユマ・アト！。ゴルグは話によるとアシユマ君を狙う刺客。どちらに重きを置くかわわらずもがな、ですね」

「相変わらず口八丁手八丁だね。アナタって」

エフアールは呆れ顔だった。

「忝い」

アシユマはヨデイを始め皆に謝意と面目なさを言っていた。

今、アシユマはミカの家に戻ってきていた。

「いやあ、アシユマ君。それにしてもアシユマ君はやりましたな」

「何をですか？」

アーチエルが訊く。

「ゴルグ・ローンを倒して名実共に世界で一番の武道家になったってことですよ」

「それに関しては、あまりうれしくありません。あんな大怪我までして、これからもああいう事があるのかと思うと、気が気でなりません」

「でも、すごいわあ。世界一なのよ？　すごくない？」

ミカがはしゃいだ。

「でも……」

「なあにをそんな童見わらわたいにはしゃいで、うるさいっしょ」

ミカの父親が注意する。

「だってえ、アシユマ先生、世界一の武道家になったただあ。おめでたいっしょ」

ミカがアシユマを擁護する。

「なんだあ、そんたらことかあ」

ミカの父親はくだらなさそうに言った。

「だが、中々たいして大変な事よ……」

宮司が言った。

宮司は毎年このぐらいの時間になると、ミカの家へ酒を呑みに来る。

宮司が、正月に神社を空けるのは何たることかと、叱られもしようが、実際実務を取り仕切っているのは息子の宮司で親の宮司は単なる飾り物、権威付けの象徴であるが、寧ろそれを望んでいる風でもあった。

かような訳もあって、宮司は毎年遊びに来るのである。

二人は明け方まで飲んでそして帰る。

毎年恒例の行事である。

『今日はもう、寝れ。その童達はもうおねんねだあ』

ミカの父親が言った。

キユポアとリイナはコタツの中で二人揃って眠っていた。

『上に布団を用意しただあ』

ミカの祖母が言った。

皆、上にながって行った。

ミカも上にながって行く。

『一緒に寝よう？ アーちゃん』

『うん、でも……』

アーチエルは何かに困った様子だ。

『いいよ、アーチエル。ミカと一緒に寝なさい』

アシユマが優しい口調でアーチエルに許可を出した。

『有難う。アシユマさま』

アーチエルは少し複雑な気分だった。

『おい、悪たれ』

ミカの父親がアシユマを呼び止めた。

『童を寝かしつけてから下さ降りて来い。おめにゃ朝まで酒につき合わせてやるっしょ。嬉しく思うだあ』

有り難くも付き合いつらい酒の席に招かれた。

『返事！』

『はい……』

アシユマはそう言うしかなかった。

アシユマは二人を担いで二階に上がった。

二階では襖を取っ払い、ぶち抜きで一つの部屋を形作っていた。

アシユマは、アーチエルにも手伝ってもらい、キュポアとリイナを寝かしつけていた。

「これが十四にもなる少女の寝姿か？　まるで子供だな」

アシユマが言った。

「ふふふ。本当ですね」

アーチエルが笑った。

「俺は親父さんに呼ばれているから下へ行く」

「行ってらっしゃいまし」

二人はそこで軽くキスをした。

「こおら！　怪獣！」

二人はビクツとなつてキュポアを見た。

キュポアはすやすや寝ている。

寝言だったようだ。

「全く、どっちが怪獣なんだか。じゃあ俺は下に行く」

「はい」

アシユマはもう一度アーチエルにキスをした。

アシユマが下に下りてきた。

コタツにはミカの父親と、宮司が酒をちびちびやっていた。

『おう、来たかあ。悪たね。まあ入れ』

そう言つてミカの父親はコタツへと促した。

『まんず、一杯』

お猪口に御爛された酒を注がれた。

『すみません』

そう言つてアシユマは酒を口にした。

『親父さんも……宮司殿も……』

アシユマはミカの父親と、宮司の杯を酒で満たした。後は皆手酌で酒を飲んだ。

『おんしもいつちよ前に酒さ呑むようになったただかあ』

ミカの父親がしみじみと言った。

『はい』

『ミカの学校の先生だってなあ。ミカが、命さ救われたって言うていただあ。恩にきるっしょ』

『そんな大した事はしていません……』

『あの悪たれが人の命さ救ったり、悪漢さ退治したり人の役に立つようになるとはなあ。なにやら感慨深いものさ、あるだなあ。それにしても、剣と体術あわせて世界一の武道家とは恐れ入ったただあ』

宮司が言った。

『そんなに大した事はありません。まだ世界には世にでていないだけで凄腕の剣術の使い手、体術の使い手などごろごろといます。それに、まだ勝ちを得ていない宿敵も居ります故』

『謙遜だなやあ。まんず、もう一杯』

ミカの父親がアシユマの杯を再び酒で満たした。

『すみません』

そうやって正月の夜はしみじみ更けて行った。

アシユマが昼過ぎまで寝ていると、アーチエルに起こされた。

『矢張り少しお酒くそう御座いますな』

そう言って、頬にキスをされた。

アシユマがぼかんとしていると、

『お仕事に御座います』

そういう言葉が返ってきた。

『仕事？ 正月早々から？』

『はい』

アシユマは洗面所に行き、顔を洗い、そして戻ってきた。

さて食事かと思っただらヨデイが、

「すみません。アシユマ君、急ぎの仕事なので食事は黒龍号の中で
そう言われた。」

アーチエルとミカは別れを惜しんでいた。

「アーちゃん、必ず来年も来てね」

「ミカさん、必ず行くから」

「必ずよ？」

「必ず！」

二人は抱擁を交わし再会の約束をした。

サイコ・フライヤー黒龍号は慌しくミカの家を後にした。

サイコ・フライヤー黒龍号の次なる目的地はどこか？

それはオロからもたらされた。

いま国龍のメインスクリーンパネルにはオロの顔が大写しで映し
出されていた。

『諸君。明けましておめでとう。さて早速の司令だが、七賢人の実
行部隊のアジトの一つが判明した。これを叩いて欲しい』

オロが年始の挨拶と共に言ってきた。

その場にいる全員が嘆息した。

「で、オロ。それは何処にあるんだい？」

ヨデイが代表で訊いた。

「それはノリトレアの浜御前邸はまごせである。詳しい座標はこれから送る」

「『ハマゴゼ』か……」

アシユマが呟いた。

「知っているんですか？ アシユマ君？」

ヨデイが訊いて来た。

「ああ、アヘイビアの実験施設で、半ば拷問状態の実験を受けてい
た時に、その名を聞いた事がある。俺が知っているのはその程度だ」

「そうですか……」

「そういうヨデイも、何か知っているみたいじゃないか？」

「浜御前の名は、半ば伝説のような形で伝わっています。……それはノリトレアの政治、経済、軍事等を影から操っているという謎の人物です」

「と、言う事は、七賢人の内の一人と言うことか？」

「かも知れませんが」

『そっちの二人の言うように、七賢人の内の一人と言うことも考えられる。心してあたるように』

オロが口を挟む。

「了々解」

イマイチ気乗りのしないクルーであった。
だが、

「そんな事だと死ぬぞ？」

アシユマが活を入れて、クルー全員の気を引き締めた。

ノリトレアとイーハンは近い。

サイコフライヤーだと三十分と掛からない。

忙しいのはオルバニアンと、アルミナである。

魔導機兵を起動して各部チェック。そして発進の時を待つのだ。

作戦概要は単純だった。

浜御前邸を海側から黒龍号、ラヴァー二機、アシユマの三重攻撃で真つ直ぐに叩く。

浜御前邸まで後五分。

ラヴァー、二機の発進が迫ってきた。

「ああ、お雑煮も御節も食いたかったぜ！ あとお餅もな！」

オルバニアンがぼやいた。

「なあに？ オゾウ二つて？ オルバニアン」

アルミナが訊いた。

「お雑煮って言うのはだなあ……ああ上手く説明できねえ！ 来年ミカン家で食わせてもらえ！」

「うん、そうする」

「よっしゃ！ 発進！！」

二機のラヴァーは発進し黒龍号に並んで飛ぶ形を取った。もう直ぐ、黒龍号の有効射程圏内に入る。

オルバニアンのラヴァーの有効射程圏内はもう少し先だ。

アルミナは近接攻撃しか出来ないから、この際頭数に入れない。

アシュマも意外だが、有効射程圏内はもう少し先だ。

気配として察知できない敵は、目視するしかないからである。

先ず、黒龍号のレールガンが火を噴く。

4門ある砲門も火を噴く。

中々壮観な絵である。

だが浜御前の屋敷はといえば、念導境界面が張られているらしく、攻撃が屋敷に届かない。

却って、屋敷から黒龍号への攻撃のほうが、激しい。

屋根が競りあがり幾門もレールガンが突き出て火を噴く。

屋敷の壁からもレールガンが突き出て、矢張り火を噴く。

矢張り七賢人クラスの幹部ともなると、攻略は面倒そうだ。

「ここは、矢張り、アシュマのお兄ちゃんに、頑張ってもらっちゃおうかな？」

ヨデイがおどけて言う。

『アシュマ君、アシュマ君。そろそろ攻撃出来ない？ ほら、見えきたしさ』

「しょうがない。やってみるか。ヨデイ、あんまり俺を頼るなよ？俺がいなくなったらどうするんだ？」

船外ゴンドラの上にいるアシュマが、意味深な事を言った。

『大丈夫。アシュマ君は絶対に居なくならないよ』

（この、能天気。ホンとに居なくなったら、どうするつもりだ？）
そう思いながらアシュマは鬼虎を抜いた。

鬼虎の刀身の周りに光の粒が集まり始めた。

アシュマは鬼虎を振ると幾線条もの光の条が伸びていき、浜御前

邸の念導境界面を突き抜け屋敷を貫き爆発させた。

全滅はさせなかったが既に勝敗はついた。

後はオルバニアンとアルミナの仕事だった。

シールドで防御された彼等の機体は向かう所敵無しで、館の砲門を沈黙させて行った。

外から見る限りでは館はその機能を停止させたように見えた。

アルミナとオルバニアンはいち早くラヴァーを降りて屋敷の中へと足を踏み入れた。

内部は相当広く幾重にも廊下^{なか}が張り巡らされていて、まるで迷路だった。

だが所々アシユマが穴をあけてくれたお陰で脱出路が出来上がり迷うような事はなかった。

「この通路、どこまで行くのかしら？」

「さあ？ どこまで行くんだろうな？」

アルミナとオルバニアンはそんな会話をしながら慎重に前へ進んで行った。

何処まで進んだらろう？

二人は大きな木製の扉の前に来た。

オルバニアンはバルカン砲を使った。

元々対魔導機兵用の武器である。

この位の扉ぐらい破れて当然だった

それにしても、かなり分厚い扉であった。

アルミナとオルバニアンは扉を開けて部屋の中に入った。

部屋の中は消毒薬のような臭いで充滿していた。

部屋を見回すと真ん中に大きな『棺桶』みたいな機械がある。

「そうか。これがアシユマの言っていた『棺桶』なんだな？」

オルバニアンが言った。

「どれ、拜んでやろうじゃないの？」

アルミナは言っつて棺桶に近付いた。

「おい、不用意に近付くな。危ないぞ」

「大丈夫よ。誰が寝ているのか、見てやるうじゃないか？」

棺桶と言っつても本物の棺桶と言っつわけではなく、蓋の部分はガラスのように透明だった。

アルミナがその蓋から中を覗いて見た。

その途端、アルミナの表情が、驚愕のそれに、見る見るうちに変わって行っつた。

オルバニアンはその表情に異変を感じアルミナの側に寄っつて行っつた。

「アルミナ？ どうした？ ……こ、コイツは？」

オルバニアンも棺桶の中身を見て驚いた。

それは鎧を半ば解放された男が、緑色の液体に浸されていたからだ。

そしてこの半ば解放された鎧を、オルバニアンは覚えている。

それは……。

「ウ、ウルクじゃねえか！！ こいつぁ……！！ ここであつたが百年目！ コイツをお前の本物の棺桶にしてやるぜ！」

オルバニアンがそう言っつた時、アルミナが

「エ……エード兄さん……！！ エード兄さん！！」

「なんだつて!？」

それは、アルミナの行方不明の兄、エード・ダ・シアだった。

胸部に三十センチ大の深そうな傷跡があつた。

何があつたか知らないが、これを受けた時はこれが致命傷だったろう。

アルミナは食い入るようにそれを見ている。

「アルミナっ！ そこをどけっ！！ そいつはお前の兄エードなんかじゃない！ 俺達の敵ウルクだつ！！」

オルバニアンが叫ぶ。

「いやっ！ これはアタシの兄さんなのよ!？ どける訳無いじゃ

ない!!」

「既にコイツは、お前の兄貴なんかじゃない！　そうでなかったら、何故、執拗に俺達を狙ったりするんだ!？」

「そ、それは……」

「私の眠りを妨げるは誰ぞ？」

その声と共にエードの身体に解放されていた鎧が装着されていく。そして棺桶の蓋が開いた。

魔導騎士ウルクの登場である。

「アルミナ！　そこから離れる！」

オルバニアンは、バルカン砲を構え、アルミナに向かって言った。反射的に離れるアルミナ。

ドドドッ！

と、言う音と共に発射されるバルカン砲。

しかし、弾は兆弾し、あちらこちらに跳ねた。

そのうち一発はアルミナの太腿を掠めた。

「うっ！」

「アルミナッ！　大丈夫か!？」

「平気よ！」

「くそっ！　バルカン砲は駄目か！」

「さあ……こつちにおいて、アルミナ。こちら側に来れば、無限の力と永遠の命を手にする事が出来る。さあ、おいで、アルミナ」

ウルクは手を差し伸べた。

アルミナはつられて、手を差し出そうとする。

「アルミナ！　そいつの甘言に惑わされるなっ！」

オルバニアンが叫んだ。

慌てて手を引っ込めるアルミナ

「そうか、我と共に来ぬか。ならば致し方ない。ここで死んで私の仲間となれ！」

「死んで、仲間になれ……」

オルバニアンは何て事を言う奴だと思った。

「死んで仲間になれって事は……兄さんも……嘘……嘘だ、そんなの兄さんの筈が無い……いや!!」

言ってアルミナは剣を振りかぶると、思い切り振り下ろした。するとウルクはなんと左手でアルミナの剣を掴んで止めてしまった。

「アルミナあッ」

オルバニアンは逸鉄を抜いて上段に振りかぶりウルクに切りかかった。

何と逸鉄を右手で掴んで止めてしまった。

「うっ、くっ！」

「くそっ！」

二人は剣を動かそうにも、びくともしない。

「さて、そろそろ二人は死ぬか？」

ウルクは非情にもそういった。

「そうはさせんよ」

男の声が響き渡った。

「誰だ？」

ウルクが訊いた。

「アシユマ・アトーだ」

「そしてその一党よ」

アーチエルがマジックアローの体勢を整えて、ヨディは棒を、エファールは鞭を携えていた。

「アシユマ・アトーか。いつぞやの借りを返さねばな」

ウルクが言った。

「返せるのか？」

「いつぞやの我と思うな。鬼虎如きでは斬れぬ我よ」

「では、試してみるか？」

「なに？」

「止めておけ、ウルク。奴は本当に斬って来るぞ」

「アーヌ！」

そこには、向こう側の扉からやって来た、アーヌが居た。

「斬って来るとはどういうことだ？ 何故分かる？」

アシユマ自身がアーヌに訊いていた。

「無想の剣を会得しつつある。お前には関係ないかもしれないがな。よかるう。ここらで鬼虎の正体を知っておくのもよかるう」

アーヌは鬼虎の正体と言う衝撃的な事を話そうとしていた。

「アーヌ殿、『鬼』については極秘事項では……」

「かまわんではないか。どうせ、今聞いても理解できないし、おぼえることも出来はすまい」

「なんか馬鹿にされてますよ？ アシユマ君」

ヨデイがそう言った。

「構わん」

「『鬼』……『鬼虎』は『念』を刀身に送る事により、鬼虎自体が『念』を増幅し、周りに特殊な力場を形成する。正にその力場は『念』を介したアシユマ、お主の『意思』そのものだ。その力場内に取り込まれた物質は、一時的なプラズマ状態と成り、次に、力場内のエネルギーへと変換され、鬼虎の本身に『吸収』される。また、エネルギーの場合はそのまま直接鬼虎に吸収される。一度出来上がった力場は多次元宇宙と並行的に連結しており基本的にエネルギー供給はほぼ無尽蔵となっている」

アーヌはここでいったん言葉を切った。

そしてまた言葉を紡ぎだした。

「鬼虎はそれ自体が記憶素子であり、アシユマ、お主の身体自体がプラズマ化した時、お主の自我を保ちつつお主の身体構造を素粒子レベルで保持している。この時の情報はお主の意思である『念』と鬼虎の記憶素子とで、力場の状態を補完しあっている。お主の身体が、欠損などした場合、直ちに記憶素子に保持されたデータに基づきお主の身体を修復をし始める。即ちこれは、 $E=mc^2$ の二乗を発生しているものでありエネルギーと物質の間を行き来できる事を表していると見えよう。一言で言うなら『化け物』だ。我々よりもな。

要は、お前の中で宇宙開闢かごびやくをしているわけだ」

アーヌは言い切った。

「それを言うなら対の鬼を持つアーヌ、お前も十分に『化け物』だ
がな」

アシュマが返した。

「違うない」

アーヌも同調した。

「では、俺は何なのか？」

「鬼虎を操る為に専用で作られた『人間のなりをしたインターフェ
イス』だな」

「どちらが主か分からなくなった」

アシュマは嘆息した。

「じゃあ何かよ!? 鬼虎を使う為に、アシュマは生み出されたん
じゃなくって、鬼虎に使われる為に、アシュマは生み出されたって
言うのかよ!？」

オルバニアンは叫んだ。

(オルバニアン、いくらなんでもそう言いかたってないわ)

アルミナが声を潜めて言う。

「だーっ! なんだか良く分かんねえが、そいつの言う事に
耳を貸すんじゃないぞ、アシュマ!」

「俺なら心配ない。アーチエルさえこのままの俺を愛してくれるの
ならば」

「アシュマさま。わたくしは何時でもアシュマさまを愛しております。
だってアシュマさまはアシュマさまですもの。どうぞ」安心下
さい」

「忝い」

「さ、ここまで話したんだ。生きて帰れると思うな」

アーヌは言った。

そしてアーヌは天龍鬼を抜き放った。

アシュマの鬼虎はいまだ鞘の内だ。

アシユマは居合いの構えをし腰を落とした。

実際問題として鬼虎の刀身の長さは二尺六寸五分。

定寸の二尺三寸よりも三寸五分程も長い。

これは居合いに決して向いている刀とは言い難い。

定寸の刀に比べ抜き放つのに三寸五分ほど鞘の内に残るからだ。

だがそれを感じさせぬ程の速度とキレを持たせるのは、ひとえにアシユマの技量のなせる業であろう。

いまや、アシユマは剣術家として完成の域に達しようとしていた。

アーヌもアシユマに中々隙を見出せず、攻めあぐねていた。

アシユマもアーヌに隙を見出せず、鬼虎を抜き放てないでいた。

アーヌもまた、完成された域の技の持ち主だった。

その時ウルクが

「ええい、アーヌ殿！ 何をしておられる！ 生温いわ！」

棺桶の中から自分の剣を抜き出して叫んだ。

それが呼び水となって二人は前に出た。

アーヌは下段から天龍鬼を擦り上げ、アシユマは鬼虎を鞘走らせた。

途中の空間で一對の鬼は互いを弾き飛ばしていた。

お互い上段からの打ち降ろしに刀を途中で交差させ鏢迫り合いとなった。

「アーヌ殿！ 助太刀いたそう！」

ウルクが言った。

「手出し無用！」

アーヌが言つて、

「動かないで！」

アーチエルが言った。

「おのれ、小癩な小娘め！ 先にお前から始末してくれん！」

ウルクが言った。

「ウルク！ その小娘には構うな！ 相当の気を発しておる。何を
するか分からんぞ！」

アー又は口走った。

アシュマはこの隙を逃さなかった。

すっ、と離れると右袈裟、左袈裟と連続の打ち込みでアー又を怯ませ、鬼虎を車に回しアー又を退かせ、そして打ち込んで行った。正に反撃の機会を与えないという奴だ。

ウルクはそれに目もくれずアーチエルの方へと向かって行った。

「来ないで！ 来たら撃ちますっ！」

アーチエルはまだマジックアローの状態を保っていた。

更に前に進むウルク。

「ふっ！」

アーチエルはマジックアローを放った。

マジックアローの光弾はウルク目掛けて飛んで行った。

ウルクは光弾が当たる直前に剣を立てて防御した。

が、マジックアローの光弾はウルクの剣を引きちぎった。

「何と！」

「今のは警告です！ 今度来たら心臓を打ち貫きます！」

アーチエルはそう言った。

これはアーチエルのハツタリだった。

今のマジックアローで、気の大部分を持っていかれた。

今のアーチエルは立っているのがやっとの状態だった。

「ここはいったん退くぞ、ウルク！」

アー又が叫んだ。

アシュマの激しい攻撃で、アーチエルの気の残量を読む余裕など無かった。

「お、おう……」

ウルクも、それは同じで、剣を引きちぎられ、気弱になっていた。

「先に行くぞ、アー又殿」

ウルクはそう言ったが、アー又に返答出来る余裕など無かった。

相変わらず、アー又は守勢でアシュマに押され気味だったからだ。

「仕方が無い最後の手段といくか」

アー又はそう呟いた後、気を溜めそして一気に膨張させた。アシユマはその『気』圧に押され、一瞬動きを止めた。

アー又はその間に背のサイコフライヤーを使って逃げた。

「逃げられたか……」

アシユマはそう呟いていた。

その途端アーチエルがぺたんと座り込んでしまった。

「アーチエル大丈夫？」

エフアールがアーチエルに寄り添った。

「大丈夫です。エフアールさん……ちょっと疲れただけですから」

そうアーチエルは応えた。

「全く、無茶をする娘だ」

アシユマが歩いてアーチエルの側に来た。

そして跪いてアーチエルの顔を覗きこんだ。

「大分弱っているな。ヨデイ、俺はアーチエルを連れて黒龍に戻る」

「そんな……アシユマさま、だめです。まだお仕事が残っているの

に……」

「大丈夫だよな？ ヨデイ？」

「まあ、何とかなるでしょう。どうぞアーチエル王女をつれてお戻

り下さい」

「恩に着る」

アシユマは頭を下げた。

「済みません」

アーチエルも頭を下げた。

アシユマはアーチエルを抱え上げ、歩いてもと来た道に戻って行った。

「アシユマは優しいから、今頃キスでもして、『アーチエル、大丈夫かい？』とかって言うんでしょうね」

エフアールが言っただけ目を流した。

「そ、そうでしょうね」

ヨデイは視線をあらぬ方向へと投げかけあやふやに答える。

「最近、優しい言葉掛けてもらってないし」

「大丈夫かい？ エファール」

「言ってるからじゃ遅いし。そういうこと言うの。それに最近してもらってないし」

「もしかして……欲求不満……ですか？」

「色々な事に関してね！！」

「え、エファールさん怒ってる？」

「別に怒ってはいないわよ！！ イライラしてるだけ！！ あゝあゝ。

いいなあ、アーチエル。優しいアシユマが彼氏で！」

「ひえええええっ！ やっぱり怒ってらっしゃるう」

「このようにはしゃぐヨデイとエファールを見ながら、

「全然出番無しかったわね」

アルミナは嘆息した

「今日はしょうがないだろ。何せ、お前の兄さんが、七賢人の四天王の一人だったなんてシヨックだモンなあ。まともに戦えってのが無理なんだよ」

オルバニアンが慰めた。

「だからこそ、アシユマみたいに、戦って見せなきゃいけないのよ！ 私の兄さんなんだもの」

「そういえば今日のアシユマ、絶好調だったな？ どうしたんだろ

？ でも、そういうことなら、一つ良い方法がある。試してみる価値はあるぜ？」

「え？ 何々？ その方法って？」

「それは僕も是非知りたいですねえ」

ヨデイが横合いから顔を出した。

「おわあっ！！」

「何ですかオルバニアン。そんなに驚く事無いじゃないですか」

「し、心臓が止まるかと思った……」

「ほら御覧なさい。オルバニアンだって、アルミナを気遣って、優しい言葉掛けているじゃないの」

エファールが話を蒸し返してきた。

「う……」

「そこで言葉に詰まらないで欲しいわ」

「と、とりあえず先に進みませんか？」

一行は置くに続く道をひたすら先に進んで行った。

そこでまた一つの襖の前に来た。

今度は素直に開く。

そこで一行は奇怪な場面に遭遇する。

部屋の真ん中には、囲炉裏が切られ、その真ん前に、極端に背の低い老人らしき人物がうなだれて、事切れていた。

またその周りには、背の低い人間らしきものが、何かを慌てているように、走り回っていた。

『人間らしき』とは、裸で走り回っているのだが性別の区別がなく、目が大きく切れ上がっていて、口は小さく、頭が異様に大きい、凡そ人間らしからぬ者たちだったからである。

そういえばそこで事切れている、老人らしき人物にも、同じ様な特徴が見て取れた。

「この死んでいるのが浜御前なのか？ どこかで診た事があるような気がするが…… 思い出せないな」

実は、ヨデイは以前に浜御前を見た事がある。

アハイビアのテーマパークの地下で、アシユマが実験体にされ一度落命した事がある。

そのアシユマを助けようとして、偶然遭遇したのだ。

だがその時はその老人が浜御前だと知るべくも無く、見逃してしまった。

で、ヨデイは老人の首筋に手をあててみる。

脈は無い。

やはり死んでいるようだ。

「おい、この死んでるじーさんだかばーさんだかが、浜御前なのか！？」

オルバニアンはそこから走り回っている人らしきものの腕を掴んだ。

すると途端にそのものは、

「きゅーっ！」

異様な叫び声を上げて死んでしまった。

「うわっ！ 触っただけで死んじゃったぞ、気持ち悪いなア！！

もう！ きしょっ！」

その時、更に奥の部屋から黒尽くめの男達が現れた。

「こうでなくっちゃあよ。消化不良だったんだ」

オルバニアンがバルカン砲を構える。

「浜御様をお助けしろ」

黒尽くめの男たちは、オルバニアンたちには目もくれず、人間らしきものにそつと触れた。

それでもやはり死んでしまう。

黙って見ている法は無いので、オルバニアンがバルカン砲で、次々黒尽くめの男たちを倒していく。

「オルバニアン、待ちなさい」

それを慌ててヨデイが止める。

「何で止めるんだよ」

そうオルバニアンは言った。

「黒尽くめの男立ちから事情を聞きましよう。それにあの人間？

ですかねえ。あの者たちがオルバニアンのバルカン砲の音で死んで逝ってます。多分過度のストレスには耐えられないのでしょうか」

「音も駄目なのかよ！？ 手の焼ける連中だぜ。ここでもバルカン砲は駄目か」

確かにこの部屋に入ってきた時に比べ走り回っている人間らしきものの数は半数程に減ってしまっている。

「さて、じゃあ、黒尽くめさんに事情を聞きましようかねえ」

ヨデイが張り切った。

「ねえ、ヨデイ、鞭とレイピアどちらがいいかしら？」

エファールが訊いてみる。

「エファールさんの場合は鞭が宜しいんじゃないでしょうか？」

「鞭ね？ まつかせなさい」

エファールは鞭を紐解くとそのまま撓らせそして唸らせた。

鞭は蛇の如く伸びていった。

そして黒尽くめの男たちの内一人に、鞭を腕ごと身体に巻きつけて、こちらに牽きつけた。

「かくして、捕虜一人の出来上がり」

エファールがおどけてみせる。

「さすが僕のエファールさん。流石ですね。早速訊いてみましょう」

ヨデイはそう言つて黒尽くめの男に話を聞いてみることにした。思えばそういうことは初めてだった。

「その～すいませんねえ。これも仕事なモンで。浜御前の正体とは何です？」

これを聞いて黒尽くめの男はいきなりぐったりしてしまった。

「ありや？ 死んでしまいました。これじゃあ浜御前が七賢人かどうかわかりません！」

「ヨデイ！ なにやってるのよ。また捕まえないと駄目じゃない」

「よっ！ 土佐の一本釣り」

「ばか！」

だが、何度も捕まえて訊いては皆死んでしまった。

「ヨデイ！ だめだ！ こっちもみんな死んじゃう！」

オルバニアンから返答があつた。

「多分捕えられた時に、情報の流出を防ぐ為の措置でしょう。仕方ありません。ここは放つて置いて先へ進みましょう」

一行は仕方なく先へ進むことにした。

しばらく行くと地下へ降りる階段を見つけた。

一行は注意深く下へ下つて言った。

特に抵抗らしい抵抗も受けずに下までたどり着いた。

そこは巨大な実験施設のような所だった。

大きなシリンドー状の物が何百基と並び、その中には人間のよう
な物が入っていた。

アシユマがいたら、ランプシティの七賢人の基地にあった施設と、
そっくりだというだろう。

そこはアシユマの『故郷』とアーヌは言ったが、ここは誰の故郷
だったろう。

そこでは非常のアウンスがズーッと喋り続けていた。
いかにも機械的な感じの音声だった。

『現在ハマゴゼシステム停止中。大至急、復旧を開始してください。
ハマゴゼシステムは二十四時間停止しますと二度と復旧できません』

「どうやら浜御前はそういう名のシステムの名称だったようですね
」

そうヨデイが言った。

「どういうシステムなんだ？」

オルバニアンが訊いた。

「このシステムに直接聞いて見ましょう……ヘルプの……キーワ
ードタブの……」

ヨデイはモニタの前に立つとキーボードとマウスを弄り始めた。

『ハマゴゼ』

を検索してみる

『ハマゴゼとは七賢人支援システムの総称である。基本的には七賢
人の実務こなすシステムである。政治、経済、軍事……』

「ノリトレアを影から操っていた者さえ七賢人の実務担当になるの
か！……七賢人と言う組織とは一体……」

ヨデイが叫ぶ。

関連項目として『ハマゴゼ実務体』と『ハマゴゼ素体』と、言う
物があった。

早速その項目へと跳んでみる。

『ハマゴゼ実務体……ハマゴゼシステムの端末システム……』

「じゃあ、あのじーさんだか、ばーさんみてえのはこのシステム

の端末ってことかい」

「ええ、たぶん」

『ハマゴゼ素体……ハマゴゼ実務体の予備端末。定期的に実務体を素体と入れ替え性能を一定に保つ役割を持つ。緊急時には即座に素体を実務体にする措置が必要。二十四時間を越えるとシステム本体の生態部品がエラーを起こすため早急の措置が必要……』

「ふ〜ん、いいこときいちゃったあ」

関連項目に『神人復活計画』と、言う物がある

「面白いのがありますねえ。ちよつとこの関連項目を見て見ましよう」

『神人復活計画……本システムは神人復活計画の雛形も兼ね備えている。システム本体は聖櫃にあたり……』

「聖櫃？ 何のことでしょうねえ？ オロにでも訊いてみましょうかねえ」

ヨデイは疑問に思いつつもそう言ってみてみた。

「ヨデイ。知ってるかなあ？ オロ、そんな事」

オルバニアンがそう言った。

「私も良く分らん。使えるものは使ってみるさ」

「お客さんのご到着よ」

エファールが言った。

通路の左右にそれぞれ影の者達が詰め掛けていた。

「オルバニアン、そちらのほうを頼みます。アルミナさん、このシステムの生体部品を片っ端からやつつけちゃって下さい」

「生体部品ってどれ!？」

アルミナが叫んだ。

「あそこら辺の赤いのだと思います」

「随分とイージーでアバウトね」

「とにかく、壊して壊して壊しまくっちゃってください」

「じゃあ、行くわよ!」

アルミナはやたらめったら壊し始めた。

オルバニアンは影の者に対してバルカン砲を撃ち始めた。
そしてヨデイは召喚の呪文を唱え始めた。

「全てを憎しむその牙よ。

全てを憎しむその爪よ。

我は今より汝の主。

出でよ竜王、

ティアマツト!!!」

ヨデイはお馴染みティアマツトを召喚した。

そして地獄の業火たる炎を吐いて敵を薪の如く燃やしていた。

そしてエファールも……

「聖なる炎よ、火の粉らよ。

集いて炎、我が壁よ。

汝の怒りで、我守れ。

包み滅ぼせ、汝の衣

ファイヤーウォール!!!」

ファイヤーウォールを唱えた。

炎の壁は敵を燃やしながら前面の遙か向うまで進んでいって消えた。

ヨデイ側の敵はこれではほぼ全滅した事になる。

「オルバニアン、交代よ」

エファールが言った。

ヨデイはティアマツトを召喚中な為、喋る事が出来ない。

いや、ティアマツトを通じれば喋る事は可能なのだが……。

場所を入れ替えたエファールはファイヤーウォールを連発しこちら側の敵もほぼ全滅させた。

「アルミナ、こちら側の敵をお願い」

「いいわ」

ヨデイは施設の破壊に専念した。
エファールも施設破壊のため呪文を唱える。

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク！！」

機械類に電気は大敵。

忽ちショートなどを起こして煙を上げる。

『注意！ 注意！ ハマゴゼメインシステムに侵入者を確認。メイ
ンシステムに重大な障害を認めます。よって機密保持のため本シス
テムは十分後に自爆します。自爆まであと十分』

「おい、早く逃げようぜ」

オルバニアンは逃げようとしていたが、ヨデイのティアマットが
『お待ちなさい、オルバニアン』

そう言って天井に頭をぶつけて穴を開けた。

そして頭を下げると、

『早く頭にお乗りなさい』

皆を乗せ、また天井まで頭を上げた。

そして来た通路まで戻ってきた。

ティアマットの頭から廊下へと飛び移るとティアマットは消えて
行った。

「これで大分ショートカットできましたね」

ヨデイが言った。

『自爆まで後九分』

「さあ、急ぎましょ」

アルミナが皆を急かせた。

「アベ二爺。聞こえますか？ エンジンを臨界にして、いつでも飛び立てるようにしておいて下さい」

廊下を走っていく四人。

『自爆まで後八分』

途中、出てくる影の者たちを切り伏せながら、脱出を図る。

「なんで、行きには出ないで、帰りには出るのよ！」

アルミナが悪態をつく。

『自爆まで後七分』

廊下にアシユマがあけた横穴が見えてきた。

皆横穴から飛び出していく。

オルバニアン、アルミナはラヴアーで、ヨデイ、エファールは黒龍号でこの地より離れようとする。

『自爆まで後六分……』

黒龍号は空中で、ラヴアー二機を回収した。

オルバニアンとアルミナは両格納庫からブリッジへと降りてきた。

「どうだい、様子は？」

オルバニアンが訊く。

「後三分だね」

ヨデイが返す。

黒龍号は、全速力で時間の許す限り、屋敷から離れた。

どれくらいの規模で爆発するか、分からなかったからだ。

黒龍号の後部長距離カメラが、屋敷を写していた。

「十、九、八、七……」

「そろそろだわ」

エファールがメインモニターを見てそういった。

「……二、一、零」

「モニターにぽつと明るい光点が写し出される」

「普通の規模の爆発だな」

オルバニアンが言った。

「でも屋敷を粉々にするぐらいの火薬の量がありますね」

ヨデイも言う。

「じゃあ、戻ってみて様子を見て見ましょう」

浜御前邸だった所に戻ってきたが、やはり見事に破壊されつくしていて、何かしらの手掛かりとなるような物は無かった。

そのうちに、ノリトレア警察のパトカーのサイレンが聞こえてきたので、一行は黒龍号に戻って早々に立ち去ってしまった。

一行はとりあえず、オロ邸に行く事にした。

第二節 逸鉄、再び

「何？ 浜御前邸が粉微塵になっただと？」

（はい仰せのとおりで……）

ここはガルマインの道場にある離れの茶室である。

ここで、ガルマインは影の者の報告を受けていた。

「それで浜御前様はご無事か？」

（それが行方が分かりません。爆破直前に黒龍号らしきサイコ・フライヤーと、魔導機兵二機と交戦したという目撃情報がありまして……）

「黒龍号といえば確かヨデイとオルバニアン、アシユマらの艇であったな」

（は。仰せのとおりで……）

「もうよい。さがれ」

（は……）

影は気配と共に消えた。

（アシユマ・アトーにやられたとすると、二度と立ち上がれないほど、粉微塵にされたのやも知れぬ。それが事実なら、どちらにせよこれでこの国での最高権力者は、事実上ワシになるわけだ。そう考えた時に、これは果たして吉とでるか凶とでるか？）

ガルマインはしばらくその場で沈思した。

黒龍号は一路オロ・エバス『国』を目指していた。

その帰路でヨデイは報告の通信を入れていた。

「オロ、今更ながらに思うのだが、あれはノリトレアに対する、侵略行為に当るのではないのかな？」

ヨデイが、操縦をオルバニアンに代わってもらって、メインモニタでオロと会話していた。

『そのとおり。しかし本気でノリトレアを侵略しようとしたわけじゃない。あくまで七賢人に関係する、我が国への脅威を排除したに過ぎん。国際世論で、通用するか分からんがな。まあ、最も国際世論の世の字にも上がることもあるまい』

「そうだろうね」

「おいおい、ちょっとまったあ二人とも、何故そんな事が言えるんだよ」

オルバニアンが話に割り込んだ。

「理由はある。第一、これを公にしてしまったら、七賢人の存在まで世界の表舞台にでねばならなくなる。それは七賢人にとって非常にまずい事であることよ」

ヨデイが言う。

「ホントに上手くそう行くのかなあ？」

「この理由はかなり効くと思いますよ」

『それはともかく、アーチエル王女とアシユマ殿の姿が見当たらんが？』

オロが二人を向うのモニター上で捜した。

「姉様は今お休みになっておられる。義兄様はその付き添いじゃ」「キユポアは不機嫌そうにそういった。

『む？ 何だ？ この子供は？』

「子供などではない！ これでももう十四じゃあー！」

『ねえさま、にいさまと呼んでいたな。そうか、お前がキユポア王女だな？』

「お前如きに、お前呼ばわりされる、謂れないわあ！」

『そうか。そういえばアリアは息災か？ 元気でやっているのか？』

「サーナリア王女とフェリア姫共々、レキシタニアで元気でやっていますよ」

ヨデイが言った。

『そうか、それなら良い』

「わらわの話しは無視かあ！ー！」

『では、待っている』

そう言って通信は切れてしまった。

「あやつ、最後までわらわを無視かえ……おのれ……」

「『祝福されぬ命の者、われの僕の末裔どもを襲う。祝福されぬ命の者の勝ちとなるだろう』ですね。操縦代わりましょう」

ヨデイはオルバニアンのそばに来て、そう呟いた。

「また、ルーンの黙示録かい？ ヨデイ。いくら、レン又王子が解説してくれたからって、全部を鵜呑みにするのはどうかと思っぜ？」
オルバニアンが言う。

「お前、レン又王子を馬鹿にするのか？」

リイナがその話に激しく反応した。

「リイナ。その話と、レン又王子の人格とは、無関係だろう？」
オルバニアンが弁解した。

「王子の解釈を馬鹿にした！」

「馬鹿になんかして無いだろう？ 鵜呑みするのはどうかなって言うただけだよ」

「お、王子のこと、お、王子……ひっく、うえっく、うぐ、うっく……」

「お、おい、泣くなよ、リイナ……」

「お主、リイナを泣かしたなあ？」

キユポアが参戦した。

「駄目だよ、オルバニアン。リイナにとってレン又王子は神聖不可侵なものだからさあ。謝っちゃいな」

アルミナまでもが言う始末。

「お前が言えた台詞かよアルミナ！」

「なんだい、あたしが言っちゃいけないって言うのかい？」

「あーいけないね！」

「あー、夫婦喧嘩をここでやらないで、ここじゃないどっかでやって頂戴！」

エフアールまでもが巻き込まれた。

「これと言つのも、原因を作つたのは……ヨデイ！」
オルバニアンが叫んだ。

「ぼ、僕が原因ですか？」

「そっだよ」

「なんで僕が……ぶつぶつ……」

ヨデイはぶつぶつ言いながらも大人な所を見せて

「まあ、しょうがないでしょう」

そう言つたものだった。

だが、

「『その後、黒き卵世界に散らばる事になるだろう』なんですがね
え」

ヨデイは一人呟いた。

アーチエルは目が覚めた。

なじみの黒龍号の自分のベッドだ。

ベッドの側にはアシュマがいた。

微笑んでこちらを見ている。

幸せを感じた。

愛する人に見守られて寝ていたのだ。

胸が温かくなるようなそんな感じがした。

「アーチエル？ 何を泣いているんだい？」

アシュマの声音は優しくかった。

更に胸かきゅっとなるようなそんな感じがした。

「泣いて……？」

アーチエルはいつもそっだよ。

感、極まると泣く。

それは嬉しさの表現だったり幸せの表現だったりする。

今もそうした感情の現われだと、アシュマは理解している。

アシュマは指でアーチエルの涙を拭ってやる。

「頭の上のティッシュを使えばいいでしょうに」

これは責める訳でなく、そう言ってみただけの言葉だった。

アシユマもそれは分かっています、

「そうだな。今度からそうしよう」

返してくれる。

何気ない言葉のやり取りが嬉しいのだ。

これは付き合い始めてから、時を経た今でも変わらない、二人の初々しい所だった。

「か〜いじゅ〜ううう」

キュポアが来たらしい。

アーチエルは身を起こして妹が来るのを待った。

「えっちいいことしてないだろ〜なあ〜」

歌う様にやってくる。

「おっ？ 姉様が起きてるう〜」

キュポアはアーチエルの側にやってくる。

すると……

「ね、姉様……怪獣になんかやられたのか？」

「どうしてです？」

「泣いた後が、あるぞ」

「ああ。これは幸せの形です」

「シアワセのカタチ？ ……なんかえっちい事されたの？」

「いいえ。これは幸せな気持ちの時、おもわず流れ出てしまう幸せの形」

「思わず流れ出てしまう……」

「今日の場合は、アシユマさまが側で見守っていてくれたと思っただけで、泣けてしまいました。キュポア、貴女にはまだ分からないかもしれないけれど、そういう幸せの形と言う物が存在するのです」
キュポアには分かっていた。

そういう経験もある。

かつてアシユマに抱きしめられた時に、流した涙がそうに違いな

いと。

それを思った時、姉に対して激しい嫉妬感が生まれた。

「幸せの形がなんじゃあ！ いったもいっつも怪獣を独り占めしおつて、怪獣にべったりしおつて！ 羨ましくなんか無いぞ！ わらわだつて幸せの形の二つや二つ……」

そう言ったところでキュポアは、はつとなつた。

アシユマに迷惑が及ぶ、と、思ったからである。

姉の顔を見、アシユマの顔を見、また姉の顔を見た。

そしてぼろぼろと悔恨の涙をキュポアは流し自分のベッドブースへと駆けて行った。

「慰めに行った方が良いかな？」

アシユマはそう言つて立ち上がった。

「いえ、わたくしの方が良いでしょう。あの子にとって幸せの形とは、私に隠れてやった背徳的行為。それを懺悔させて許してやって、心の負担を軽くしてやれるのは、私しかいないと思つてます」

「そうか。行つておいで。俺はブリッジにいる」

「分かりました。有難う御座います」

アシユマがブリッジにやって来た

何の躊躇ためらいもなく半球板の前の椅子に座り、エナジアのバーを上げたと、半球板に手をあてる。

側にオルバニアンがやつてきてアシユマに話を持ちかける。

「なあ、アシユマ相談があるんだけど、いいか？」

「いいぞ」

「いや、実はさあ、さっきの戦いを見てて思つたんだけど、ウルクに俺とアルミナは手も足も出なかった。そして雑魚な敵にはエファールとヨディの二人に殆ど倒されちゃった。そこでこう思つたわけよ。俺達の存在意義って何なの？ ってさ。いや、決してエファールや、ヨディを悪く言つてるんじゃないぜ。俺達にや、俺達の役割

ってモンがあると思っっているんだ」

「そう思っっているならいいじゃないか。解決だ」

「いやいや、まだ話しは続きがあつて……俺らが思っっている俺らの役割って突破力だと思っっているんだ」

「ほう、突破力。それは何に對しての突破力なんだ？」

「よくぞ訊いてくれました。それは、アー又は別としてもウルクぐらいの強敵を叩いて突破できるだけの力が欲しい」

「それで？」

「……でだ。決して逸鉄が悪い刀だつて言つてるわけじゃあねえ。

訳じゃあねえが、突破力に欠ける。そこでアシユマの兄貴に頼みた
いのは……」

「そういう刀か。欲しいのは」

「決して逸鉄が悪い刀じゃあ……」

「それは分かつてる。気兼ねしているのか？ なら斟酌無用だ。ただ、逸鉄だけはとつて置けよ。あれは良い刀だ。いつ使い道があるか分からんからな」

「で、俺が望む刀の方は……」

「今度俺と一緒に来い。イツテツの親父さんに紹介してやる」

「ア、アタシは!？」

アルミナが訊いてきた。

「アルミナは駄目だ」

「どうして!？」

「女だからだ。あそこの工房は女人禁制だからな」

「まあた、そんな迷信にさ」

「迷信かもしれないが、大切にしているものは尊重すべきだ。特に神がかりなモノに對してはな。安心しろ。お前の『ロンリーストライフ』も使い易くしてやる」

「女性差別だ。それにまつて、あれは兄貴の形見なの。だから別の劍をもつて行つて」

「兄貴の形見だからこそロンリーストライフで決着をつけたほうが

いいんじゃないのか？違うか？」

オルバニアンが口を挟んだ。

「ねえ、アシュマ。やっぱりイツテツのおじさんに掛ければ、リリースドライブ大分変わっちゃうかな？」

「使い易さをそういう所に求める事もありうる。何か希望はあるか？」

「軽さと破壊力を両立させて。刃の部分の魔導石の硬度をあげて」
「わかった。ところで二人とも何か隠しているな？」

「い、いや？ そんな事無いよねえ？ オルバニアン？」

「そそそ、そうだなあ」

「そうか？ 辛くなる前に言え？」

アシュマが言った。

「あ、あと金用意しておけ？ 一振り目安金二千万だな」

「金二千万！」

「最低ラインだな」

「ひよえ〜」

「や〜ん。そんなにかかるのお」

黒龍号はオロ邸の庭に下りた。

もう既に専用デッキとしての感がある。

が、今回は皆を下ろした後ドックの方へ搬送された

キュポアはどうなったかと言うと、すっかり憑き物が取れた様な顔をして、アシュマの前に出てきた。

「何、人の顔をじろじろと見ておるのじゃ？ 失礼じゃぞ？ くす
っ」

「大分調子良さそうじゃないか？」

「わらわを、誰だと思つておる？ レキシタリアの第二王女キュポア・アップルトンなるぞよ？」

キュポアはおどけて見せる余裕さえ見せた。

「はよう下船せぬと、ドッグにそのまま連れて行かれてしまうぞ」

「わかった。よし行こうか？ キュポア」

「まぢやれ。姉様がまだぞ」

「よし、俺が待っててやるか。キュポアは先に行っててくれ」

「わかった」

「……分かったってそれだけか？」

「？ 他に何かある？」

「『姉様にえつちい事するな』と言う奴だよ」

「ああ、それが。それは二人の責任でやってくれ。それは人がとやかく言えるものではないわな。人様に迷惑が掛からん程度にやってくれて構わん。少し寂しいがな……」

そうしてアシユマはキュポアの後姿を見ていた。

背中がやけに寂しそうだった。

不意にキュポアがこちらを向き、

「わらわはどうやら、かいじゅ……義兄様の事が……なんでもない」

「ここへおいで。キュポア」

アシユマはキュポアを隣に座らせた。

「すまなかつた。キュポア。つらい想いをさせた」

「いいえ……義兄様のせいじゃありません」

「キュポア……すまなかつた」

アシユマは言ってキュポアの頭に手を置いた。

そして、撫でた。

「いいえ、いいえ！ にいさまは悪くない！ にいさまは……」

「いや悪いのは俺さ。俺の存在など早く忘れて、良い人を見つけたんだ」

「にいさま……」

キュポアは軽くアシユマの頬にキスをしたあと、

「姉様には内緒よ？」

と、言つと

「私はここで降ります。もう直ぐ終点だから気をつけてね？」

「終点？」

「そ 終点」

アシユマが

「？」

と、なっている頃、アーチエルがやっとになってやって来た。

「あら？ キュポアは？」

アーチエルが訊いた。

「アーチエル、その荷物は何だ？」

「あら？ アシユマさまこの船、ドックに入ると言うので、ちょっとお洋服の非難を」

「いくらドック入りと言ってもそこまで解体したりするわけじゃないぞ？」

「え？ そうなんですの？」

アーチエルは驚いた。

「キュポアを見る。アイツはスーツケース一つでオロ邸に行っているんだぞ？」

「ええ？ そうなんですの！？」

アーチエルは更に驚いた。

「手伝つてやるう。戻すのを」

「お願いしても宜しゅうございますか？」

「ああ、いいよ」

「済みません」

「……キュポアが何か、達観したような顔つきになっていたぞ？」

アシユマが言った。

「大分泣きましたから」

アーチエルがその言葉を返した。

「泣いたのか」

「泣きました。私も一緒に泣きました。二人で笑い、二人で怒り、二人で泣いて、二人で落ち込みました。そしてキュポアは生まれ変わったように……表現が大げさなら取り憑いていた物が落ちたよう

「なっていました」

「なにを話していたか……聞かない方がよいか？」

「そのほうが良い御座いますわね」

「例えば？」

「リーリ・ルウさんの事とか」

「う……」

「とりあえずこんな感じでしょうか？」

「ここにこう並べておけば固定されたのと同じだからな。しかし随分と集めたなドレス」

「はい。お父様が王女として恥かしくない格好をするのも勤めの内だと仰って、お洋服を買う分は、お給金から差し引いても構わないと、仰ってくれたものですから」

「そうか。しかしスーツケース四個分とは、一国の、しかもレキソタニアの王女ともなれば、少し少ないかもしれんな。しかも普段着とあわせて」

「そうでしょうか？」

「アーチエルとしては多いのかもしれないな」

「はい」

アーチエルは凜として答えた。

その姿がアシュマにはとても眩しかった。

「さあ、行こうかアーチエル」

「はいアシュマさま」

「アーチエル……」

アシュマは先程のキュポアとの会話と、今のアーチエルとの会話でほだされたのかアーチエルのことを強く意識していた。

アシュマはアーチエルの手を持つと半ば強引にアーチエルを引っ張り抱き寄せてしまった。

アーチエルはこのような形で抱きしめられた事等無かった。

動悸が早い。

心臓が口から飛び出しそうだ。

緊張して口の中がからからだ。

「アーチエル」

アシユマがアーチエルを強く抱きしめる。

(この人は私を求めているんだ。このような形で)

それが分かった途端アーチエルもアシユマの背に手を回した

少し苦しい。

アシユマが何かを言った。

アシユマはアーチエルにとって意味不明の言葉を投げかけてきた。

でも、涙が溢れてきた……。

もう何も考えられない。

頭は真っ白だ。

だがアーチエルにはそれが幸せに思えた。

結局二人はしばらくそこで抱き合ったままだった。

二人が黒龍から出ようとすると

『作業中止ー！！ 人が立ち入ってるぞ！ どういうことなんだ？

ちゃんと点検したのかあ！ お前たちどこの者だ？ 所属と部隊

名を言え』

スピーカーで男が喋ってくる。

とりあえず答えてやることにした。

「所属はこの黒龍号だ！ 部隊名は無い！ 俺はアシユマ・アトー

！ 彼女はアーチエル・アップルトン、レキソタニアの王女だ」

『王女だかなんだか関係ねえが部外者立ち入り禁止だ。早く出て行

つてくんない！！』

味も素っ気も無い。

職人と言つものはそんなものなのだろう。

「駅へ行こう、アーチエル」

アシユマはそう提案した。

「はい」

アーチエルも素直に頷く。

駅と言うのはこの広大なオロ邸宅中に張り巡らされた鉄道網の停車場で、アシユマはそこに行こうと言うのである。

そこまでは少し距離があつて、歩いていく事にした。

「済まない、アーチエル。こんな事になつて」

「？ いえ、わたくしは楽しゅう御座います。アシユマさまとお散歩しているみたいで」

「そうか。そう言つてもらえると助かる」

ふたりは駅に着いた。

目的地の切符を買い、列車に乗り椅子に腰掛けてた。

アーチエルは余りの事に放心していた。

アシユマも放心しているように見えた。

が、神経のどこかは常に警戒していて敵に備えている。

今がもちろんそういう状況ではないが。

アーチエルはアシユマがさっき言つた事を考えていた。

「……………」

どういつことだろう？

よく覚えていない

訊いてみたい。

だが訊くのが怖い。

どうしたらいいだろう？

頭が真っ白だ。

「アーチエル、着いたよ」

アーチエルは半分ぼうつとしていて危うく乗り過ぐす所だった。

「寝ていたね」

アーチエルはアシユマにそう言われた。

「寝ていたのですか……」

「そう、可愛い寝息を立ててね」

「嫌ですわ。わたくしっしたら」

「マジックアローはそれだけ気を消耗する呪文ってことさ。さあ、荷物を持ってやろう」

荷物はアシユマが持った。

「済みません」

「謝る事は無い」

一番近い駅と言ってもオロの屋敷までは十キロ以上離れている。どうするか？ と、途方に暮れているときに。車のクラクションが鳴った。

見ると、ヨデイが車で迎えに来ていた。

「まあ、ヨデイ様ーっ」

アーチエルが手を振る

ヨデイも軽く手を振り返す。

アーチエルとアシユマの二人が後部座席に乗る。

「済みません」

「いえ、いいんですよ。暇なんだし」

「他の皆さんはどうしてらっしゃるんですか？」

「えーと、オルバニアンとアルミナがイライラして落ち着かない様子でしたな。その他には、アン女史がアーチエル王女を心配しておられましたよ？」

「まあ、どうしましょう。あの人は怒ると怖いから……」

「怖いのか、アンは」

アシユマが訊いた。

「こわい……です……」

アーチエルは、また寝そうだった。

アシユマは肩をさり気無く貸してやった。

アーチエルはアシユマの肩に頭を乗せて寝始めた。

「ヨデイ、車を出してくれないか？ ゆっくり、そっと」

「了解しましたよ、アシユマ君」

「帰ったらまず、アンだな。そしてオルバニアンとアルミナ……」

「忙しそうですね」

「なに。いい暇つぶしさ」

アシユマは館に着いて、先ずアンに謝った。

アンは何故アシユマに謝られたか理解がつかないと言った。

それのお陰かどうかは知らないが、アーチエルは叱られる事無く無事済んだ。

そしてオルバニアンと、アルミナの両方を伴ってイッツテツの工房へ行った。

アシユマはイッツテツの工房へ二人を連れて来た。

二人は口をあぐりあげた。

何で建物の中に洞穴だか洞窟があるのかと。

実際はフロアの一角を粘土で固めてあるだけだが、イッツテツ『親方』に言わせれば、「形から入る事が大切」

なんだそうだ。

「今つれて来るからちよつと待て」

言つて二人を待たせ、また中へ消えていった。

「ねえ、オルバニアン……」

「なんだよ、アルミナ……」

「アシユマはこんな所で、七日間も飲まず食わずの眠らずでトンテンカンやったんでしょ？」

「ああ、このイッツテツを作った時はそうだったらしいな……」

「なんだかアシユマって……」

「アシユマって？」

「物好き……」

「ぷっ！ はっ、あはははははっ！！」

「な、なんでもないのでよ！？ 変な意味じゃなくて」

「しらね〜ぞあ〜その内『聞こえてるぞ〜』とかいって……」

「聞こえてるぞ？ 誰が物好きだ？」

アシユマがイツテツを伴って出て来た。

「ひえっ！」

アルミナが小さく飛び上がった。

「オヤツサンこいつ等が……」

「お前の弟分ってわけか！ 女が居るなんて言いやがって。これなら二人とも入っても大丈夫だぞ？」

その時アルミナの鉄拳制裁が、イツテツの親父の脳天にぶち嘯まされた。

「つづ……なにするんじゃ、小童！！」

「弟分なんていいやがって！！ ア タ シヤ お ん な だ
！！」

「女にしとくにや、勿体無いのう。ま、決まりは決まりだ。お前さんはここまで。剣を預かろう」

イツテツはそう言った。

アルミナは不安なのか寂しいのかその二つがない交ぜになったよ
うな顔をして、

「重いよ。大切にね」

そう言った。

「わかっつてらあな、いろんな意味でだろ。貸して見な」

イツテツはアルミナからロンリーストライフを受け取った。

「じゃ。確かに預かったぜ」

「つて、あたしの言いたいことはまだ……」

「分かってるって」

「私まだ何も言っていない……！！」

「言ってみな？」

「軽さと破壊力を両立させて。刃の部分の魔導石の硬度をあげて」

「んなこたあ、分かってる。他に何かあるのか？」

「え？ 他には……」

「一つ訊いてやる。殺るのは大物か？ 雑魚か？」

「大物よ。トビっきりの」

「分かった。少し扱いづらい剣になるぜ？ それだけ了解してくれ」

「え？ それだといざって時……」

「それはあんたの腕でカバーしてくれ！ 今まで剣の破壊力に甘えていた分だけしんどくなるぞ？」

「あたしの腕でカバー……」

「そうだ。なあにオメエさんなら大丈夫だろう。気になるのはこっちだ」

「おれ？」

オルバニアンは自分を指差した。

「そうだ」

イツテツは腕組みした。

「ナニがいけないんだよ？」

「それだ、それ！」

言って指差したのはオルバニアンの腰にある『逸鉄』だった。

「これの何がいけないんだよ！！ 言つとくけどなあ、アシユマに貰ったんだからな！ 変な誤解すんなよ！？」

「誤解だろうと六回だろうとそんな事はどうでも宜しい。おい、ヒヨッコのヒヨッコ！ 逸鉄を抜いてみい！」

「なに言ってるんだ？ そんな抜くのなん……てっ！？ うんむむむっ！！ ふぎっ！！」

オルバニアンが押しが引こうが逸鉄はびくともしなかった。

「どうじゃ、抜けまい。それは刀身が曲がっているせいだからだ」

「じゃあ、何で最初は嵌ったんだよ！」

「火事場の馬鹿力だろう。おそらくはな。そういう事が往々にしてある」

「じゃあ、鞘の内なのに、なんで曲がってるって分かるんだよ？」

「お前、ワシを舐めとるな？ 小僧。馬鹿にするなよ？ このイツテツ、刀が鞘の内にあると無かるうと、曲がっていると、曲がっている曲がっていないの差ぐらい着くわい！！」

「ようアシユマよう。このオツサン信用できるのか？」

「当たり前だ。現代の名工にも数えられてるお人だぞ？」

「そういえば、ヒヨッコ！ ゴルグ・ローンを倒したようだな？」

これで名実共に世界一の武者者だな！」

イツテツがアシユマを称えた。

「いえ、それ程でも」

「謙遜だな。それよりも、おい、ヒヨッコのヒヨッコ！ お前は逸鉄の修理だけでいいんだな？」

「いや、俺にもピンポイントに大量の破壊力を与えられる刀が欲しい」

オルバニアンは力説した。

「なんでい！ お前もか。お前にはまだ早い！ ……とはいってもオメエに逸鉄で『それ』をやれつても無理な話か。しょうがねえ作ってやるか！」

しょうがないような風をしてイツテツは言った。

「なんかカチンと来る言い方だなあ」

オルバニアンは憤慨した。

「なら、やめるか？」

イツテツは挑発してみる。

「う……うくつ！」

オルバニアンは俯いて怒りを抑えている。

「オヤツサン、遊ぶのはここまでにして、話を聞いてやってくれな
いか？」

アシユマが助け舟を出す形になった。

「まあ、よかる。刀で良いんだな？」

イツテツが訊いた。

「剣でもいいがやはり刀がいいかな？ 大きさとか寸法とかは任せ

る。とにかく強力な奴を作ってくれ」

オルバニアンが言った。

「大きさは任せる？ 強力な奴は作れ？ 先ずは、お前さんの技量が分からんと出来ん相談だな」

「尤もな話しだぜ。試合しろってか？ アシユマと？」

「いや、中で巻き藁でも斬ってくれば良い」

「あつ、あのアタシは？ ここで帰れって言うの？」

寂しそうにアルミナが言った。

自分ひとりだけ除け者にされたような孤独感を覚えていたのだ。

「なら俺も一緒に帰ろう。オヤツサン、オルバニアンを頼みます」

アシユマが頭を下げる

「おう！ 任された」

イツテツが言う。

「じゃあ、オルバニアン頑張ってる」

「気をつけて帰れよ、アルミナ」

「アシユマがついてるから大丈夫」

（それが一番心配なんじゃないか）

オルバニアンは心の中で舌打ちをした。

アシユマと、アルミナは二人揃って駅の方へと向かった。

残されたオルバニアンはイツテツの工房に入ってしまった。

中に入って周りを見てみると、手狭な工房の中でイツテツの弟子らしき男達が、槌を打っていたりふいごの火の中に剣を入れていたりとしていた。

当のイツテツは巻き藁を十数本持つてきて、向うの通路の方から並べてイツテツの背中（若しくは左面がみえる角度）で終わっていた。

「オメエには今、刀がねえ。だからこの刀を貸してやる。コイツは、良くも悪くも『普通』の刀だ。そして巻き藁の中には鉄心が入って

いる物も何本か仕込んである。別に試験じゃねえから、気楽にやんな」

(気楽になんたツつってもよ……まあ、いいか)

「始めるぜ？」

オルバニアンは宣言した。

「なんだ。まだ始めてなかったのか？ いいから始めるよ」

イツテツは早くやれと言わんばかりに促した。

(全くやりにくいオッサンだぜ)

オルバニアンは巻き藁を斬り始めた。

何本か斬って行って次の巻き藁を切ろうとしたときにイツテツが

「あの嬢ちゃんとヒヨッコなあ……！！！」

そうオルバニアンに言ってきた。

オルバニアンはその言葉に動揺を覚えながら刀を振るった。

ガキッ！

と、音がして今までと違う感触を手に覚えた。

鉄心だったのだ。

だが何とか斬った。

斬った後で刀を見た。

刃こぼれがしている。

「すまねえ、オッサン。刀、刃こぼれ起こしちゃまった」

「んなこたあ分かってる。いいから続けるい！」

(なんだよ、折角人が、刃こぼれ起こして済まんと、詫びいれようとしてんのにな)

「くだらねえ事言っつてねえで、さっさと続きをしな！」

「分かってるよ！」

オルバニアンは、また巻き藁を斬り始めた。

「そういえば、あの嬢ちゃんアルミナと言ったか？ アシユマのヒ

ヨッコとお似合いだったなあ」

また、イツテツはオルバニアンに語りかけてきた。

オルバニアンにまた動揺が走る。

また、ガキツと音がし、今度は巻き藁を斬る事が出来なかった。
オルバニアンは嘆息した。
刀を見てみる。

大分刃こぼれしている。
鋸のこぎりのようだ

「オツサン、もう斬れな……」

「だめだ。なに言い出しよる。ヒヨッコのヒヨッコが！ いいから
続ける！」

「ちっ！ 分かったよ」

オルバニアンは巻き藁を斬れない刀で何とか斬って行った。

「ところで、あの嬢ちゃんは……」

イツテツが言い出した。

(そら来た)

オルバニアンは思った。

そして次の巻き藁が鉄心だと思い込み、力の限り切り打ちこんだ
すると手ごたえは軽くその分刃筋が曲がってしまった。

また暫く斬っていくと最後の巻き藁になった。

やっと終わりだと思つて巻き藁を斬ると、鉄心だった。

刀が途中で止まった。

「終わったぜ、オツサン」

「最後まで諦めなかったのは褒めてやろう。どうれ、先ずは刀を見
せてみい」

オルバニアンはイツテツに無言で刀を渡した。

「ふむ。思ったより悪くはなさそうだ」

そう言つて次は巻き藁を見に行った。

「ここで、最初の動揺。それにもめげずよう斬っておるわ」

イツテツは巻き藁の切り口を見ながらそういった。

「二度目の動揺の時には、斬れなんだか。ま、仕方あるまい」

イツテツは歩いていき、

「三度目の動揺のときは偽者。竹が芯の巻き藁じゃ。この時は力み

すぎて刃筋が立っておらん」

そう言い、最後の巻き藁の前で、

「最後の最後で油断したな？ おぬしに大切なのは何者が来ても動揺せず、いきり立たず、油断せず、戦いが終わるまでそれを持続する事だ。おぬしは気にムラがある。それを戒める事だな」

「なんだよ！ 結局試験かよ！？」

「ま、そうなるかの？ おぬしにワシが打った刀を託してよいかどうかのな」

「で、答えはどうなんだよ？」

「まあ、よかる」

呆気なくイッテツは言った。

「一応、標準の域は達しているからの」

「どの辺りなんだよ？ 俺の腕って」

「ヒョッコが！ そんなこと気にせんで修行に励め！ バカだったれが！」

「なっ……！！」

「それはともかく、おぬしの刀も多少扱いづらくなるぞ。いいか？」

「威力があればそれでいいや」

「お前も単純よのう。まあ、いい。今夜はここに泊まっていけ」

「なんで!？」

「逸鉄の打ち直しをやる」

「何？ こんな時間からか？ もう、夜も更けたぜオッサン」

「夜も更けたからやるんじや！ お前が新刀打ちに付き合えるかどうか試してやる」

「え？ 勘弁してくれよ」

もう何ヶ月も前から殻兵器の分析が各国で行われてきた。

その為にリスパダハルの様に政権が吹っ飛んだ事もあった。

殻兵器の争奪戦に各国が鎬を削る事も合った。

スコラに大挙してやって来て秘密を握ろうとした事もあった。

そう、殻兵器の正体は魔導法術。

人の脳核にその呪文を覚えさせ、呪文を唱えさせ術式を発動させる非人道的なものだった。

術式は、脳殻を中心に発生させ、術式が及ぶ範囲のものを全てエネルギー化する為、残留放射能を発生させない。

これは以前マリク紛争時アシユマが鬼虎で見せた念導境界面内の物質のエネルギー化に遠因がある。

それからのだろうか？

いち早くこの呪文の正体に気付いたのはアシユマ・アトーで、その呪文は暗黒魔法の禁呪、『エンジェル』と言うものだった。

名前は美しいが威力は計り知れない。

鬼虎ほどでないにしても……。

そしてどこからその呪文を知ったのか、殻兵器を『開発』している国があるという。

アシユマ達一行はそれを阻止すべく、オロの執務室に集まった。

「お早う、諸君。さて懸案の殻兵器を開発している国だがノーツ連邦、クーロン人民共和国、アヘイビア連邦共和国。いずれも超大国三国だ。特に危険視しなければならぬのがアヘイビアだ。アヘイビアは先日我が国と戦争して負けたばかり。殻兵器を手に入れば何をしてくすか分かったものではない。これらの国の殻兵器開発阻止が目的だ。頼んだぞ諸君」

「じゃあ、オロ、先に手をつけなければならぬのはアヘイビアか？」

「ヨデイ、昨日話したろう。『オロ』ではなく『大統領』と呼べと」

「へいへい。オロ大統領閣下。で、私ら庶民は、一体どこから手をつけなければならぬんでしょうかねえ、オロ大統領閣下」

「なにをバカな事を言っている？ お前だってアルス……」

「わぁーっ！ しーっ！ しーっ！ しーっ！」

「何だまだ話してないのか？ ヨデイ特務大佐」

「えーっ！ またナントカ太佐あ？ いい加減止めようよお。それ」

「何を言っている。そのほうが色々都合がよかるう？ 用兵において」

「用兵、使い辛くても、ナントカ太佐じゃない方がいい！」

「わかった、わかった！ その件は考えてやるから、とりあえず先にノーツ連邦に行ってくれ。ノーツ連邦はもう実験段階に入っている。明日明後日にも実験があるかも知れん。これを止めるのと、できれば実験記録の破棄、開発科学者の始末……おっと君たちはこれは君たちにそぐわない仕事だったかな？ なんなら、こつちで処分するが？」

「オ口様。それってオ口様側で科学者さんたちを殺すってことですよね？」

「アーチエルはオ口を睨んだ。」

「そういうことになりますかな？」

「いけない事です。させません」

「どうやって？」

「国際世論に訴えてでも」

「はははっ。さすが理想主義者の王女様だ。だがこの世の中、奇麗事だけではカタがつかない事もありません」

「きつと何か方法があるはず」

「あつたらとつくにしますよ。われわれだって本当だったらそうはしたくない。してないのはそう出来ないから。それともこの世の中に殻兵器が蔓延した方がいいのですか？」

「それは……」

「『フォゲット』使えばいいんじゃないの？ 魔法のエリアの治療に使った」

「オルバニアンが言った。」

「アーチエルの顔に喜色が走る。」

「ナイス、オルバニアン！」

ヨデイが喜ぶ。

「駄目だ」

誰かが言った。

皆、声のする方へ視線を送ると、その先にはアシユマがいた。

「何故、駄目なんですの？」

アーチエルが訊いた。

「敵側が『アンチ・フォゲット』を使っていたら効果無しだ。」

「アシユマ君、ちなみにアシユマ君が『フォゲット』を掛けられたら、やっぱり忘れてしまうんですかね？ いろんなことを……？」

ヨデイがアシユマに質問した。

「もう、普通にしか忘れない。『アンチ・フォゲット』を掛けているから」

「あ、そうでした。私も掛けてもらっているんです」

アーチエルがと呆けた事を言う。

「大丈夫かよその『アンチ・フォゲット』とか言うのはよ」

オルバニアンがそう言うのに対しアシユマは、

「効果抜群じゃないか？ 普通に忘れていた事を普通に思い出す。自然でいいだろ？」

そう、言った。

「じゃあ、相手側が『アンチフォゲット』を掛けていたら……そうか……『フォゲット』は効かないか……ちえっ、じゃあ『フォゲット』は使えないんだ……」

オルバニアンは残念そうにした。

「まあ、そのことはこちら側に任せてもらおう
オロが言う。

「でもそれってことは……」

と、アーチエル

「まあ、全てが全て殺すというわけではないから安心しなさい」
「安心できません！」

アーチエルは怒ってみせる。

「まあアーチエル王女。ここで口論しても始まらない。殻兵器拡散を防ぐ為だ。さっそくノーツ連邦まで行ってくれたまえ」

「殻兵器拡散を防ぐ……」

「なんか上手くのせられたような気がする!？」

アーチエル王女様はご立腹だった。

「俺もそんな気が……ふふわああああ」

オルバニアンが大きな欠伸をした。

「眠そうねえ？　オルバニアン」

アルミナが相棒を見て言った。

「眠いのなんのって、あの親父、人が弱い立場なのを利用して三日三晩寝せねえわ、肉体労働させるわ、飯は食わせねえわ、風呂は入らせねえわ、全くあの親父……」

アルミナがつつつ……と少し離れる。

「何で離れたんだ？」

「ふけつ」

「さつき入ってただろ!？　シャワー!」

「あ、あの……だから、上手くのせられた気が……」

「さあ、寝るぞ!」

「じゃあ、私も一緒に寝ちゃおう」

「あの、私のお話は……?」

「姉様、わらわでよかつたら話を聞くぞ?」

ポンポンと、キュポアがアーチエルを慰めた。

第三節 契り

アーチエル達は、一路ノーツ連邦の西部地域を目指していた。最初に殻兵器の実験が行われるという情報によるものだ。

実験所の名前はポルクス。

黒龍号の優秀なステルス機構のお陰でノーツ連邦の領空内に易々と侵入できた。

ポルクス実験場ではまだ実験が行われていないらしい。

実験所本棟の横に黒龍号を強制着陸させた。

実験所の正面から延びる道路の向うに、黒煙が上がっている。

何かの事故だろうか？

急いで実験室に向かう。

敵部隊の抵抗がさほど多くない。

何かあったのだろうか？

兎に角、実験室を捜さなければならない。

急いで実験を中止させねば。

「そっちあったかあ？」

オルバニアンが叫ぶ。

「こっちにはないわ」

エファールがレイピアで敵を切り裂きながら答えた。

敵の出かたはあくまで散発的だ。

国家の威信と名誉を掛けた、大事な実験のはずである。

この施設を護る軍隊がいていいはずである。

それらは一体どうしたのであるうか？

そこで時は二時間ほど前に遡る。

『彼』はとある施設を目指していた。

そこは実験場である。

殻兵器の。

彼は、はっきり言うたと実験などどうでもよかった。

実験が行われる前ならば、その場にいる科学者を殺して殻兵器を奪い去り任務終了。

実験が行われた後ならば、データを奪い去り科学者を殺して任務完了。

そう、彼にとってはどちらでも良かったのである。

だからと言ってはなんだが、実験場のかなり手前から彼は降り立った。

この実験の為に、防衛網が何十と引かれている。

もちろんこの広大な実験場の全ての場所をカバーできるわけではないが、補い合って目の届かない所は無いようにした。

定期的に魔導機兵を飛ばしてもいる。

そうやって殻兵器の実験が上く行われるように準備を万端にして護りに付いた。

だが彼にとってはそれもどうでも良い事だった。

警備が厚かるうが薄かるうが、ただ行って、殻兵器を奪い去りさえすれば良いのだ。

そんな事を、森の中を歩きながら、うすぼんやりと考えていたら、早速一番外側の防衛ラインに引つ掛った。

「その鎧……？ 鎧の男！ 止まれ！ 止まらないと発砲するぞ！！」

彼ははその言葉を無視した。

「発砲するぞ！！」

タタタタタッ！！

乾いた音がして銃弾が発射された。

すると独りで天龍鬼の鯉口が切られた。

銃弾は天龍鬼の念導境界面に接触すると、光に変換され電光とな

つて天龍鬼の鯉口の中へと吸収されて行った。

小銃を撃った兵士は唾然とした。

天龍鬼を持つ彼……そう、彼はアーヌ。

アシユマの宿敵だ。

アーヌが前もって来ていたのだ。

アーヌは区画を分ける金網を手で引き裂こうとした。

途端に起こる大放電。

「それみる！ その金網には十数万ボルトもの電圧が掛かっているんだ！ 幾ら強固な鎧を持つお前でも……」

この兵士は先程のアーヌの物質とエネルギーの変換を、ただ鎧が銃弾を防いだ物と解釈したらしい。

アーヌはそれでも構わず金網を引きちぎった。

「ひっ！？ ば、化け物か！？ お、応援を呼べ」

兵士が応援を呼んでいる間に、アーヌはどんどん先に行ってしまった。

森の中に敷かれている、舗装された道路の上を。

暫く森の中を進んでいくと、また金網にぶつかった。

アーヌはまたかと思いつながら、金網に手を掛けようとした。

『おっと、そこまでだ。手を上に上げな』

魔導機兵のパイロットは言った。

別に手を上げなくとも良いのだが、酔狂なのか手を上げて見せた。すかさず兵士がボディチェックをする。

「おい、この鎧シームレスだぜ。どうやって脱ぐんだ？」

「コイツの武装はこの刀だけか？ 魔導石はねえのかよ？ よく今まで生きてこれたな？ あちっ！ 何だこの刀、柄に触るとびりつと来たぞ？」

「もう良いか？ 満足したか？」

アーヌが突然喋った。

「うわっ！ びっくりしたなあ、もう！ コイツ喋りやんの」

そうこういつている間にアーヌは動き出した。

再びアー又は金網に手を掛けようとした

「おいオッサン！ だから動いちゃ駄目なんだってばよ！」

アー又は兵士に体を触れられた。

「気安く触るでないわ！」

アー又は振り向きざま、抜く手も見せず、その兵士の胴体を両断してしまった。

「う、うわあああつっ！！」

もう一人の兵士は四つんばいになって、逃げ出した。

それと入れ違いで、剣を持った歩兵部隊が現れた。

「攻撃の許可は今取れた。構わん！ 殺つてしまえ！」

「我の行く手を阻むか。面白い、やってもらおうではないか」

アー又の声は低いが良く通る声だ。

その声でドスを利かせて喋られれば、誰だって怯むだろう。

辛うじて隊長らしき人物が踏みとどまり、部下にこう言った。

「ひるむな！ 者共、かかれ！！」

部下たちは一斉にアー又に切りかかった。

アー又の天龍鬼は軌跡を見せず、兵士たちを斬っていく。

ただ、刀が閃く度に兵士達が倒れていく。

「お、おい……あれが閃光のアシユマなんじゃねえか？」

「それを言うなら、BLOODYアシユマだろ？ 下手に手出しし

ないほうが良いんじゃないのか？」

その時アー又が言った。

「あのような未熟者と一緒にするな」と。

上空の魔導機兵が

『抵抗するな！ 抵抗すれば撃つぞー！！』

そう警告した。

「撃つなら勝手に撃つがいい！」

アー又は叫んだ。

『よし、そっちがその気ならお望みどおり撃つてやる！ まだ動

けるものは負傷した者を引っ張ってつてくれ！ 攻撃を開始する！
アーヌの周りを魔導機兵が取り囲む。

『よしっ！ 撃ち方始め！』

ガガガガッ！

と、言う音と共に魔導機兵のマシンガンが火を噴く！

もうもうと煙が上がり、アーヌが隠されていく。

『撃ち方止め！』

部隊のアーヌへの攻撃がやんだ。

まだ暫く煙は晴れないだろう。

『奴の死体を確認して任務終了とする。なあ、一人一人に魔導機兵の

マシンガンはオーバーだったかね』

『歩兵だけでは、対処し切れなかったんですから、仕方ありません

』

『だな』

煙が、やっと晴れてきた。

『よし、任務終……』

部隊長が任務終了を告げようとしたその時、煙の中から三日月形の光の刃が現れ、魔導機兵を真っ二つに切り裂いてしまった。

隊長機はそのまま地面に激突し、爆発してしまった。

『たっ！ 隊長おおお！！ ぜ、全機撃ち方はじめ！』

三十機ほどいる魔導機兵隊はマシンガンを斉射し始めた。

またもや上がる硝煙。

だが今度はもうアーヌも待つてはいなかった。

次々と光の刃を繰り出し、次々と魔導機兵を落としていく。

それを見ていた兵士が本部に応援を要請する。

応援は間も無くやってくるだろう。

しかし、ここの魔導機兵部隊は瞬く間に全滅してしまった。

硝煙の中からアーヌが出てくる。

「ひっ、ひっ、ひいっ」

兵士は完全に怯えきっていた。

「無抵抗の者を斬るほど腐ってはいない。あと、応援は呼ぶな。犠牲者が増える」

アーヌはそう言うと、一人、道の真ん中を行った。途中ある障害はすべて排除して。

そして時は今に至る。

警備が手薄だったのは、アーヌに原因があったのだ。

だが、それではアーヌはどこに行ったのか？

「……『中央実験制御室』、ここだ」

アシユマが言った。

「やっぱり外国の文字が読めるって便利ですね。いいなあ、アシユマさまは。ではみなさんをお願いしますね」

アーチエルは羨ましそうに言っただけで去った。

「頼む」

アシユマはこの部屋にある気配を感じていた。

そして部屋の中から漂ってくる血の匂い。

アシユマは異変を感じていた。

その部屋の扉を開く。

そして言う。

「居るのは分かっている。出て来い！」

「ほう、流石だな。我が気配を読むとは」

（アーヌ！！……いや、違う！ アーヌはこんなに簡単に、尻尾をつかませるような気配の出し方は、しないはずだ）

そう。

アシユマの勘がそう告げていた。

アーヌのほかは何者がが居る！

(しかし、アーヌに出会ってしまった以上油断が出来ん！)

「どうした？ 来ないのか？ ならばこちらから行くぞ！」

「くっ！」

二人の『鬼』は中空で交差し、火花を散らし、鏢迫り合いになった。

ギリギリと鎬を削るように二人は刀を押し付けあう。

小石が転がってカランと鳴った。

その時時、二人とも同時にふつと離れた。

後は睨み合いである。

その時だった。

アーチエルが皆を連れて入ってきた。

「アシュマさま、お待ちせしましたあ」

アーチエルが部屋の中へ入ってきた。

先ず驚いたのが、部屋の中央で刀を交えている、アーヌとアシュマだった。

次に驚いたのが、天井板が割れ、そこから出てきた何かに、アーチエル自身が捕まった事。

「皆の者、武器と剣を置け。魔法を使うものは魔導石も床に置け！」

ヨデイ達は武器を床に置いた。

アーチエルを捕まえたこの者は誰か。

それは異形の者だった

手はハサミになっており尻には尾があり、その先には毒針用の器官が付いていた。

「みんな武器を置いちゃ駄目！ この人はわたしを生かしておくつもりなんてないわ！ だからみんな……」

「いいから武器を捨てる。アシュマ・アトー、貴様の鬼虎を捨てるんだ！ さあ、アーヌ殿、我等七賢人にとって憎き相手、アシュマアトーにとどめを」

「アシュマさま！ 駄目！」

そう言うアーチエルとは裏腹に、アシユマは鬼虎を床に突き立てた。

「アシユマさま……」

アーチエルは悲嘆とも感動とも喜びとも知れない複雑な感情に打ち震えていた。

「『蠍』、お前がこんな事をして我が喜ぶとでも思ったか？ イレギュラーナンバーの知恵は猿以下か？ こんな卑怯な手を使って、嬉しいと思う奴の気が知れん」

そう言うって天龍鬼を右手にぶら下げて『蠍』と呼んだ異形の者の側へと歩み寄って行った。

「アー又そいつはイレギュラーナンバーなのか？」

「そうだな。ナンバーは零零五。コードネームは蠍。今日の俺の供だな。適当に掻い摘んでは人を殺して喜んでいたな」

「何でひどい人。許しません！」

アーチエルが怒りを顕にした。

「ほう、面白い。どう許さんのかな？」

「そ、それは……」

「俺が許さん」

アー又が言つて『蠍』の鳩尾から天龍鬼を突き入れた。

それは心臓を通り、首を通り、脳天へと抜けた。

「な、何故……」

アー又はそれには答えず、

「さあ、王女よ。行かれよ」

そう言った。

「お……おのれ！ せめて……」

蠍はそう言うのと尾の先にある毒針をアーチエル目掛けて突きたてようとした。

が、アー又が気付くが早いか、その針を手で握って動きを止めた。しかし針の先がアーチエルの肩口を掠めた。

衣服は切り裂かれたが、肩に薄っすらと浅い傷跡かできる程度で

あつた。

「そ……それだけでも、十分致死量に達するぜ。く、くくくく」

アーヌは刀に力を込めて止めを刺した。

アシユマは急いで鬼虎を引つ掴み倒れこむアーチエルを抱きとめた。

アーチエルは瞳孔が開き、異様に汗をかいて、呼吸が苦しそうである。

唇も紫色に変色している。

アシユマは鬼虎を見た。

「本システムに重大な障害が発生。障害を取り除きますか？ はい、いいえ」

アシユマは迷わず「はい」をえらんだ。

アーチエルを包む青白い光。

アーチエルの体から毒が取り除かれていく。

アーチエルは小康状態を取り戻しはした。

だが熱がある。

相当高温だ。

また鬼虎を見る。

「本システム異物排出のため、暫く平常体温より二丁三度体温が高くなる事があります」

まだ異物は残っているのかと思うアシユマ。

「アシユマ・アトーよ」

アーヌの声に反応するアシユマ。

「これで借りは返したぞ。借りは後二つ残っている」

「何のことだ？ お前に貸しを作った覚えはないぞ。借りならあるかな」

「そうだったか？ なら私の借りは後一つだな」

もはや、貸し借り計算等出来ないに等しい二人であったが。

アーヌは天龍鬼を納刀し、ヨディたちの前を堂々と通り過ぎていく。

「そうだ、アシユマよ。殻兵器は処分した。科学者も始末した。データも消去した。貴様らのすることはもう残ってはいまい。おせっかいが過ぎたかな？」

確かに辺りは血の海で科学者と思しき死体が転がっている。

物はあちこちに散らばっている。

散乱していると言っても良い。

「……………」

アシユマはアーヌに掛ける言葉を見出せないでいた。

「ではな」

アーヌはそう言うと、部屋の出口から外へと出て行った。

アシユマは鬼虎を納刀し、アーチエルを抱き上げた。

「ヨディ。すまないが先に戻っている」

「そうしてあげてください」

「すまない」

アシユマはアーチエルを抱え上げ、出口を出て行った。

「さて、アーヌの言葉だけでは信用できませんからね。特にデータ関連を中心に検証を始めますよ」

ヨディが陣頭指揮に立った。

アシユマがアーチエルを伴って黒龍号に帰ってきた。

「みなさん、お帰りなさい……………って、怪獣……………お義兄さまと姉様だけですか。みんなは？ 姉様具合悪いのですか？」

「ああ、毒にやられた」

「毒ですって！？ 大丈夫なのですか？ 姉様は」

「ああ、大丈夫だ。後はゆっくり寝かせるだけだ」

「お帰りなさいませ。今アーチエル様が毒にやられたとお伺いしましたが……………」

アンが、ブリッジの方からやってくる。

「アンか。その通りだ。毒に冒されている」

「アシユマさまがいながら見す見す……」

「すまんと思ってる」

「とにかく、先ずアーチエル様のお召し物を取り替えないと……アシユマさまベッドまで運んでください」

「分かった」

アシユマはアーチエルをベッドに運んで寝かせた。

そしてアンが着替えを取り出すのをただ眺めていた。

「何をしてらっしゃるんです？ さあ殿方は出てった出てった」

アンに追い出されてしまった。

暫くしてアンがベッドルームから出てきた。

アシユマはただ、でくの坊のようにそこに突っ立っていた。

「着替えが済みました。後はアシユマさまの出番です。側に付いてあげて下さいまし。また着替えが必要な頃来ます」

「相済みぬ」

アシユマが詫びる。

そして早速アーチエルの元へと寄るアシユマ。

アンは、

「はあ。やっぱりアシユマさまの心はアーチエル様のものですか」
溜息をついた。

アシユマはアーチエルのベッドの側についた。

キュポアが

「あら、お義兄様いらしたのね？ ならもう大丈夫だね。後は姉様を宜しく」

そう言った。

「あ、ああ。……いつもみたいに、『おい！ 怪獣』じゃ無いから調子狂うな」

「ああ、あれは一時の気の迷いみたいなものじゃ。気にするな。では、わらわは行く」

「済まん。気を使わせて」

「構わん。では、な」

キュポアもいなくなつた。ベッドルームには、アシュマとアーチエルの二人きりとなつた。

アーチエルは熱に浮かされていた。

アシュマが絶えずひたいの手ぬぐいを替えてやる。

「みず……」

アーチエルが弱々しくそういうと、吸飲みで水を飲ませてやる。

すると時々意識を覚醒させてアシュマだと認めると、

「手を……」

そう言つて手を差し伸べてくる

手を握つて欲しいのだから。

手を握つてやる。

すると向うも弱々しいが手を握り返してくる。

「アシュマ、さ、ま」

言葉使いが、たどたどしい。

相当消耗したのだから。

「可哀相に」

そういうと本当に眼に涙がにじんでくる。

いかんいかんと、慌ててにじんだ涙を指で拭く。

今、自分は本当にこの娘を愛しているのだなと実感する。

命をかけて護ろう。

この娘の命を。

ヨデイ達が帰ってきた。

どうやらアーヌの行動の検証に奔走していたらしい。

女子ベッドルーム（女子部屋とも言う）の戸が少し開いてヨデイがやって来た。

アシュマははまだアーチエルの手を握っていた。

「アーチエル王女はどうですか？」

「まだ熱が高い。予断を許さない状況だ」

「アーヌのほうは検証が終わりました」
「そうか」

「ただ、アーヌはデータを削除しただけではなさそうですね」
「とは？」

「データをコピーしてから削除しているっばいんですよね」
「それはまずいな」

「はいはいはい、殿方はご退出願いますよ〜」
アングが、手を叩きながらこちらにやって来た。

「な、何ですか？ 一体？」

「アーチエルの着替えさ」
アシユマが言う。

「じゃ、じゃあもう少しここにいまししょうか？ アシユマ君！

「そんな事、良い訳無いだろ！ こっち来い」

「あた、あたた、ア、アシユマ君！ 耳いたい。ち、千切れちゃいますよお」

「で、ヨデイ。次はどこなんだ？」

アシユマが訊いた。

「オロも情報を掴みきれていないようです。あるとしたら同じくノ
ーツ連邦だそうです。暫時待機と言う事で」

ヨデイが答えた。

「だが何故殻兵器の情報が漏れた？ 俺が撃ち漏らしたか？ 技研
で？」

「さあ？ こればかりは分かりません。ただ撃ち漏らしたただけなの
か？ それとも新しい情報源から漏れたものなのか？」

「新しい情報源？」

「いえ、何でもありません……僕の思い過ごしかも」

「そうか」

「その後、黒き卵世界に散らばる事になるだろう。嗚呼、これは

有つてはならぬ事である』」

「ルーンの黙示録か。これからのことで何か役に立つ事は？」

「『祝福されぬ命の者、その光に飲み込まれこの世より消えうせる』ですかね？」

「それに関してあの王子はなんと言っていたっけかな？」

「『見えない』でしたね」

「そうか。そして現状は予言どおりに進んでいるわけだ。まるで予定表通りに事が進んでいるように見えるな」

「アシユマ君、気を付けて下さいね？ 『祝福されぬ命の者、その光に飲み込まれこの世より消えうせる』ですからね？」

「一応気をつけておこう」

あれから三日が過ぎた。

アーチエルの身体も大分毒素が抜けて、症状も大分安定した。ここに至るまで、アシユマは昼夜を問わずアーチエルを看病しつづけた。

それは、アシユマのアーチエルへの愛情のなせる業であった。

「アーチエル様、これからお風呂に入ります。出るまで男子禁制に御座ります」

侍女のアンが宣言した。

「大丈夫なのか？」

「今は気分がよいそうです。ですから、入るなら今と……」

「そうか。それなら任せるが」

一時間程が過ぎた。

今頃は丁度入浴を済まして着替えている頃だろうか？

そんな事を考えているとアンから、
「もう大丈夫ですよ。着替えが終わりました」
そう言われた。

そうかと言ってアシユマは女子部屋に入った。
皆も風呂を入り終わったらしく、丁度寛いでいる所だ。

この船は女子が多い。
だからだろうか、エファール、アルミナ、コクレトなどは男子側のユニットバスを使うことも多い。

エファールが、着替えを持ってバスローブ姿で男子部屋のほうに行く。

そこを丁度アシユマとすれ違う。

エファールの方はこれからヨディのところに泊まりに行くようだ。

「あら、アシユマ貴方も？」

(何が『貴方も』なのか全然分からん)

アシユマはそんな事を思いつつ、アーチエルのところに来た。

アーチエルは起きていて、腕を広げて、アシユマを待っていた。

「アシユマさま!!」

まるで純真無垢な子供だ。

「アシユマさま、ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」

一転して叱られるのを怖がるような子供の様になった。

アシユマは、

「アーチエル。良いんだよ」

そう言ってアーチエルを抱いてやる。

すると、

「アシユマさま、アシユマさま」

と、言って甘えてくる。

大分元気になっているようだ。

完治に近い状態だと言えるだろう。

鬼虎を見してみる。

一応、鬼虎にはまだ警告を示すインジケータは表示しているけ

れども安全圏内に針は振られていた。

そうこういつてる間に他のベッドシエルはいつの間にか閉じており、開いているのはこのブースのみとなった

「アシユマさま。この数日間、有難う御座いました。感謝に耐えませんが……」

アーチエルは感無量と言った感じで言っていた。

「いつ、いや？ 別に、大した事はしてないぞ？」

アシユマと言うこの男、人から褒められり、感謝されたりするとさり気無く照れる。

アーチエルはアシユマのそんな純朴な所が好きであった。

愛しているといっても構わない。

そして……

「……アシユマさま。愛しています。これからも愛し続けます。アシユマさまはアーチエルのこと、愛してくださいますか？ それとも……重たいですか？」

アーチエルは毒のせいで心細くなっているのか、そんな事を言い出した。

アシユマはいったん抱くのを止め、両手でアーチエルの両肩を優しく掴み、そして優しく見据えながらこう言った。

「大丈夫。愛してるよ、アーチエル。これまでも、そして、これからもだ」

「リーリ・ルウさんの事は？」

「！」

可哀相に。

アシユマが婚約者になったにも拘らず、アーチエルの心にはその事が密かに引っ掛って気になっていたのだ。

アシユマはそう思った。

「今はお前さえ俺の心に住めば良い」

アシユマはアーチエルを安心させるように言ってる。

「アシユマさま嬉しゅう御座います。……アーチエルのこと抱いて

「はいただけないでしょうか？」

「いいよ。おいで」

アシユマはまた『抱っこ』をしようとした。

「いえ、その『抱く』ではなくて……」

一番アーチエルらしくない言葉が出た。

アシユマが一瞬呆然となつてしているとアーチエルが、

「あの、アシユマさま？ 抱いては頂けないのでしょうか？」

「いつもの抱っここの事じゃないよな？」

「じゃあ、こう言いましょう。わたくしと『契つて』は頂けないで
しょうか？」

「……………」

「あ、あの？ アシユマさま？」

「……………アーチエル、意味分かつてて言ってるよな？」

「うん……大体、薄ぼんやりと、何となく……………」

「なぜ、急に？」

「『今』しないといけない気がして……………」

「……………分かった」

アシユマはブーツを脱ぎアーチエルの布団の上に乗るベッドシエ
ルを閉じた。

「おいで、アーチエル」

アシユマは横になりながら自分の腕の中にアーチエルを誘った。

「はい、アシユマさま……こんな不束者ですが宜しくお願いします」

そう言つてから、アーチエルはアシユマの腕に素直に抱かれた。

「こちらこそ」

アシユマもそう言った。

アシユマは軽くキスすることから始めた。

耳にキスをしたり、頬擦りをしたり、髪を撫でたりした。

そしてアーチエルを強く抱擁する。

するとアーチエルは大粒の涙を零す。

「アーチエル泣くのはまだ早いよ」

そう言って、涙を唇で拭ってあげた。

「だって、アシユマさま優しいんですもの」

そしてアーチエルの寝巻きを全て脱がせた。
美しかった。

今までに無い位に。

涙が出そうになった。

ここで、なぜかリーリ・ルウの事を思い出した。

「アシユマさま、ルウさんのこと考えてる」

「考えてないよ。アーチエル」

「うそ」

「嘘なものか」

（女の勘は鋭いな）

アシユマは焦った。

（今は、アーチエルの事だけを考えていよう）

前にもこんな事があったなとアシユマは思った。

これはきつく戒めようと思った。

何故なら、今愛しているのはアーチエルだからである。

アシユマはアーチエルと眼が合う。

お互いに眼で笑って、アーチエルが眼を瞑って澄ました顔をした。

アシユマはそんなアーチエルに軽くキスをする。

アーチエルは眼を恥かしげに開き、俯き加減になり少し照れなが

ら

「どうぞアシユマさまの存分になされませ」

そう言った。

アシユマは頷くと優しく口付けをしていく。

アシユマの腕の中でアーチエルは泣いていた。

「何を泣くんだい？ アーチエル」

「分からないの。いつものように昂っちゃったからかな？」

「ああ、たぶん。……アーチエル可愛いよ」

「アシユマさま……好きです」

「俺もだ」

アシユマはアーチエルに優しく愛撫を重ね、いよいよアーチエルと、一つになる時が来た。

「アシユマさま、ちよつと怖い」

「そんなに緊張しないで。力を抜いてごらん」

そして二人が重なり合った時、それは相当の痛みをアーチエルに与えた。

あまりの痛みがりようにアシユマがやめようとしたぐらいである。
が……。

「おねがい、このままで……」

流れる涙をそのままにアーチエルは言った。

「契ると言う事はこう言う事だったんですね？」

「そうだよ。アーチエル。これで、俺とお前が一つになったよ」

「嬉しゅう御座います」

アーチエルはまた涙を零していた。

はじめは確かに痛がっていた。

アシユマは早めに終わらせてやろうとした。

しかしアーチエルがそれをとめた。

アシユマと一つになれた『喜び』からか、離れる事を拒んだのである。

このアシユマと一つになれた『幸せ』を忘れえぬようにしっかりと抱きついては、身体に『喜び』を覚えこませ、そして最後はアシユマとともに果てて終わりとなった。

アーチエルは、忘我となり、ただ涙を流していた。

「大丈夫かい？ アーチエル」

アシユマが囁いてアーチエルは正気を取り戻す。

「……この世にこんな幸せがあるだなんて少しも知りもしませんでした」

そう言って泣いていた。

「嫌ですよ。アシユマさま。私の側から離れないで下さいましね？」

「ばかだな。離れるわけが無いじゃないか。離れられないよ」

「そうですね。馬鹿ですね。わたし。そんな筈なのに」

「おいでアーチエル。アーチエルを抱いて寝てあげよう」

「疲れませんか？」

「疲れたら腕を抜くさ。でもそれまではアーチエルを肌にかけて眠りたいのさ」

「アシユマさま……」

アーチエルはこの言葉が相当嬉しかったらしく

「アシユマさま」

そう言って身をアシユマに預けてきた。

結局この体勢は二人が目を覚ますまで続いた。

ふと、アシユマは目を覚ます。

枕元の時計に目をやる。

もうおきてもいい時間だ。

アーチエルはぐっすりだ。

だが、暫くアーチエルを見つめていると、アーチエルも気配に気付いたのか、ふと目を覚ました。

「お早うアーチエル」

アシユマが愛しい人へ朝の挨拶をする。

アーチエルは慌てて毛布を自分の目のすぐ下まで隠してこちらをみている。

気恥ずかしいのだろう。

目が泳いでいる。

「どうした？ アーチエル」

アシユマは知っていてアーチエルに訊く。

「き、気恥ずかしゅう御座います」

アーチエルが頭まで毛布を被ってしまった。

アシユマは毛布の上からアーチエルの頭を撫でてやる。

しかしそれは今この場で口に出しては、言わなかった。
(まあ、暫くは二人の秘密と言う事にしといてあげましょう)
黒龍号はこれから来る運命の時を間近に控えて飛び立った。

黒龍号はノーツ連邦東部地区エゲゴフに到着しようとしていた。
「黒煙が上がってるなあ。また、アーヌが出張ってきているんじゃないだろうか？」

オルバニアンが言う。

「それは困りますねえ。アシユマ君、また前面に出て頂くことになるかも知れないですが、宜しくお願いしますよ」

「分かっている。……ゴンドラをあげてくれ。外から直接出る」

黒龍号は直接実験棟本棟の脇に付けた。

アシユマはゴンドラからの発進、他の皆は後部ハッチからの出撃となった。

アシユマが建物の入り口に立った。

皆、その後についている。

アシユマは入り口に入った。

途端に銃撃を受けるアシユマ。

アシユマは鬼虎を振って衝撃波を起こす。

壁や床にひび割れを起こし、向うの部屋の敵を吹き飛ばした。

アシユマが向うの部屋に入るとそこは計器類がびっしりとある部屋だった。

が、かなりの機器類が破壊されており、ガラスと破片とが床に散乱していた。

そして、制御室と書かれたプレートが落ちていた。

もちろん読めるのはアシユマだけだが。

『また来たのか！？ 悪魔の手先め！！』

太腿を負傷したまだ若い兵士が小銃を持ってこちらに向けて床に転がっていた。

年頃はアーチエルと同じぐらいでまだ少年と言えよう。

「アシュマ、何て言っているんだ？」

オルバニアンが訊いてきた。

「ああ……。また来たか、悪魔の手先。だ、そうな」

そうアシュマは言った。

「アシュマ君アーヌが来たかどうか訊いていただけですか」

そうヨディは言った。

「一つ訊く。青黒い色の鎧の男はやって来たか？」

「お前あの男の仲間じゃないのか？」

「違う。やつは殻兵器を処理したのか？」

「処理をした。ヤツは凄いい勢いで科学者たちを殺して行った。その後、妙な女が来て鎧の男は手に入れた我々のデータをその女に渡していたな。どうやら、鎧の男はその女にデータを渡すのを嫌がっていたようだったが……」

「どんな女だ？」

「いい女だ。プラチナブロンドの巻き毛が印象的な女だ」

「そうか。分かった」

「何ですって？ アシュマ君？」

ヨディが訊いてきた。

「アーヌとアビスが来たようだ。殻兵器は処理をして、科学者を殺し、データはアーヌからアビスに渡されたらしい」

「そうですか。じゃあ、もう僕たちがやれる事はないですね」

「そうだな。俺は少し気になる事がある。ヨディ、黒龍号に戻って待機してくれ。もしかしたら、もう少し離れてくれると助かる」

「アシュマ君……まさか殻兵器がまだ残っているとでも？」

「確証は無い。だが、実験場の向うから気配が伝わってくる」

「誰の？」

「まだ分からん」

「アシュマ君、行くつもりですか？」

「行かねばなるまい。呼ばれているのでな」

「何故そんな事が分かるのですか？」

アーチエルが言った。

何故か挑むような感じである。

「はつきりと分かるわけじゃない。そんな気がするだけだよ」

「行くのですか？ 一人で。何かがあるか分からないそんな危険な地へ？」

「さっきも言った。行かねばなるまい」

「許しません！ たった一人で、そんな危ない所へ」

「アーチエル……」

アーチエルの意外な剣幕に周囲が驚いて退く。

「お願い！ 行かないで！ 胸騒ぎがするの！」

「殻兵器があるとすれば行かねばなるまい？」

「それだったら、何もアシユマさま一人で行く事は無いでしょうに……！」

「時間が無い。それに俺一人で行く方が、何倍も安全なんだ。それはもう承知のはずだろう？」

「いや。いや……納得出来ない……。お願い、行かないで……！！」

アーチエルは涙ながらにアシユマに縋りつき訴えていた。

アシユマはアーチエルを抱き寄せ、

「すまない。アーチエル。でも、これは俺の仕事なんだ……行かせおくれ……」

そう言うと、アーチエルは、

「抱き寄せてわたくしを誤魔化そうとしないで！ わたくし、本気で心配しているのに……！！」

アシユマを跳ね除けてしまった。

「そうか……。アーチエルの許しを得る事が出来なくても、俺は行かなくてはならない。時間が無い、俺は行く」

アーチエルはいつに無いアシユマの強い態度に何も言う事が出来なくなってしまう。

アシユマはそのまま踵を返し行ってしまった。

アシユマは実験棟本棟を出てきて呪文ウィングを唱え、そこから飛び去ってしまった。

実験場の中心部、グラウンド・ゼロ。

即ち爆心地になる予定の地に彼女はいた。

アシユマはその前に降り立った。

「アビスか……珍しいところにいるな……何の用だ？」

「アシユマ・アトー。貴方に逢いにここまで来たのよ？　少しは嬉しがつて見せてよ」

「悪いがお前は俺のタイプじゃないから、嬉しがつて見せたくはないな」

「そう？　これを見ても？」

アビスは高さ一メートル程のコンクリート製の柱の上に殻兵器を置いた。

「殻兵器か……！！　アー又は処分していなかったのか」

「そうね。そういうことになるわね」

「ならば俺が処分せねばなるまい」

アシユマは腰を落とし柄に手をかけた。

アシユマの後には異形の者が直ぐ後まで来ていた。

アシユマはこのことに気が付いているのか？

その異形の者は上半身が人間の女、下半身は蛇と言った格好をしていた。

所謂蛇女と言った所だろう。

その異形の者は物音一つさせずにアシユマに牙剥き近付き飛びつこうとしていた。

その蛇女が、アシユマに触れるか触れないかの境でアシユマはくるっと一回転して間を外し、逆に蛇女の後ろ側に回りこみ首と胴を斬り離してしまった。

「無駄だ。幾ら音を消そうとも、俺に殺気に向けていたのでは倒す

ものも倒せんぞ?」

アシユマは言った。

「俺の勝ちだ。殻兵器をよこせ」

「アシユマ・アト!。甘いわ。そこが貴方の弱点よ」

「なに?」

アビスが手元の小型スイッチを押した。

首が切り離されたはずの蛇女がアシユマに飛び掛ってきた。

そして右腕は右腕に、左腕は左腕に、両足は尾に絡め取られ、体の自由を奪われてしまった。

「これが貴方の弱点。絶対物理防御があるからと言って殺気を発しないものには、防御が疎かになってしまいがちになる」

「なるほど……今度……会った時の……参考にさせてもらおう……」
「残念。貴方に次は無くてよ」

アビスはそういうと切り離された異形の者の頭を持ってきた。

「ねえ、アシユマ。貴方は罪な人ね。この子はね、……貴方の妹、イレギュラーナンバー零零九『蛇』はね、貴方を見た途端好きになっちゃったんですって。とても逢いたかったそうよ。殺したくないぐらい。それなのに、アシユマ貴方は彼女をこんなにして……」

アビスは切り離された首をアシユマの眼の前に持ってきた。

「どう? 綺麗な娘でしょう? この娘の牙には毒が仕込まれていてね、強力な神経毒なのよ。最も貴方にとっては、痺れ薬程度にしかならないでしょうけれどね。この子のベーズは貴方のどこにしてあげましょうね? アシユマ」

「そんなものは御免蒙る」

「ああ。遠慮なさらなくて、アシユマ。そうね鬼虎が邪魔だわ。鬼虎を持っている右手に口付けさせてあげましょう」

(くそつ、この死体、意外と力が強いな。びくともしない)

「身動きできなくてもどかしそうね。力だけは貴方より強いはずよ? そう作ってあるもの。さてベーズを……」

アビスは『蛇』の頭をアシユマの手首辺りに持って行った。

そして手首の辺りに『蛇』の牙を噛ました。

「あがつ！」

アシユマは叫んだ。

それは痺れ薬なんて程度のものではなかった。

眩暈がして世界は周り徐々に視界がゆがんで暗転してゆく。

甲高い耳鳴りがして頭痛に襲われる。

身体は熱くなり呼吸が苦しくなり心臓は何かに驚づかみにされたように痛い。

体の関節は指先に至るまで熱を持って軋んで痛い。

確かに体は痺れて動けない。

アビスが親指と人差し指と中指で鬼虎の柄頭の鬼の飾りを摘むようにして持ってコンクリート製の柱にそばまで持っていき、さも熱そうに指をふうふうとしていた。

「鬼虎はここに置くわよ？ あなたの手元においておくとロクな事がないから。ちなみにアタシは鬼虎を本部に持っていこうなんて、コレツポツチも考えてないの。私が興味があるのは、鬼虎に頼らない超人の研究。これなら私にもなれそうでしょ？ 鬼虎は私にとつては却って邪魔な存在なのよ。あなたに聞こえているかしら？ まあ、いいわ。これでサヨナラよ。この殻兵器のスイッチを入れれば三十秒後にはドカン！ 貴方はこの世から消えてなくなるわ。寂しくなるわね。それじゃ、チャオ」

アビスはそういうと本当に殻兵器のスイッチをいれ、その場を立ち去り、自ら発光体となって消えてしまった。

テレポーテーションの禁呪を使ったらしい。

爆発まで後二十秒足らず。

アシユマは焦った。

この窮地をどう脱出するかを。

時間はどんどん過ぎてゆく。

爆発まであと十秒。

蛇女の呪縛は取れない。

蛇女の毒は身体に回ったまま痺れている。

アシユマはもがくがどうしようもない。

それでもアシユマは自身を縛っている戒め目掛けて発気の術を放出した。

『蛇女』の手首から先と蛇の胴体部分はバラバラになった。

爆発まで五秒を切った。

アシユマは見えない目と聞こえない耳の中で鬼虎の気配を捜した。万の目は役に立たなかった。

ただひたすら気配を読み、そして鬼虎の位置を掴んだ。

つたない身体でそこへ向かって跳んだ。

アシユマは手を伸ばした。

そして鬼虎の柄頭の鬼の髑髏どくろの飾りに、あと数センチと言った所まできた。

……が、そこで時間がなくなってしまった。

運命の時が来たのだ。

殻兵器がそこで発動してしまったのである。

全てを光で溶かし込み暗転して取り込んだ物を一気に一点へと収束させる。

その時が。

アーチエル……！！

「ああ！ アシユマさまの声！ アシユマさまの声が聞こえる！！
行かなきゃ！ 私、行かないと！！」

「いけない！ オルバニアン、アーチエル様をとめて！」
ヨデイがアーチエルに一番近かったオルバニアンを止めに行かした。

「アーチエルの姫さん！ 行くの待った！！」

オルバニアンはアーチエルを羽交い絞めにしてとめた。

その時、閃光が二人の目を突きオルバニアンは思わず腕で光を遮り、アーチエルは目を閉じた。

「こっ、こりゃあ鬼虎の!？」

オルバニアンは叫んだ

「いつ、いやこの規模は殻兵器かも？」

ヨデイが指摘した。

「じゃあ、アシユマが殻兵器の処理に失敗したって言うの？」

エフアールが気になることを言った。

「そんな! アシユマさま!！」

アーチエルがアシユマの名を叫ぶ。

閃光がやんで直ぐにアーチエルはウイングで飛び立った。

ヨデイたちもアーチエルを追うように実験棟棟脇から黒龍号で飛び立って行った。

アーチエルは暫く飛び続けていると巨大な空洞が現れた。アーチエルはその、お碗型の空洞の底へと降りて行った。すると(不思議な事に)鞘に納まった鬼虎を見つけた。

そしてそれを胸に抱き、すぐさま愛しい人の名を呼んだ。

「アシユマさまああ! 出てきて下さーい!！」

木霊が返る。

アシユマは現れない。

「アシユマさまああ!！」

何度アーチエルが呼んでも、アシユマは出ては来なかった。

「アシユマさまああ!！」

アシユマが死んだのでなければこれで、あらわれるはず。

それがそうではない。

やはり死んでしまったのだろうか？

アーチエルは涙声になっていた。

アーチエルは鬼虎を携えて黒龍号の内部へ帰ってきた。

黒龍号は比較的安全な森の中に降り立っていた。

「お帰りなさい。姉様」

アーチエルを出迎えたのは妹のキュポアだった。

「あれ？ ……ぐすつ。 ……ヨデイ様とかは？」

「そうでした。ヨデイ様方は総出でこの近辺でかいじゅ ……お義兄様を捜索中です」

「ぐすつ。そうでしたか。有り難い事です」

「そういえば姉様、それは鬼虎ではないのかの？ 鬼虎はお義兄様が緊急時には文字が浮かび上がるのではなかったのかえ？」

「そうよ！ そうだわ！ 鬼虎よ！」

アーチエルは鬼虎をゆっくりと抜いた。

キュポアもアーチエルの隣に来た。

アーチエルは鬼虎の上に文字が浮かび上がっているのを認めた。

「はあっ！」

アーチエルは文字を読んでいて気絶しそうになった。

キュポアがアーチエルを慌てて支えた。

「どうしたのじゃ、姉様！」

「ア、アシユマさまが ……アシユマさまが ……！！！」

「一度読んだだけでは分からん事もある！ ゆっくり落ち着いて読むのじゃ。そうだブリッジの大椅子に座ってゆっくり読むのがよい」

アーチエルはキュポアに伴われてブリッジのいつもアシユマが使っている大椅子に座った。

アーチエルはさつき見た事が目の錯覚であることを願いつつ鬼虎を抜いた。

『本システムは消滅いたしました。処理を続行いたします。OK』

（本システムは消滅いたしました ……消滅 ……消滅、消滅！ 消滅

！！ やはりアシユマさまは ……！！！！）

「うっ、うっ……うっうっ」

アーチエルは顔を伏せて泣き出してしまった。

「姉様、鬼虎にはなんと書いてあったのじゃ？」

キュポアが極々冷静さを装ってアーチエルから言葉を引き出すようにとした。

「アシユマさまは……」

「お義兄様は？」

「アシユマさまは……この地上から消えうせました」

「消えうせた？ それは死んだということか？」

「……そうです」

「鬼虎で何とかならんのか、姉様？」

「……なりません。……アシユマさまは永久に失われてしまったのです」

「そんな、姉様……」

アーチエルは滂沱ほうたと流れる涙を止める術を知らなかった。

ただ、辛うじてキュポアが通信席に座っているリイナに近付き、

「クルーのみんなを呼び戻して欲しい。搜索は無意味じゃ」

その言葉を言ったときキュポアも涙が溢れてきた。

「た、頼む。わ、わらわは……も、もう……」

「わかった。あとはこちらに任して、休め」

リイナがそう言う。

「うっく。うえっく。ひっく……」

キュポアは泣きながら廊下を渡って行った。

入れ替わりでアンがブリッジに上がって来た。

アンはぐるりとブリッジを見回した。

アンはアーチエルを見つけた。

アンはアーチエルに訊いた

「アシユマさまは？ アーチエル様……」

「……」

「アーチエル様！！ アシユマさまは……？」

「アシュマさまは殻兵器の光の粒となって消滅してしまいました」
最早アーチエルは生きる屍の様になって返答も淡々としたものになっ
ていた。

「わあっ！」

アンの反応は分かりやすかった。

顔を手で覆い、泣いてブリッジから出て行ってしまった。

そしてヨデイ達が黒龍号に戻ってきた。

「もう、搜索をしなくていいとは、何か分かったのですか？」

ヨデイはリイナに問い詰めていた。

リイナはアーチエルを指差した。

ヨデイが意を決してアーチエルの所へ寄って行った。

「アーチエル王女、何か分かりましたか？」

アーチエルは見た目には無反応で、でも口だけ動かして喋り始め
た。

それはまるで人形の様でもあった。

「アシュマさまは、消滅されてしまいました。この世には塵一つ残
っていません」

「……！」

そこにいる全員が衝撃を受けた。

またそれに足る言葉であった。

「アーチエル王女……！」

その場にいる皆が皆アーチエルに掛ける言葉を失っていた……と
は、限らずどこにでもいる無神経な者……即ちアルミナがこう言っ
た。

「鬼虎なら何とかかなるんじゃないの？」

「……！」

また周りにいる者はアーチエルの答えに期待した。

「そ、そんな虐めないで下さい皆さん。出来そうならとつくにして
います……！」

「そうよね……！」

エフアールが同情を寄せた。

「直ぐに諦めないでもっと良く見てみた？ 大体にして鬼虎にはな
んて書いてあったの？」

「『本システムは消滅いたしました。処理を続行いたします。OK』
……です」

「処理？ 何の処理？」

「そ、そんなの分かりません！！」

「じゃあ、続行しちゃおうよ！！」

アルミナはアーチエルの指を持って『OK』を押ししてしまった。

この行為が後で重要な結果をもたらす事になる。

「何するんですかアルミナさん！！」

「おいおい、怒らないでよ！ やらないで後悔するよりやって後悔
した方がましってモンよ！」

「……な、何て事を！ あつちに行つて。そつとしておいて！！」

「ここ、あたしらの仕事場だもん。そんなにアタシらが嫌なら、そ
つちが出て行けばいいじゃない？」

「！！！ もういいです！！」

アーチエルが、鬼虎を持ってブリッジを出ようとした。

「アーチエル、待つて！！」

オルバニアンがアーチエルを追った。

「？」

「俺、君の味方だから！ アシユマが帰ってくるまで君の味方だか
ら！！」

「あ、あの男……オルバニアン！ なに彼女の前で女、口説いてい
るんだよ！！」

「お前はアホか！？ 口説いているんじゃないよなくて元気付けているだ
けだろうが！！」

「何よ！ なんかあるとみんなアーチエル、アーチエルって！ 甘
やかすぎよ！ 恋人を戦争で亡くしたのは貴女だけじゃないのよ

！ アーチエル！！」

「!!!」

アーチエルは驚愕した。

確かにそのとおりなのである。

しかし今のアーチエルが出せる反応は、ただ泣く事のみだった。

アシュマの死しか頭に入らないのである。

「アルミナッ」

パン!!!

オルバニアンは張り手をした。

アルミナはポロリと涙を流して、

「幾ら正論を言っても悪く言われるのは、いつもアタシ。いいもん

！ 慣れてるもん！」

アルミナはずんずんと廊下から後部ハッチ経由で外へと出て行ってしまった。

「あの……バカ！ あ……」

そう言っただけでオルバニアンはアーチエルを見た。

「構いません。行って下さい」

アーチエルは涙を忍ばせ、そう言った。

「すまねえ、……姫さん!!!」

「何だかんだ言ってもアルミナさんはいいなあ。優しいオルバニアン彼氏がいて

アーチエルはそう言った途端にその場で泣き崩れてしまった。

優しいお方、

アシュマさま……

もう二度と戻ってこない……

「大丈夫ですか？ アーチエル王女？」

ヨディが近寄ってきて心配そうに言った。

「いえ、大丈夫ですから」

「ヨデイ。十分危険だわベッドに寝かしつけましょう」

エファールが言う。

「そうですね」

「い……いえ、大丈夫ですから」

そう言っている側から腰砕けになってまともに歩けなかった。

「いいから、言う事をきいて……」

エファールがそう言った。

それでも何とか二人してアーチエルをベッドに寝かしつけた。

ベッドに横になったアーチエルは少し起き出して着替えのパジャマを取り出した。

アーチエルは

「どうも有り難う御座いました」

丁寧に挨拶をした。

「もう、お引取り下さい」

丁寧だがその言葉には強い強制力があつた。

だがヨデイにはやらなくてはならない事が一つだけあつた。

「アーチエル王女、鬼虎をこちらへ」

この事であつた。

「！ ヨデイ様。それだけはどうぞ平にご容赦下さい。鬼虎は二人の思い出が詰まった唯一のアシユマさまの形見。これだけは手放しとう御座いません。お願い……お願い……これだけは……これだけは私から取り上げないで……」

アーチエルは大粒の涙をはたはたと零しながら訴えていた。

「アーチエル女王、鬼虎は武器です。これがどういう意味だかお分かりですね？」

「……………」

「王女がもし御自害あそばされでもしたら……」

「私は自害など致しません！」

「！」

この言葉にも強い強制力が掛かっていた。

流石の元王族、アルステインもこのオーラには圧倒させられた。

「本当ですね？ 御自害あそばないとお約束いただけますね？」

「約束します」

「本当に……」

「……私の言う事が信用できないとでも？」

「いえ、信用いたします」

「では、一人にしてください……」

「ははっ」

ヨデイとエフアールはベッドルームから出て来て溜息をついた。

「流石ね。アーチエル。凄い威圧感があったわね」

「あの気迫がこもった彼女こそ、元来のアーチエル王女でしょう」

「そうね。間違った事を、しなければいいのだけれど」

「こればかりは、彼女を信用するしかないですねえ」

「可哀相に。彼女ね……昨日、初めてアシュマと結ばれたのよ」

「！……そうですか。それはお辛いでしょうね」

「ええ、そうね……後でアシュマを偲んで酒でも酌みかわさわない

？ 今日だけは何もかも忘れたいのよ」

「悲しくて泣けないという奴ですか？ いいですよ。僕もそんな感じだから」

二人はブリッジに戻らずそのままヨデイのベッドに行った。

「さて、ワシはどうするかの中」

アベ二爺は途方に暮れた

「何だ、爺も涙に暮れるのか？」

と、リイナ。

「お主はどんなのじゃ？」

「私か……？ 私は、虚しいな……追いかけるべき目標を見失った……そんな感じだな」

「淡々と話して決め込んでいるようじゃが、本音とは少し違うようじゃな」

リイナの瞳は涙で潤み頬は涙で濡れていた。

「これは、涙……」

リイナは初めて自分が泣いている事に気が付いた。

「泣きたいのなら、わしの胸でよければ貸すぞ？ 幾らでも」

「洗面所へ行つて来る。そして自分のベッドで泣く」

「まあ、それもよかる……」

アリシアナがブリッジにやって来た。

「アベニ様だけですか？」

そうアリシアナが言った。

「そうじゃ」

「物騒な！ ここはまだ敵地の真っ只中なのに！」

「アリシアナ嬢。おぬしは元気じゃな」

「ああ、アシユマさんのことですか？ 私はこの艇に配属されて日も浅いですし、アシユマさんとはあんまり面識無いですし、恋愛感情持つちゃいけないですよ、私。持つ気も無いですけれど」

「何故じゃ？」

「私、人妻ですので……子供もいますし……」

「なんと！」

「言いませんでした？」

ベッドシエルを、閉じたアーチエルはやっと一人大泣き出来る様になった。

人目を憚らず大泣き出来る、偽りの安息の地。

鬼虎に頬擦りし鬼虎にキスを浴びせていく。

思えばこの旅は鬼虎を巡る旅でもあった。

アシユマと共に苦しみ、共に楽しみ、共に怒り、共に泣き、共に愛した。

そう、先日の今頃は初めて二人で契ったものだった。

あの時、

『抱き寄せて誤魔化そうとしないで！ わたし本気で心配しているのに……！！』

なんて言わなければ良かった。

心配しているなら他に言い様は幾らでも有ったのに。

あの時の抱擁を跳ね除けなければよかった。

あの時にもっと話し合いに持つて行つていればよかった。

上手くすれば二人でいけたかも知れ無い。

なぜ、何故あの時……

アーチエルはそのことに思い至ると焦りとも不安とも違う、言いよの無い感情に心をかき乱された。

今思つてみれば、予感と言う奴だろうか。

そしてアシユマの存在に立ち戻る。

アーチエルにとって、アシユマはアーチエルの全てであった。

アシユマが絶対の存在で、アシユマの存在は完璧なものだった。

アシユマのちよつとした仕草、アシユマの気難しい顔、その眉間を触る癖、……これはアシユマが何かを考えている時の癖だ。

アシユマの人知れず行う朝練……これはダンスのように調律が取れて美しい物だった。

アシユマの振り向いた顔、寡黙であるところ、かといって時々子供のように無邪気になる事、優しいキス、髪の毛を撫でてくれる事、

……全てが。

そう、全てが好きだった。

全てを愛していた。

そのアシユマはもういない。

アーチエルの愛したアシユマはもういない……。

アーチエルは涙に暮れた。

昼夜を問わず。

鬼虎を懐に抱きながら。

そんな時アーチエルは危うい甘美な死への罫にはまってしまっ。

(このまま死ねたらアシユマさまのところへいけるかしら？ この

鬼虎で……。喉を突くには長すぎる。腹を斬るには覚悟がなさ過ぎ

る。……鬼虎の刃で血管ちくたを斬れば……)

アーチエルは鬼虎を抜こうとした。

が、うんともすんとも鬼虎が抜けない。

(鬼虎よ……こんな生きる屍になった私に生きるというの？ アシ

ユマさまのいないこの世界で……)

アーチエルは再び泣き暮れた。

鬼虎を抱いて。

そんな日が三〜四日続いたろうか。

キュポアもやつれ、アンも最近仕事に集中力がない。

黒龍号のクルー達もどこか精彩が無い。

そんな時、颯爽とブリッジに現れた人影があった。

「皆さん、お早う御座います！」

それは、風呂上り後のアーチエルだった。

長い髪を後に束ねてポニーテールにした。

「キュポア、そこはもういいわ。あなたは休みなさい」

「……姉様……姉様、よくも随分とサツパリしていられるのう」

「サツパリしていないと前へ進めないもの」

「それは、かいじゅ……いえ、お義兄様にとって、ちと可哀相では

ないかえ？ 仮にも愛する人が死んだのじゃぞ？ もう少し悲しん

で、死者の御霊を慰めてもよいのではないかえ？」

「もう、ただ泣くのは飽きました」

「冷たい姉様じゃ！」

「ただ泣いて暮らすだけの娘など、アシユマさまは喜びませぬ。しつかり前を見て、歩いていく。それが、アシユマさまが、私に託した生き方だと信じます。それに……私には鬼虎が御座います。これがある限り、アシユマさまは直ぐ側に居りまする」

そう言つてアーチエルは優しげな眼差しをし、鬼虎を撫でた。

「アーチエル、健気ね。そんな貴女、可愛いわよ！」

エフアールはアーチエルを抱きしめ、その豊満な胸をアーチエルの顔へ押し付けた。

「よ、よう。アーチエルこないだは悪かつたな」

アルミナがそう言つてきた。

「いえ、何もしないで後悔するより何かをして後悔する方がいい。そう言いましたよね？ アルミナさん？」

「あ、ああ……」

（言つたつげかな？ アタシそんな事？）

「で、これからどちらに向かわれるので？ ヨディ様」

アーチエルはヨディに訊いていた。

「あ、ああ。え〜とですね、オ口の屋敷に行きます」

「オ口様の……」

「やる事がなくなつちやつたんですよ。今のところ」

「そうですか……」

アーチエルは少し拍子抜けした。

しかし気を取り直し、

「では行きましょうオ口邸へ」

そう言つた。

第四節 復活のアシユマ

オルバニアンはいま、オロ邸にいた。

そして、イツテツの工房に向かっていた。

「オツサンいるかい？」

オルバニアンは返事を聞く前にさっさと入って行く。

「こらあつ！ 関係無いもんが勝手に入っちゃ駄目だろうが」

「俺は関係者だろ？ 武器を注文しているんだからよ！」

「それでも駄目なもんは駄目だ」

「それじゃあ、何時いつならいいんだよ！？」

「今だな」

「じゃあ、いいんジャンか！」

「バカモン！！ そろそろ考え方がいかんと言つておるうに！ 相手の都合も考えにゃあいかん。ヒヨッコはそこら辺、何か言つてなかつたか！？」

「死んじまつたよ」

「え？」

「死んじまつたよ！！」

「なに！？ あれだけ強かつたやつが何故……？」

「殻兵器だよ、殻兵器！！ 剣の達人も殻兵器にゃかなわなかつたつて事だろ？」

「そ……んな」

工房の主イツテツは呆然として二の句が告げなかつた。

「例の武器は仕上がっているのか？」

「ああ、仕上がつとるよ。こつちだ……おい、お前ら今日はもう火を落とせ」

「ですが親方、今、火を落とすとこの剣が出来なくなつちまいやすが……」

「そんなものはまた作りゃあいい。今日は弔いだ。みんな帰って酒

でも呑んでくれや」

「弔いつてだれのでやんすか？ 親方が弔いを言い出すぐらいだから、相当なお人じゃあ……」

「アシユマ・アトーよ」

「親方……それは嘘だ……とても信じられねえ」

「殻兵器だだよ。流石のアシユマの御大将でも殻兵器にやあ敵わなかつたつて事さ」

「じゃあ、先日のノーツ連邦の核実験で命を落とされたんだ」

「そういうこつた」

イツテツは力なく言った。

「おい、ヒヨッコのヒヨッコ。俺に付き合え」

「そう来ると思っただぜ。途中でアルミナと待ち合わせてんだ。やつも一緒にいいだろ？」

「まあ、工房じゃねえからな」

途中でアルミナが合流した。

「こんにちはおじさん」

「ケツ。オジサンかい」

「あらら、ご機嫌斜めねえ。やっぱり私はいない方が良かったかしら？」

「まあ、酒ぐらいは奢ってやろう」

ここで、オルバニアンはアルミナにイツテツに鍛えてもらった『ロソリーストライフ』を受け渡した。

イツテツはオルバニアンとアルミナを駅から離れた薄暗い路地へ連れて行った。

そこには屋台街があり、様々な酒、様々な食材、まさに世界の食のオンパレードと言ったところだった。

「オルバニアン何にしようか？」

アルミナが言ってきた。

「しっ。付けられてる」

「えっ」

「振り向くな。イツテツの親父にも伝えないと……っっていねえジャン！」

「オルバニアン目立ってる」

「そ、そうか。済まん」

二人は追跡者を撒くように歩いて行った。するといつの間にか開けた所に出た。

そこは、線路の高架下である種の部屋のような空間となっていた。出入り口があり、シャッターが閉まるようになっていた。

「お前らかい？ 武器に大量のミスリルを仕込んでいるってのは？ 現れたの是一目で盗賊と分かるような格好をした男達であった。しかもただ盗むのではなく、男は殺し女は犯す最低のタイプだった。

「野郎ども！ 男は殺しても構わんが、女はまだ殺すなよ？ たっぶり甚振ってから殺せ！」

暗がりのいたる所から下卑た笑い声が聞こえて来る。ガーツ！！

天井から電車の通る音がする。

やっと電車の音が途切れたかと思うと聞き慣れた親父の声がしてきた。

「おいヒヨッコども。そいつらはここいらのごろつきで、毒にこそなりはすれ薬にはならん連中だ。百害あって一利なし。遠慮する事は無い。殺してしまえ」

出入り口がシャッターで閉じられてしまった。

オルバニアンとアルミナは閉じ込められた形になった。

どうやら、盗賊どもを倒せば出られるらしい。

「イツテツの親父め、俺達を嵌めたな？」

オルバニアンが言えば、

「あのクソ親父、俺達を嵌めやがったな？」

盗賊の頭目が同じような事を言った。

「アルミナこっち来い」

「なんだい怖気づいたのかい？」

「ちがう！ こっち来い！」

「何よ？」

「聖属性の白魔導石は持っているか？」

「持ってない！！」

「分かりやすいリアクションどうも。取り敢えずこれ身に着けて

「付けたよ」

「呪文言うから続けて」

「分かったわ！」

「紛う事なき汝らの」

「紛う事なき汝らの」

「誓いたてたる信条は」

「誓いたてたる信条は」

「天の神に伝わりたもう」

「天の神に伝わりたもう」

「悪鬼に対する天罰の」

「悪鬼に対する天罰の」

「怒りをそこに打ち秘めん」

「怒りをそこに打ち秘めん」

「聖なる光よ剣とならん」

「聖なる光よ剣とならん」

「マジックブレイド！！」

「マジックブレイド！！」

すると二人の刀身が白銀色に輝いた。

「バカモン！ 何をするかあ！ 素の状態で試し斬りをせんかい！」

「ちえっ！ レスト」

「アタシも楽しみだっただのに。ちえっ！ レスト」

二人の剣は輝きを失った。

二人は剣を構えた

「!？」

二人はそれぞれにして意外な感触に内心驚いていた。

アルミナの剣は殆ど改修されていなかった。

寧ろ痛んだ所を直すに留まったように見えた。

が、そこから先が職人芸だった。

魔導石の刃とロンリーストライフの棟が殆どシームレス状態で付いている事。

これはどうやってやっているのか後で検証して見たがとうとう解らなかった事。

重心が手元辺りに設定された事。

これは使い勝手が良くなったという事だ。

全重量が増したにも拘らずに……である。

一方のオルバニアンの刀は使い勝手が悪かった。

なにせ刀の重心が、先端に設定されているのである。

振りにくい事この上ない代物だった。

その他は全くと言って良いほど、文句の付け所がなかった。

総全長は六尺ほど。

身幅といい、棟といい、切っ先といい、長さといい、反りといい、

重さといい、またとない一品のはずなのに、振りにくい。

重心が切っ先辺りにあるためだ。

「おい！ オッサン！ なんだあ、この振りにくい刀はあ！」

オルバニアンは悪態をついていた。

「刀の真価も分からんで文句言うなあ！ 先ずは敵に向かって振ってみる！」

「よゝし、そこまで言うなら、やってみるか！！」

「なにをこちゃこちゃと……野郎ども、構うこたあねえ！ 畳んじまいな！」

盗賊の男たちはじりじりと囲いを狭めてきた。

しかし、アルミナもオルバニアンも慌てなかった。

盗賊はそれぞれ四々五人が襲い掛かってきた。

が、彼らの間合いに入る前にオルバニアンとアルミナの間合いに入ってきた。

オルバニアンとアルミナは思い切って彼等の刀と剣を振ってみた。すると、盗賊たちはいずれも体を両断され吹っ飛んだ。

（斬れる！）

これがオルバニアンの感想だった。

オルバニアンの刀は遠心力で斬る刀だった。

一方のアルミナは

（扱いやすい）

そう思っていた。

確か以前のイツテツの話では扱いにくい剣になるはずだったのに、どうやら、手元に重心がある事が扱いやすさの元にあるようだ。

前より重い重量でも扱いやすい。

その上重量も増えた事による物理攻撃力が増したのが嬉しい。

オルバニアンは再び刀を振るった。

横に薙いだのだ。

相手を斬った感触は殆どなかった。

一度遠心力がつくととてつもない破壊力を発揮した。

瞬く間に四人程斬った。

アルミナも四々五人程斬った。

もう、敵は頭目と小者が残るのみとなった。

「さっきのあれを試すぞ」

オルバニアンは言った

「マジックブレイド？」

言った途端アルミナのレストが解けた

「そうだ。マジックブレイド！」

オルバニアンのレストも解けた。

「一人一殺づつだな」

「そうね」

そうオルバニアンとアルミナが会話した。

「頭あ、どうするんで？」

「馬鹿野郎！ 逃げるに決まってるんだろ！」

「どこへ！？」

「もうお仕舞いだな盗賊の頭とやら」

そう言つてオルバニアンは刀を真つ向唐竹割にした。

だが驚いた事に手ごたえがさつきよりも更に軽い。

盗賊の頭目は頭頂から股下までを蒸発させていた。

「ひえっ！ ひっ！ ひっ！」

自分は失禁し腰も立たなくなった。

「イツテツの親父さん、こいつもう戦意なくしているわよ。そんなんでも斬るの？」

「言つたろう。こいつらは百害あつて一利なし。こやつを生かせば、いずれ徒党を組んでお前らを襲うぞ！ やれ！」

「そう言つ訳なのよ。恨むんなら、イツテツのおじさんにしてね」

「ひっ！ ひっ！ ひっ！」

「……………」

「ひいーっ！っ！っ！」

「……………」

「やっぱり止めようよ。寝覚め悪いよ」

ザン！！

オルバニアンが子分の首をはねた。

「オルバニアン！！！」

アルミナがオルバニアンを非難した。

「イツテツ親父の言うとおりで。こいつを生かしておいてはこちらの命取りだ」

「オルバニアン、アシユマが逝ってから少し変よ？」

「少しおかしくもなるさ！ あのアシユマが……アシユマがやられちまうなんて……鬼虎を持っていながら……」

「オルバニアン……」

さっきオルバニアン達を閉じ込めていたシャッターが開いていく

「おい、ヒヨッコのヒヨッコ」

イツテツが言った。

「お前はヒヨッコの仇を討ちたいのか」

「ああ、討ちたいね。アシユマを葬れる奴なんかそういるもんじゃない。奴に決まっているんだよ」

「奴って？」

アルミナが訊く。

「アーヌさ」

「まあ、いい。今度こそちゃんと奢ろう。それよりも、使い勝手はどうなんだ？」

「使い勝手？ 最悪だよ。なんでよりもよって刀の先に重心を持って来るんだよ！」

「そりゃ、お前さんの希望どつりに作ればそうなるわな。御希望通り強力な奴だ！ 実際斬ってみてどうだった？」

「手応えがなかった。人を切った感じがしなかったよ」

「そうか、そうか。お嬢ちゃんは？」

「アタシは、てっきり、使い勝手が悪くなるもんだと思っていた。そうしたら以外にも使い勝手が良くなっていたから、ビックリしちゃった」

「お嬢ちゃんの場合は、もうあれで限界一杯一杯だから。使い勝手を良くするほうに変えた。実際に細かい部分も見直して、軽量化もしてある。まあ、手元の錘で相殺されているがの。ヒヨッコのヒ

ヨッコと同じで、重心を切っ先に持ってきても良かったんだが、あの重量じゃ、まともに振る事も出来なかったろう」

「何でアルミナと同じコンセプトで作らなかつたんだよ!？」

「お前なら出来ると思った。だから作った。わしの期待に添えるよ?」

「うつ……ところでこの刀の名はなんて言うんだ？」

「ワシが打った刀だからな。銘はやはり『逸鉄』じゃろう」

「それじゃあ、俺の腰にある奴と同じジャン」

「じゃあ、好きなように呼べばよかろう」

「俺そついうの苦手なんだよ。考えんの」

「じゃあ、大逸鉄とでも呼べば良いだろうに」

「え? そのまんま……」

「うるさい。さあ、この話しはここまでじゃ。さあ、呑みに行くぞ

! 今夜はヒヨッコの弔いじゃ」

三人は屋台外のほうへと歩を進めた。

翌朝、オルバニアンとアルミナが、オロの館に帰ってきた。

玄関ホールで、丁度ヨデイと、ばったり会った。

「ああ、オルバニアン丁度良かった。捜していたんですよ。これから発進します。準備をしてください」

「今度はどこへ行こうってんだよ?」

「クーロン人民共和国です」

「そうか……ふわあああつ」

オルバニアンは欠伸あくびをした。

「うわっ、お酒臭いですねええ。夕べは二人でえつちですか? ま、どうでも良いですけどね」

丁度その時アーチエルが通り過ぎて言った。

「お早う御座います」

「やあ、お早うアーチエル」

「お早う、アーチエル」

オルバニアンと、アルミナがアーチエルに挨拶をした。

（仲の良い二人……契り……『この世にこんな幸せがあるだなんて少しも知りもしませんでした』……二度と来ない幸せ）

アーチエルは、頭の中で、モザイク状に断片化されたイメージが二人を見ていて想起され、その場で危うく泣き崩れそうになった。

それをしなかったのは、アーチエルの意志の強さと、王女と言う矜持があったからだ。

アーチエルは簡単な手荷物と身一つで黒龍号に乗り込んだ。

アーチエルは洗面所に行つて涙を拭つた。

そして鏡に映る自分を見て、

（しっかりなさい。アーチエル。幾ら泣いてもアシユマさまは帰っては来ないのよ）

そう呟くと、アーチエルは自分に張り手を一発かまして、気合を入れてブリッジへと向かった。

クルーの主な面々がメインパネルに集まっていた。

『お早う諸君。では早速司令を伝える』

（おんなじオロ邸内なんだからなんで邸内で司令受けないんだよ）

オルバニアンが不満を言った。

（しいっ！ 何か曰くがあるのでしよう）

珍しくヨデイがオルバニアンを注意した。

『では、早速だがクーロン人民共和国の西側地区ラフフチヨウに行つてくれたまえ。そこで殻兵器の実験準備が進行中だ。これを叩いてくれ。詳しい座標はこれから送る。では、頑張つてくれたまえ』

「おい、いつもいつも後手後手に回つてんな、オロ。怠慢なんじゃねえか？」

「オルバニアン、よしなよ」

「そしてそのツケを俺達に回して尻拭いさせて……そしてアシユマ

「が死んじまった……」

「やめろ！ オルバニアン！」

いつに無い強い調子でヨデイはオルバニアンを叱責していた。

「アシユマを殺したのはお前だ！！ オロ！！」

「ぱちぱちぱち。」

オロの拍手の音だ。

『泣かせる話した。友人を称え私を貶める。そうしたければそうするがいい。それとも私に何かして欲しいのかね？ 泣いて見せることか？ それとも土下座かね？ どちらをしても良いがアシユマ殿は帰っては来ないぞ？』

「この野郎！ そこでまってる！ 今ぶん殴りに行ってやる」

「オルバニアン！」

「？」

「ガスツ！！」

「！？」

オルバニアンは拳を食らって床に倒れこんだ。

殴ったのはヨデイだった。

「何しやがる！ ヨデイ！！」

「悲しいのはあなただけではないのですよ！ よくよく冷静になりなさい！！」

「ちっ！！」

オルバニアンは舌打ちをした。

その一方で、身体に変調を来たす者が……。

アーチエルである。

オルバニアンの激烈な言葉に、精神に負荷がかかり、身体に変調を来たしたのだった。

アーチエルはふらふらとし、思わず膝を付いてしまった。

気丈に見えても、今まで我慢していたモノが噴出したのだ。

「アーチエル！ どうしたの顔が真っ青よ？」

「姉様、大丈夫ですか？ 凄い汗ですよ？」

エファールとキュポアが両脇から心配そうにアーチエルを見た。
「だ、だいじょ……」

世界がゆがんで回り、そして暗転しアーチエルは気を失った。
そして、アーチエルはベッドの上にいた。

キュポアはアーチエルの側についていたかったが、黒龍号の半球
板を押さえなくてはならない。

側には居られなかった。

その代わり侍女のアンがアーチエルを見ていた。

アーチエルは目を覚ました。

いや、半分ほど覚醒したという所だろう。

まだ夢現ゆめげんと言う事だ。

世界が回っていた。

(これが目眩と言うものなのね)

ふとベッドの右側を見る。

アンが椅子に座って寝ていた。

(ふふつ。アンたら)

そして、左側には……

優しく微笑みかけるアシュマの顔があった。

アシュマの姿はいつものアシュマだったが柔らかい光に包まれて
いた。

(ア……アシュマさまー!!)

アーチエルは驚いた。

これは、現実なのか、それとも夢幻なのか？

(アシュマさま……)

(アーチエル……苦勞を掛けるね。済まない)

(アシュマさま……)

(アーチエル……愛してるよ)

(アシュマさま……貴方は本物のアシュマさまなの？ それとも幻
?)

(……………)

(夢なら覚めないで。覚めているのなら、アシュマさまキスしてください……)

(……いいよ目を瞑って……)

アーチエルとアシュマの距離が短くなっていく。

(あ……)

そして、軽くキス。

(………はあ。アシュマさま……)

アーチエルとアシュマは口付けを解く。

アーチエルはほんのり上気する。

(アーチエル、もう行かなくては)

(アシュマさま、待って。貴方の居ない世界で私はどうしたらいいの……?)

(………)

(アシュマさま!)

「……アシュマさま!」

と、叫んでアーチエルは目が覚めた。

唇に感触が残っている。

いやにリアルな夢だった。

「アーチエル様。大丈夫ですか?」

「ああ、アン! 今、ここにアシュマさまが来ていたのよ。貴女気が付かなかった?」

「アーチエル様、それは夢に御座います」

「夢などではないわ。現に唇に感触が……いえ、何でもありません」

「アーチエル様……もう少しお休みななされませ。作戦時刻はもう

少し後……いいえ作戦自体から外していただきましょう」

「それは駄目よ。アシュマさまが現れた以上、何か意味があるんだわ」

「アーチエル様……」

「いつまでも、くよくよなんかしてられないわ。アシュマさまに笑われちゃうもの」

そう言っただけで彼女は鬼虎を手につくとブリッジに颯爽と現れた。

「大丈夫ですか？ アーチエル王女」

ヨディが言った。

「皆さん、ご心配掛けました。もう大丈夫です」

アーチエルはそう言った。

「キュポア、もう大丈夫です。私と代わって下さい」

アーチエルは妹に向かいそう言った。

「大丈夫なのか、姉様？ 本当に」

「大丈夫ですよ。キュポア」

「ならいいのじゃが」

キュポアは姉に席を譲り渡した。

黒龍号は、クーロン人民共和国の西側地区、ラフフチヨウに向か
つてとんだ。

黒龍号はラフフチヨウの実験場に滑り込んだ。

相変わらず敵からの攻撃は無い。

そして、実験場近くに沸き立つ黒煙、黒煙、黒煙……。

「またも、アー又達が来ているのか？」

実験観測所の直ぐ隣に黒龍号を乗りつけ、アーチエルをはじめ戦

闘要員達が降りて行った。

先陣はオルバニアン、殿しんがりはアルミナだった。

以前は散発的にしる戦闘があつたのだが今回はそれすらない。

オルバニアンは主武装をバルカン砲から大逸鉄へとかえた。

バルカン砲はその場に置いた。

そのバルカン砲をヨディが拾い上げ装備する。

オルバニアンは慎重に歩を進めた。

「いる。複数人だ。アー又もいるかもしれない」

「そうですね。逃げましょうか？」

ヨディがおどけて訊く

「冗談。我に秘策ありだ。アルミナ」

「解ってるよ。オルバニアン」

「紛う事なき汝らの

誓いたてたる信条は

天の神に伝わりたもう

悪鬼に対する天罰の

怒りをそこに打ち秘めん

聖なる光よ剣とならん

マジックブレイド!!」

途端に気が膨れ上がり気配を殺して隠れる事が難しくなった。

「だれだ!」

アーヌの声が聞こえてきた。

「オルバニアンそれ、禁呪……」

エファールが言いかけたが、アーチエルがすたすと前に行き、

皆があれよあれよと言う前に、アーヌの目の前に出てしまって、そ

れ所ではなくなった。

そして、皆がオロオロとしている所で、

「アシュマさまの仇、アーヌ様御覚悟を!」

アーチエルがそう言った。

そう、オルバニアンと考える事が一致した者がここにいた。

アーチエルである。

「何だ騒々しいぞアーヌ」

ウルクが出てきてアーヌを注意した。

「我がアシュマ・アトーの仇? どういうことだ? アシュマ・ア

トーは死んだのか?」

「とぼけるな!! お前以外に誰がアシュマを殺れるってんだ?」

オルバニアンも出てきた。

「何だアーヌ何の騒ぎだ?」

カフルが現れる。

「なんだって良いじゃないのよお？ 楽しくやりましょよお」
カシアも現れた。

「待ってください話しがどうも変です。アーヌ様、貴方様はアシユマ・アトーを手に掛けられましたか？」

アーチエルが疑問を呈した。

「いや、そんな事はしておらん」

「分かりました。仇呼ばわりした事をお許し下さい」

「何か行き違いがあった様じゃの」

「おい、アーチエルの姫さんよ！ そんなんでこいつを信用して良いのかよ！？」

「ええ。敵味方に分かれているとはいえ、アーヌ様は実直なお方。嘘をつくとは思えません」

「じゃあ、他に誰がアシユマを殺れるんだよ」

「……アビスだな。やつなら権謀術数に長けておる。アシユマはアビスの策略に嵌ったやもしれんのう」

アーヌが言った

「分かりました。皆さん戦闘準備に入ってください！」

「おお！ お姫さんが率先して、戦闘の準備を呼びかけてる……ってそれで良いのか？」

オルバニアンが叫ぶ。

「戦いの前に一つ聞きたい！ 殻兵器は処分したのか！？」

ヨデイが訊いた。

「貴様に言われるまでも無い。今度はちゃんと我が処分したわ」

「そうか」

「わたしが、アーヌ様のお相手を致します。皆様方、他の方々お相手をお願いします！」

アーチエルは鬼虎を抜き放ち、秘剣・裏・閃光一刀・崩しの構えをとった。

(ほう)

アー又は、これはこれでさまになつとる、と思いなから、

「娘御よ。そなたがそれを持つということは我に敵対するということ事ぞ。刀を手放し我等に渡すが良い」

アーチエルは、

「この鬼虎はアシユマさまそのもの。渡すわけには参りません」
そう言った。

「死んだ男に義理立てするか。健気よの」

「……………」

「最早、語らぬか。全くあの男に似て…………ならば致し方なし。覚悟召されよ」

アー又は刀をすらりと抜き下段に構えた。

ウルクはアルミナと対峙していた。

「残念だぞ、アルミナ。お前も我等の仲間に入りさえすれば無限の力が手に入ると言うのに。…………何故に兄を信じない？ 兄は悲しいぞ」

「お前は、もう私の知っている兄さんじゃない」

「紛う事なき汝らの

誓いたてたる信条は

天の神に伝わりたもう

悪鬼に対する天罰の

怒りをそこに打ち秘めん

聖なる光よ剣とならん

マジックブレイド！！」

「ほう面白い技を使うなあ兄さんにも教えてくれ」

「言つなあッ！！」

「アルミナっ冷静になれっ」

オルバニアンが叫ぶ。

カシアはエフアールと戦っていた。

「ふうん貴方も鞭使いなのね？ どっちが強いのかしら？」
と、カシア。

「年の功で貴女の方が強いんじゃないかしら？」
と、エフアール。

「なんですってえ？ 貴方よりは若いわよ！？」

「そんな仮面付けてちゃ何を言っても無駄ね」

「あ・そ。じゃあ、取っちゃおうかしら？」

「バカ、止める今の調整だとフェイスオープンすると稼働時間が短くなるぞ」

カフルに止められた。

「いいわよ別にそれまでに殺っちゃえば良いんでしょう？」

「止めとけ」

カフルは止めた。

カシアはその静止を聞かなかった。

カシアはフェイスオープンをした。

カシアは緑色の液体を暫く吐いていたが、吐き終わるとこちらを向いた。

何とその素顔は目元はきついが確かに可愛らしい美少女然とした顔ではあった。

「どう可愛いでしょ？」

カシアは自慢げに素顔をさらした。

しかし、幾ら可愛くても緑色の吐しゃ物を見せられては気分もげんなりである。

この間ヨデイは何をしていたか？
召喚獣を召喚していた。

「エリクリス、ファラ、メイリーフ、サマ、セッツ、フィラ……」
ヨデイが聖呪文の禁呪を唱えていた。

「汝黄金の瞳を持つ者よ

汝黄金の翼を持つ者よ

罪びとどもが汝を仰がん。

今こそ正義を見せるべし！

汝の為に炎を見せん

出でよ竜神、

バハムート！！」

ガオオオオオオン！！

ヨデイのバハムートが吼えている。

ヨデイのバハムートは外に召喚されたようである。

遠そうだがやけに迫力のある声である。

ドカアッ！

この時、この音でアーチエルとアーヌ、ウルクとオルバニアン、アルミナのペアも戦いの火蓋を切って落とされた。

アーヌの下端から繰り出される鋭い一撃はアーチエルの秘剣・裏・閃光一刀・崩しから放たれた一撃によって弾き返された。

（この娘、構えだけでなく実際やりおるわ。それにしても何とあ奴の太刀筋に似ていることか）

そう思うが早いかな、アーチエルは右の脇構えからアーヌの腹部へと鋭い一撃を送り込んだ。

アーヌは刀を立ててこれを防いだが明らかに圧倒されていた。

（アシユマさまだわ。アシユマさまが側に居る。いいえ、私の中にいるわ）

アーチエルはそう思い至るとその身を鬼虎にゆだねた。

そうすると防御と攻撃は更に磨きがかかり、いよいよアーチエルの刃はアーヌを攻め立てた。

ヨデイに召喚されたバハムートらしきものの鼻面が見えた。

遠そうだがやけに迫力のある声な訳である。

全長百メートルは下るまいと思われる巨大なバハムートであった。アーチエルが召喚するバハムートとは形も違っていた。何が違うかと言うと、先ず角があった。

即頭部のところに一對、黒光りする、まるで闘牛の持つようなこつ奴が。

そして羽。

羽は一對増えて計二対の四枚の羽があった。牙。

顎の発達もさることながら牙が大きく硬く発達していた。

「うわわわわっ！」

危うくカフルにあたる所だった……？

いや、当って良かったのだ

カフルを狙ったのだから。

だからこの場合外れて残念と言っべきだったろう。

だが次は？

白い鼻先が上から見えてくる

それはカフルとカシアをぱくりとやって、

ごっくん

喉を鳴らし呑んでしまった。

オルバニアンとアルミナは同時にウルクに斬り掛かって行った。

三者間合いは同等。

さあ、どう出るか？

ウルクは二人の剣を自分の剣で受け止めた。

すると、ウルクの剣は二人の剣に、まるでチーズでも切るみたいに切り裂かれて行った。

これはオルバニアンとアルミナの勝ちかと思われたが、二人は疲労困憊のようになってしまった。

何故か？

「ヨディ、早くバハムートで二人を助けてあげて！」

エファールが叫んだ。

かなりの緊急事態の様である。

「『マジックブレイド』は『ザ・ライフ』と同じ念放出系の禁呪なの。念を放出するという事は生命エネルギーを使うという事。一刻も早く安静にさせないと!」

それに対してヨディは返答が出来ない。

サイクルスペルの呪文で半永久的にバハムートの召喚呪文を詠唱し続けなければならないからである。

永久連鎖魔方陣を使用するかバハムートの口を通じてヨディと会話するかである。

そしてヨディが何をしゃべったかと言うと……

『うわっ。アソコのねえちゃん、良いプロポーションしてるわあ。

歩哨の兵隊にしとくのもつたいないわあ』

「アアタツ! この非常時に何見てるのよ!」

『わっ! ごめん、ごめん』

「もう遅い。二人はもう俺の虜だ。そこのお前」

ウルクが二人の首根っこを掴んでぶら下げている。

「!」

「そうだ召喚しているお前、先ず召喚を止める!」

ウルクはヨディたちに命令をし始めた

ヨディは召喚を止めた。

「そして小娘! 貴様の持つてる鬼虎をよこせ!」

アーチエルの剣に迷いが出た。

そこへ、アー又がやってきてウルクをぶん殴った。

「みつともない真似をするな!」

ウルクを叱った。

「カシアと、カフルもどこぞで醜態を見せているやもしれん。回収してお前は帰れ!」

「はっ! 申し訳ありません!」

「アー又ってああ見えて意外と義理がたいのねえ」

エフアールが言った。

ウルクが消えた。

そして、アー又が訊く。

「今一度訊く。鬼虎を渡す気は無いのだな？」

「ごさいません」

アーチエルが答える。

「そうか。……では参る」

「……………」

アー又は徐に天龍鬼を大上段から打ち込んできた。

それをアーチエルは右へ左へいなしていた。

アー又は大上段から必殺の一打で斬りかかって来た

アーチエルはそれを鬼虎を逆ノの字に構えてそれもいなした。

だけでなく、それで体が流れたアー又の所へ、アーチエルが刀を送り込んだ。

が、アー又は前屈みのまま歩を進め難を逃れた。

そしてアー又は刀を車に回しアーチエルへと送り込んできた。

しかし、アーチエルもいつまでも同じ所にいるわけでなく、剣難を逃れていた。

「な、なあ、ヨデイ……アーチエルってあそこまで剣の達人だったのか？」

オルバニアンは殆ど残っていない体力にも拘らずそう訊いた。

「さ、さあ？」

ヨデイは曖昧に答えた。

「ただ、アシユマ君の戦い方に似てますね……………」

「そ、そういえば……………」

そこにいる全員がそういえばと頷いた。

アー又はアー又で、

(仲間なのに今頃気付いたのか戯^{たわ}けめ！)
と、思っていた。

「娘御よ、次で終わりにさせてもらっぞ」

「そうあっては困ります」

(アシユマさま。アシユマさまを感じます。私をここまで刀の手練れにしてくれたのはアシユマさまのお陰なのですね?)

が、アーヌは鬼虎を巻き込み上に大きく跳ね上げたかと思うと、今度は大きく切り下ろし、鬼虎を強引に引き落とした。

「ああっ！」

アーチエルが悲鳴を上げた。

「こればかりは、地の力が違う娘御では、防ぎきれんな。力技でいかせて貰った」

アーヌがアーチエルを蹴りこむ。

「ぐっ!!」

アーチエルの直ぐ後は壁だったのでアーチエルが壁に叩きつけられ、反動でアーチエルは四つんばいの体勢になり、苦痛に喘いでいた。

「がはっ！」

「娘御よ。よく健闘した。褒めて使わず。あの世でアシユマと仲良く暮らすが良い」

アーヌは必殺の一撃をアーチエルの頭上に送り込んできた。

(アシユマさま!!)

アーチエルは思わず目を瞑った。

アーチエルが心の中で叫んだ時それに呼応するかの如く、地面にあった鬼虎が宙に浮かび、電光とともに光り輝きながらアーヌの天龍鬼を空中で受け止めた。

「なっ、何だありゃあ?」

オルバニアンが叫び声をあげた。

アーヌは天龍鬼が押ししても引いても鬼虎にひっついて離れないのに苛ついた。

光の粒が集まりだした。

そして形を成していく。

「うっ、ま、まさか……!!」

アーヌが言葉を失った。

皆言葉を失った。

誰一人として言葉を発しようとしなない。

アーヌでさえもだ。

アーチエルは何が起こったのだろうか、目を開けて仰ぎ見た。

そこには光の粒が集まって人の形を成していた。

その光の人は、鬼虎を手に掴みアーチエルを護っていた。

「ア……ア、ア……アシュマさま!!」

そう、その光の人はアシュマだった。

「 $E=mc^2$ の二乗だ……」

ヨデイが漏らした。

「何だつて?」

オルバニアンが訊き返した。

「鬼虎が質量とエネルギーの等価交換をさせるということです。今、アシュマ君はエネルギーから質量……物質へと変換して蘇ろうとしています。しかもそれをやろうとしているのは、アシュマ君の強固な意志……」

「アシュマさま!!」

「苦勞を掛けたね。アーチエル。今、終わらせる」

アシュマは光に包まれながら後を振り向きそう言った。

「はい」

「アーヌよ。今日の俺は殺生をしたくない。データを置いて、立ち去るが良い」

「そういつわけにも行くまい。アシュマ・アト」

二人は既に一足一刀の間合いの中で相正眼に構えた。

暫くじりじりとした時間が過ぎた。

何か、コンクリートの破片か何かが上から落ちてカラリと音を立てた。

その音が呼び水となってアシュマとアーヌは電光石火の動きを見せた。

アーヌはアシュマの面上に天龍鬼を打ち下ろしてきた。

それに対しアシユマはその刃を潜り抜け、正眼から左の脇構えと変化しアーヌの左胸へと切り抜けた。

この勝負はアシユマの技勝ちとなった。

しかし、アシユマはアーヌの鎧にかすり傷を一つ付けたに過ぎなかった。

アシユマは少し落胆した。

無想剣を掴み掛かったのではなかったのか？

今のは無想剣ではなかったのか？

「落胆しておる様じゃの？」

アーヌがそう言った。

アシユマはすぐさま警戒をし、下段に構えた。

「そう、警戒するな。我の負けじゃ」

「形ではそうだが、斬れんでは意味が無い」

「これは、我の鎧を強化させてもらったからの。それに前にも言ったが、おぬしは鬼虎の力を把握しておらん」

「鬼虎の力……」

「いや、鬼虎の力は把握してるのかも知れん。無意識にな。無想剣も、完成に近づいておる。最後の試練、生と死とその狭間の境地もまさに実地で体験したわけだ。後はそれが上手く一つにまとまれば……。生死の狭間を超え一刀が万剣に成り万剣が一刀に帰る。これが成った時、それを奥義として『無想活殺』と名付けるが良い」

「アーヌ様、今日のアシユマさまには無限の力が見えます。どうぞお引取り下さい」

「……………アシユマ、我が宿敵よ。今日はその娘御に免じて最早太刀は交えぬ。だが覚えておくがいい。近いうちに必ず決着をつける」
「相分かった」

アシユマはアーヌがしまつてあったメモリを受け取ると鬼虎を納めた。

「少し甘くはないか？ アシユマ・アトーよメモリを受け取った時点で刀を引くとは。ここで我が刀を振り上げたならおぬしはまた死

ぬぞ?」

「お前はそんな事をする奴じゃない」

「我はお前のその甘さを指摘しているのだ!」

「分かった肝に銘じておこつ」

「では、今日はここまでとする」

「分かった師匠」

「我は貴様の師匠などではないわ!」

そういうとアー又は踵を返し出口から堂々と出て行つた。

アシュマははまだ光の粒の集合体であつた。

その光の集合体のままオルバニアンとアルミナのところへ行つた。

「全く無茶な事をするもんだ」

「へ……アシュマほどもねえや」

言いながらオルバニアンは涙ぐんでいた。

「全くだ。いま、気を注入するから動くな」

アシュマはアルミナのところにもやつて来た。

「禁呪だぞ? あれは。危うく自分の命を落としかねないところだ

つたぞ?」

アシュマはアルミナに注意した。

「死んでいた人間にそんな事言われたくないわ」

アルミナは大粒の涙を零しながら言つた。

「安静にしておくんだぞ」

次にアシュマはエフアールのところへ行つた。

「心配をかけた。すまないエフアール」

「本当よ。貴方は昔から本当に危なっかしいと言つか、なんと言つ

か……見ているこつちがハラハラさせられたものよ。今回のが一番

ビックリしたけれど。こんな事は今回で終わりにして欲しいわ……」

「済まない」

そしてアシュマはヨデイのところに来た。

「ヨデイ。留守をすまなかつた」

アシュマはそう言つた。

「実を言つとね、君がいない間とても心細かったんですよ。良かったです。君が帰ってこれて」

「そうか。苦勞を掛けた」

「いえいえ、貴方ほどでは。なにせこの世にいなかったんですからね」

そして最後にアーチエルの側によって

「よく俺の代わりをしてくれた。済まなく思っている」

「アシユマさま……」

「随分とつらい思いもさせた」

「アシユマさま……」

「ごめんよ……」

「アシユマ……!!」

アーチエルはそう言つてアシユマに抱きついた。

アシユマの光のヴェールはこの時初めて吹き飛ばされ、生身のアシユマが現れた。

「アーチエル」

アシユマは強くアーチエルを抱き寄せた

「アーチエル、ここはまだ危ない。帰ろう黒龍号へ」

「はい、……はい！ アシユマさま」

アーチエルは泣いた。

またその涙を止めようとも思わなかった。

そのまま少し時が過ぎ去った。

「さあ、行こうか？」

「はい」

だが、アーチエルがアシユマから離れて一人で歩こうとすると膝がかくかくとして、ちゃんと前へ歩けない。

そんなアーチエルを見てアシユマが抱き上げた。

「……済みません」

アーチエルが謝る。

「謝る事はない。色々あったからね。今日は。このままベッドまで

連れて行ってあげる」

そうアシユマは言ったものだった。

アシユマはアーチエルを抱きながら列の一番最後を歩いて行った。黒龍号につく頃にはアンとキュポアが待ち受けていて

「アシユマさま……ほんによう戻られました。良かった」

アンは両手で顔を隠して泣いてしまっし、キュポアは

「義兄様！死ぬなら死ぬ、生きていたら生きていると、ちゃんと連絡してくれないといかんぞ！死んだと思って泣いてしまったではないか！」

等と支離滅裂なことを言いながら泣いていた。

黒龍号にもどりアーチエルをベッドに寝かしつけキスを交わし、

「ちよつとブリッジにいつてくる、すこしまつてて」

そう言つとアーチエルは目だけで返事をする。

余程疲れたのだろう。

アシユマはそう思い、もう一度アーチエルにキスをしてブリッジの方へ出て行った。

アーチエルはアーチエルで『すこしまつてて』とはどういふことかと考えた。

ここへ帰ってきてずつつと側に居てくれるのだろうか？

ずつつとはどこまでを指すのか？

私が寝るまでか？

寝て覚めるまでか？

嬉しい反面、悪い気もした。

そんな事を考えているうちに、うとうととして眠ってしまった。

アシユマはブリッジに居た。

「ほんつと、何でも有りになって来ましたね」

ヨディがあきれ果てた調子で言った。

「でもまあ、こうして無事の帰還だ。おめでとう。そしてお帰り。」

アシユマ君」

ヨデイが言い右手を差し出した

「有難う。ヨデイ」

アシユマがヨデイの手を握った。

「しかし、わかんねえ」

オルバニアンが言った。

「蘇るまでのアシユマは一体どこに居たんだ？」

「この世界より螺旋階段状に五十六億七千万階層上の世界と云つておこつか」

「五……五十六億……あんだつて？」

「そこにあるこの世界の平行世界にいたな」

「何故分かるんだよ」

「教えてくれる存在がいたな……ミ……なんだつたかな？ その存在だかなんだかがよく分からない者がここに来るのはまだ早いといつて追い返されたわけだ」

「ホントか嘘か分からないわね」

エファールがいった。

「呼び戻されたきつかけは、どうやらアルミナがアーチエルに何か鬼虎の表示を押させた事らしい」

「あはやだ、そんな事まで分かるの？」

アルミナが言った。

「どこまでが真実なんだか……」

エファールがまた言った。

「ま、真相は闇の中だわ」

「それにしても、無事でよう御座いました」

そう言つてアンが泣いていた。

「アンさんも喜んでくれているんだし、アシユマも感謝しないとね
！」

アルミナがそういった。

（いや、アンの場合は男女の意味なんだけどなあ。でもあれ以来ど

うなっただんたろう?)

ヨディはそう思った。

「もう！ 怪獣のバカ！」

キュポアは怒った。

(この『バカ』はいろんな意味があるんだらうなあ)

アシュマは思い苦笑した。

「いや、良かった。本当に良かった。わしより若いもんが先に逝ってはいかん」

アベ二爺がしみじみ言った。

「分かっているよアベ二爺」

アシュマは老人を労わった。

最後にリイナがやってきて言った。

「アシュマ、アビスは侮らん方が良い。仮にもイレギュラーナンバーズを統括している者だ。狡猾だし頭の回転も速い。今回の件は、もしお前が油断したものの結果なら、私は同情はせん。自業自得と思え」

「相変わらず手厳しいな」

「当然の事だ。甘えるな。今回はこれで済んだから良いものの、何らかの要因で復活できなくなっていたら、そうなったら、悲しむのはアーチエルだけではないぞ？ キュポア然り、アンも然り、アルミナや、エフアールその他多くの者が悲しむだらう。私もそのうちの一人だ。お前はそうしたもの好意の元に生かされているのだ。それを忘れるな」

「……相分かった。肝に銘じておこう」

「ああ、そうしてくれ」

アシュマとリイナの会話は終わった。

「じゃあ、ヨディ。俺、寝るわ。疲れた」

オルバニアンが言う。

「じゃあ、アタシも寝るわ」

アルミナも言う。

「休んでも良いが、えっちするなよ？」

と、アシユマ。

「なんで？」

そうオルバニアンが訊く。

「あれは『気』を使う。俺がさつき注入した気はまだ定着していない。えっちをすると気の垂れ流しになる。死ぬぞ？」

「あ、ああ。分かったよ」

「じゃあヨデイ、俺も行く。アーチエルの側に付いていてやりたい」「いいわねえ。ヨデイ。『側に付いていてやりたい』ですって。私もそんな事言われて見たいわあ」

エファールはアシユマを羨ましそうに見た。

「エファール、そんな熱い視線送っても、なにもしてやれんぞ？」

「別に期待してないわよアシユマ！！ アタシはねえ、ヨデイにそれを期待してたのよ！ それなのに！ 全く黒龍号の男どもは皆、鈍感ぞろいで、アタシや、嬉しくて涙がちよちよぎれるわよ！ 全く！」

「おお女神さまはお怒りだ。退散、退散……」

そう言ってアシユマはブリッジからから文字通り退散した。

「……さて、オロにも連絡を入れますか？」

「そうね。また嫌味でも言われるのかと思うと、ちょっと嫌だけだね。折角お目出度い事が起こったのにね」

エファールは折角の喜ばしい事に水を指される事が嫌だったのがある。

アシユマがアーチエルのブースに来た時、彼女はいなかった。

側の椅子に座ってポーツとして彼女が帰ってくるのを待った。

暫くするとアーチエルがユニットバスから出てきた

「まあ、だんなさま。わたくしの事を待っていて下さったんですか？」

「ま、そうなるな」

「うれしい……大好きよアシユマさま」

アーチエルはそうしてアシユマの頭を抱きしめた。

「……アシユマさま、お帰りなさい。私のだんなさま」

やっとアーチエルから帰還を喜ぶ言葉が発せられた。

「……ただいま、アーチエル。俺の最愛の人よ」

アシユマも帰還を告げた。

「アシユマさま、お疲れみたい。寝ます？」

「うん、まだ魂が定着していないみたいだ」

「そうなんですの？」

「ああ。そんな感じだ。でも、こうやってアーチエルに抱かれていると落ち着くよ」

「なら、ここで寝ていって下さいな。私がアシユマさまの魂が抜けて行ってしまわない様にアシユマさまを抱きながら寝てさしあげます」

「腕が疲れるぞ？」

「疲れたらそつと抜きます。心配御無用」

「有難うアーチエル」

珍しくアシユマの方がアーチエルに甘えた。

その日アシユマはアーチエルのブースで眠った。

ヨデイは、

「『祝福されぬ命の者、その光に飲み込まれこの世より消えさせる。驚くかな、もう一人の祝福されぬ命の者現れし時、祝福されぬ命の者この世に出現す』ですか」

と、諳んじた。

「ヨデイ、それ、ルーンの黙示録？」

エファールが訊いた。

「ええ。そういえばアシユマ君の件くだりでしたよ」

第五節 戦乱

漆黒の闇。

全てを飲み込む闇。

静寂をつかさどる闇。

その静寂が再び破られようとしていた。

闇の中に浮かび上がる五人の人影。

それは人の形をしたものが複数個あった。

それらは皆フードを被りお互いがお互いを確認する事さえ出来な
いでいた。

そう彼等こそが世界を裏の闇から操る七賢人であった。

七賢人たちは話し出す。

「ハマゴゼシシステムを失ったのは痛手でしたな」

「然様」

「神人様がその種を展開するのに有用なサンプル元でしたからな」

「まあ、全てが失われたわけではありませんからな。データは残り
ましたし」

「然様、然様」

「それより今日のテーマは何でしたかな？」

「アビスの処遇ですか？」

「然様」

「では……アビスよ」

「はっ」

アビスは闇の中から浮かび上がった。

七賢人より一段と下がった所にアビスは跪いていた。

「アビスよ、お前に問う。イレギュラーナンバーズほぼ全滅の責任
はアビスよ、お前にありや、なしや？」

「わ、私めにあります」

「アビスよ、お前に問う。アシユマ・アトーを殺害した折、鬼虎を

奪つてこなかつた責任はアビスよ、お前にありや、なしや？」

「わ、私めにあります」

「アビスよ、お前に問う。アシユマ・アトー復活の責任はアビスよ、お前にありや、なしや？」

「そ、その嫌疑には異論が御座います。アシユマが復活するなど、予想もしえなかつたこと！ その嫌疑だけはどうかお許し下さい」

「アビスよ、それもお前が鬼虎を我々の元に持って来なかつた事に遠因がある。それをお前は罪がないと申すかッ！ それも階位三十二の分際で我等に意見をするかッ！」

「……………」

「裁定を下すッ！ アビス、汝は十階位降格！ あらゆる指揮権を剥奪する！」

「くっ……………」

「異論はあるまいな？ アビスよ」

「……………はっ」

「では、下がれ」

「……………」

「イレギュラーナンバーが一々二体残っておりましたな」

「誰に運用を任せましようなあ？」

「取り敢えずガルマインに運用を任してみましよう。何、出来損ないのイレギュラーナンバーなど使い捨てにしても構わんではないですか？」

「その通り今の我々が急務とするのは神人様の復活ですからなあ」

「そう、それに『携拳』するべき人間の選定も行わなければなりませんなあ」

「ごくごく一部の人間しか挙げられませんかね」

「まあ、それでも多いと思いますかね……………失敬これは口が滑りましたかな」

「はっはっはっ」

そしてその日、衝撃的なニュースが世界を駆け巡った。

アヘイビア連邦共和国が殻兵器の開発に成功したとの事だった。

アヘイビア側のスポークスマンは

「これは世界の秩序と平和を護る為の物であって、決してどの陣営に対し優位に立とうとか、世界を征服してやろうとか、そういうものでは一切無い事を明言しておく。誤解の無き様」

とは、言ったものの、世界のどのマスコミも、そう思っている者は少なくはなかった。

皆一様に思っていることは、オロ・エバス国に対する牽制だと思っていたからだ。

今、アヘイビアにとっての目の上の瘤は、オロ・エバス国だったからだ。

サバンナ、アヘイビア大統領は小躍りして喜んだ。

これである、煮え湯を飲まされ続けてきたオロに一泡吹かせられる。

そう思うと嬉しくて嬉しくてたまらないのである。

なにせ人間一人に殻兵器を持たせて、置いて来ればいいのである。なんなら魔導機兵を持たせて投下するのも良い。

ミサイクルに詰めても良い。

大規模なあの艦隊はもう要らないのである。

先の、オロ・エバス国に艦隊を全滅させられて丸裸だったアヘイビアはこれでようやく巨大な戦費から開放されるはずだった。

そして世界の覇者になれるはずだった。

数時間後の、あの会見を聞くまでは

アシユマ達は暗たんたる気持ちでこのニュースを聞いていた。

「今までやって来たことは一体なんだったんだよ!!!」

オルバニアンはその怒りをどこにぶつけて良いか分からなかった。

それは皆同じ想いで、リスパダハルの殻兵器が発見された事に始まるこの事態の顛末は最悪の形で一つの結末を見た。だが事態は意外な方向を見せ始める。

続いて、後を追うようにして、オロ・エバス国の大統領オロ・エバス自らが会見場に赴き会見を始めた。

「本日オロ・エバス国は殻兵器の開発に成功した。数日内には量産の体勢を取る事が出来る。以上だ。何か質問は？」

アシユマ達もこの会見を見たが、開いた口が塞がらなかった。

「みんな！！ オロのところに行こう！ 俺は、アイツに一発叩き込まないと、どうにもこうにも気がおさまらねえ！」

オルバニアンは怒りの矛先をオロに向けた。

「オロをぶん殴るかどうかは別にして、事の真相をきかなければなりませんね」

ヨディは言った。

さつきまでの優位に立てた喜びは何処へやら、サバンナ、アヘイピア連邦共和国大統領はこれを見て地団駄を踏んだ。

そして、これでアヘイピアが世界の覇者になり、自分はそこの王たる大統領になるといふ夢は潰つぶえ去った。

国元連の事務総長はこの両会見に不快感を示し、

「誠に遺憾である」

そう言った。

また、事務総長は殻兵器をドメル条約に基づき査察に入れる旨を伝えた。

これを受けて両陣営双方とも査察を拒否。

オロ・エバス国は条約に加盟していない事を理由に査察を拒否。
アヘイビアは純粹に査察を拒否。
そればかりか、わが殻兵器の傘下に入れば永遠の平和と安寧が得られるとまで言い切った。

「何故分からなかった!!」

オロは側近たちを罵りテーブルを叩いた。
そして、

「お前たちが、アヘイビアの殻兵器の実験計画を、把握していなかったから、こうなったのだぞ？ 諜報部は何をしていたのだ！」

「はっ、申し訳ありません。ですがまさか地下殻実験をするとは思わなかったものですから……」

「愚か者！ 諜報員はどうした？」

「全て身元が割れ殺されました」

「駄目だ！ 話しにならない！ 私が打ったハツタリの手だとしていつまで効くか分からん。何か手はないか!？」

「殻兵器開発を急がせるのは？」

「貴様はバカか!？ その上で何か策を練れと言っている」
皆、口をつぐんでしまった。

「ヨデイたちに連絡を取って……いや、もう彼等は私の為に動いてはくれんだろっ」

オロは苦悶の表情を浮かべた。

黒龍号はオロの領地である広大な庭園を飛びつつオロの館を目指した。

オロの館は今や政の府と化していた。

黒龍号はオロの館の前の庭に降り立ち機関を停止した。

後部ハッチが開きヨデイ以下数名が出てきた。

ヨデイを先頭に皆がオロの館内に入ろうとする。

門には今までいた例ためしのない衛兵がいた。

ヨデイが門に手をかけ中へ入ろうとするのを衛兵が、

「身分証を」

と、止められた。

各々身分証の提示を求められた。

そしてその間ボディチェックを受けていた。

黒龍号のクルーは女性が多い。

ここの衛兵は、女性が一人だったから、ボディチェックするのは大変だったろう。

そして武器を取り上げられそうになり、アシユマなどは衛兵を全部相手にしてでも鬼虎を取り上げられるのを拒否した。

このオロ・エバス国では、アシユマの名を知らぬ者など居ない程で、拳句の果てに困り果てた衛兵が、直接オロに訴え出る始末だった。

普通ならここで、『通してよし』となる筈だったが、オロは逆に『絶対に通してはならん!』と言う事になってしまった。

「ならぬと言われて、素直にはい、と言えるほど人間が出来ておらぬでな」

アシユマが門の入り口を押し開くと武官百人ほどが待ち受けていた。

アシユマはそれを見て思わず溜息を吐いた。

そうまでして、自分に合いたくないのか？

アシユマは落胆した。

だが……

「アシユマ、上、行くぞ、上!」

オルバニアンがアシユマの腕を取り引っ張りあげるようにして、階段のあるほうへ引っ張っていく。

アシユマは、このオルバニানেরバイタリティーに、驚きもしたし、呆れもした。

が、バイタリティーがあるのはオルバニアンだけではなかった。「引き止めるおつもりなら引き止めなさい！でも誰もわたくしの前へ進もうとする意思は止められません！」

アーチエルがそう言ったものだった。

その剣幕に、誰も止める者はいなかった。

その後ろには珍しくリイナが従っていた。

そして皆次々と前へ階段へと行った。

武官達は氣勢を殺^そがれたのか、皆呆然として見上げるしかなかった。

オロの屋敷は政の府である。

基本的には文官しかいない。

武官は殆どいない。

最初の屋敷前でのやり取りが全てである。

いささか警備の面で弱いといわざるを得ない。

まあ、そのお陰でこうして内部に入れたわけであるが……。

兎に角一行はオロを指指して執務室の前にやって来た。

「やい！オロ！いるか！？」

オルバニアンが叫び、ドアを蹴破る。

いつも通りにオロはそこにいた。

「わたしは誰にも、会わんと言ったはずだぞ？」

オロが言った。

「オロ様、他の国の実験は私達に阻止させておいて、自分たちは殻兵器を開発しているというのはどういう見でしょうか！？」

アーチエルが憤慨遣る瀬無いと言ったような感じで訊いた。

「……………」

「その途中で、アシユマさまが犠牲になっても、弔いの言葉一つ掛けて下さらなかったのは、どういう見なのでしょうか！？わたし達も犠牲になっても、已む無し。そう言う事なのでしょうか！？私達を、捨て駒のようにお考えなのでしょうか！？お答え下さい！？」

ヨデイ達は余りのアーチエルの剣幕に息を潜めた。

辛うじてオロがこう言った。

「それが政治と言うものだよ」

それに対しオルバニアンが机の向こう側へ行きオロをぶん殴った。

「オルバニアン！ 止める！」

ヨデイがオルバニアンを羽交い絞めにした。

「オロ！ そんなものはなあ！ 政治でも何でもねえ。卑怯者のやるこつたー！！」

オルバニアンは羽交い絞めを解かれると着衣の乱れをその場で整えオロを一瞥すると、そのまま部屋を出て行った。

皆もそれに倣い部屋を出て行った。

最後にヨデイが部屋に残った。

「オロ、さっきの会見、あれは本当のことか？」

「…………… 本当の事だからこうして殴られもする」

「そうか……………」

「君達はもう自由だ。どこへなりとも行くが言い。もちろんこのドッグを使うことも全くの自由だ。経費だけは取るがな」

「オロ……………」

「ここから先は私の独り言だ。うちの情報部によるとアビスと言う幹部が降格処分受けたらしい。今はガルマインの元で働いているそつだ。参考になるかは知らんがね」

最後に部屋を出て行くこうとしたリイナが耳聴くそれを聞きつけた。

「分かったよオロ。お互いに辛い立場にいるということだな」

そう言つて、ヨデイはオロに手を差し出した。

「何のことだ？ サッパリ分からん」

オロは顎をさすりながら一人で立ち上がった。

穀兵器の開発に関し、各国の反応は様々だったが、各陣営間では更に関係が悪化した。

即座に国交を断絶すると言った国さえあった。

元々外交など皆無に近かったアヘイビアとノーツ連邦、アヘイビアとクーロン人民共和国らは更に険悪な関係になる。

ノーツ連邦などはこれを逆に好機と見、艦隊を発進させアヘイビア連邦共和国（と、その同盟国）、クーロン人民共和国に宣戦布告をする用意をしていた。

実験に成功したとはいえ殻兵器の量産までには至っていないと見たからである。

ただ、オロ・エバス国には宣戦を布告しなかった。

今度の戦いでおそらく最大最強の陣営だからである。

下手に手を出して刺激したくなかったのである。

そして実際、艦隊を出したくても出せないのがアヘイビアとクーロンだった。

この国らは『岩のピザ』騒動でクーロン人民共和国の艦隊が、アヘイビア対オロ・エバス財閥（当時）の戦闘でアヘイビアがそれぞれ自国の艦隊を失っている。

代わりにノルブル王国、ドラスティス共和国が艦隊出動をかけてきた。

これは、同盟を結んでいるアヘイビアへの協力の意味合いが強い。つまり実際に戦うのは、ノルブル王国、ドラスティス共和国の連合艦隊と、ノーツ連邦の艦隊、そしてオロ・リスパダハルの連合艦隊ということになる。

実際には艦隊戦になったときに、宣戦布告がなされるであろう。

レボトミノ連邦共和国、ノリトリア王国は、今回艦隊合流を見合わせた。

レボトミノは、自国の大統領官邸に、アヘイビアの降下部隊が現れこれに侵された……として、アヘイビアに事態の説明と謝罪、それなりの賠償を求めているが、未だに回答がないという理由で出兵を拒んでいる。

ノリトリアは単にガルマインが病に臥せているためと言っているのが

理由だが、もちろんそんなはずはない。

この大戦後、世界情勢がどうなるかを見極めて、漁夫の利を得ようという腹積もりなのである。

クーロン人民共和国も意地を見せ、巨大な空母二隻と大量の魔導機兵を積んでやって来た。

そして勿論アヘイビア連邦共和国と、ノーツ連邦、オロ・エバス国の各国に宣戦を布告するだろう。

そして艦隊を出せ無い筈のアヘイビアが、二艦出撃させてきた。

一艦は、急場しのぎだが、今までのどの艦よりも性能は良かった。名をアートノーンと言う。

装甲も機関出力も大きさもそして攻撃能力も、今までで最高の性能を誇った。

そしてもう一艦……と言うのだろうか？

船と呼ぶには形に違和感を思えるこの飛行物体、お椀を大小揃えて上に重ねたような形の飛行物体であった。

この飛行物体の名称は『ヌル』。

先日黒龍号とニアミスを起こした正体不明の飛行物体である。

(第九話参照)

アシユマはここにアーヌの気を感じたといっていたが……。

戦闘能力は未知数である。

直径二キロ、全高七百メートル、下部に半球状の物体が三つについて回転をしていた。

この乗り物は神人による『携拳』と呼ばれる計画に使われるものらしいが……

そして、オロ艦隊と、リスパダハル連合艦隊は、エシーデューテイー、パラケーシ、ヘルガギルテ、そしてアロアオゲル。

旗艦級の戦艦が四艦もいる。

特にヘルガギルテは元はノーツ連邦の誇る空中要塞。

それをオロ・エバス財団が奪取し、リスパダハル共和国に譲渡した。

直径千二百メートル、魔導砲×三。

巨大さと攻撃力では古今無双と称された。

このように各国最大級の戦闘艦を繰り出してきているので、早く戦闘をしたいところだが動くに動けず一定の距離を持って牽制しあっていた。

このバランスが少しでも崩れて戦闘が始まるものなら、それは即ち世界大戦を意味していた。

「アシユマさま……」

「うむ、由々しき事態だな。どうする？ ヨディ」

今、一行はまさにその戦闘が始まらんとする空域の、更に上にいた。

そこから三すくみ（……四すくみと言うべきか）になっている艦隊を見下ろしていた。

「兎に角、説得しかないとします。各々分担して各国の首脳に説得をするんですよ」

ヨディが語った。

「そんな悠長な事言っている間に戦闘が開始されたらどうするんだよ」

オルバニアンが突っ込んだ。

「この三すくみ状態が長く続いてくれる事を祈りましょう」

アーチエルが言う。

「それならばそろそろ正体を明かしてはどうか？ そのほうが民も分かりやすい」

アシユマは言ってみた。

「正体？」

理由の知らないものは口々に言った。

アシユマはヨディに向かって言っていた

「いや、僕は……ダストモンキー名義で説得に当たるのはどうかな

？と。正義の賊と言つことで民意も……」

「ヨディ〜！」

「正体つて何のことですか？ アシユマさま？」

アーチエルが訊いた。

「アナタツ、またどっかに女をこさえているのっ！？」

エファールは切れかけた。

「なんで、正体の話でそっちに話しが飛ぶのよ？」

ヨディは大いに困惑した。

「何でもいいから名乗りを上げるよ、『アルステイーン』」

そう言ったのはオルバニアンだ。

「アルステイーン！？」

女性陣は皆悲鳴に近い声で叫んでいた。

いよいよヨディが、アルステイーンである事を、世に広く知らしめる時が来たのだ。

アルステイーンは健在だと。

「で、でもお顔が違いますわ」

アーチエルが恐る恐る訊いた。

「そういえばアーチエルつてはアルステイーン王子に会った事あるのよね」

アルミナが言葉を添えた。

「ああ、この顔はですね、作り物なんです」

「作り物？ 整形？」

オルバニアンは少しシヨックを受けた。

「ああ、大丈夫です。これ剥がせるんですよ。ちょっと待っていてください」

ヨディ……アルステイーンは自分のベッドブースに行くところこそとスプレーのような物を取り出しブリッジに戻ってきた。

「やあやあ皆さん、お待ちどうさまでした。これから剥がしますから」

ヨディ……アルステイーンはそう言うと自分の顔にスプレーをか

けた。

今まで皮膚だった所はふやけてぶよぶよになり、そして皮膚の端を掴んで一気に剥がした。

下から出てきたその顔は、目元涼しく鼻筋が通り凛々しく、まさに美形と呼べる顔だった。

「『皆さんこんにちわ。これが素顔の僕です』って所でしょうかねえ」

おどける所は前と一緒のようだ。

「まあ！ なによ、あなた。こんなに良い男だったなんて、惚れ直しちゃったじゃない」

エフアールは頬に手をあてた。

「惚れ直したただなんて、いやぁ照れるなあ」

アルステイーンは後ろ頭をかいた。

「以前にお顔を怪我されたとかお聞きしましたが？」

アーチエルが訊いた。

「あ、この人工皮膚は怪我の治癒を促進させる働きがあるんですよ」

「なぜ今まで『ヨデイと言う仮面』を被っていた？」

アシユマが口を開いた

「先ず一つは、ガルマインの追求から逃れる為……これは半ば途中で意味をなさなくなりました。仮面をしていようがしてまいが、ガルマインと戦う機会が多くなった為です」

「次は？」

「自由が欲しかったんですねえ。きつと」

「そうか……」

「今はそんな事言ってる場合じゃないって」

オルバニアンは言った。

「じゃあ、オルバニアンとヨデイ……ごめんなさい、アルステイーン様って義兄弟じゃない！」

アルミナが言った。

「ま、そういう事になるかな……ってそんな事あどうでもいいんだ

よ！！ 誰がどこの陣営に説得しに行くんだよ！？」

「その前に、貴方もオルバニアンからルーランに戻りなさい」

「は？」

「うん、そうなさい」

「やだよ、アルステイーン！ なんか堅ッ苦しくてさあ」

「そのほうが、各国首脳と会い易いんですよ。ここは一つ貴方もルーランの名に戻る！」

「え、やだなあ……」

「そんなに嫌がるとアルステイーン止めますよ？ 僕は」

「！ わった！ わった！ 分かりました！！ しょうがないなあ。分かりました。ルーランになります」

「うんうん」

「で、誰がどこの陣営に説得しに行くんだよ」

「うんそうだなあ」

アルステイーンが考える。

アーチエル、アシュマ

アヘイビア連邦共和国

アルステイーン、エファール

ノーツ連邦

ルーラン（オルバニアン）、アルミナ……クーロン人民共和国

「オロのところは誰が説得に行くのさ？」

「うん……」

「あのお……」

アーチエルがおずおずと手を上げた。

「なんででしょう？ アーチエル王女？」

アルステイーンが弁舌さわやかに言った。

「サーナリア女王陛下とフェリア姫をオロ様の説得に伺わせるのかわかでしょうか？」

アーチエルは自分の意見を言った。

「うむ！ 妙案でありますな！ 流石はレキシタニアの王女」

アルステイーンに褒められた。

「先ほどまでの話をまとめるところになりますね」

アルステイーンが実際に簡単な表を作ってみた

アーチェル、アシユマ……………アヘイビア連邦共和国

アルステイーン、エフアール……………ノーツ連邦

ルーラン（オルバニアン）、アルミナ……………クーロン人民共和国

サーナリア、フェリア……………オロ・エバス国

「さてこんなもんですが、いかがなものでしょうか？」

「サーナリアだけど、オロのところへ言っただ大丈夫なのかよ？」

「さすがに実妹の事は気になりますか？」

「そ、そう言う訳じゃないけどよ……………」

「サーナリア王女とオロの組み合わせは、悪くないと思いますよ。

オロはああ見えてもフェミニストですし、何か害を及ぼすような事はしないと思いますよ」

「そ、そうか。じゃサーナリアを迎えに行くか」

「さて皆さん、一日仕事になりますよ。気張っていきましょう！」

「あなた、口調は変わらないのね」

そうエフアールが言った。

寝ているのか、けなしているのかは不明だ。

でも、アルステイーンは

「僕は昔からこう言う口調です。親しみやすくいいでしょ？」
そう同意を求めた。

「一国の王子が親しみやすいというのも疑問があるわ」

「まあまあ」

そして先ずサーナリア王女とフェリアをレキシタニアまで迎えに行った。

距離にして二〜三時間の所だ。

「サーナリア！ フェリア姫！ 迎えに来た」

オルバニアンが黒龍号のハッチから手を差し伸べた。

「お兄様！ 迎えに来てくれるのは嬉しいんですけど、もう少し

慌しくない方が宜しかったわ。お陰でほんの身の回りの物しかもつて来れなかったんですもの」

「それでいいんだよ！ 十分だったの！」

サーナリアとフェリアは先ずベッドルームに進みコートなどを脱いだ。

それをアンが預かりクロークルームに持って行った。

サーナリアはアンに礼を言い、それから二人はブリッジに上がった。

「こんにちは皆さん！」

サーナリアが言った。

「やあ、いらつしやい」

美形の青年が二人を出迎えた。

(きやあーっ！っ！ ！いい男よフェリア！！)

(きやあーっ！っ！ ！それで御座いますわね、サーナリア様)

二人とも男への興味は消えていないらしい。

「さあ、どうぞこちらへ」

「はい。不躰でお恥ずかしゅう御座いますが、あのお名前は……？」
フェリアが訊いた。

「はい、ヨデイ・ヨフルです」

「は！？」

二人の頭は混乱した。

「アルステイン兄ちゃん。ふざけてないでちゃんとやってくれ！」
今操縦席にいるオルバニアンは言った。

「はあ！？」

さらに混乱する二人の頭。

「ははは。悪かったね、二人とも。ヨデイとは世を忍ぶ仮の姿。その正体はアルステインで訳なのさ」

「本当ですか！？ ではお義兄様おにいさま！？」

「そつだね。そうなるかな？」

「ああ、お義兄様、お会いしとう御座いました」

「さて。折角の対面を壊して悪いけれども、早速こちらの願いを聞いて欲しい」

「なんでしよう、お義兄様」

「オロ・エバスの戦争への介入を阻止したい。その為の交渉役になつてもらいたい」

「分かりましたお義兄様」

フェリアは少し恪気を起こしてサーナリアの二の腕をつねっていた。

「きゃ！ いた！ ……何をするのですか」

「アルステイン様に心許されるサーナリア様なんか知りません！
そう言つてフェリアはふいと横を向いてしまった。

「そういえばアシユマ様は？」

フェリアが訊く。

「今、着替え中ですね。もうそろそろ……おつ、来ましたね」

「だから、俺はこう言う服が苦手なんだって……動きにくいし足は滑るし」

「でも似合いますよ。凜々しい感じがします」

アーチエルが褒めた。

アシユマがスーツ姿になっている。

「まあー、お美しい！ 殿方らしい凜々しさがありますわね」

「本当に、全く持つてお美しい……」

サーナリアとフェリアがアシユマの男ぶりを褒めた。

「美しい？ 美しいだ？」

アシユマはその場でスーツを脱ぎだした。

「見てくれの美しさなんて俺は要らない！」

「はあ、二時間もかけて選定したのに……。このひねくれ者」

アーチエルはぼそぼそと呟いた。

「アーチエル様、アーチエル様！」

「まあ、サーナリア様！ それにフェリア様も」

「アーチエル様、ずっと目がアシユマ様に釘付けで、わたくし達に

気が付かないんですもの」

サーナリアがアーチェルに文句を言った。

「そつ、それは相すみませぬ」

「最近良い事があつたに違いないわ」

フェリアが言った。

「え？」

「なかつたの？」

「いえ、それは……」

「それは？」

「ほんの少しだけ……」

「それ御覧なさい」

サーナリアが勝ち誇つたように言う。

「『それ御覧なさい』ではなからう？ 雲雀の様にぴーちくぱーち

くと。少しは、何故自分たちが貴重な時間を割いてまで、ここに呼

ばれたかを考えるが良い」

「誰か？ 私たちを愚弄する者は？」

「誰かではあるまいに、居候の分際で！」

「うっ！ キュポア王女！」

「サーナリア様。分が悪う御座います。ここはひとつ……」

「フェリア……どうするのかえ？ 逃げの一手は効かんぞえ。大人

しく、そこにいるアルステインと打ち合わせでもして来るが良い。

姉様もいつまでも案山子かかしの様に立ってないで、早く服を片付けて義

兄様と一緒に打ち合わせに出てたも？」

「はっ！ はい……」

「全く。どいつもこいつも、わらわが面倒を見てやらんといかんと

は、何たる事よ。わらわに何かあつたら、なんとするのじゃ」

アシユマが普段着のまま打ち合わせに出る。

その国々で弱い所を突いて動揺したところをこちらに有利な話に
持つて行く。

しかし話の流れと言うモノがあるのでそこは臨機応変にと言うの

が話の要諦だった。

そして最初に行く所はノーツ連邦で、事前に書記長へと打電しておいた。

これにより、アルステインが生きていたと言うニュースが、全世界を駆け巡った。

約一年前のノリトレアの騒動の真相は如何に。

ノーツ連邦を今の時期に訪れる目的は？

その数時間後にはルーラン・ノリトレア王子がクーロン人民共和国に出現、今まで行方を隠していた理由は？

何故今この時期に、戦争が始まる直前のこの時期に？ と憶測を呼んだ。

また、数時間後前ノリトレア国王であるサーナリア『女王』も供を一人つれてオロ・エバス国に入る事も（世間の人々にとっては）驚かされる事だった。

そしてまた数時間後、アーチエル王女がアヘイビア大統領府を訪問。

アーチエル王女が表舞台に立った外交活動は初めてではないか？
何故、今この時期、このタイミングで訪問したのだろうか？

皆マスコミに注目されながら、ヨディヤオルバニアン、アシユマなど時間が早かったから会談が始まるのであった。

アルステイン帰還の一報に注目した物がいた。
ガルマインである。

折角浜御前が完全に死んで、この国を自由に切り盛りしても構わない事になったのに、よりもよってアルステインが生きているとは……。

ガルマインは

「くそ！」

一言吐き捨てるのと、これからのことに思案した。そうでなくとも、最近ゲリラの活動が激しくなって、それを駆除するのに手を焼いていたからだ。

もし、このゲリラとアルステインが手を組んだなら……。

いや、二つを一つにしなればいいのだ。

それにしても気になるのはアシュマ・アトーだ。

奴は最強の刺客、ゴルグ・ローンまでをも倒したというのか？

巷の噂ではそういうことになっている。

どちらにしても看過出来ないことであった。

そして時間はさかのぼる。

アルステインは四翼の白金色に輝くバハムートで空港へ降り立った。

空港関係者は魂消た。

アルステインと呼ばれる若者が来るとは聞いていたが、まさか空港に御伽噺おとぎばなしに出てくるようなドラゴンの背に乗ってやってくるとは思わなかった。

言論統制があるこの国にも拘らず、マスコミが集まりこの国に来た真意などを訊いた。

(後に聞いたところによると、ここには外資系のマスコミが来ていたとの事であった)

「アルステイン王子、この国に来た理由をお聞かせ願います」

「分かりました。この国に来た理由は一つ。ここから遙か離れた戦場で今まさに始まらんとする武力衝突を回避させるためです」

アルステインは言い切った。

「分かりました。それでは、前回起きたノリトレアでのクーデター

騒ぎの真相について一言」

「ガルマインが、サーナリア王女をルーラン王子と偽り、国政を我が物にしようとしたのが真相です。討つべきはガルマイン。近くノリトレアに帰ったらそうなるでしょう」

「王子、では……」

「おっと、その前に皆さんは早く逃げた方が宜しそうだ。僕のお迎えが来たらしい」

記者たちは「えっ」と、振り向くと軍用車両に乗ってきた数人の兵士とリムジンが乗り付けてきた。

リムジンはアルステインとエファールを飲み込み走り出した。

中にはなんとアガツコフ書記長が乗り込んでいた。

「！ア、アガツコフ書記長……！」

「何を驚くのかね？ アルステイン君？ 私が同席してはまずいのかね？」

「いえ、まさかこの様な形で対面するとは思わなかったもので」

「そうか。私も時間が惜しいものでね」

「まあまあ、そんな焦らず会食でもいかがですか？ 人生は長い。

そんなに急いでも得る物は得る。得られない物は得られませんよ？」

「会食などゲストの君たちの方から望むとは図々しいにも程がある」

「では何か企画してください。あ、オペラは駄目ですよ。あれは眠くなる」

「小うるさい客人だ。そろそろお帰り願おうかな」

「帰ってもいいですけど、肝心な事を伝えていない」

「なにかね？」

「この艦隊戦に勝者なし。将兵の命を無駄にはいけません」

「勝者なし？ 何を言っておるのかね？ 君は」

「タイン教の聖書の一番最後の節。そこに乗っているルーンの黙示録。そこに書いてあります。『世界に散らばりし黒き卵の所為により、世界より戦船集いて争う。これ世界の行く末占う戦である。しかしこれの勝者なし』……だと」

「何を言っておるのかな？ 馬鹿馬鹿しい！ 車を空港に戻せ！
この国より退去願おうか？」

「それで良いのですか？ 例えば、艦隊が全滅するように解釈してみましようか？ するとどうなるか？ 答えは簡単でしょう。ガルマインの一人勝ちです。何故か？ 現在十分に戦力を保持しているのはガルマインの陣営だからです。そして切り札にはバヴェルを使用してくるでしょう」

「な、なにかね？ ……そのルーンの黙示録にはバヴェルの事も書いてあるのかな？」

「ええ。『破壊の権化と祝福されぬ命の者との戦いがある』とね」

「バヴェルはどうなるのだ！？ 祝福されぬ命に者とは……！！？
ゴホツゴホツ！！」

アガツコフは急に苦しんだかと思う、と今まで通訳をしてくれていた、隣の秘書らしき女性が、

「大丈夫ですか？ 書記長！ 書記長！！」
と、言った。

アガツコフは胸の内側のポケットから錠剤の入った小瓶を取り出し、錠剤を水無で飲んだ。

「騒ぐでない。ヒルダよ大丈夫じゃ。薬も飲んだでな」

アガツコフは一拍置いてから、

「それよりも未来じゃ。先じゃ」

そう言った。

「未来予測はここまでです。アガツコフ書記長」

「何じゃと？ 肝心要の部分がないのでは、しょうがないではないか」

「肝心要のその核心部分は貴方が……いや、国民が物語を紡ぐべきでしょう」

「なに！？ 言うに事欠いてその話か！！」

「いえ、いえ。国民一丸とならなければ、この難局を乗り切らないだろうと……」

「そうだ。そうでなければ、ワシの命が危ないから」

「……………」

「ヨディどうしたの急にだまって？」

「エファさん、僕はアルステインだよ」

「あら、御免なさい。で、そのアルステインさんはなんだって言うの？」

「どうして、この世界の権力者と言うのは皆傲慢で、民の事を考えないんだらう？ …… あ、通訳さん、これ通訳しなくていいですか」

通訳のヒルダはもう遅いという顔をした。

「あっちゃー」

と、アルステインは額に手をあてた。

「なんだと!？」

アガツコフは怒った。

「貴様の言う事も、貴様の要求も、もう聞く耳をもたんからな！」
「待ってください！ 書記長の裁定一つで、一体何千万の命が助かるか。どうぞご再考下さい！」

アルステインは車の中で土下座した。

アガツコフはこの位置からのロケーションがいたく気に言ったように、どう甚振ってやるうか考えていた。

「朝出るときについ靴を磨き忘れたんだよ。それで靴が汚れていてねえ」

「書記長、それでしたら私めにお任せ下さい」

アルステインはテーブルの上にあった蒸しタオルを使おうとした。

「蒸しタオルはまだ使いたいんだよねえ」

アガツコフは言ってきた。

「ではこのスーツで……………」

「服が汚れるではないか。服が汚れた男を私は好かん」

「で、ではこの私めの、し、舌で……………」

「ヨデイ！」

エフアールが叫んだ。

「やはりヨデイと言うのは貴様か！ ダストモンキーだな？ 貴様！ リスパダハルでの殻兵器騒動の折には、世話になったな。あれでワシは、相当の恥を掻かせて貰ったよ。ああ、確かに殻兵器が欲しかったさ。魔導石の採掘権利もな。それがお前のせいで全てはあだ。どうしてくれる？ お前と言いつつ、アシユマ・アトーと言いつつ」

「あら？ ばれてらっしゃる」

「当然だ！ われらの情報収集能力を甘く見ないで欲しい物だ」

「あの時はどうも済みませんでした……」

「はああ？ よく聞こえんなあ」

「あの時はどうも済みませんでした……ハツタリで」

「わあっはっはっはっ」

「そして済みません！ 今回はハツタリじゃなくて！ 今までの会話、外のマスコミに全部筒抜けなんですよ！」

「は……はあ？」

「これで貴方は党執行部から追放だ。党としては関係無い事を盾にするだろうからね。つまり、これで貴方の政治生命も終わりと言うことだ」

「な、何をバカな事をいつとる？ ハツタリも大概にせえ！」

「いいや、ホントの事さ」

アルステインは上着の内側についているマイクをアガツコフに見せた。

「う、う、う、嘘だ！！」

「だから、今回は本当のことなんですよ！ 党執行部も、これで戦争どころじゃなくなるぞ！」

「やったわね、ヨデイ！」

「いや、だからアルステインだってば」

「いいじゃない。私にとってはヨデイもアルステインも同じよ。

中身が変わるわけなし。それにしてもやっぱり口八丁手八丁なの

ね。あなた」

(こりや暫くヨデイと呼ばれそうだなあ……折角、元に戻ったのになあ……そうだ一応党執行部の反応見てみよう。ここでのやり取りはライブ中継でやっているからな)

「通訳さん。党執行本部と話しをして見たい」

「駄目です。外国の方とは直接話をしません」

「どことなら話しが出来ます?」

「党広報部を通してなら……」

(こりや通り一遍の答えしか返ってこないだろうなあ)

その時、車内電話が鳴った。

ヒルダが電話を取る。

「はい、はい、……党本部からです」

「党本部は何と?」

「艦隊戦の用意は続行するそうです。同志アガツコフは本日より病気療養の為入院するそうです」

「わざわざ何故そんな事を僕に?」

「高々一人の為に我等の艦隊が進撃を止めたなどあってはならない事。我が国の艦隊は世界一である。どこの国にも負けはせぬ……だそうです」

「そんな事を言う党執行部だから先が見えるんですよ。一応警告はしますからね。『世界に散らばりし黒き卵の所為により、世界より戦船集いて争う。これ世界の行く末占う戦である。しかしこれの勝者なし』ですからね。……では、行きましようか? エファさん」

ヨデイは車を止めさせて、雪原の方へと歩き出した。

「エファ……結局僕は何も出来なかったよ」

「そんな事は無いわ。アガツコフを失脚させたじゃない? 偉業よ!」

「でも、この国はそんなトップでさえ簡単に切り捨てた。あの豪腕と呼ばれたアガツコフでさえ……僕は……」

アルステインは、何かを言い続けようかと思っただが、言葉が出

てこなかった。

仕方ないので帰ることにした。

何か呪文を唱えた。

するとバハムートが召喚され、二人を乗せて合流ポイントまで飛んで行った。

オルバニアンとアルミナはエファガナと言う街に来ていた。

ここに来るのは二度目である。

しかし党中央執行部に来るのは始めてである。

緊張する。

掌が汗でべったりだ。

この国は主権在民と言う言葉から最も遠い国である。

マスコミが機能していないのである。

どのマスコミも党の広報部の代理としての役割が義務付けられた。即ち党の都合の悪い物は一切出版なり放送などしてはならない不文律があった。

そんな国の中枢に行くのである。

緊張して当然である。

二人はお互いを見据えて「うん」と頷くと、党中央執行部のあるビルの入りに行って行った。

受付に来た。

標準語で

「ルー・ウイロンに会いたい取り次いでくれ」
そう言った。

(どうせ分かるまい)

そう思っていたら、
「どちら様でしょう?」

なんと流暢な標準語で応えてきた。

「ルーラン・ノリトレアとアルミナ・ラ・シアと言うものだ」

と、応答すると、

「少々お待ち下さい」
と、帰ってきた。

三十分程そこで待っていたら、

「お待たせしました。どうぞこちらへ」

歳の若い女性と厳いついなりをした男性二人が案内に来た。

そのまま案内をするのかと思いきや

「まずは武器をこちらへ」

そう言っ て来た。

(それ、来たぞ)

そう思った。

オルバニアンが

「ここは敵の中枢部。俺達はそこに入った異物だ。何をされるか分かったもんじゃない」

そう言つと若い女性が

「それはこちらとて同じ。武器を持たれたまま中枢部で暴れられては困りますからね。武器をお渡しなさい」

「断わる。このまま通してもらおうか」

「駄目です。通すわけには参りません」

「通せ！」

「駄目です」

「何を揉めておるのかね」

また、流暢な標準語が聞こえてきた。

不毛な論戦が五分ほど続いた後、オルバニアンの前方から声が掛かった。

声をかけてきたのは小柄な男で、眼光鋭く、メガネを掛けていて、口ひげを生やし、腹が出て、少し太めの中年の男性だった。

「あつ、書記長！ 危険です！ どうぞお下がりを！」

書記長と呼ばれたこの男、二度の首都壊滅、艦隊の全滅劇、その他度重なる障害も力でねじ伏せて辣腕を振るうこの国のトップ、ル

「ルー・ウィロンその人であった。」

「この男がルー・ウィロンか……」

「呼び捨てにしない！ お辞儀」

見ると周りの者が全員お辞儀をしていた。

オルバニアンとアルミナも形ばかりお辞儀をした。

「ま、よかる。付いてくるが良い」

男を四人従えて先へと歩いて行く。

オルバニアンとアルミナは小走りにその後をついて行く。

「あのルー・ウィロンって奴只者じゃないな」

オルバニアンが囁く。

「そうね。なんかこう……オーラのような物を感じるわ」

アルミナが応える。

「武芸者並みのオーラを持つ男か……」

ルー・ウィロンは私室にオルバニアン達を招き入れた。

男達は部屋の入り口に置いてきた。

ボディチェックも何もなし。

（このオツサン、武芸はやったこと本当にないのか？ 自然体でい

て尚、隙が無い）

だが次の瞬間からそれを忘れてしまった。

オルバニアンは少し天然系だ。

例えば次のように心を引くような事があると、

「へー」

オルバニアンは感心する。

それは……。

三人はとある部屋に入る。

この場合は部屋の造りだった様だ。

高く広い天井。

ゆっくり回る天井の扇風機。

目を窓に転ずれば大きい窓に広がる大パノラマの雪景色。

オルバニアンは思わず

「ここで酒なんて呑んだら美味いだろうなあ……………」
そう漏らしてしまった。

「良いサケがある。一緒に呑まんかね？」

「えっ、いいの？」

「オルバニアン！」

「あっ、ああ……………」

「君も何かね？ 女房に尻を敷かれる方かね？ 女房殿も一緒にやらんかね？」

「いただきます」

「結構です！」

「……………」

「……………」

「なんだよ！ 俺は尻に敷かれてなんかいないぞ！」

「毒が入っているかもしれないのよ！？」

「……………」

「……………」

「ここは度胸を試されているんだぞ！？」

「ここに何しに来たのよ！ 話し合いに来たんでしょ！？」

「……………」

「……………」

「サケを飲みながらも話しは出来る！」

「悔しい！ あたしも飲んでやる！」

落ち着いて周りを見てみると、丁度類は皆質素で尚且つ上品な
を選んであった。

まるでここから見える風景に溶け込むように。

酒が運ばれてきた。

二合徳利三本、お猪口三つでやって来た

「オルバニアン……………ルーラン王子と言ったかね？」

ルー・ウィロンが手酌でお猪口にサケを満たした

「ええ」

オルバニアンが矢張り手酌でサケを満たし、

「この出会いに」

「この国に平和があらん事を」

「平和と繁栄がこの国にあらん事を」

ルー、オルバニアン、アルミナの巡で話し終わると三人で一気に
お猪口のサケを飲み干した。

「こう言うときになると、肩書きばかりが先行して、鬱陶しい事は
無いかね『オルバニアン』君」

「ありますね。ルーランの名を呼ばれると身動きが叶わなくなりま
す」

「そうだな。全くだ。今の有り様……世界の有り様を……君はどう
思うオルバニアン君」

「そうだなあ。『全くやってられないぜおっちゃん』って、感じか
な？」

「例えば？」

「税金は高い、受ける福祉は低い、文句を言えば即逮捕、マスコミ
は政府の言いなり」

「私を皮肉ってるのかね？」

「はあ？ オツサン被害妄想かい？ 俺はノリトレアの事を行って
るんだぜ。そして世界中がその傾向にある。それもこれも七賢人の
奴が……」

「そうか。被害妄想か……はっはっはっ」

「な、なんだよオツサン、急に笑って」

「いや、私の国もそうなんでね。……そうしなければ、国を治め切
れなかった。仕方がなかったのだ。これが国民にとってベストなの
だ」

「そーか。おれはホントは王子だと正体を明かしているが、政治に
や疎くてね。でも民を押さえつける事は、あんましやらない方が良
いんじゃないの？」

「私も、そうはしたいのだがね。ところで、私に何か言いたい事が

あつたんじやないのかね？」

「そうだ！ オツサン、戦争を回避出来ねえか？」

「とは？」

「今展開している魔導機兵群を退いちゃ、くんねえか？」

「それは出来ん」

「何故？」

「いま退かば、国の内外の敵を勢いづかせるからだ。それだけは避けねばならん。そうしないと、この国は様々な勢力によって四散して分裂してしまう」

「そんな国なら無くて良いんじゃない？」

「は……？ はは、ははは……！ ワシに面と向かってそこまで言つた者はおらんぞ」

「オ、オルバニアン！ 早く謝るのよ！ オルバニアン！」

「なんで？ このオツサン怒ってねえぞ？」

「なんで分かるのよ！？」

「顔見りや分かんたる。人間のスケールが違うんだ。俺みたいな小僧の言う事ぐらい、分かつてるよ」

「いや？ オルバニアン君、君には色々教えられる事が多い。意外なところであつけらんかんとして奥が深い。まだまだ未熟な所もありそうだが、この年齢でこの度胸、つかえる」

「え？ おれ？ 俺やあ駄目駄目。頭バカだもん。頭すっぱり空だから」

「なおさら使える。どうだ？ 私の元で政治を学んでみんかね？」

「いや、結構。その手のはヨデイだけで十分。おつといけねえ。今はアルステインだったな」

「ヨデイ……あのペテン師かッ！ ダストモンキー等と抜かしおつて！ あの男に煮え湯を飲まされて、どんな思いをしたことか！

あの男だけは許さない」

ルー・ウィロンはお猪口のサケを飲み干した。

「だが、それとこれとは話しが別だ。オルバニアン君、ワシの弟子

「ならんかね？」

「じゃあ、魔導機兵隊を退いてくれれば、俺もオツサンの弟子にでも何でもなるうじゃあないか」

「オルバニアン！」

オルバニアンはアルミナが何か言いかけるのを手で制し、

「さあ、どうする？ 俺は逸材だぞ？」

オルバニアンは自分を売り込んだ。

アルミナは気が気でなくなった。

辺りに沈黙が流れる。

「はあっ！ はっはっはっ！」

沈黙を破るようにルー・ウィロンが笑い出した。

オルバニアンは勝ったのかと思った。

「確かに逸材だ。土壇場の駆け引きなど教えて出来るもんじゃあない。才能だ」

「それじゃあ！」

「確かにお主程の逸材は、そうは見付からんだろうさ。だが、ワシも不死身と呼ばれた漢^{おとこ}じゃ。これより新たに空母三隻と、魔導機兵約三万機強を、引き連れて行かねばならなくなった。この国の魔導機兵のほぼ全部じゃ」

「何故そんな事を……下手すりゃ死ぬぞオツサン」

「元より承知。兵士が戦っている中、指揮をする者が陣頭に立たなくて、何が宰相よ！ そう！ お主の捨て身の攻撃がわしの魂に火をつけた」

「捨て身の攻撃？ そんな事したっけか？ 俺？」

「さらばだ。オルバニアン。帰りの事は心配するな、話しは通しておく」

「駄目なのか？ 回避できないのか？」

「だめだ。もう後戻りは出来ん」

「そんな……」

「では奥方殿も」

「あの……………」

アルミナが控え気味に言葉を発した。

「なにかな？」

「どうか、ご無事で……………」

「うむ。では行ってまいる」

後日、アルミナは何故『ご無事で』などと言ったのか、後で考えてみてもどうしても分からなかった。

ただそこには偉大なカリスマを持った大政治家がいた。

オルバニアンたちは二人乗りの小型のサイコフライヤーを与えられそれで合流ポイントへ向かった。

「なあ、アルミナあ」

「なあに？」

「他の国とか他人は『豪腕』だか『辣腕』だか『冷酷』だみたいに見えるけどよ、俺にとってルー・ウィロンのおっちゃんは、親父みたいに感じたよ。せめて死んで欲しくはないな……………」

「オルバニアン……………そうね。そうね！　オルバニアンの言うとおりだわ。誰も死んで良い人間なんていないもの。アタシ、オルバニアンのそういう優しい所大好きよ」

アルミナは後部座席からオルバニアンの耳元へ唇を持っていつてキスをした。

「うひゃひゃ。くすぐつてえよ」

オルバニアンはくすぐつたそうに首をすくめた。

サーナリアとフェリアはオ口の屋敷の前に立っていた。

黒龍号はもう、屋敷の遙か向うだ。

スーツケースを一つ持ち、挑むようにオ口の屋敷におとないを入っていた。

この屋敷の執事を取りまとめているバークに荷物などを持たせ、
「オ口様はどちら？」

そう訊いた後、一人でどんどん進んでいく。

「お待ち下さい、サーナリア様」

執事のバークとフェリアが追って行った。

「あら、どうなさったの？」

サーナリアは何かあったのかと、後ろの人間を振り返った。

「『どうなさったの』ではありません。サーナリア様お一人だけ身
軽になられて私……」

フェリアが言った。

「そう悪かったわね。じゃあ、早くいらっしやいな。私は先に行っ
てますから」

「まっ！ まって私も直ぐ……」

上着をその場で脱ぎ、二人揃ってスーツ姿になった。

二人とも髪の毛をアップにまとめ、紺のジャケットに紺のスカ―
ト胸元には赤いスカーフを巻いてストッキングを履き、靴は黒の口
ーヒール。

勝手知ったる他人の家、オ口の執務室を目指してすたすたと歩い
て行った。

「王女、姫、お、お待ち下さい！」

二人で、ばん！ とドアを開いた！！

「オ口は？」

「何だね君達は？」

オ口は言っていた。

「サーナリア・ノリトレア……」

「フェリア・ファソーイ！」

「二人揃って、泣く子も黙る、ノリトレアの主従コンビとは、私達
のことよ！」

「そんな事は分かってる！ ばかばかしい！」

「ばかばかしい……ですって？」

「私は忙しい。何が望みだ……いや、いい。訊かずとも分かる」

「そう判断する前に私達の話聞くがよかるう？」

と、サーナリア。

「大体分かる」

と、オロ。

「何をどう分かるというのですか？」

サーナリアが叫んだ。

「『派兵を止めて、戦争を回避せよ』だな？」

「そうですね。そんなところですよ」

「だめだ。そんな事は出来ん」

「なぜ？」

「少なくともアヘイビア側が兵を退かぬ限り我が方の兵を退く事は考えられぬな」

「アヘイビアはアシユマ様が何とかしてくださいます」

フェリアが言った。

「話しにならない。アシユマ殿と誰が行ってるって？」

「アーチエル様ですわ」

「益々以って話にならない。万年武張った男と平和理想主義者では、門前払いもいい所だ」

「何ですって！！」

フェリアが怒った。

「アシユマ様達なら何とかしてくださいます！」

「ならばここで何とかしなくともいいだろうに……」

オロは一笑に付した

「いやいやいや、こちらはこちらでちゃんとせねば」

フェリアは慌てて言った。

「そうでありませぬ、こちらでも出兵を止めねばなりません」

サーナリアも言った。

「馬鹿馬鹿しい！ 私は忙しいのだ！ 出て行きたまえ！」

ドアから屈強そうな男達が入ってきてサーナリアたちを担いでい

ってしまった。

「お離しッ！ 離しなさい！ 離しなさいってば！！ オロ殿！
この仕打ちはあんまりですぞ！？」

オロはもう取り合わず自分の仕事に没頭していた。

サーナリアとフェリアはとある一室に押し込められた。

そこはサーナリアの部屋であった。

二人がいつも滞在中に使用している部屋だ。

鍵は開いている。

だが見張りがいる。

つまり二人は軟禁状態になってしまったのだ。

「これではだめです。サーナリア様、完全に見張られています」

「そうですか仕方ないですね」

それから、サーナリアは部屋を見て回った。

窓、トイレ、床、ベッド下……脱出口は見付からなかった。

「しかたないわね。最後の手段」

サーナリアは携帯端末を取り出してダイヤルをプッシュした。

数回のコール音がして相手が出た。

その相手とはオロだった。

「私だ。オロだ」

「オロ大統領。私です。サーナリアです。先程はいきなり押しかけ
済みませんでした。非礼は詫びます。しかし分かっていただきたい
のです。我々も、この戦争は回避せねばなりません。兵を退く事は
出来ませぬか？」

「幾ら口説いても無駄だぞ？ 私は、私の国と国民を護る義務があ
る。開戦までもう時間がないだろう。わざわざ電話までさせて申し
訳ないが、これで切らせてもらう。また、ここに滞在したければ、
それでも構わん。ただし私の部屋にくるのは控えてくれ。私も忙し
い」

「やはりどうあっても兵は退けませぬか？」

「くぐい」

「失礼。では以前通りここを使わせてもらいましょう。フェリアにも同様の自由を与えてやって下さい。あとは我々が黒龍号に帰る事も」

「それは保障しよう」

「有難うございます。では」

そう言ってサーナリアは携帯端末を切った。

「後は皆に期待ね」

「そうですね」

フェリアが追隨した。

黒龍号がアヘイビアの大統領府に着陸できたのは、偏に黒龍号の優秀なステルス性能があったからである。

そして操縦者の腕が良かったからである。

その操縦者は機内に残り、短い仮眠に入る。

寄る年波には勝てないという事なのか、それともそういう術があるのかアベニはすぐさま寝に入った。

往路はアベニ爺、復路はコクレト軍曹が担当した。

コクレト軍曹はベッドルームから起きてきてコクピットで待機をした。

「じゃあ、軍曹。行ってくる」

アシユマが言った

「じゃあ、後を頼みます」

アーチエルも挨拶してブリッジを出ようとしていた。

「キュポアもう少しの辛抱ですからね。待っててくださいね」

今にも眠そうなキュポアは、

「だ、大丈夫じゃあ。帰りもどんと来いじゃあ、姉様あ。ふわあ…」

…

「では行ってきますね」

アーチエルはそう言い、黒龍号の後部メインハッチから出て大統領

領府の裏庭に降り立った。

そこは既に武装された警官隊が出張つて黒龍号を取り巻いていた。そして抜刀警官隊が前へずいっと出張つてきた。

「止める！ 俺は争う為にここに来たんじゃない！ 話し合うためにここに来た！ サバンナ大統領は居るか？ 緊急事態だ！！」

「大統領は会わないだろう。我にとつても、いけ好かない奴だがな」
そこへ現れたのはアー又だった。

「どけ！ アー又！ おれは大統領に会わねばならん！ 行く手を阻むとあれば、この鬼虎にてまかり通るのみ！」

「我を舐めるか、アシユマ・アトーよ！ 我もこの天龍鬼にかけて、お前を通すわけには行かん」

「まって！ アシユマさまこのままでは、大統領に逃げられてしまいます！ 無駄な争い等お止めになつて！」

アーチエルが叫ぶ。

「む……」

「大統領ならまだ逃げてはおらんぞ？」

「その言葉は本当なのか？」

「でなければ我はここにはおらん。もしそうだとしたら、我もまた騙された事になる」

「……わかった。ここに大統領がいるというお前の言葉を信じて、まかり通るとしよう」

「ならば我は最大限の力を以つてお前を食い止めよう」

「来るか！」

「参る！」

お互い手の内を知り尽くしている二人だ。

何をしてくるかは分かっていた。

間合いを探りながら二人してお互いを中心に時計回りに回っていた。

見ているほうも真剣だ。

皆が固唾を呑んで勝負の行方を見極めようとしていた。

ちやりっ！

誰かの剣が発した微かな音だった。

勝負を決する為のきっかけには十分だった。

アーヌもアシユマも居合いを放った。

が、お互いそれは見せ太刀でそれぞれ空を切った。

次に二人は互いに大上段に振りかぶりお互いに切り伏せようと刀を振り下ろしてきた。

アーヌは見事アシユマを叩き斬った。

アーヌは勝ちを得たはずだった。

が、アーヌが斬った物はアシユマの虚像であった。

アシユマはこの土壇場で秘剣空蝉を使って見せたのだ。

次の瞬間アシユマは虚空から現れ後の先でアーヌを斬った。

いや、こちらも斬ったはずだった。

斬れなかったのだ。

アーヌの新調した鎧はそれほど硬かったのだ。

だが感触は掴んだ。

次は斬れる。

そう思った次の瞬間、アシユマはアーヌの横に寝かせた天龍鬼の刃を胸にまともな喰らってしまった。

後ろへと振り返りもせず放った突きだ。

天龍鬼がアシユマの胸に吸い込まれる。

「がっ！ かはっ！」

見事アーヌの突きがアシユマの心臓を貫いた。

「先程の空蝉は見事であったぞ。元来なれば勝ちはお主のものよ」

「アシユマさま！」

アーチエルがすぐさま走りよって、アシユマをかばった。

「娘御よ、アシユマの止めを刺す。そこをどかれよ。さもなければ

そなたの後にアシユマに止めを刺すがいかがか？」

アーヌが言った。

それに対し、アーチエルは落ち着いたもので、

「暫時お待ちあれ」

「そう来たものだ。」

これにアー又は虚を突かれ気を抜かれ、一步も下がる事も進むことも出来なくなっていた。

アーチエルはすぐさまアシュマの蘇生処理を施した。

「う……………」

「アシュマが立ち上がる。」

「アシュマさまよう御座いました」

「アーチエルが半分泣いた様になる。」

そこへ黒尽くめの男がアー又の側に立ち、

「作戦終了ですアー又様。大統領ご一行は無事に脱出なされました」
そう言った。

「何？ あの大統領は我までも囿に使ったというか？」

「……………は！ 申し訳ない限りで……………」

「相分かった。お前は自分の部署に戻れ」

「は——」

「アシュマ——」

「——」

「付き合わせてすまなかった」

「何のことだ？」

「大統領はここにはいない。行き先は不明だ」

「そうか」

「これで我のお主への貸し借りは無しだな」

「アー又は天龍鬼を鞘に戻しつつそう言った。」

「いや、俺が借り一つだな。止めを刺さなかった。お前は」

「アシュマも鬼虎を鞘に収めつつ言った。」

「いや、それを言うならその娘御のお陰ぞ。その娘御、中々我に隙を見せなんだわ。じゃから貸し借り無しだ」

「そうか。それならそれでもよいが」

「では、ここにいる意味もありませんね」

アーチエルが言う。

「そうだな。ならみんなを回収して回るか」

「はい」

「アー又殿！ 奴ら逃げてしまいますぞ！ 何とかしなくて宜しいのか」

警官隊の隊長と思しき人間が言った。

「今日の戦いは終わった。後は運命の赴くままに戦う事になるだろう」

「アー又殿それでは困ります。私は大統領から奴らを倒すように厳命されております故」

「ならば、おまえがすれば良いだけの事。我には関係なし。好きにすれば良からう」

アー又はそこで踵を返した。

「アツ、アー又殿！ お待ちあれ、アー又殿！」

しかし呼べど叫べどアー又は戻ってこない。

アシユマ達も機上の人になった。

アシユマ達がアルステインやオルバニアンを回収に向かっている頃、戦闘が始まった。

それは丁度アー又がアハイピア本土から飛び立ってヌルに到着してから始まった。

戦闘の口火はヌルからであった。

それは全くの唐突さと言えた。

光線が一番近くにいた敵艦を沈めた。

ちなみにその艦艇はノーツ連邦の艦艇だったが。

それはどの陣営にも真似できないほどの超長距離砲撃で、まさに針の穴に糸を通すような正確さで攻撃してきた。

そしてわざわざ一艦一艦丁寧に沈めていった。かくして艦隊戦が始まった。

全艦艇、ヌルの長距離攻撃が脅威と見えて近距離まで詰めて砲撃を開始した。

今度はヌル……アー又はオロ・エバス国、リスパダハル共和国連合軍の艦艇を攻撃し始めた。

エシーデューティー、パラケーシ、が即座に沈められた。

オロ・エバス国、リスパダハル共和国連合軍はなす術もなく次々と沈められていった。

そしてヌルは徐に攻撃を止めた。

暫く沈黙が続いた。

なぜ、あの巨大な円盤状の物体は攻撃を止めたのか？

そしてヌルはここより遙か上空に陣をとり全体を見渡した。

アー又は最初に平等に戦闘が開始されるように戦力を整えたつもりだった。

そして、艦隊戦は最初控えめながら再開された。

次第に砲撃が激しくなり、魔導機兵も発進して行った。

今や眼前皆敵と言う状態で皆消耗の度合いが激しく四陣営共に次々と艦艇やら魔導機兵が海の上へ落ちて行った。

全ての艦艇が前へ前へと進むしかなかった。反転して逃げれば即座に狙い撃ちになるからであった。

早くもクーロン人民共和国の空母三隻が落とされた。

クーロンの魔導機兵群はもう直ぐ届く援軍を知らない。

それは空母三、魔導機兵約三万の大軍であった。

それを稀代の政治家ルー・ウィロンが全軍の指揮をとっていた。

それを知らないクーロンの魔導機兵軍は各艦艇に特攻を仕掛けていた。

三軍合わせても百五十〜二百隻弱。

こちらの魔導機兵は二万弱にまで数を下げていたが、敵艦の特攻に成功すれば後は魔導機兵同士の戦いになる。

勝機は十分あった。

真つ先に特攻の標的になったのが敵の空母だった。

空母の方でも敵の意図が分かったからなるべく多くの魔導機兵を放出して沈んだ。

戦は混戦模様となってきた。

敵味方の魔導機兵が飛び交い、戦艦では小回りが利かず直ぐに落とされた。

リスパダハルのヘルガイルテは巨大な空母でもある。

虎の子四万の魔導機兵を放出して轟沈した。

特攻は思ったより効果が高く、エンジン……魔導石を臨界にまでエネルギーを高めて突っ込むとそんじょそこの爆発では済まなかった。

一機で一艦落すのはたやすい事だった。

そこへ駆けつけるルー・ウィロンの兵三万！

意気上がるクーロン軍。

惜しまず機兵を全て放出。

これで兵力はクーロン軍魔導機兵五万弱に対して、他の勢力七万弱の魔導機兵。

が、士気の上で、連携の上で、用兵の上で、クーロンの兵が圧倒的に他の勢力に勝っていた。

だがオロ・エバス国のアロアオゲルは皆が久しく忘れて使っていないかった切り札を使うことにした。

魔導砲だ。

射線軸上の味方を全てどかせた。

ぽっかり開いた空洞に遥か彼方からクーロンの魔導機兵が攻め込んできてる。

「！ い、いかんっ！」

ルー・ウィロンは叫んだがもう遅い

砲口光ったかと思うとクーロンの魔導機兵群一万五千は魔導砲と共に消え去った。

「まだ大丈夫だ！ まだいける！」

ルー・ウィロンは言った。

「各個撃破だ！　まずはノーツ連邦の魔導機兵から行くぞ！」

一つの大きなうねりと変化したクーロンの魔導機兵は、さながら竜が天をのたうつ様に次々と変化しては攻撃を繰り返していた。

ひいては一本の曲線、寄せては天に開いた手の如く敵を包んだ。変幻自在。

まさにその言葉がぴつたりと合っている用兵だった。

ノーツ連邦軍の機体群は、見る見るうちに落とされ、旗艦であるウフタエフタも瞬く間に落とされていた。

ただしクーロン軍もそれなりの損害は負ったが。

「次はドラスティス共和国軍だ！　必ずしも皆が言うようなノルブル王国と一枚板と言うわけではないぞ。各個撃破で行けば崩せる」

とまで、ルー・ウィロンは決め込んでしまった。

実際、兵はこれで士気が上がった。

彼我勢力は一対一、五。

だがノルブル王国が入ると、彼我勢力は二体一、五となる。

事実ノルブル王国軍の魔導機兵がドラスティス共和国軍の魔導機兵の援護と言う形で戦闘に加わってきた。

「案ずるな！　所詮は付け焼刃。俄仕込みの連携だ。こんなものは怖れるに足らん！」

またもルー・ウィロンは断じてしまった。

人のカリスマと言うものは恐ろしいもので、あれこれはこうだと断じられると聴いているほうはそうだと思ってしまう。

ルー・ウィロンとはそうした漢だった。

で、俄仕込みの連携はどうなったかと言うと、何とオロ・エバス、リスパダハル共和国連合軍とクーロン軍が連携して、ドラスティス共和国軍とノルブル王国軍を前後から挟み撃ちにしてきた。

ドラスティス共和国軍とノルブル王国軍は見る見るうちに数を減らして行った。

そしてある程度まで数が減るとオロ・エバス国、リスパダハル共和国連合軍は兵を退かせた。

「魔導砲反応……？ いや良く分かりません！ オロ軍アロアオゲルより、未知のエネルギー粒子を検出！」
「なんだと？ よりによって……全魔導機兵に離脱の旨通達せよ！」
「間に合いません！」
「伝えよ！」

一方アロアオゲル内では……

「多気音粒子 収束中」

「薬室内圧力上昇……」

「エネルギー充填百二十パーセント！」

「照準、前方敵魔導機兵群及び艦艇二隻！」

「艦長、発射トリガーです」

「うむ。では、発射」

轟音と共にアロアオゲルは魔導砲 を発射した。

多気音粒子キャンセラーが効かない新しい世代の魔導砲だ。

魔導砲 は拡散してクーロンの魔導機兵など敵を全滅させた。

もちろんドラスティス共和国の旗艦フルーレやノルブル王国の旗艦ブルドッグなどは結局何もさせてもらえず沈められた。

旗艦アロアオゲルは残った残敵に魔導機兵を二つに分けて対応させた。

残敵とはこの戦いの間ずっと脇にいて鳴りを潜めていたアヘイピアの超弩級戦艦アートノーンと、クーロン人民共和国の空母三隻である。

「三隻ともエンジンをエナジアで臨界にし全員退避」

「そつ、それは書記長！」

「騒ぐでない！ あくまで最後の手段としてだ」

がそれはロクな武装も持たない空母としては、攻撃手段はこれしかないのである。

次々と逃げていくクーロン軍乗組員たちのサイコ・フライヤー。

後に残るはルー・ウィロンのみ。

アロアオゲルはアートノーンに対して攻撃を集中した。

魔導機兵がアートノーンに向かっていく。

「敵超弩級戦艦から多気音粒子 反応！ 魔導砲です！！」

「なに？ 回避！」

「間に合いません！」

「こちらも敵艦に対し緊急で魔導砲を発射だ！ 撃てる分だけでいい！……まさか向うも魔導砲を開発していたとは」

互いの艦は魔導砲を撃ち合い、アートノーンの魔導砲は拡散してアロアオゲルごと敵魔導機兵を粉碎した。

そしてアートノーンもアロアオゲルの放った魔導砲の直撃を受けて沈んだ。

それは、もう片方に分けたオロ・エバス軍の魔導機兵の部隊がクローンの空母に取り付きつつあった時だった。

「おぬしらも道連れだ！」

ルー・ウィロンはそういうと自爆スイッチを押した。

それと同時に自分は強固な脱出カプセルに身を預けた。

空母三隻は周りに取り付きつつあった魔導機兵もろとも大爆発を起こした。

魔導機兵は次々誘爆を引き起こし跡形もなくなった。

戦場だった場所には数十機の魔導機兵を残して戦闘を終了した。

どの勢力もほぼ壊滅状態であった。

「こうなったか。まさにこれもまた運命」

アー又は呟いた。

第六節 革命その一

全員を回収した黒龍号はこれからのことについて話し合った。もう、オロに義理立てする必要もなくなった。ただしもうオロからの援助はないと見たほうがいい。

そんな時にクーロン人民共和国に革命の狼煙のろしが上がった。

それは、この艦隊戦での結果を受けてである。

まさに勝利者無しの状態でこの会戦は終わった。

この状況の中、オロ・エバス本社（本国？）の援助は暫く滞るだろう。

その代わりクーロンは指導者も全兵力を失ってまさに裸同然だった。

ゲリラの指導者リン・シャオリンは迷った。

が、決断した。

立つのは今を置いて他に無い。

そして手に銃を取った。

それが進軍の合図だった。

全国に散らばった同志が、今まで虐げられてきた人と一緒になって各地の政府拠点を落として行った。

まさにそれは手に銃持つ革命ではなくて、人の手によって戦う革命だった。

それだけに虐げられてきた人達の怒りが爆発したといえるだろう。今までクーロンの民全十二億の内一割にも満たない官僚が敷いて来たこのクーロンの独裁政治と言うものが今まさに倒れようとしていた。

一方、ノリトレアも政情が不安定となっていた。各地でゲリラ活動が頻発し、それが徐々に規模を大きくしてきたのである。

それは偏にアルステイン、ルーラン、サーナリアが表舞台上に上りノリトレアの民の心に火をつけたからである。

今や、ノリトレアは一触即発の様相を呈していた。

「アルステイン、俺達も革命とやらを起こそうじゃないか。ヨデイもアルステインとして身分を明かした。俺もルーランとして身分を明かした。民も俺達がノリトレアを開放してくれると信じているだろう。なあ、やろうぜ！」

オルバニアンが熱く語っていた。

黒龍号は人里はなれたノリトレアの山の麓にいた。

と、言ってもノリトレアの都『ロイヤルパレス王宮市』から三十キロメートルと離れていない。

そして黒龍号のブリッジ。

アルステインを中心として、車座となつて評定をしていた。

「オルバニアン、やるのはいいが、相手はあのガルマインだ。戦力も温存してある。これは民との連携が必要となるぞ？ いかがする？」

アルステインが冷静な所を見せる。

「そこのところは如何か？ フェリア姫」

続いてアルステインが発言する。

「実は大反攻作戦を父が計画中です」

「ファソーイ公だな」

「はい……そのことで殿下……」

そこでアルステインは苦笑いをした。

「殿下？ 如何なさいました？」

「その殿下と言うのはこそばゆいな。前に戻ってヨデイに戻るとい

うのはだめかな？」

「いけません義兄上。賽は既に投げられたのです。義兄上はアルステインでなくてはなりません」

サーナリアに注意された。

「そうか……で、フェリア姫、何だったかな？」

「私が父と会えば細かい日時などが分かりましょう」

「良いのですか？ 危険ですぞ？」

「どうやって会うんだよ？ ファソーイ公は今、蟄居閉門中と聞いたぜ？」

オルバニアンがフェリアに尋ねた。

「抜け穴があるのです」

「ふ〜ん」

オルバニアンは関心した。

「それでも危ないな」

アシユマがぼそりと言った。

「とは？」

アルステインが受けた。

「以前王宮市に、単独で侵入した時に、昼日中から近衛の兵だろうか？ 警備中の兵にやたら遭遇したよ」

「では、夜では？」

フェリアが言った。

「そうだな。それが賢明かもしれない」

「戒厳令かそれに準じたものが敷かれているんじゃないかしら？」

と、アルミナ。

「じゃあ、お姫さん一人を行かせるわけにはいかないな」

オルバニアンも言う。

「じゃあ、俺が護衛に回ろう」

アシユマが言った。

「~~~~」

なぜかフェリアは上機嫌。

「……………」

そして不機嫌なのが、サーナリアとアーチエルだった。

サーナリアはフェリアの二の腕をつねった。

「いたっ！ 何をしますな？ サーナリア様」

「何もしておらんぞ？」

サーナリアは鬱憤を晴らした。

が、アーチエルは鬱憤の晴らしようが無かった。

「で、いつ行くんだ？」

アシュマはフェリアに訊いた。

「今日は流石に疲れました」

フェリアは言った。

「じゃあ、明日の昼では？ 夜半に丁度着くと思う」

「そうだね。それが順当だね。アシュマ君」

アルステインが言う。

「それなら僕の足でも十分つくしね」

「は？ 何を言っている？ アルステイン。危険だと言った筈だ」

「でも行かなきゃならないだろ？ 今後の事も含めての話し合いと

もなれば」

「なら俺も行く」

オルバニアンも言った。

「何言っているんだお前まで」

「アシュマ、戦の話だ。俺も参加したい。それに『アルステイン』

『ルーラン』兄弟が揃ってガルマインを討つんだ。民にとっては、

これほど分かりやすいお題目は、ないじゃねえか。俺も参加させて

もらっせ」

「私は控えさせてもらいます」

サーナリアが言った。

「護衛する身としてはありがたいが、一応話を聞かせてもらおう。

オルバニアンの実妹だしな」

アシュマが訊いた。

「私は知らずとは言え、一度はガルマインの傀儡くわいとなった身。その私が出ては革命に水を差しかねません」

「どう判断する？ アルステイン？」

「……ここは、サーナリアの意思を尊重しましょう」

アルステインは即断した

オルバニアンが、

「そう、即決してはサーナリアが可哀相じゃないか？」

そう言った。

「即決も何もそのほうがいい。政も戦もそんな甘い物ではない」

「でも……」

「一番リスクの少ない事を選んで、一番効果的な事を選ぶ。そういうものだ」

「しかし……」

「お前の事だ、納得がいかない事だろう。でも分かってくれ。サーナリアにとっても一番リスクが少ない」

「兄上、サーナリアもそれが良いと存じます。サーナリアは兄上のお気持ちだけで、充分に御座います」

サーナリアがオルバニアンに向かって言う。

「サーナリア……」

「じゃあ、行くのはフェリアとアルステインとオルバニアンと俺の四人だな？」

アシュマはそう言った。

その夜の会議はそれで終わった。

流石に今日は疲れる一日だった。

まさに命を張ったの交渉の一日だった。

命を失いそうにもなった。

皆、疲れていた。

アシュマも疲れていた。

アーヌに心臓を突かれていた。
それが、アシュマの疲労の原因だった。
あの硬い鎧さえなければアシュマはあの時点で勝っていた。
いや、勝ち負けは関係ない。
自分の腕が未熟だったのだ。
少し落ち込んでいると、アーチエルが自分の枕を持ってやってきた。

「添い寝、宜しいですか？」

アーチエルは優しい笑みをして尋ねた。

アシュマはこの笑みに大分救われた感じがした。

「いいよ」

アシュマも笑みを返した。

「じゃあ、今日はもう寝ようか」

「寝ながら少しお話できますか？」

「出来るよ」

二人はその晩、色々と話しながら寝た。

次の日の昼、アシュマ達が王宮市に向かって発とうとしていた。

「ではお気をつけて言っておきましょう」

アーチエルはそう言うと、アシュマの格好を改めて見た。

アシュマが黒の革マントを着ている。

首のところにボタンで止めるタイプの奴だ。

似合い過ぎて怖い。

「アシュマさま、それ似合い過ぎ。却って目立たない？」

「黄昏刻を過ぎると重宝する」

「そうですね」

そういうアルスティーンとオルバニアンとフェリアの三人も目立たないようにフード付きのマントを着込んでいた。

「じゃあ、行って来る」

「アシユマさま」

「ん？」

「お気をつけて」

そう言ってアシユマとキスをした。

「じゃあ、行って来る」

そう言ってアシユマは行きかけた。

「アシユマ、アシユマ！ フェリア姫！」

慌ててエファールがアシユマを止める。

「ああ、そうだ。彼女がいないと話しにならないんだっただ」

「酷すぎます。アシユマ様」

フェリアが、文句を言う。

「では行って来る」

アシユマが言った。

「アシユマさま」

「義兄様」

「アシユマさま」

アーチエルとキュポアとアンが同時にアシユマに声を掛けたものだから、三人は目を白黒させて互いを見ていた。

アシユマがその状況を救うように、

「三人とも黒龍号を頼んだぞ」

と、言った。

アシユマ達は徒歩で王宮市に向けて歩き出した。

アシユマのウィングならもの十分でいける距離だ。

それをしなかったのは、万が一の事を考えてだった。

空が夕闇に包まれる前の頃一行は王宮市に着いた。

皆が家路を急いでいた。

暗い表情をさせて。

王宮市は陰鬱に沈み込んでいる。

皆を家路へ促すベルの音がする。

「なんだ？ この陰鬱さは！？」

「これがガルマインの治世下の王宮市に御座います」

フェリアがそう言った。

「これ程までとは……」

アルステインは愕然としていた。

「それはいいけど早く隠れようぜ」

路地の更に小路に身を隠した。

「あそこまで人々の顔が暗いとは」

アルステインはかなりショックを受けていた。

「さて、こちらの方へ来てください。公園の方に抜け道があります」

「こちらです」

フェリアの案内で公園の林伝いに歩いて、滝を模したの噴水の裏手に来た。

林と言ってもかなり鬱蒼としておりぱっと見では何をしているかは分からないようになっていた。

そこからフェリアは何かを探していた。

「あった」

フェリアは目的の物を見つけたようだ。

カチリと音がして、コンクリート製の壁がいったん置くに引き込まれ、そして横にスライドした。

「こちらです」

フェリアが奥にある階段へと誘った。

階段を降りると通路があった。

中は複雑に分岐していて侵入者を拒んでいた。

フェリアは通路を把握している様で、

「皆様、離れないで下さいね。いったんはぐれると、二度と地上に出られなくなりますので」

そう言った。

暫く進むと迷宮の出口に着いたようで、衛兵が二人扉の前に立っていた。

「何奴！ 姓名と所属を言え！」

「フェリア・ファソーイ。この館の主の娘です」

「こ、これは失礼しました。して其処許そこもとは？」

「余はアルステイン・ノリトレア、そしてこれに控えるは我が義弟うとルーラン・ノリトレア。そしてこれなるは、アシユマ・アトー。我等の護衛として来てもらった。アラタ・ファソーイ公に目通りしたい。問題なくば通されよ」

「アツ、アツ、アツ……アルス……殿。とつ、とつ、とつ通られよ……い、いや、こちらへ」

「大儀」

門番二人の内一人が戦評定の場に転がり込み、残る一人がその評定の場へと案内した。

「何？ アルステイン様が……」

フェリア姫の帰還よりもアルステインらの来訪の方に場は色めき立った。

特に父親のアラタ公は

「これで勝てるかもしれない」

と、喜んだと言う。

改めてアルステインらが評定の場へ案内された。

「こちらに御座います、アルステイン様」

「うむ、大儀」

言って自分は長テーブルの上座に座り、その左右にアシユマとオルバニアンを配置させた。

「先ずは皆に詫びたい。この国が、いや民の心がここまで荒廃しているうとは……。全ては余の不徳の致す所。許されたい」

「勿体無いお言葉。却って胸が痛みます。どうぞ面をお上げ下さい」

アラタ・ファソーイ公が言った。

「うむ。濟まない。して、ファソーイ公。現状はどうなっておる？」

「は！ いまノリトレアは、ガルマインの圧制に苦しめられております。民に重税を布き、半ば奴隷のように民を『遺跡』なるところへ連れて行き死ぬまで働かされております。民は経済面と肉体・精神面とで追い詰められております」

「先程、民の顔を見る機会があった。皆、暗く険しく悲しげな表情であった。これ、皆、ガルマインの政が悪しきが為。倒すべくはガルマイン！ ところで、我が陣営はどうなっている？」

「はっ！ 先ずは勇猛果敢で知られるミフシーヨ公の兵二千と魔導機兵五百……………」

こうしてアルステインは、ファソーイ公から現状の陣立てを聞いた。

そして……………。

「全国から集めに集めて魔導機兵八千に、剣士が三万二千人、兵士が約六万。少し厳しいですね。現状ここにある兵力は魔導機兵二千に剣士が約八千」

「はあ……………」

そうとしか言葉を返せないファソーイ公であった。

「くわえて敵は分かっているだけでも魔導機兵三万二千か。厳しいな。義兄上」

オルバニアンが言った。

「ルーラン。仕方ないですね。奥の手その一を使いましょう」

「お、奥の手で御座いますか？ もっ？」

ファソーイ公が驚いた。

「ええ。この奥の手は、今、使わないと意味が無いんですよ」

そう言ってアルステインは携帯端末を手にした。

ダイヤルをプッシュしてコールを入れる。

『はい、ドクワント・ネルゼイ!』

「やあ、警部。僕が誰だか分かりますか」

『僕って……ヨデイ! ヨデイ・ヨフル! いや! ダスト・モンキー! どこにいる? 今直ぐ捕まえに行つてやる! そこで待つてろ!』

「あんまり長電話できないんですよ。いいですか一度しか言いませんからね? 正しく行動してくださいね? 怪盗ダスト・モンキーはガルマインの艦艇に乗り、ガルマインの圧政に苦しむ民を救おうとする、ノリトレアのアルスティーン王子の命をいただきます」

『なんだとうつ!? 人殺しだけはしない義賊じゃなかったのか!』

! お前は!』

「警部。今の僕の名は、アルスティーン。反乱軍の拳兵はもう直ぐですよ。その時、僕の言ったことをよくよく吟味して、一見間違っている様な事も、正しい判断力を以つて行動してください。それでは切ります。もう出ませんからね」

『おい、チョツと待て! そりゃ一体どういう意……』

ここでアルスティーンは携帯端末の電源を落としてしまった。

「殿下……今のは?」

ファソイー公が戸惑っていた。

「ドクワント・ネルゼイ。国際警察機構の警部です」

ファソイー公はアルスティーンの意外な人脈に驚いていた。

「義兄上、今の謎掛け、難しいのでは? 下手したら挟み撃ちつて事も……」

「大丈夫ですよ、ネルゼイ警部なら分かってくれますよ……。これで、上手くすれば戦力となるろう。如何か?」

「は、真に持つて奇抜な作戦。これならガルマインも気が付かないでしょう」

ファソイー公が言った。

「で、いつを以つて蜂起と致しますか?」

「早い方がいい。明日のこの時間を以って蜂起といたそう」

「殿下それは早すぎます。準備の整わない部隊も出てきましょう。もう少し時間に余裕を持たせた方が良いのでは？」

「時間的余裕など無い！　すでに余がここに着いた時点で戦は始まっている！　急ぎ同志に連絡を取り蜂起の準備を始めよ！」

「ははっ！」

「でも義兄上、これだけでも戦力不足は否めません。如何致しましょうか？」

「奥の手その二を使いましょう」

アルステイーンはまた携帯端末を取り出してダイアルを押し始めた。

【はい、リンです！　どなたですか今忙しいのです！　話なら後に……】

「クローン語で喋られてもわかりません。どうもこんばんわ。ヨデイです」

『あーっ、ヨデイさんネ？　なにネ？　今忙しいヨ！』

「忙しいのはこちらと同じ。それに今の私はアルステイーン。一つ相談があるのだが、どうだろう、魔導機兵の部隊を貸してはくれなйдらうか？」

『何バカなこと言ってるネ？　魔導機兵を貸せだなんて非常識にも程があるネ！　今こちらは革命中ネ！』

「革命中でも何でもいいですから、貸してください。そちらの政府軍には先の決戦で戦力らしい戦力は残ってないはずです。違いますか？　こちらに直接来なくてもいいです。領空を侵犯して敵を引き付けてくれるだけで十分ですから。ノリトレアの魔導機兵が来たら逃げてくれて構いませんから」

『本当にそれだけネ？』

「それだけです」

『分かったネ。で、それはいつネ？』

「明日の今頃ですね」

『わかったネ……そこにアシュマいるか？』

「ああ、いますよ。代わりましようか？」

『宜しくね』

「アシュマ殿、リン女史から」

携帯端末をアルステインから受け取る。

「リン？ ……リン・シャオリンか？」

『そうネ。アシュマ！ 元気にしてたか？』

「何の用だ？」

『つれないネ、アシュマ。アシュマ私のこと必要力？』

「戦力としては必要だ」

『相変わらず女心、解ってないネ。でもまあ合格点あげるヨ。ヨデ
イに代わってネ』

「はい、『ヨデイ』」

「だから、アルステインなのに……」

アシュマからアルステインに携帯端末が手渡された。

「はい、アルステイン」

『アルステインて？ ……あー、ヨデイネ。気が変わったヨ。魔』

導機兵一万六千機引き連れて加勢に行くネ』

「なんと！ お礼の言葉もない」

『では、明日のこの時間にそちらにつくネ。場所は？』

「場所はノリトレアの王宮市に来てください。我々の機体の旗印は
……」

この間アルステインとリンとで細かい打ち合わせがなされた。

『……分かったネ。じゃあ、それで行くネ』

「では宜しく」

こうしてリンとの会話も終わった。

「アルステイン殿下、今の方はどういった方で……？」

ファソーイ公が訊く。

「今の者はオロ・オバスが企業だった頃のクーロン支局の支局長を
努めていた人、かな？ そういった人物だ。今はクーロンで革命の

指導者になつてゐる筈だ」

「そのような方が我が国の革命に来てくださるので？」

「そういうことだ」

「ところでサーナリア様は今回いらつしやらないので？」

「本人の希望だ」

「そうですか。惜しいことをしました」

「何故？」

「サーナリア様は、ガルマインに利用された、悲劇のヒロインとして民に慕われております。もし、サーナリア様がいれば、アルステイン様、ルーラン様。サーナリア様と、旗頭が三つになり、民衆もさぞや勇気付けられる事でしょう」

「なるほど、そうか。……アシユマ君チョツと来てくれ」

「何だ？ アルステイン」

「これ！ いかにも強いと聞き及んでいても、ただか一剣士の分際でアルステイン殿下を呼び捨てにするとは何たることか！」

「ファソーイ公！ 良いのだ。彼の場合は」

「しかしそれでは下のものに示しがつきませぬ。殿下を軽んずる輩も出てまいります」

「つかぬ示しとは一体何だ？ 軽んずる者は、打ち捨てて置けばよい。彼は武道の王者である。その彼に頭を下げさせるとは如何なる事か？ 余は友にそのようなこと、出来ぬ！ させられぬ！」

アルステインはそのことを力説した。

「殿下そのお話はこれまでになされた方が、宜しゅう御座いますぞ

？」

「何故なにゆえじゃ？」

「意外なところから反乱の芽が育つやもしれませぬぞ？」

「そうなたらそうなた時の事よ」

後の話したが、意外にもこの話は貴族たちに受け入れられ、アルステインは情と友情に篤い男として受け入れられた。

しかし、

「御用はなに御座いましょうや？ 殿下」

アシユマは唐突にそういった。

「アシユマ君……宜しい。アシユマ・アトー。そちに任務を与える。我が黒龍号に赴き、わが義妹サーナリア・ノリトレアをここに連れてまいれ」

「御意」

「殿下、話しに聞く黒龍号はどのくらいの大きさですか？」

「三〇四十メートルと言ったところか……そうだな？ ルーラン……ルーラン！」

（そうだ。ここでは俺はルーランなんだった）

オルバニアンは自分の迂闊さに心の中で舌打ちした。

「何でありましょう義兄上」

「黒龍号の大きさは三〇四十メートルと言った所だな？ ルーラン」

「御意」

「それならば格好の隠し場所が御座います」

「それは何かな？ ファソーイ公」

「この抜け穴がある公園の端に崖がありまして、そこに大きめの『裂け目』があるので御座います。しかもその裂け目にも隠し通路が続いているのであります」

「では、直接呼ぶことに致すか」

携帯端末を使おうとするアルステインをアシユマが、

「殿下、盗聴の恐れがあります。やはり私が動くのが得策かと。崖の場所さえ教えていただければ黒龍号ごとここに戻ってまいります」
そう言った。

「そうか、行つてくれるか。すまぬ、我が友」

それが今アルステインに出来るアシユマへの最大の褒賞だった。
それをアシユマは、

「これに勝る誉、他に無し」

そう言つて出発した。

「なに？ アルステイーンが王宮市に？」

「はっ」

ガルマインはその報告を王宮の中央大塔の自室で聞いていた。

報告をしているのはガルマインの持つ特殊部隊『影の者』だった。

「どこにいる？」

「ただいま絞り込んでいるところがあります」

「絞り込んでいるというのは、どういうことか？」

「携帯端末の音を拾ったもので、ただいまその発信源を特定している所があります」

「多分ファソーイの所かミフシーヨの所だな。そこさえ抑えれば後は鳥合の衆。恐れるに足らん」

だが、ガルマインは一つの危惧を持っていた。

小さい時から知ってはいたが、あの利発で聡明な所は全然変わらず大きく育った。

そのアルステイーンと重なる人物をガルマインは知っていた。

ヨディ・ヨフルである。

アシユマと同様に、これまでにガルマインの野望をつぶして来た者だ。

二人に共通しているのは弁舌の巧みさだ。

もし二人が同一人物なら、今度は一体どのような手で来るのだろうか？

今、アルステイーンをヨディ・ヨフルとして追い詰める事が出来るとしたらこの声紋パターンディスクだけ。

そしてそれをダスト・モンキーの証拠として、法廷に引きずり出し合法的に殺すつもりだった。

しかしそれも使う機会があるかどうか……。

尤も、アルステイーン自体を国家反逆罪の罪で殺すという手立てもあったが……。

「ひとつ、突付いてみるか」

ガルマインそう独りごちると影の者の頭の一人を呼びつけた。
「全く、浜御前の代わりをせねばならぬこの忙しい時に……」

「ところで余が乗れる機はあるか？」

アルステインが言った。

アルステインとオルバニアンは用意された寝室に向かっていた。

「そんな！ アルステイン様自ら敵陣に臨むおつもりですか？」
と、ファソーイ公。

「そのつもりだが？」

「いけません！ なりませんか？ アルステイン様！」

「機体だけは用意しておいてくれないか？」

「分かりました」

「ちゃんとした機体だぞ？」

「分かっております」

「義兄上、それでも前線は我等にお任せを」

オルバニアンが言った。

「うゝむ。……ガルマインとの決着は、余、自らの手で付けておきたい」

「それを言うなら私もそうです」

夜明けも近かった。

昨日からずっと出突っ張りだ。

疲労もたまつて眠気も襲ってくる。

もう、寝てもいい頃だ。

向うから、女性が歩いてくる。

アルステインらを見つけたようだ。

こちらに向かつて歩いてくる。

「ヨディ……」

「エファール！」

「捜したのよ。ここのお屋敷広くって……もう寝るんでしょう？」

「ああ。一緒に寝るかい？」

「その為に捜していたんだもの」

「これ、その女子よ。アルステイン様より離れよ。どういう間柄かは知らぬが、最早アルステイン様はお前一人のモノではない」「よい。ファソーイ。これなるは余の妻じゃ。今宵は妻と一緒に寝る」

「まあ、ヨデイー！」

エファールはこの言葉に感激してアルステインに抱きついて来た。

「これその娘、駄目だと言うておるうに……」

とは言っても、王子も随分と破天荒になって帰ってきたものだ、とファソーイ公は思っていた。

所謂

「やれやれ」

と、言った心境である。

「エファール、アルミナは？」

オルバニアンが訊いた。

「私と同じ様に貴方を捜していたわよ。下手に動き回らない方がいいんじゃない？」

「そうか。アシユマは見かけた？」

「さあ？」

「そーか」

「全く、あの者は少し武芸ができるからと言って大きな顔をして、勝手な事ばかりしおって。殿下、あの者を近くに置く事、罷り成りませんぞ」

ファソーイ公は言った。

「なぜ？ 余はあの者に全幅の信頼をおいておると言つのに」

アルステインは返した。

「殿下……」

「ファソーイ、余はこの戦に勝つたら、貴族の世を解体しようと思

うておる。この国は貴族だけの物ではない。民達の物でもある。余はこの国を民主的共和制に移行しようと思つておるのだ」

「ア、アルステイン様……な、なりませぬぞ！！ それだけはな
りませぬ。奴らは自分のことしか考えておりませぬ」

「ファソーイ公、そなたはこの戦に勝つて、余に付き、権力の一端を握つて、我が世の春を謳歌しようと考えているならば、それはとんでもない思い違いだ。困窮に喘いでいる民を利用しようと考えておるのなら、それも間違いだ。最早こういつた権力闘争のない世にしなければならぬ。これは、民が自由を勝ち取る為の戦いなのだ。我々はその手助けをするに過ぎん。それともやはりそなたは権力を欲していたのかな？」

「そ、そんな滅相もない」

「だからこそなのだ、ファソーイ。余がアシユマ殿に全幅の信頼を置くのは、そういつたことにある。階級差を超えた友情。青臭く言えばそういうことになるかな？ ま、はなから階級差なんてものはなかったがね」

「さ、然様さやうで……」

「ところでサーナリアは如何しておる？」

「先ほど寢室へお連れ致しました」

「よし。そこへ通せ」

「もう寝てらっしゃるのでは？」

「構わん」

アルステインはサーナリアの宿泊している部屋の前に来た。

ドアをノックする。

「誰じゃ？ このような夜更けに婦女子の部屋におとないを入れるとは非常識にも程があるう。時刻を改めてまた来るがよい」

「サーナリア。余だ。アルステインだ。少しの間だけだ。入らせ
てもらつよ」

「あ、義兄上？ し、暫しお待ち……」

しかしアルステイーンは構わずドアを開けた。
そして皆が閉口した。

そこにはベッドの中に裸のサーナリアとフェリアがいた。

フェリアの父アラタ・ファソーイは卒倒しかけた。

何とか気力でそれは防いだものの、アラタの怒りは一気に頂点に達してしまった。

「フェリア！ お前と言う奴は、何と言うことをして……お前は……ワシは……民衆が……アルステイーン様に対して何と申し開けば」

「い、いや良いです。こう言う愛の形もあるのでしょうから
アルステイーンは呆れてそう言った。

一通り着替え終わって、改めて部屋の中に入ったアルステイーン達。

一体何の話かと思えば……。

「サーナリアよ、明日、余は出撃せねばならん。オルバニア……ルランもやはり出撃せねばならん。となると、王族で残るのはお前しかおらん。お前がこの指揮を執るのだ。サーナリアよ」

「義兄上！ なりませぬ」

サーナリアは義兄を諫めた。

だが、アルステイーンは

「確かにこれは余のわがままだ。だがガルマインだけはこの手で倒したい」

「義兄上、わたくしは陣頭指揮など出来ませぬ」

「大丈夫。お前を補佐してくれる人が沢山いる。大丈夫だ」

「義兄上……」

「今宵はこれまでじゃ。後は明日の為にゆっくり英気を養ってくれ」

王宮市は夜半過ぎから雨になった。

もう直ぐ明け方になるうかと言う頃闇に紛れてうごめく影の一団があった。

ガルマインの影の者であった。

雨が朝日の到来を遮っていた。

その一団はファソーイ公の屋敷に近付きフックつきワイヤーを打ち込み五階建ての一番上の窓ガラスに取り付いた。

そこから各々侵入しようかと言う時に、

「ガルマインの手のものか？ 雨の中ご苦労な事だ」

屋根の上から声がした。

そこには彼等の天敵アシュマ・アトーがいた。

影の者は無言で合図を交わした後、屋根に登りアシュマを取り囲んだ。

屋根の上は雨で滑りやすくなっていた。

影の者の足元は踏ん張りがきかなくなっていた。

アシュマはその覚束無い^{おぼつか}筈の足元であるのに思い切り正面に飛び込んだ。

アシュマは魔法ウイングを用いていた。

そして、横を抜きざま居合いで影の者の腹部を存分に撫で斬った。

その時の感触で、

「お前らマシンナリービーイングだな？」

そう看破した。

マシンナリービーイングには秘剣^{おほろがすみ}朧霞は使えない。

機械の眼は誤魔化せないのだ。

「面倒だ一気に方を付けるか」

アシュマがそう言うや否や鬼虎の刀身が銀色に輝き始めた。

「ふっ！」

アシュマは気合一発鬼虎を車に振るうと三日月形の光の刃が無数に発生し影の者達を一気に切り裂いた。

が、一人だけその刃を逃れたものがいた。

「ヒトか……？」

矛盾に聞こえるかもしれないが、秘剣の類はよほどの例外を除いて、気を持つものをその標的から外さない。

マシンナリービーイングは擬似的な念導境界面、所謂気の力場を形成する為に、『気』配を発生させる。

その為の器官として脳髓を使用するが……。

逆にヒトは修行次第で気配を断つ事が出来る。

アシュマのように。

そういう敵には基本的に秘剣の類は当たらない。

例外もあるが。

気配のないものには目視とイメージで対応できる。

特に万の眼で「万の眼」どうにか出来たりもする。

兎にも角にも敵が一人逃げた。

追いかけるが。

アシュマは空中を滑空した。

そして侵入者に近付いて行った。

アシュマは侵入者の前へ躍り出た。

侵入者が鉤爪を開いて牙をむく。

左腕の鉤爪を横に薙いで来た。

アシュマはそれを上段からの振り下ろしで全て断ち割った。

すかさず右の鉤爪を繰り出す。

アシュマの身体は敵の左脇へと流れて鬼虎を袈裟に薙いだ。

峰を返してある。

がきつ……！！

と、言う衝撃が手に伝わる。

しかも鬼虎の刀身に『気』を廻らせてある。

所謂『発気の術の鬼虎版』だ。

侵入者の受けた衝撃たるや凄いものだったろう。

アシュマにしてみれば手加減をした方である。

生かすつもりだったから。
殺すつもりだったら始めから斬っている。
まずマスクをとって顔を露出させる。

「女だ……」

それも歳、背格好アーチエルと同じくらいの。
口をあける。

自殺用の毒や自爆用のスイッチを取り除いたり引き抜いたりする。
ぜんぶで六つも出てきた。

後は全部引っぺがし何かないか全部調べる。

着衣は全部捨てる

髪の毛の中、膣の中、肛門も丹念に調べる。

小さい工具ケースが四つも出てきた。

ここで始めて少女にヒーリングスフィアを掛け、アシュマのマン
トを掛けてやり、背負って館へと帰った。

少女を連れてアシュマは館の尋問室にやって来た。

尋問室と言っても、元来ある陰惨なものではなくて、白い壁と、
出入り口のドアと、木の椅子と机だけ。

他には何も無い。

アシュマはこれからこの少女に尋問を始めようとしていた。

少女には下着と白いワンピースと革の靴が与えられた。

アシュマが部屋に入ってきた。

少女は既に覚醒していた。

少女は中々愛くるしいくるりとした瞳と愛らしい唇を持った美少
女だった。

髪の毛は短かく亜麻色の髪の毛だった。

「名前は？」

アシュマが訊く。

少女は、アシュマの事を、さっき戦っていたのとはまるで別人格

だと思った。

それですいつい少女は

「ムラサキ」

と、答えてしまつて己を恥じた。

(この少女顔に出るな。意外と早く済むかな?)

アシュマは思った。

「貴様……見たな?」

「見た? 何を」

「とぼけるな! 私の……」

「私の?」

「私の……」

「ああ、秘所か。ああ。悪いが念入りに調べさせてもらった。何を隠しているか分からんからな。案の定、色々危険物が出てきたな」

「誰にも見せたことはないのに……! 覚えている! いつか殺してやる!」

「分かった、待っている。ムラサキさん、貴女の目的は?」

「ムラサキと気安く呼ぶな! 私をそう呼んでいいのはガルマイン様だけだ!」

「そうか」

アシュマはそう言い、

(矢張り、尋問に対する耐性訓練などはなされていない様だな)と、思った。

「ではこうしよう。貴女の目的は暗殺。しかも第一目標はアルステーン王子」

「知らないッ!」

「第二目標はルーラン王子。別命オルバニアン・マグマイヤー」

「知らないってばっ!」

「第三目標はサーナリア王女」

「知らないよっ!」

(全部ビンゴだな……)

「第四目的はアーチエル・アップルトンの……」

「アーチエル・アップルトン……」

「？」

アシユマは一瞬であったが、少女のおかしな様子を見逃さなかった。

(アーチエルが元来の第一目標なのか?)

と、思った。

「アーチエルと言う娘は知らない」

ムラサキは言った。

(俺の思い過ごしか? いや、一応考慮に入れておこう)

「俺は標的の候補には入ってないのかな?」

「あんたは強すぎて多分アタシじゃ勝てないだろうってね」

「そうか。じゃあ尋問を終わる」

「え?」

「物足りないか?」

「もっと拷問めいた事をされるのかと思ってた」

「聞きたい事が聞けたからな。他の奴は知らんぞ?」

「BLOODYアシユマのイメージとは程遠いな」

「少し眠るか? 毛布を持ってこようか?」

「……………有難う」

「少し待っててくれ」

アシユマが部屋を出たところで、中に入っているムラサキとアーチエルとは絶対に接触は避けてくれと言う旨を、全館に渡って通達してくれと衛兵に頼んだ。

そしてアシユマは毛布を取りに行った。

アシユマは自分の部屋に戻った。

軽くシャワーを浴びてベッドに潜った。

そこには既にアーチエルが全裸で寝ていた。

アシユマがベッドに潜り込むとアーチエルは少し覚醒し、
「アシユマさま、もう朝ですよ?」
そう言った。

「もう直ぐ朝だけどまだ寝れる。さあ、お休……」

「じゃあ、また可愛がって下さいますのね?」

「へ?」

「アーチエルは嬉しゅう御座います」

(……やっぱりこうなるんじゃないかと思ってたんだよ)

アシユマは午前中の時間に起こされた。

迎えに来たのはエファールだった。

まだ寝て一〜二時間しか経ってない

しかしイレギュラーナンバーである彼には関係ない。

昨日までの疲労の大部分は取り除かれていた。

「まあ、アーチエルここで寝てたのね?」

エファールが愛しいものでも見るかのように眼を細めた。

「起こすなよ?」

アシユマが注意した。

「ちゃんと抱いてあげた?」

「余計なお世話だ」

「そう。抱いてもらってるのね? 良かったわね、アーチエル」

「さて行くぞ、エファール」

「はいはい。またねアーチエル」

アーチエルは未だぐっすり夢の中だった。

地下の大発令所で、作戦の概要をアシユマなどが聴いていた。
作戦はこうだ。

上空八千メートルで部隊を整える。

ガルマイン側はこちらの動きを察知して兵を出してくるだろう。その時アシュマ・アトーは（恐らく）マルル広場にて発進待機をしている（若しくはマルル広場上空で）敵魔導機兵群に奇襲攻撃を掛け敵を混乱に陥れる。

後は混乱した魔導機兵隊に上空から降下してこれを殲滅する。

以上が作戦内容の骨子だった。

「以上だが質問がある人はいるかい？」

アルステインが訊いた。

アルステインが話す席の周りには、今は内輪だけしか居ないからアルステインは砕けた言い方になっている。

「アーチエルがいたら、卒倒するような作戦だね」

アルミナが言った。

場が軽く沸いた。

アシュマを除いて。

「アシュマが殆ど殺っちまうんじゃないのかい？」

オルバニアンも言う。

ここでもまた場が沸いた。

アシュマを除いて。

「で、個人個人は、どの持ち場に着けばいいの？」

「先ずアシュマ君は自由に動きまくる遊撃手」

「うむ」

「オルバニアン、アルミナは魔導機兵に乗って僕が駆る魔導機兵の援護などを。でもまあ基本的に君達も遊撃手だね」

「わかった」

「右に同じよ」

「エファさんはこの発令所のオペレーターのまとめをして下さい」

「わかったわ」

「で、フェリアさん貴女はサーナリアの補助をしてやってください」

「分かりました」

「で、アーチエルさんは……彼女のバハムート、戦力として相当な

ものなんですがねえ」

「後で俺が伝えておこう」

アシユマが言う。

「で、サーナリア。君の仕事は、ここに座っている事だ」

「え？ 座るだけですか？ 義兄上」

「極端に言えばそうです。そして発する言葉は『よきにはからえ』」

「それだけですか？ ……よかったあ。本陣の大將なんてしたことないからもう胸がドキドキしちゃって……」

「大丈夫。君の隣のフェリアは、スコラのタクティカルバトルで二年連続の優勝者です」

「まあ、それは。心強い」

「アルステイン様は、そんな事までご存知なのですか？
フェリアは呆れた。

「教員になるときの資料にね、書いてあったんですよ」

「スコラかあ……久しく行ってないなあ」

フェリアは懐かしむ様子を見せた。

「さて、アベニ爺とリイナ嬢、キュポア王女、コクレト軍曹、アン

嬢は……」

「待ってくれ。その面子に私をくわえないでくれ」

リイナが言った。

「どうしてですか？」

アルステインは問うた。

「野暮用がある。なに大した事ではない。直ぐに終わる」

と、リイナは答えた。

アルステインは十数秒の間考えていたが、

「いいでしょう。きっちり決着を付けて下さい」

そう言った。

「しかし困りましたね。黒龍号で動く砲台になって欲しかったのですが、面子が揃いません」

「ファソーイ公から兵を借りればよからう」

リイナが言った。

「ならばわらはサブコクピットでレールキャノンの砲手をしてみたいぞ」

キュポアが言い、

「私は凡そ戦闘には向かないのでここで皆さんのお世話をしよう御座います」

そうアンが言った。

「それもまたいいでしょう」

アルステインが許した。

「さて。後は作戦発令までは自由ですが、いつでも連絡が付くようにはして置いてください。今の内に眠っておく事をお勧めします。では、解散」

「終わりましたでしょうか？」

ファソーイ公が言った。

「終わりました」

アルステインはにっこり笑って言った。

「ここに我が娘が立つ事になるうとは……」

「それだけ才気に溢れていると言っことですよ」

「そう言っていただければ……」

「さて……余は、余の乗機を見てまいる」

「矢張り出陣なさいますので？」

「もう決めたことだ」

アシユマは再び部屋へ戻ってきた。

アーチエルがすやすやと寝ている。

もう直ぐ昼だと言っのに。

「ねほすけ」

アシユマはぼそつと言ってみた。

「……………」

アーチエルは寝たままだ。

アシユマは再びベッドに潜り込んだ。

「うーん、アシユマさまも今朝に御座いますか？」

「もう昼だよ」

「……………！！ 昼！？」

アーチエルは飛び起きた。

「そっだよ」

「大変！」

アーチエルは服を急いで着て、

「では、アシユマさま御機嫌よう」

「ああ、またあとで」

キスをして、アーチエルは部屋から出て行った。

アシユマはそのまま眠りに入った。

アシユマは夕方過ぎに目が覚めた。

シャワーを浴び、軽く食事をし、鬼虎を改め、大発令所へと向かった。

大発令所には、全国から続々と味方の魔導機兵が集結しつつある情報が、集まって来ていた。

また、各地で小競り合いが起きていると言う情報も入ってきた。

「やはり発進てくのか？ アルスティーン」

「発進てくすよ僕は」

「俺に任せておけばいいものを」

アシユマは微笑した横顔を見せた。

「たまには僕自身の手で決着を付けたいです。それにアシユマ君はアーヌが来た時に為のストッパーになってもらいます」

「ふむ」

「アシユマ君がいつも敵に行っているような攻撃を、こちらが食らったら目も当てられません」

「アーヌもそうだが、俺もガルマインとは決着を付けてはおきたい」
「ガルマインには俺も意趣ありだぜ」

オルバニアンも言ってきた。

「所詮、ガルマインに意趣を含んでいない人は、いないんですよ。
こうなったら早い者勝ちですね」

アルステイーンはそう言った。

「考えておかなきゃいけないのは『バヴェル』の事なんじゃねえのか？」

オルバニアンが言う。

「それもありますね。バヴェルを出されたら、こちらに勝ち目は、
先ずないと見ていいでしょう」

「バヴェルとアーヌ……そしてアーチエルか……」
アシユマはそう呟いた

一方ここは王宮市の中心、ロイヤルパレス王宮。

更にその中心、中央大塔の軍司令部……。

その大きな椅子にガルマインは陣取っていた。

足元には戦況を刻々と映し出すモニタパネルが埋め込まれていた。
もちろん眼の前にも何面かモニタパネルがあり、様々な状況を映し出していた。

「ガルマイン様、敵の動きが活発化しています」

「どう活発化しているのか？」

「各地の基地からの報告では、敵魔導機兵群が王宮市へ続々と向かってきているとの事、またそれを阻止しようと各地で小競り合いが起こっています」

「敵の総数はいかほどか？ 概算でよい」

「六千機弱かと」

「このファソーイ、ミフシーヨ、その他の諸侯の魔導機兵を集めれば約八千。この近衛師団とほぼ同数になるな。……ノリトレ

アにある各基地に通達だ。緊急事態である。各基地にある全ての魔導機兵を王宮市に集結させる事。以上だ」

「はっ！」

「さあ、数の上ではこちらが優位に立ったぞ？ どうする？ アルステイン。ふふふ」

「アルステイン様」

下級兵士が何かを持ってアルステインの所へやって来た。

どうやらそれを読み上げるらしい。

「全国にあるガルマイン派の基地から魔導機兵が続々と王宮市に集まっています」

「そうですか。それまでは読み通り」

「ガ、ガルマイン様！」

「何だ、騒々しい！」

「ク、クーロン革命軍がノリトレア本土に接近しつつあります！」

「なんだと!？」

「現政権はガルマインの私物になり下がり、政権としての機能はしていない。我々クーロン革命軍はノリトレアの前途を憂い、貴国の同志の出撃要請を受けて、立ち上がったものなり」

「事実上の宣戦布告ではないか」

「ガ、ガルマイン様！」

「またぞろ何だ」

「こっ、国際警察軍です!!」

「なんだと!？」

「こちらは国際警察軍。怪盗ダスト・モンキーより犯罪予告これ有り。『怪盗ダスト・モンキーはガルマイン殿の強い要請によりガルマイン殿の艦艇に乗り、ガルマイン殿の圧政に苦しむ民を救おうと

言われているノリトレアのアルステイン王子の命をいただきに参上』。以上の真偽についてガルマイン・デッド氏について事情を聞くと共に怪盗ダスト・モンキーの身柄の引渡しを願うものである」
「なんだ？ それは！ 明らかに嘘臭いではないか！ 実際の戦力はいか程なのだ」

「クーロン革命軍は、超弩級戦艦一、大型空母三、魔導機兵は既に展開。その数凡そ四万九千！」

「国際警察軍の方は超弩級戦艦一、中型空母二。魔導機兵群は約一万」

「うっむ」

ガルマインは唸った。

（数で押し切られるな。こちらが不利か）

「如何致しますか」

「この王宮市の近衛機兵を全て発進させる。この王宮市で後れを取る訳にはいかんだ」

「はっ」

「第一、第二師団をこの王宮に、第三と十一師団の魔導機兵をクーロンの大馬鹿者どもに、第十二と十六師団と第三機械化師団を国際警察軍の阿呆どもに向かわせる」

「はっ」

「敵ガルマイン陣営に動き有り。敵親衛隊機発進の様」

エファールのその声を聞いた、アルステインが、ヘルメットを小脇に抱えながら、

「サーナリア、後を頼む」

そう言った。

「分かりました。義兄上も、どうぞ存分にお働きになってください」

「フェリア姫、サーナリアを宜しく願います」

「お任せ下さい。必ずや我が軍に勝利をもたらします」

「ははは。頼もしい限りだ。エファ、国際警察軍とクーロンの革命軍との連携をうまくとってあげてくれ」

「分かったわ。ヨディ」

「ヨディじゃなくてアルステインなのに……じゃあ、行って来る。いこう、アシュマ君、オルバニアン、アルミナ嬢」

発令所からメインの通路へ出るまでの短い廊下で、アーチエルが不安そうな面持ちで、立っていた。

「アーチエル」

「アシュマさま……」

「すまん先に行ってってくれ、アルステイン」

「分かりました。なるべく早く」

「わかった……」

アシュマは、アルステインに軽く手を振ってから、

「どうした？ アーチエル」

無愛想な顔から一転して柔らかい表情をアーチエルに向けた。

「いえ、ただアシュマさまのご無事を……」

「無事に戻ってくる。必ず。アーチエルは心配せずに良い子で待っていてくれ」

「胸騒ぎが致します……」

「困った。アーチエルの胸騒ぎは当たるからな。せめて願っていてくれ」

「はい」

アーチエルが身体をアシュマに預けてきた。

アシュマがそつとアーチエルを抱きしめてやる。

アーチエルがその感覚を味わう。

そしてどちらからともなく唇を近づける

キス。

暫しの間、唇をを繋げた後、二人はそれを解いた。

「行って来る」

「あ……」

アシユマはもうそこにはいない。
アーチエルは唇に残った感触を確かめるように指を唇に持っていた。

魔導機兵の格納庫に、生身でやって来たアシユマ。

『待ちましたよ、アシユマ君』

「すまない」

『冗談です』

少し格納庫内が笑いで沸く。

『どうでしたか？ アーチエル様との短い逢瀬は？』

「殿下の催促がなければもっと長く出来た」

また、笑いが沸く

（さすが口八丁手八丁の『ヨデイ』。人を乗せるのが上手い。みんなの緊張感が程よく解けた。残念だがここだけは叶わない）

アシユマはそう思う。

『じゃあ、アシユマ君。一人にして悪いけど、僕達は上空待機です』
「分かった。皆が降りてくるまで俺一人で踏ん張ってみるか」

ファソイ公の屋敷の前のアスファルトの道路が割れて引き込まれて大きな穴が開いた。

先ずアシユマが魔法『ウイング』を使って飛び出してくる。

そしてアルステイン機を筆頭にオルバニアン機、アルミナ機と次から次に魔導機兵が飛び出していく。

ここでアシユマは皆と別れマルル広場へ行く。

正確には王宮の第十二番門からの目抜き通り、そしてマルル広場を望める場所、そこへ行くのだ。

味方の魔導機兵は遙か上空、八千メートルへ上って行く。

ここで、アルステインの乗機について説明をしておこう。

機体はエスタ。

技術立国ノリトレアの最新モデルである。

アルステインが予め自分用にも購入しておいたものだ。

機体のアレンジコンセプトはオルバニアン機とアルミナ機との中間と言ったところか。

（と、言いつつそのオルバニアン機もかなりアレンジが加わったのだが。）

先ず両腕に半固定式のシールド、両手には三十三ミリ念封弾六連装バルカン砲。

シールドの内側に魔導石製の刀がそれぞれ二本づつ、計四本の刀を忍ばせていた。

刀は身幅が異様に広く、重ね厚く頑丈に出来ていた。

機体はミスリルと魔導石の積層装甲で非常に頑丈に出来ていた。

ついでながらオルバニアンの機体もマイナーチェンジをした。

機体コンセプトをアルミナ機にシフトした。

機体装甲を厚くして、六メートル超の長大な刀を背に刺した。

三十三ミリ念封弾六連装バルカン砲は健在。

アルステインらはこの機体をもってガルマインとの決着を付けるつもりであった。

アーチエルは何かする事がないかを探しに大発令所に来た。

発令所に入る。

「皆さん、ご苦労様です」

「お疲れ様です。アーチエル様」

フェリアが言った。

「私に何か出来ることはありませんか？」

「ええ。アルステイン様が、ここの護りにバハムートを所望して

いらしゃいました」

「然様ウフクですか。早速召喚しますか？」

「もう少し先でいいでしょう。それにここでは落ち着いて召喚できないでしょう?」

サーナリアが言った。

ガルマインはある所に連絡をつけていた。

その連絡先とは……

「早急にアーヌ殿をこちらに寄越して頂きたい」

『この七賢人に対して随分と横柄な態度をとるものだ。浜御前が居なくなつて、自分がその地位に就いたから、少しい気になつていゝるのではないか』

「失礼。今、クーデター騒ぎで多少苛つているもので」

『それはそちらの勝手。そちらの方で解決されよ』

「そうやって見放してしまつて良いものですか?」

『なに?』

「アヘイビアは事実上オロの手に落ち、クーロンは益々七賢人の意にはそぐわない国になり、ノーツ連邦はいざともなれば、トップでさえ平気で切り捨てる非常な国家、とても七賢人の入り込む余地があるとは思えん」

『何が言いたい?』

「超大国三国が七賢人の意のままに動かぬとなれば七賢人の意に叶う国をこれ以上失うのは面白くないのでは?」

『その情報には誤りがある。アヘイビアはいまだ我が掌中にある』

「それでもオロがうるさいのでは?」

『……………』

「そこで重ねてお願いがある。アーヌ以下四天王の方々を寄越して頂きたい」

『寄越すのは構わんが、今からでは間に合ふまい』

「又ルを貸して頂きたい」

『そこまで我等に面倒を見ると言うか。又ルはならん! 又ルは、

『携拳』に使うべきもの。今ここで戦闘で使うわけにはいかん』

「『携拳』……人類選別非難計画ですか」

『そうだ。お前も入っているぞガルマイン』

「分かりませんな。何故、今になって『携拳』などと」

『それは貴様の知るところではないが、断片だけは教えよう。神人様がこれ以上を望まれないのだ』

「何を？」

『この世界のありようをだ。自然環境破壊、国家間の対立、民族間の紛争。数え上げればきりが無い。そして軽拳される人数の容量がもう一杯一杯なのだ。その全てを神人様はもう望まれない』

（七〇八割方はお前たちの操作の結果ではないか）

ガルマインはそう思ったが、そんな事はおくびにも見せず話を続けた。

「では、何を望むと……？」

『現人類の粛清』

「どうやって？」

『その為のアー又たちよ……成る程。その意味ではアシユマ・アトーは邪魔だのう。……仕方あるまい。ヌル共々アー又達を貸し与えよう』

「感謝の極み」

『そう思う必要はない。間もなくこの人間の世は終わる』

そう言つてガルマインは七賢人との会話を終えた。

（ふむ。全人類の粛清などとは大言壮語を吐きよる。地球に帰つてきてみよ。バヴェルを以つてして貴様らこそ最初に粛清してやるわ）

ガルマインは不遜にもそのような事を考えていた。

そして、ガルマインは続いて足元のモニタパネルを見て、

「うむ。百四十六号は生きているか」

そういった後、部下に無線機を持つてこさせ、無線機を通じ何処かへこう喋り始めた。

『百四十六号、ガルマインだ。答えられたら答える。百四十六号……』

……
ガルマインの声は王宮を飛び越えファソーイ公のの屋敷の尋問室
アシユマが持つてきてくれた毛布に包まって寝ている少女ムラサキ
に届いた。

「！……ガルマイン様。……ガルマイン様の声が聞こえる」
カラクリはこうである。

耳の後ろの頭蓋骨に電波送受信機と骨導音で伝わるスピーカーと
マイク、これらが皮膚の下に貼り付けられている。

これがカラクリの正体である。

『慌てるな。よく聞け百四十六号。お前の目的は何だ』

「私の目的……一、アルステイーンの暗殺。二、ルーランの暗殺……」

『違う。そうではない。元来の目的だ』

「元来の目的……」

すると少女は瞳の色を妖気で塗り替え、

「一、アーチエル・アップルトンの確保。二、敵中枢部の破壊」

『そうだ。何よりも先ずアーチエル・アップルトンの確保を優先さ
せる。いいな？』

「解りました」

『アーチエル・アップルトンの容姿はわかっているな？』

「はい」

『では、行け！』

「はっ」

ムラサキはドアに毛布を掛けた。

そして、机を放り投げ壊した。

大きな音がして何事かと守衛が覗き窓を覗いた。

しかし覗き窓の眼の前には毛布が掛かっていて何が行われ居るの
か分からなかった。

「一体何をしているんだ？」

守衛は鍵を取り出し部屋の中へ一人で入った。

誰にもことわりを入れずに。
少女一人だと思って侮ったのである。

「いるか？」

ガルマインはどこを見るとでもなく呟いた。

「はっ。ここに」

それは、以前、黒龍号のクルーと遭遇し生き残った、数少ないイレギュラーナンバー、零零四、蝙蝠だった。

蝙蝠はガルマインの真上に音もなく、気配もなくぶら下がっていた。

「百四十六号の手助けをしてやれ。それだけ言えば分かるな？」

「はっ」

ムラサキは守衛の格好で出てきた。

ドアにさり気無く鍵を掛けその場を立ち去った。

そして近くの侍女に、

「アーチエル様の居所は？」

と、訊いた。

「アーチエル様でしたら五階の三号室ですよ」

「ありがとうございます」

ムラサキはアーチエルの居場所を知ってしまった。

アーチエルはそろそろバハムートを召喚する為、落ち着く自分の部屋へ向かっていた。

「ヨデイ、俺達が一番乗りみたいだ」

上空八千メートルにはオルバニアン、アルステイーン、アルミナの三機が着いていた。

「後五分待ちましょう。そこで集まったもので上空からの奇襲を掛けます。アシユマ君に連絡を暗号で」

マルル広場にはガルマインの魔導機兵が集まってきた。
その数四〜五千。

アシユマは定位置について鬼虎の鯉口を切っていた。

(この最初の一撃でこの勝負の趨勢が決まる……)

アシユマのインカムに暗号通信が入る。

『アシユマ、こっちは後五分だ』

「分かった。俺の方はこれからいく」

アシユマは手を鬼虎の柄に置いた。

第七節 革命その二

アシュマは不意に茂みから居合いの形のまま十五メートルほど飛び上がった。

ウイングの魔法を唱えていたのだ。

そしてアシュマは一気に鬼虎を引き抜くと、無数の三日月型の光の刃が飛んで行った。

それらはアシュマが見える範囲でのガルマイン側の魔導機兵の悉ことごとくくを両断して行った。

斬りミスや斬り漏れはない。

「ガルマイン様！ マルル広場に展開中の魔導機兵四千五百機が一瞬にて全滅……！」

「分かった……！」

「あの……全滅なのですが」

「分かっておる！ 何度も言わせるな！ 対処中である！」

（流石はアシュマ・アトーであるな。都の機兵群の半数を一瞬で屠るとは。しかしそれもアーヌ殿が来るまでの事）

「とりあえず残りの機体を発進させる」

「はっ」

ムラサキはアーチエルの部屋から戻ってきた。

アーチエルが居なかったからだ。

アーチエルはバハムート召喚の為、落ち着く場所として自室を選んだ。

ふたりは階段ですれ違った。

いや、その直ぐ後でムラサキはくると方向を逆転した。

そして、アーチエルの横にぴたりと張り付き、

「騒ぐな、ナイフがお前を狙っているぞ」
そう言った。

「何が目的？」

アーチエルが声を潜めて言った。
「喋るな」

ムラサキが喋る事を遮った。
ヒュッ！

そのムラサキが指笛を吹いた。
すると窓に大きく蝙蝠型のシルエツトが張り付いた。

「きゃあっ！！」
アーチエルは悲鳴を上げる。

「静かにしろ！」
ムラサキがアーチエルに当身を食らわした。

「おい、傷付けてはいないだろうな」
「ああ、そんなへまはしないよ。あんたが新入りの蝙蝠かい？
そのまんまだね」

「無駄口を叩くな。女を寄越せ」
「分かったよ」

ムラサキはアーチエルを蝙蝠に預けた。
「いたぞ！ あいつだ！」

廊下に館の中の兵士が大拳して押し寄せてきた。
「私の回収は？」

ムラサキは言った。
「もう一つ任務が残っているだろう？」
冷たく蝙蝠は言い放った。

「そうかい。私は見放されたってことかい……」
「じゃあナ、百四十六号」

残ったのは、館の兵士とムラサキだけ。
ムラサキはゆっくり囲まれて追い込まれていった。

「ゆつくり囲めよ奴の腹の中じゃ爆弾が詰められているらしいからな」

「う……」

ムラサキは絶望的な感情になった。

何故こう言うときに爆弾を爆破できないのか。

窓に取り付いて脱出しようとするを取り押さえられるだろう。

どの部屋もドアの鍵がかかっている。

「へへへ中々可愛い顔してるじゃねえか」

「後で輪姦まわそうぜ」

ムラサキは眼に涙を浮かべていた。

最後に残った手段は喉をナイフで突くしかない。

「さて行くぞ」

いよいよムラサキは喉を突こうかと言う時、

「お待ちなさい！」

凜とした声が響き渡った。

皆が声のするほうを見ると、そこに居たのはサーナリアだった。

「双方剣をお引きなさい」

サーナリアが重ねて言った。

「サーナリア様いけませぬ。危のう御座います」

近くの兵士が言った。

（この女がサーナリア……この女をやれば……）

ムラサキが良からぬ事を考えていた。

「私を殺せば、ガルマインのところへ帰れる等と、考えないほうが

良いでしょう」

「なぜ？ そのことを」

「眼を見れば分かります」

「ああ……」

ムラサキはその一言で観念した。

「よしんば私を人質にしてこの場を逃れたとしても、ガルマインは貴女を利用し尽くしてあなたを破滅へと追い込むでしょう」

サーナリアはムラサキに止めの言葉を浴びせかけた。

「う……」

「貴女を尋問室に閉じ込めねばなりません、アシユマ様が帰ってくるまで我慢なさってください」

「王女、それは私に死ぬよりも辛い責め苦で御座います」

「心を許したのですか？ アシユマ様に。そうですね……。あの方はどなたでも魅了してしまう不思議な力を持った人。心を開かれたとしても無理からぬ話。でもそれとこれとは別の話。それでも待つてもらわねばなりません。大丈夫。大事には至らないでしょう」

「本当ですか？ 王女？」

「アシユマ様は必ずそうします」

「アシユマ……様」

ムラサキはここで初めて自分のした事を後悔した。

「なんだって！？ アーチエルが？」

アシユマは我が耳を疑った。

エファールの言葉によればアーチエルは蝙蝠によって拉致されたとの事であった。

「アシユマ、大丈夫？」

エファールが言う。

「奴が行く所は分かっている。これからそこへ行ってみる」

「アシユマ君！」

アルステインからの通信が入った。

「何だアルステイン？」

「これから攻撃を仕掛けます。アシユマ君のほうはよろし？」

「済まない、俺はアーチエルを助けに行く」

「アーチエル王女がどうかしましたか？」

「詳しい事は省くが、アーチエルはガルマインの手に落ちた」

「なんですって！？ 攻撃を中止しましょうか？」

「いや、続行してくれ。丁度良い陽動になる」

『分かりました。皆さん行きますよ!』

上空約八千メートルからヨデイ達は大降下作戦を展開した。

これには

「敵機探知!」

ガルマイン側のオペレーターが叫んだ。

「数は?」

「約二千!」

「現状発進している魔導機兵で対処しろ。直ぐに心強い援軍がやってくる。全兵士にそう伝える」

ガルマインはこう応えた。

「はっ」

「敵歩兵部隊がこの王宮に向かって押し寄せてきます」

「数は?」

「凡そ五万!」

「バカな。やつらの兵は多く見積もっても七〜八千」

「まだまだ増えていきます。ただいま六万」

「それだけの兵力を奴らはどこから集めた?」

ガルマインは理解しかねるという風に口を開いた。

「分かりました市民です。市民が蜂起してアルステインの反乱に加わっているようです!」

市民は主な目抜き通りで魔導石と剣とを革命軍から貰っていた。

「ガルマインを倒せ! 我等に自由と安息の日々を!」

市民たちは口々にその言葉を唱えながら王宮を目指していた。

急降下したアルステインの部隊はガルマインの機兵部隊を捉え蹴散らしていった。

アルステイーンは二丁拳銃ならぬ、二丁バルカン砲で敵機兵を黙らせた。

オルバニアンもそれに続いてバルカン砲を敵機兵に浴びせかけて行った。

やはり敵より高い位置にたっているのが効果的なのか総じてアルステイーン軍の機兵のほうが優勢だった。

次々、落とされていく敵の魔導機兵。

アルミナが一人で敵陣に突っ込み大剣を掲げた。

「おらおらおら！ 真っ先にアタシの獲物になりたい奴は誰だい！？」

アルミナは敵の集団に向かって切り込んで行った。

オルバニアンや、アルステイーンも敵の密度が高い所から殲滅をして行った。

実際三機の破壊力は相当なもので敵の陣形を次々と崩して行った。そして止めは遅れてやってきた僚機が刺して行く。

『アルミナあ、調子に乗ってどっか飛んでくなよ！』

オルバニアンが揶揄すれば、

『だいじょうぶよ！ アンタ見たいな鉄砲玉じゃありませんよー』

アルミナも余裕で返す。

『じゃあ、こつち来いよ！ 獲物がわんさか居るぜ』

『どれどれ？』

そこ……第十番門……そこから大挙して押し寄せてくる民衆を魔導機兵がマシンガンで滅多打ちにしていた。

『ぎゃはははは死ね！ 死ね！ 死ね！ 何にも出来ねえクソ垂れる豚のくせして『自由を』だああ？ でめえらにやこの銃弾で十分だあー！』

『そうかい。俺から見りゃ、あんたの方がこの銃弾に似合ってると思っただがなあ』

いつの間にかその虐殺者は、オルバニアンに背後を取られていた。
『何者だ』

『革命軍だよ!』

オルバニアンは三十ミリ念封弾を敵の魔導機兵にぶちまけていた。
魔導機兵は直ぐにボロボロとなり、橋の上に落ちた。

わあっ!

と、沸く観衆。

みんなでその魔導機兵を剣で突付いた。

『みんな! そんな奴はどうでも良い! ガルマインだ! ガルマインを倒すんだ!』

『おおおおっ』

皆、異様に興奮した叫び声を上げ、皆で門を壊して王宮へと目指した。

『へっ! どんだけ民に圧政って奴を布いて来たか分かるっでもんだぜ』

オルバニアンは上空で戦っているアルミナとアルスティーンの所へ戻って行った。

ガルマイン軍は数こそ革命軍の二倍弱と多かったが、士気と勢いで革命軍がガルマイン軍に勝っていた。

今や王宮が落ちるのも目前かと思われた。

「すまん、みんな、ここで私を下ろしてくれ」

リイナが言い出した。

「何、頓珍漢な事を言っておるのじゃ? リイナ! 危なかるうにアベニがキュポアが窘めた

「ありがとう。大丈夫だ。私の目標はあの中央大塔にはおらんよ。兎に角降りねばならんだ。降ろしてくれ。あとミニ・サイコ・フ

「ライヤーも借りていくぞ」

「何をお主はそんな早急な事をしようとするのじゃ。革命が終わってからでは間に合わんのか？」

「間に合わんな。完璧に」

アベ二爺が黒龍号を目立たない所へ接地した。

リイナとキユポアが出てきて……、

「何かあったらこのインカムで連絡するのじゃぞ？」

「分かった」

「危なくなったら逃げてくるのじゃぞ？」

「わかった」

「分かっておるのか？ 本当に」

「分かっておる！」

「たまにはちゃんと年上の言う事も聴いておくものじゃぞ？」

「年上と言ってもたった半年ではないか？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ぷっ……あはっ、あははははっ」

「ははっ、ははははははは……」

「ははは……信じて待っておるからの」

「はい。『お姉様』」

二人は握手して別れた。

「お待たせしました。戦況はいかがですか？」

サーナリアが帰ってきた。

「こちらが押しております」

フェリアが応えた。

「アシユマ様にアーチエル様の事は伝えましたか？」

「はい。たつた今」
「アシユマ様の第二撃目は？」
「結局撃たれませんでした」
「そうですね……」
「その後直ぐに魔導機兵隊がやってきましたので必要ないと思われるのでしよう」

蝙蝠がアーチエルを連れて天井近くの大窓から入ってきた。
そして一際高いガルマインのいる司令所へ静かに舞い降りる。
朝方から降っている雨はいったん小康状態をとったが夜半から大降りになってきた。

「蝙蝠か。アーチエルを置いたら下がれ」

「……………」
アーチエルは、ガルマインの側に付いている影の者に、静かに引き取られようとしていた。

「相変わらずね。ガルマイン」

「何がですか？ アーチエル王女」

「人はもちろん、褒美も欲しいでしょうけど、先ず欲しいのは『お褒めの言葉』ではないでしょうか？」

「『お褒めの言葉』？ あの化け物にか？」

「……………」

「まあ、まずはお着替えなさい。そんなにびしょ濡れなのは身体に障る」

「まあ！ なんてオヤサシイ。とてもガルマイン殿のお言葉とは思えませぬ」

アーチエルは皮肉を言い奥へと消えて行った。

「全く最近の娘は礼儀を知らないな」

「ガルマイン様、ピッタリで御座いますわ！　あり難く存じますっ
！！」
アーチエルは着替えてきて開口一番、皮肉交じりにそう言った。
だが格好は似合っていた。
シンプルな純白のドレスに、純白の手袋、白いエナメルのハイヒ
ール。

白尽くめだった。

「ガルマイン様……第五階層まで突破されました……」
「そうか。十番ゲート封鎖。十番ゲートを必ず死守しろ」
「ゲートを封鎖されたら味方はどうなるんでしょうか？」
「ワシは死守しろと行ったはずだ。取り残された仲間の事？　そん
な事ワシが知るところのか？　下らん事を言っておるとこの場で殺
すぞ」

「は、はっ！！　申し訳ありませんでしたっ！　失礼しますっ！！」

「貴方が哀れだわ。ガルマイン」

アーチエルが言った。

「なに？」

「人の愛を知らず、人の情けを知らず、人の心を知らず」
「知らぬでも良いものではないか？」

「あの声が聞こえて？　皆、貴方を恨む怨嗟の声よ。貴方は勝てな
いわ。貴方が一番見下していた民によって貴方は滅ぶのよ」
パン！

ガルマインは立ってアーチエルに平手打ちを噛ました。

「あまり良い気になってわめくな。王女よ。わしは負けはせん！
王女がワシの手の内にある限り。くくくく……ははっ……あーっは
っはっはっはっ！」

「破壊の権化、バヴェルを使おうというのね！？」

「まだその時ではないがの」

ガルマインはその精気に満ちた顔で笑い続けていた。

アシュマも続いて攻撃に加わらんとした時、『それ』は何もない空間から不意に現れた。

『それ』は七賢人の乗り物『ヌル』だった。

「来たぞ！ 頼もしい援軍だ！」

ガルマインは吼えた！

「全軍に通達！ あの乗り物は我が軍の援軍である。一切手を出さな。また鎧姿の者が現れるがこれも我が軍の味方だ。一切手出しするな。以上！」

「くそ！ あのお椀か！ 厄介なものを出してくる！」

アシュマは叫んだ。

「先にあのお椀の処理が先決か！」

続いて叫ぶアシュマ。

「いや、我との勝負が先決だな」

そこに立ちはだかったのはもちろんアシュマの宿敵アーヌだった。

そして『ヌル』は攻撃を開始した。

しかしどことなくテンポが悪く、しかもビーム砲の威力も格段に弱くなっていた。

多分、アーヌがここに居るからだ。アシュマは踏んだ。

恐らくシールドであるビーム砲は防げるのではないか？

「アルステイン！ 聞こえるか？ アルステイン！」

『はいはい。聞こえてますよ』

「シールドを掛ける！ それであのお椀のビーム砲は防げるはずだ」

『わかりましたそう通達しましょう』

「我の事は無視か」

「そうだ。仲間の命を優先したからな」

「ヌルの事、良う見抜いた」

「……………」

「今宵はちと趣向を変えようぞ」

「？」

「こう言うことよ！」

アーヌが叫び、天龍鬼を引き抜くと無数の光の刃が発生し、アシユマ目掛けて飛んできた。

「くっ！」

アシユマも咄嗟に鬼虎を振るい、光の刃を引き出した。

双方の光の刃は空中で激突しあい、対消滅をした。

対消滅をしたその時のエネルギーは眩い閃光まばゆとなって辺りを照らし、何かが爆発したような大きな爆音が辺りを包んだ。

双方の陣営の機兵乗り達はその閃光を見て、

「何だ！？ あの光は？」

皆、口々に言った。

その時にはウルク、カシア、カフルの三人も地上に降りてきて、中央大塔に居るガルマインに反旗を翻した民衆達をその凶刃で殺戮を開始した。

そして、ヌルも攻撃を続行した。

アーヌの制御がなく自動的にビーム砲の威力が抑えられているとはいえ、一撃で魔導機兵を撃墜するだけの威力は持っていた。

(まずい、このままでは味方機が全滅する)

アシユマはそう思ったがアーヌの激しい追撃で手が回らない。

「どうした？ 思いのほか逃げ腰で、我は詰まらん」

アーヌはまた攻撃をしてきたアシユマも攻撃を仕返す。

二人の真ん中でぶつかり合うエネルギーの塊。

閃光せんこうが煌きらきと轟音ごうおんが響き渡る。

(だめだ。このままでは駄目だ。あのお椀が邪魔だ。アーヌに訴えかけてみるか)

アシユマはそう思いアーヌに口を開いた。

「アーヌよ、お前はこれで勝って嬉しいのか？」

「なに？ どういうことだ？」

「俺は、あのお椀に気をとられて存分な働きが出来ない。そんな男から勝ちを得て嬉しいのか？」

「……………成る程お主のいうこと一理有る」
すると間も無く又ルは動きを止めた。

「又ルが動きを止めた？」

カフルが言った。

「どういうことだ!？」

ウルクが叫んだ。

「有り難い。これで何とかなる」

アルステイーンが呟いた。

するとエフアールが通信を入れてきた。

『ヨデイ、クーロン革命軍から通信よ』

「アルステイーンですってば」

『あら御免なさい』

「わざとやっていますね？」

『意味はあるのよ。それはさて置き、繋げるわ』

『アイヤー！ やつと繋がったネ。アルステイーンか？』

「そうですね。リン・シャオリン」

『ア、ア、アンタがアルステイーンか？』

ヨデイの顔はコクピット内にある小型カメラでリンの艦のモニタに映し出された。

『き、綺麗あるな。決めたよ、私この人の子種も……………』

『完売済み!』

エフアールが割って入った。

『用件！ 用件!』

『あ、そうだったネ。こちらの艦隊は何かノリトレア政府軍に勝ったネ。兵士を鼓舞するの大変だったネ。でも数で押し切ったよ』

「数で押し切ったって…………どのくらいの数で来たんですか？」

『四万八千九百六十ぐらいネ』

「ほぼ、五万……」

『こちらの犠牲少くするには数で押し切るのが一番ネ。我々はこれで帰るネ。あと、貸し一つネ』

『ヨデイ、ネルゼイ警部からよ』

エファールが言った。

『ヨデイ、大方片付い……おめえ誰だ？』

『今の僕はアルステインですよ、警部』

『じゃあ、ホントにお前、アルステインだったんだなあ。……失礼しましたッ！ アルステイン殿下。他に何かご用命は御座いますかッ！？』

「今は取り立ててありません。こっちの方の押し気味ですし援軍も来るでしょう。我々の勝利も近いです」

『ならば自分たちも随行したく思います。この戦いの顛末を見届けさせてください！』

「わかりました。それが国際警察機構の意思ならば」

『有難う御座いますッ！』

『義兄貴！ 俺達は塔に突入する』

オルバニアンから連絡が入った。

「『達』？ アルミナ嬢も一緒ですね？」

『そうよ、アルステイン！』

今度はアルミナから連絡が入った。

「中央大塔には四天王の内三人が居ましたね。僕も行きましょう」
相変わらず上空では、閃光と轟音との激しい戦いが続いていた。

中央大塔の入り口付近には死体で地面が見えないほどだった。

その中でアルステインらは魔導機兵で降りる場所を探すのが折れた。

空では今も不気味な閃光が煌き轟音が聞こえて来る。

やっと降りられるところを見つけたオルバニアンとアルミナはそこに降り立った。

オルバニアンは機兵を跪かせ、例の巨大な刀……『大逸鉄』を引っさげて機兵から降りた。

同様にアルミナもロンリーストライフを掲げて地面に降り立った。「ウルーーーク！！ 決着を付けにキタよっ！！ 尋常に勝負しな！！」

アルミナが叫ぶ。

「分かっている。喚くな。今日、ここで、決着を付けてやる！ 相手がアシュマでないのが残念だがな」

「言ってるぜ。アシュマだとお前じゃ役不足だったの！ 俺達ぐらいで丁度良いのさ！」

オルバニアンが返した。

「二人掛りでないと勝てない半人前がほざくな」

オルバニアンは、

「だから二人で一人前なんだろう？」

そう言ったが、アルミナが、

「それを皮肉って半人前って言ってるのよ！！」
そう言った。

「え？ そうなの？」

「もっ……」

「夫婦漫才はもうお仕舞いか？」

ウルクが口を挟んできた

「夫婦漫才じゃないわよ！」

「アルミナ、お前も『こちら』側に来ないか？ 強力無比だぞこの力は」

「言っなっ！」

「何故拒む？ 比類なき力だぞ」

「だまれっ！」

「そうか……。では行くぞ！」

ウルクが突進してきた。

「アルミナ、『例の奴』は適時に使うぞ！」

「解った！ オルバニアン」

ウルクはその巨大な剣を振りかぶってきた。

ぶうん！

と、音をたてて剣が振り下ろされた。

しかしオルバニアンは、頭上でそれを

ガツ！

と、受け止めた。

頭上で峰を寝かし、刀を車に回しウルクの左脇腹に斬りつけた。

がきっ！

と、音がして手ごたえがあった。

アルミナも剣を車に回しウルクの右脇腹に斬り付けた。

ウルクは、

ぶうん！

と、剣を左から右へと振り回した。

二人は素早く間合いから外れた。

「うっうっ！！ おのれえっ！ ちょございな！！」

そして衝撃波のようなモノが発生し二人を更に押し戻した。

「流石にやるな」

オルバニアンが呻いた。

ウルクは続いてその巨大な剣で地面を削った。

すると、地面の土砂が石礫されきのようになりオルバニアンとアルミナ

を襲った。

オルバニアンとアルミナは剣を立てて石礫を防いだ。

そこへウルクが飛び込みざま剣を横に薙しのいできた。

それも何とか二人は凌しのいだ。

体が左に流れるウルク。

大質量のものを振り回しているのだからそれは仕方がない。

が、隙は隙である。

オルバニアンがウルクの手を狙って大逸鉄を振るった。

同時にアルミナは先ほど痛打したウルクの脇腹に同じくロンリーストライフで攻撃をした。

ロンリーストライフの一撃は見事ウルクの脇腹にあたって僅かだがヒビを生じさせた。

一方オルバニアンの大逸鉄はウルクの右手首を斬り割っていた。

と、言ってもどうやら鎧部分を割っただけの様だが、それでもウルクにはそれなりに効果があつたようである。

それが証拠に、

「ちっ！」

舌打ちをさせていた。

「兄さんなら、こんな隙など見せなかつた。それはその鎧に護られているという、心の隙に他ならない！ あたしの前でそんな醜態見せないで！」

「アルミナ！ 例の奴行くぞ！」

「わかつたわ！」

「アーアーゲー、アーゲーアー、ゲーアーアー、ゲーゲーアー、ゲ
ーアーゲー、アーゲーゲー」

オルバニアンとアルミナは何かしらの禁呪を唱えようとしていた。

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。」

我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無

無にして全、全にして無………」

「ま、まさか………」

ウルクはその呪文に驚きを禁じえなかつた。

「無限の力、その一端を見せん

無限の力、その一端を見せん
我を死の淵から救いたまえ
我を死の淵から救いたまえ
纏え漆黒の羽根
纏え漆黒の羽根
纏え漆黒の羽根……」

「ブースト!!」

二人は何とブーストを掛けた!

ブーストは強力な呪文だがそれだけ身体に掛かる負担も大きい。
そんな危険な呪文を二人は使ったのだ。

二人は、高速運動を攻撃をウルクに仕掛けた。

「くそ! 姑息な手を使いおって」

ウルクは二人に切り刻まれていった。

ウルクは力尽きて跪いた。

今やボロボロでまともに動くことなど出来ないだろう

「アルミナ! 仕上げだ!」

「分かったわ」

「紛う事なき汝らの

誓いたてたる信条は

天の神に伝わりたもう

悪鬼に対する天罰の

怒りをそこに打ち秘めん

聖なる光よ剣とならん

マジックブレイド!!」

アルミナはマジックブレイドを唱えた。

剣は白銀に輝き、この世にあるもの全てを、切り裂ける力がある
ように思えた。

アルミナは回り込むようにウルクに突進すると、右袈裟に斬りつ

けた。

アルミナのロンリーストライフは肩口から胸のところまで刃が止まった

「こんなの、あの優しかった兄さんじゃない。こんな殺人兵器のようになつて、これを兄さんが望んでいるはずが無い！ 兄さんが余りにもかわいそう。だからお願い、オルバニアン兄さんを楽にしてあげて」

オルバニアンも、マジックブレイドの呪文を唱え終わっていた。

「ウルクよ！ 俺はお前を倒す！ しかし俺はお前をエード・ダ・シアとしてではなく、ウルクとしてお前を討つ！！ エード・ダ・シアを、ウルクと言う呪縛から開放する為に！！」

オルバニアンの大逸鉄は左袈裟に斬りつけ矢張り胸の下で刃が止まった

ウルクはもう瀕死の状態だった。

だが、何かを喋ろうとしていた。

「アルミナ……強くなったな……。オルバニアン、……アルミナを頼む」

「エード……」

オルバニアンが呟いた。

ウルクは息絶えた

そして、オルバニアンたちのブーストは終わり、二人にとって地獄を思わせる苦痛の時間がやって来た。

アルステインも降りられる場所を見つけて地上に降りた。

「しまった！ ここにこんなに遺体があると、召喚獣をよべない？」

「アンタかい……？ 顔変わってないかいアンタ？」

カシアは言った。

「生憎こつちが本物なんでね。悪く言わないで欲しい」

「あんたのその顔は悪くは言わないよ。アンタの素行にはチョツと

問題ありだけどね。大体、人をモンスターの餌代わりにするとはどういうことよ？」

「それは失礼、貴女が人間ならば」

「貴方つて、ホント性根まで捻じ曲がっているのね」

「貴女にそういわれるとはこのアルステイン・ノリトレア、まだまだ性根はまっすぐと言うところですか？」

「もう！ この男子ヨツと顔が良いから私の玩具にしようと思ったけど、予定変更！ 今直ぐ殺すわ！」

「当たり前だ。それが前提条件だ」

四天王の一人、カフルが言った。

「エリクリス、ファラ、メイリーフ、サマ、セツツ、フィラ……」

アルステインが呪文を唱え始めた。

「来るぞ、カシア。ハイ・バハムートだ！」

「汝黄金の瞳を持つ者よ

汝黄金の翼を持つ者よ

罪びとどもが汝を仰がん。

今こそ正義を見せるべし！

汝の為に炎を見せん

出でよ竜神、

バハムート！！」

アルステインは四枚翼のバハムートを召喚した。

死者に配慮して空中を浮遊しての召喚だった。

『ホーリーブレス！』

ティアマツトの口から聖なる炎、ホーリーブレスが吐かれた。

カフルがカシアの前に出た。

手の甲をこちらにかざしたかと思うと光の膜が広がって、直径二メートルほどの盾になった。

「どうだ？ これで『ハイ・バハムート』の最大の攻撃、ホーリー

プレスは防いだぞ？」

『『ハイ・バハムート』ってなに？』

無邪気に（バハムートの口を借りた）アルステインが訊いた。

「お前は自分が何を召喚しているのかも分らずに召喚したというのか？」

『うん』

一々アルステインが喋るたび、うんうん頭を振るのでバハムートがとても可愛く見える。

その時、

『星振る窓よ乙女の心

聖なる調べ届けと願わん

貴方の心に私の心

重ねて紡いで一つとならん

ここより彼方にいる貴方

貴方に会うため扉を開く

テレポーテーション！』

そんな声が虚空から聞こえてきた。

途端に光の珠が虚空より現れて人の形になり実体を表した。

その正体は、ミカ・タキオ、サクラコ・セタ、エミル・フォルテ以下六十三名の生徒と校長ミス・ケリー・サトウだった。

「きゃっ、いったい」

「きゃっ、何かふんずけちゃったわよ」

「こ、これって……血なの？」

わいのわいの騒いでる女生徒に、

「静粛につ！！ これは実戦です！！ 死にたくなかったらすぐさま

整理！！ 私語厳禁！！」

みんなを率いているのはミカ・タキオであった。

「魚鱗の陣！！」

ミカの一言で全員が陣形を組んだ。

一転突破の陣形だ。

突撃でもするのだろうか？

皆手を前の人間の肩に乗せ、またその人は更に前の人の肩に手を添えて……と言う形で先頭のミカまで繋がった。

ミカの両隣には寡黙だけど大好きなジークとチヨツと怖いけど本当は優しいミス・ケリー・サトウに護られ、後ろの両肩にはサクラコ・セタとエミル・フォルテの両名が手を置いていた。

「我は貝殻。耳を傾けよ 潮騒の音がする

我は貝殻。耳を傾けよ 遠い異国の音がする

我は貝殻。眼を見張れ 美しき紅の色

我は貝殻。眼を見張れ 我は螺鈿になるものなり

我、今此処に汝を大きくせしめん

アンプリファイ！！」

ミカがそう唱えると大きなほら貝のイメージが一瞬表れ、そして消えていった。

この魔法は地味なようで、実はその効果たるや、大変な結果をもたらす、脅威の魔法なのである。

カシアとカフルは何が起こるのかと身構えた。

「聖なる女神タテトラム

聖なる盟約に従い、

汝をして我に光の加護を与えたまえ

汝、我を護りたまえ。

シールド、バイ、ハンドレッド！！」

ミカ達は一瞬、光の珠に包まれそのイメージはすぐさま消えた。

「何だシールドか。驚かすでない」

「カフル、魔法を侮らない方がいいよ」

「お前を貫いたというマジックアローか？ あれは相当の念者でなければ出来ぬ魔法だと言うではないか。確か……禁呪という奴であるろうが」

ミカは更に呪文を続けた。

「エリクリス、ファラ、メイリーフ、サマ、セッツ、フィラ……みんなの気の力、私に貸して！」

ミカは聖属性の禁呪を唱え始めた。

一体何を唱えようというのか

「びよびよびよ。

僕リトルチキン。

可愛い？ 可愛い？

可愛いって言わなきゃいじけるぞー

いじけるぞーいじけるぞー

それでもほつといたらふえてやるー

リトルチキンー！！」

びよびよびよびよびよびよびよびよびよびよ……

無数のひよこのぬいぐるみの様な生き物が現れて瞬時にカシアとカフルを生き埋めにしてしまった。

「エリクリス、ファラ、メイリーフ、サマ、セッツ、フィラ……」

ミカはまだ何かを唱えるつもりである

と、言う事は召喚魔法は永久連鎖魔方陣を用いているという事である。

それはミカの左手に描いてあった。

「汝ら聖なる創造主に仕える者よ

汝ら敢えて苦難を求むる者よ

汝らの苦難は茨の道程
汝らの苦難は栄光への道筋
永久の闇に一条の光を放て
汝の敵を撃て

……………」

ミカは呪文の詠唱を終えた。
光の弓矢がそこに出来る。
後はトリガーキーを発声すれば終わる。

「何だこいつらは？ 切つても付いても足で踏みつけても増えるだけだぞ？」

カフルがひよこの群れから出てきた。
そこへすかさず、ミカが、

「マジック・アロー！！」

と、唱えた。

光の矢が凄い勢いで飛んで行った。
光の矢は見事カフルに命中し、何とカフルの上半身がはじけ飛んでしまった。

これこそ魔法アンプリファイの威力であり魚鱗の陣形の意味であった。

魚鱗の陣形は仲間から少しずつ魔力を分けてもらうのに必要だった。

魔法アンプリファイはそれを増幅させるのに使った。

ミカはいわば依り代だったのである。

「次来るわよ。みんなお願い！」

生徒達が念を送る。

「汝ら聖なる創造主に仕える者よ

汝ら敢えて苦難を求むる者よ

汝らの苦難は茨の道程

汝らの苦難は栄光への道筋

永久の闇に一条の光を放て

汝の敵を撃て

……………」

生徒達が念を送り、ミカの手に再び光の弓矢が与えられた。

「カフル？ どこに居るのよ、カフル？」

そう言っただけでカシアがひよこの群れから出てきた。

「マジック・アロー！」

「し、しまった!!」

カシアがそう言った時には既に遅く、上半身をはじけ飛ばされてしまった。

「はあ、凄い威力ですねえ。魔法と言うものも」

『アルステイン』が言った。

「あの、済みませんがどなた様でしょうか？」

ミス・ケリー・サトウが訊いた。

「ああ、そうか。ヨデイです。今はアルステインを名乗っていますか……」

すると後ろから、

「ああ、何てお美しいお方なの……」

「アルステイン様ですって」

「でもヨデイって言ってたわよ」

「今は、アルステインで名乗っているんだから、良いじゃない……」

……ん？ アルステイン？」

「アルステイン殿下!!」

「失礼致しました！ つい口が滑り」

皆その場で跪いてしまった。

「皆さん顔を上げてください。それでは皆さんのお仕事に差し障りがおありでしょうか」

「そうよ！ みんなまだ仕事が残っているのよ！」

まずミカは掌に描いてある無限連鎖魔方陣を消した。

（ばいばい）

（ばいばい）

（またねー）

（もつとかまってー）

（ばいばい）

ひよこたちが消えていく。

「ばいばい。またね。……みんな、魚鱗の陣！」

またミカを中心とする陣形ができ上がった。

「出でよ勇者、聖なる剣と。

出でよ勇者、聖なる盾と。

汝の力誰が為に。

尊い命我らが為に。

黄金の途を一人行かん。

汝をして皆を護る。

ザ・ライフ！！」

その近くで半死だった者、重症だった者、何らかの症状を持った者は皆癒され、立ち上がった。

もちろん、オルバニアンとアルミナも例外ではなく覚醒し立ち上がった。

「ヨディセ……アルスティーン様、アーちゃん……アーチエル王女は今どこに？」

「虜の身なのです。ガルマインの……」

「そんな！ アシユマ先生は今どこに？」

「あそこに居ます」

夜空に指をさした。

いつの間にか雨はやんでいた

そして雲が重く立ち込める空で、雷のような音をさせながら閃光が走っていた。

「そうですか。アシユマ先生、早くアーちゃんを助けてあげて下さい」

ヌルが孤立していた。

主のアーヌはアシユマとの戦いに精一杯で、ヌルに関わっている余裕などなかった。

だから革命軍の魔導機兵部隊が五千機もの部隊でやって来たとしても、そして国際警察軍が五千機もの魔導機兵の部隊でやって来たとしても、分からないのも無理からぬ話だった。

それほどまでに、アシユマとの死闘は気の抜けないものとなっていた。

アシユマは作戦を変えた。

さっきまでの、相手の光の刃五十対こちらの光の刃五十、と言うような対消滅型のやり方でなく、相手の光の刃五十対こちら光の刃特大……と言うような博打を打つような攻撃方法に変えたのである。

「アーヌー！！」

アシユマが叫んだ。

鬼虎が強く輝く。

「行けッ！！」

アシユマの叫びと共に巨大な光の刃がアーヌに向かって飛んでいく

「うっ！！！！」

アーヌが低く唸った。

博打が頭に当たった。

巨大な光の刃がアーヌに当たると、念導境界面で処理しきれずに、アーヌを斬り刻んだのである。

それでアーヌは相当ダメージを食らった。

これはいかんと、ヌルに戻ってみると撃沈寸前だった。

あちらこちらから火を噴いて時たま小爆発を起こしている。

アーヌは頂の小突起に何とかたどり着いた。

その小突起はコクピットであり、アーヌの修復所でもあった。

アーヌはこちらを向きアシュマに向かって叫んだ。

「一時休戦だアシュマ！」

アーヌはコクピットに乗りヌルを急浮上させた。

眼にも留まらぬ速さとはこう言う事を言うのか。

黒龍号は世界一の速度を誇るとうそぶいてはいるが、次元が違つとアシュマは思った。

インカムに音が入って来た。

『アシュマ君。逃げられてしまいましたねえ』

アルステインだった。

「ああ」

『こつちじゃ祭りだなんだの大騒ぎですよ。さっき四天王の内三人を倒しましてね。えらい評判ですよ。特にスコラの学生たちが』

「スコラ？ 来てるのか？」

『ええ、ミカさんを先頭に。今は皆さん怪我人の治療をを行つてますよ』

「そうか。俺は早速ガルマインの所に挨拶に言ってくる」

『またですかあ？ いいですねえ。飛べるって』

「その話は、今度またゆっくり聞いてやる」

『あ、はいはい……あ、アシュマ君、僕も行かなくちゃ。じゃあまた後で』

ヨディはそう言ってアルステインからの通信は切れた。

アシュマは逸早く中央大塔へ飛び、どこか侵入できる所はないか

捜した。

すると天井近くに大窓があった。

そこからの侵入を試みてみる事にした。

窓枠に来た。

窓は開いていた。

何故開けっ放しにしておくのだろうか、辺りを何気に見回すと、

眼の前に、イレギュラーナンバー零零四号、蝙蝠が居るのを見つけた。

二人は互いを見詰め合う形となった

「蝙蝠！」

「アシユマ！」

「貴様に構っている暇はない」

と言うとアーチエルを捜してフロアに下りた。

『アシユマさま！！』

「アーチエル！」

アシユマはアーチエルを見つけた。

が。

アーチエルはガラスのカプセルに入れられていた。

「よく来たな。アシユマ」

ガルメインがそこに立ってアシユマと対峙していた。

「アーチエルを返せ」

「出来ぬ相談だな」

ガルメインはそう言った。

アーチエルの頭にはヘッドギアをかぶせられている。

そのとなりには空のカプセルがあった。

その隙に蝙蝠はまたも逃げた。

「アーチエル！」

アシユマは鬼虎を振り上げた。

「さて、アシユマ」

ガルメインは何かのスイッチを掲げてアシユマの注意を喚起した。

そしてもう片方の手にはモ二八女王を抱いていた。

「このスイッチはアーチェルのカプセルに通じていて、押すとガスが出るようになっておる」

アシユマは数歩下がった。

アシユマは鬼虎をだらりと右手に持つて、

「ガルマインお前の負けだ。民衆が直ぐそこまで来ている。もう終わりだ。降伏しろ」

そう言った。

その時、男がガルマインの側にやってきて、

(四十五階を突破されました。暴徒が直ぐそこまで来ています)
と、告げた。

その時、

「もう逃げられませんよ。ガルマイン」

そう言いながらアルステインが階段から上がって来た。

「観念してお縄につきな！」

オルバニアンも反対側の階段からアルミナと共に上がって来た。

一般の兵士達も階段から上って来た。

じりじりと包囲の輪が狭まる。

「お前の負けだ。ガルマイン」

アシユマが言った。

ガルマインはもう一つスイッチを取り出した。皆一斉に怯む。

ガルマインはそのスイッチを押した。

すると硬質ガラスの壁がせり上がってガルマインとアシユマ達を分けてしまった。

「しまったあっ！」

叫んだのはアルステインだった。

ガルマインはもう一つのカプセルに乗りカプセルのふたを閉じた。

「わしは負けはせん！最後の勝利者はわしなのだあっ！！ わあっはっはっはっはっはっ！！」

そして二つのカプセルはそこまで通じているチューブの中へと吸

い込まれていった。

あつ、と言う間の出来事だった。

モニハ女王は、

「何故じゃ、ガルマイン！ 何故わらわを見放すのじゃ！ ガルマイン！！」

と、泣きじゃくった。

アシユマが鬼虎を振るって『入り口』を作った。

モニハがビツクリしてアシユマの方へ眼をやる。

アシユマはモニハ女王の事など構いもせず無言でアーチエルのカプセルを飲み込んだチューブにその身を投げ込んだ。

続いてアルステイーンが入ってきた。

モニハはまたビクツとして身を硬くした。

アルステイーンは膝を折り目線をモニハと同じにして

「モニハ。アルステイーンです。長い事苦勞を掛けて済みませんでした。これからはもう寂しい思いをさせません。さあ、こちらへおいでなさい」

「アルステイーン……お義兄……様」

「そうですよ。モニハ。向うにはルーランも居ます」

「ルーランお兄様……」

「ああ、ルーランだ。モニハ。さあ『お兄様』だって言っても初対面だからな。始めましてかな？」

オルバニアンは照れながら言った。

「お兄様！」

モニハは何故かオルバニアンに抱きついて来た。

「おう、こっちに来たか！ モニハ。よくしよしよし！」

「お二方、共に、ガルマインが言っていたのとは違って、お優しいんですのね？」

「もちろんですとも」

アルステイーンが言った。

「ガルマインがこの程度で引き下がるとは思えない……まさか『バ

ヴェル』を使用するつもりか!? だとしたら此処は危ない! 逃げなければ!」

アルステインは重大な事に気が付いた。

「逃げるつたつて俺達だけで逃げるのか!?」

ロイヤルパレス

「大丈夫です。この王宮市は防災都市でもあります。市民を速やかに且つ安全に数十万人規模で非難させる事が出来ます。これからは時間が勝負です。さあ、急ぎましょう!」

アルステインたちは、急いで市民の非難作業にあたり始めた。そして、

「後はアーチエル王女だけ。たのみましたよ。アシユマ君」

アルステインは全ての命運をアシユマに託した。

蝙蝠はどこへ行くともなく逃げていた。

「クソ! どこへ行けば良いというんだ……クソ! 零零式のお陰でとんだ眼にあった」

「行くところならあるぞ」

「何!?」

蝙蝠は辺りを見回した。

「上だ零零四」

「なに? なんだと」

蝙蝠は上を見た。

「! 零壹参!」

「貴様の行く所は地獄と言う所だがな」

「ほざくな零壹参! 返り討ちにしてやる」

蝙蝠はそう言い、急上昇をした。かなり速い。

そして、エディードに向かって急降下を開始した。

そしてお得意の超音波攻撃を囓ましてきた。

「くっ!」

エディアードは片方の手で、片方の耳をかばった。

剣を持っている側の耳は捨てた。

蝙蝠が羽の縁で斬り付けて来た。

エディアードが剣でそれを防ぐ。

ギギギ！

と、言う音と共に摩擦の振動を剣の柄から掌たなこに感じた。

剣の棟を見してみると深く抉えくれた傷跡があった。

「その剣もいつまで保つかな？」

蝙蝠がにたりと笑った。

「貴様の剣はミスリル製。俺の羽の縁は魔導石製。どちらが硬いか分かるよな？」

蝙蝠は急上昇をし、またエディアード目掛けて急降下をして来た。蝙蝠がエディアードに斬り付けるといふ時にひょいと蝙蝠の進路上にその身を晒した。

蝙蝠は

(自殺でもする気か?)

そう思った。

そんな事はお構い無しにエディアードは剣を思い切り振り上げて振り下ろしながらその剣を投げた。

蝙蝠は驚いたがもう遅い。

速度のついたエディアードの剣を避ける事も防ぐ事も出来ずに頭から尻までを貫かれた。

幅広の剣なのでほぼ両断されたといっても良いだろう。

「俺は生きている。お前は死んだ。どちらが強い分かるよな？」

エディアードは落ちていく蝙蝠の死骸を眺めていた。

アシユマはアーチェルの乗ったカプセルを追ってチューブの中を進む。

チューブの先のほうに光が差し込んできた。

「出口か？」

アシユマは呟いた。

そしてチューブの外に出た。

しかしそこは『出口』ではなかった。

それだけでなく厄介な奴が居た。

「ふっアシユマ・アトーか。お前のお陰でどれだけ辛酸しんさんを嘗なめた事か」

喋ったのはアビスだった。

何故こんな所にいるのだろうか？

「それはこっちも同じ事だよ」

陰から出てきたのはなんとリイナだった。

「リイナなんでこんな所へ？」

驚いたのは逆にアシユマの方だった。

「アビス。お前が失脚してガルマインの元で働いていると聞いたときは、正直驚いたよ。プライドの高いお前の事だ。何とかして上に這い上がるうとしたはずだ。お前が失脚したという事はイレギュラーナンバーズ計画が頓挫したって事さ。とすれば残るはこのバヴェルの研究成果を盗んでまでも中央に返り咲きたいと思う事だろうね。だからバヴェル本体かバヴェル全体の情報が集まりそうな所にいるかと思つたよ。ここみたいだね」

リイナは一気に捲くし立てた。

「随分饒舌になったもんだねえ。アタシが一番手潮にかけて作り上げたのに、アタシに逆らうようになって……そうさ、事の始まりはアンタだったんだよ！ アンタがアシユマを殺し損ねるだけでなく、寝返って悉くあたしの邪魔をしてくれた。あんただけは許さないよ！ 零零参！」

「アシユマ！ ここは私に任せて先に行け！」

「しかし！」

「勝算がある！」

「本当だな！？」

「本当だ！」

「分かった。任せるぞ！」

アシユマはチューブとチューブの中継地点を後にした。

ここから先は砂漠である。

「まさかバヴェルを使おうというのか？ …… アルステイン！

聞こえるか！？」

アシユマはインカムを使った。

『そんなに大声出さなくとも聞こえていますよ』

「ガルマインはバヴェルを使用するつもりだ。皆を安全な所へ非難

させてくれ！」

『もう着手していません。ご安心下さい。後はこちらにお任せ下さい』

「分かった、任せたぞ。 …… ガルマインめ ……！」

アシユマは舌打ちをし、先を急いだ。

リイナはアシユマに貰ったククリを逆手に持ち、アビスを中心にまわっていた。

アビスはそこにある大岩を椅子代わりにし、膝に頬杖ついてニヤニヤとしながらリイナを見ていた。

アビスはこんな所へ馬もないだろうに、乗馬服を着ていた。

手には乗馬鞭を、腰にはサーベルを佩^おびていた。

「どうしたんだい？ 勝算があるんじゃないやなかつたのかい？」

「お前もイレギュラーナンバーだね」

リイナは断定した。

「ご名答」

「ナンバーは幾つだい？」

「零壹弐」

「いつ人間やめたんだい？」

「忘れたね。あんたがスコラに居る時にやまだ人間だったんだけどねえ」

「で、能力は？」

「取り立ててこれと行ったものは無い」

「成る程、教えないって訳か。それも当然か」

「アタシは教えたよ。後はアンタの解釈次第」

「そうかい！ それじゃあ行かしてもらおうよ」

そう言ってリイナは前傾姿勢で走り出した。

だが思った程、速度が出ない。

（砂か！ 厄介な）

思いながら更に前傾姿勢で走った。

（速く！ 低く！）

リイナは走ってやって来る。

（いまだ！）

リイナのククリがアビスへと唸る。

顔に強い衝撃を受け、リイナが後ろへごろごろと転がった。

「!?」

「私を斬るのではなかったのか？」

（何が起きた？）

リイナは何が起きたか一瞬理解できなかった。

リイナは暫く考えて、

（高速攻撃だ！）

そう理解した。

リイナもイレギュラーナンバーだった者だ。

こんななりでも、今でも常人よりかは、スピードもパワーもある

感覚器官だって鋭い。

そのリイナがアビスの攻撃を補足し切れなかったのである。

慎重に行かざるを得ない。

「どうしたんだい？ 口ばかりで何もしないのかい？ アタシはお

前をそんな子に育てた覚えはないよ」

「うるさい！ 母親面するな！」

「でも世話をしたのはアタシじゃないか。殺人のイロハをね。いわ

「ばアタシはお前の師匠筋だ。だからお前はアタシに勝てないのさ。一生ね」

「勝ってみせる！ どんな手を使っても！」

「無駄だね。あたしの能力は基礎体力の全体的な向上。つまり常時ブーストを噛ましているようなものさ。これと言って、突出した部分は無いけどね」

「じゃあ、これならどうだい」

リイナは腰に巻いたポーチから一つのアンプルを取り出した。

「そのアンプルは？ ……まさか、あのアンプルかい？」

「そう、私が『蜘蛛』になるアンプルさ」

「そう残念だねえ。確かにそれは基礎体力の向上につながるけれどあたしの能力には及ばない」

「さあね？ やって見なければ分からないよ？」

リイナは圧力注射を用意して身体に押し付けた。

「……うっ！ うっうっ……うっう……」

リイナは低く唸り声を上げて体が変化し始めていた。手足は伸び、体は成長し、顔の作りは大人になった。

「……でもね、それでもあんたは私に遠く及ばないよ。なんとその時リイナは呪文を唱え始めた

「汝清らかなる声音持つ乙女よ。

我と血の盟約を結ばん。

幾星霜の刻超えて

今、汝の声音貰い受ける。

サイレント……」

「ぐっ……」

アビスの声は出なくなった。

「これは、アンタにテレポーションで逃げられなくしておくのと、ブーストの呪文を使わせないためさ。何故なら今から私が……」

「アーアーゲー、アーゲーアー、ゲーアーアー……」

途端にアビスの顔色が変わりその場所から動こうとした。

その瞬間リイナは中指の先から粘着性の糸を出した。

アビスは糸に絡まり脚の自由を奪われ倒れてそれに更に絡まった。

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無

無限の力、その一端を見せん

我を死の淵から救いたまえ

纏え漆黒の羽根

ブースト!!!」

リイナは呪文を詠唱しきつた。

同時にアビスが、絡まっている糸をちぎり解き終わった。

「いくよ！ アビス！」

これから一分半の間リイナの身体能力が極限まで、引き伸ばされるのだ。

アビスはサーベルを抜いた。

リイナはククリを下からすり上げた。

アビスは辛うじてそれをサーベルでかわした。

そして今度はリイナがククリを振り下ろした。

アビスがサーベルを振り上げてそれを防ごうとする。

リイナのククリが振り下ろされる。

サーベルとククリが交差する。

そしてサーベルが粉碎された。

驚愕するアビス。

どうやら、アビスの身体能力は超えているらしい。

「止め！」

リイナはそのところは甘くない。

カタは一気に付ける。
アビスの表情に恐怖の色が刷^はかれた。
リイナは左手のククリでアビスの腹を存分に薙ぐと、今度は右手のククリでアビスの頭蓋を横に割った。
アビスは膝を付き、脳しように撒き散らしながら、そのまま後ろに倒れた。

「忘れよ止めよ解き放て
我に一時の安息の時を与えたまえ
我に枕とベッドを与えたまえ
開放の彼方へ
リムーブ・スペル
安息は我とともに」

リイナはブーストを解いた。
「うっ、がああっ!!!」
途端に体中に激痛が走る。

リイナは腰のポーチから小さなビンを出し、その蓋を開けそして飲んだ。

しかし上手く飲めない。
それは鎮痛剤なのか暫くすると激痛に悶える事は無くなり、ミニ・サイコ・フライヤーの所まで行き、ふらふらと黒龍号のいる所へ帰って行った。

第八節 決着

これより数時間前アヘイピア宇宙センターでは一機のサイコ・フライヤーに火が入ろうとしていた。

何回かの有人月ロケット探査で得たノウハウを元に月へと臨む所だった。

もちろん乗り込んでいるのは七賢人と不思議な箱、聖櫃である。

「これで地球とも暫くおさらば。人類滅亡の有様でも見ていきましょう」
う

「四天王は上手くやってくれますかな？」

「その為に彼等を派遣したのですからな。ガルマインに勝手にバグエルを使われては困りますからな。上手く運用してもらわないと」

「然様、然様」

いま、そのサイコ・フライヤーに火が入り、弾かれたように空へと吸い込まれて行った

アルステイン達と大発令所の面々の再会は地下壕の司令部で行われた。

「ヨディ！」

相変わらず昔の名でエファールはアルステインを呼んだ。

「エファ！」

二人は抱擁しキスをした。

「なに甘えてんだか。戦はこれからが正念場だったのに……」
アルミナが呆れて言った。

「そのとおりだった……。此処を司令部に設定する！ 関係諸部隊に連絡！ まずは外の状況を確認する事から始める」

アシユマはチューブの中を飛んでいた。
どれ位飛んだろう。

三十分程は飛んでいるはずだ。
前方が少し明るくなってきた。

「出口か？」

アシユマが出た先はまたもや出口ではなくカプセルの中継部分だった。

「ちっ！」

アシユマは舌打ちしたのには理由があった。

ガデウィンが門番のようにそこに立つて居たからだ。

ガデウィンはかなりの部分を改造されていて生身の部分は殆ど残っていない。

脳は念導境界面用にとって置かれたようだ。

普通のマシンナリービーイングとも違う。

多能力的にはゲールと同等かそれ以上。

マシンナリービーイングにはひどい目に合わされている。

油断はしないほうが良い。

ガデウィンが地上から浮き始めた。

両手に刀を握った。

どうやら二刀流のようだ。

そこから、ガデウィンは高速移動で攻めてきた。

アシユマはそれを紙一重で見切った。

必要最小限の動きでかわし、ガデウィンに隙ができるのを待った。

が、段々と攻撃の回転が早くなってきた。

アシユマは徐々に斬り刻まれるようになってきた。

アシユマは呪文を低く静かに唱え始めた。

唱える呪文はもちろんブーストである

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無
無限の力、その一端を見せん
我を死の淵から救いたまえ
纏え漆黒の羽根
ブースト！！」

これで、ガデウィンより優位に立ったはずだ。
が、ガデウィンは更にスピードを上げてアシユマを追い詰める。
「ッ！ くそっ！」

アシユマはここで更にブーストの二度掛けを行つたため呪文を唱え始めた。

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。
我はそこに汝はここに、
無にして全、全にして無
無限の力、その一端を見せん
我を死の淵から救いたまえ
纏え漆黒の羽根
ブースト！」

するとガデウィンは更にスピードを上げてきた。
そして二つの刀で攻撃をしてきた。
「うっ！」
アシユマも反撃を試みるが速すぎて眼で追いきれない。
それでもかわしているのだから大したものだ。
アシユマはスピードを三度掛けすることにした。
このままでは負けてしまうのは眼に見えていたからだ。

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。
我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無
無限の力、その一端を見せん
我を死の淵から救いたまえ
纏え漆黒の羽根
ブースト！」

アシユマは出来ればブーストの四度掛けはしたくなかった。
幾ら使い慣れているとはいえ禁呪は禁呪。
ブーストのダメージがそれなりに残るからである。
ガデウインはどうか？

……どうやらガデウインはそれ以上スピードを上げられないよう
だ。

最初のブーストから時間がたっている。
急いでケリを付けねばならない。

アシユマは飛んでくるガデウインの正面に立った。
ガデウインは刀を交差させてアシユマ目掛けて飛んできた。
アシユマは珍しく正眼。

ガデウインが飛んでくる。
動きがスローモーに見える。

ガデウインと交差する瞬間、アシユマは、すっ、と下へ潜り込み、
鬼虎を高く掲げ、ガデウインの頭頂部から臀部までを一気に斬り裂
いた。

斬り裂かれたままガデウインは暫く飛び続け
その後大爆発を起こして四散してしまった
アシユマはブーストを解いた。

身体に痛みは走るが思ったほどでもない。
アシユマは自分にヒーリングオールを掛けると再び立ち上がって
ウィングを掛け再びパイプの中に身を躍らせた。

アシュマはパイプの中をくねくねと進んでいた。

先に光が見える。

今度こそ出口だろうか？

アシュマがそこをを抜けると出口ではなく、そこから先はフレームだった。

だが、フレームの隙間から身体をすり抜けさせると、その身を高く上らせ眼下に見えたのは……、

「バヴェル！！」

そう、そこに存在していたのは破壊の権化『バヴェル』だった。

「！アーチエル！！」

アシュマは弾けた様にバヴェルのコクピットの方へ飛んで行った。コクピットは二段に分かれており、上の方にガルマインが、下の方にアーチエルが、あのカプセルごとバヴェルに取り込まれていた。カプセル……コクピットに閉じ込められているアーチエルの目の前にやってくる。

アーチエルは眠っていた。

傍目にはそう見えた。

「アーチエル！」

アシュマは、アーチエルの目の前で、彼女の名前を叫んでみた。

反応が無い。

「くそッ！」

アシュマはコクピットのガラスを思い切り叩いて見せた。

矢張り反応が無い。

アシュマはコクピットから少し離れて鬼虎を上段に構えた。

『止めておけ、アシュマ』

ガルマインの声が、拡声器越しに聞こえる。

『もう、バヴェルは動き出す。その強大な念導境界面の前では、鬼虎とお前の念導境界面は赤子同然。念導境界面同士の親和など考えられぬ。ここから早々に立ち去れ。いや？ その前にアーヌ殿が片付けてくれるようだ』

「なに？」

そう言ってアシュマは辺りを見回した。

しかしアーヌの姿どころか、気配すら感じられなかった。

『起動キー始動!!』

アーチエルは少し眉根をよせ苦しげな表情をした。

『エナジア起動!』

バヴェルの六百六十六億のエナジアのケースが一斉に起動した。

アシュマは再び鬼虎を振り上げた。

「無駄な事を……」

ガルマインはそう呟くと、小指を少し弾くように動かして見せた。するとアシュマは、何かに弾かれたように吹き飛ばされ、地面をごろごろと転がった。

『メイン回路、アーチエルに接続!』

アーチエルは仄かに燐光を放って輝きだした。

だがその表情は額に汗を浮かべ、眉根をよせ、苦しげに喘ぎ始めた。

『浮上!』

ガルマインはバヴェルを浮上させている。

アシュマは接近を試みる。

しかしその度に弾き飛ばされては地面を転がった。

バヴェルは浮上を続け天幕を剥ぎ取り、遺跡の壁を削りながら地上へと出た。

それは地震を引き起こし、王宮市にも伝わった。

どーん!

下から突き上げるような揺れだった。

それは立ち上がれない程大きな揺れで、皆は地面に這いつくばるしかなかった。

王宮の中央大塔も東西南北四つの大塔は悉く崩れさった。

「始まったか!？」
アルステインは分厚い装甲の地下壕で口を開いた。
地面には亀裂が走り、大地は割れ、家々は皆崩れ去り亀裂に落ちて行った。
バヴェルは浮上を完了した。
地面の揺れも収まった。

「うわあっ!! あれは何だ!？」

「民の中から驚きと恐怖の声が上がった」
外部に設置してあるカメラからの映像が、避難所の各所に設置してある大パノラマモニタに映し出される。

そこには地上より、塔の様に遙かに上空にそびえる、黒い影が映し出されていた。

司令所のアルステインもそれを見て驚く。

「バヴェル……だ……あなたは今、バヴェルと戦っているんですね
? アシユマ君」

アシユマが再びバヴェルに近付こうかと言う時、

「アシユマ! 待たせた。先程の再戦だ!」
声が上がって降ってきた。

アーヌだ。

「今はそれどころでは無い! アーチエルを助けなければ!」
アシユマは叫んだ。

「我との戦いが先よ!」

「いつからガルマインの手下に成り下がった? アーヌ!」

「これも因果なものでな。このバヴェルを護るのも仕事の内よ。それになアシユマ。諦めろ。一度バヴェルに取り込まれた者は、二度とその脚で地上を踏む者は無いという。ガルマインとてそれは同じ。

二人とも二度と戻っては来れないだろうよ」

「それを先に言え。今ならまだ間に合うかも知れん！」

アシユマはそう言うのと上昇のスピードを上げアーチエルを目指した。

「諦める！ もう無駄だ！」

アーヌはそう言いながら天龍鬼の光の刃を飛ばして来た。

巧みに避けるアシユマ。

アシユマは更にスピードを上げる。

しかし頂上部分に届くにはまだまだ上だ。

アーヌがアシユマの背後を取った。

アーヌがアシユマを斬り付けた。

アシユマは振り向きざまアーヌの天龍鬼を弾いた。

ガルマインはバヴェルを回転させようとした。

王宮市に攻撃しに行くためだ。

が……。

「何故だ？ 何故動かん？」

ガルマインは苛いらついた

ガルマインはその苛つきの中、あることを理解する。

「小娘め。ワシの仕事の邪魔をするか……！ ただ部品に徹していれば良いものを」

そう、アーチエルは無意識の中、必死にバヴェルの機能を制限して、ガルマインと戦っていたのである。

「ふむ。そうしたければそうするが良い。ここからでも攻撃は出来る」

そういうとガルマインは、六百六十六段あるバヴェルの外部リングを回転させ始めた。

リングとリングの間には放電現象が起こりそして終に、巨大な口径のビーム砲が発射され、近場の砂漠から草原、森へと決りながら

市街、そして崩れ去った五大塔を完全に粉碎した。

続いて、バヴェルの回りには、暗雲が立ち込め、バヴェルを中心に雷鳴が轟き始めた。

暴風が吹き荒れ、雷が降り、雷は随所に鳴り響いては王宮市をも巻き込んだ。

家々は崩れ落ち、燃え上がり、建築物と言つ建築物はたちまち崩れ去った。

王宮市は炎と雷と嵐と雹とで攻められ、王宮市は今まさに地獄絵図と化していた。

ビーム砲は今も発射され続けている。

一方アシユマと、アーヌはまだ戦いを続けていた。

ガルマインのバヴェルの発する雷光の中、戦いにくそつではあったがいまだ両名も健在であった。

「邪魔をするな！」

「女への愛情に溺れたか。愚かなりアシユマ・アトー」

「お前には分からぬ。アーヌ！」

「それは兵法の妨げにしかならんぞ」

「今は兵法云々どころじゃない！」

「愚かな」

アーヌはアシユマに大上段から斬り付けた。

アシユマは鬼虎を横に寝かして頭上に掲げアーヌの強打ちを何とか凌いだ。

そしてアーヌは今度はアシユマの下から斬り上げた。

アシユマは更に速度を上げて上に昇りアーヌの刃からすり抜けた。

アーヌは、なおもアシユマを追った。

「くっ！ しつこい」

アシユマはなおも速度を上げ、とうとう頂上部までやって来た。

「ガルマイン！ アーチェルを返してもらつぞ！」

『その前にアーヌを何とかした方が良くないかねアシユマ君？』

ガルマインは応えた。

「アシユマ、後ろがから空きぞー！」

アーヌがアシユマに詰め寄る。

アーヌ必殺の上段打ちだ。

アシユマはそれを振り返りざま横に払った。

秘剣・万の眼を使っていたのだ。

アシユマは頂上部の更に真ん中、すぐ下にはバヴェルの重力の坩堝『漆黒の門、裁きの扉』の出口が見えていた。

出口と言っても比喩的に言っているだけで、こちら側も『漆黒の門、裁きの扉』である事には変わりがない。

アシユマはその口の丁度真ん中で、鬼虎を顔面の前に置いて何かをぶつぶつと呟いていた。

「とうとう戦う気になったか」

アーヌが言う。

「一回だけだ。一回だけ付き合ってやる」

アシユマが言った。

「その代わり卑怯な手も使う」

アシユマが続ける。

「一回で十分。卑怯な手でも何でも構わん。来い！」

「鬼虎よその力の一端を我に貸し給え」

鬼虎が銀色に輝き始めた。

「行くぞ」

アーヌがアシユマに向かって飛び始めた。

八双の形だ。

アシユマもアーヌに向かって飛び始めた。

顔面に鬼虎を付けた奇妙な形だ。

鬼虎は銀色に光ったままだ。

アーヌはどんどん近付いてくる。

アシユマは剣を前に倒しながら言った。
「ブースト!!!」
と。

アー又は一瞬の出来事に対応し切れなかった。
一瞬裡に加速したアシユマはアー又の中腹を鬼虎で突いていた。
白銀色に光った鬼虎は見事アー又の背までをも貫き通していた。
「み、見事だ……卑怯でもなんでもない……ただ、無想剣でないのが残念だな」

アー又は話した。

「七賢人と……ケリを……付けたいか？」

「七賢人とケリ？」

「ならば月へ行くが良い」

「月!？」

「そうだ。我がヌルが運んでいってくれよう」

「ヌル? どこにある？」

「お主なら感じる事が出来よう……」

「使い方が分らん」

「ヌルの頂上がコクピットになっておる。そこに入って念じるだけでよい……そう、月へ行く前に、ヌル本体を無に帰してくれ。……でないとなんか成仏できぬ魂が……いや、それは言うまい。……兎に角、始末してくれ」

「? ……相分かった」

「神人を……聖櫃を倒せ」

「神人……聖櫃？」

「それが今回の一連の騒動の根幹だ」

「アー又……」

「それでは行く」

アー又は何と自分の力で鬼虎を体から抜き取って行った。

アー又はそのまま重力の坩堝へ落ちるしかないのだ。

アシユマはアー又を助ける事も出来たが、それでは彼のプライド

が許さないだろう。

アシユマは、ただそれを見守る事しか、出来なかった。

「さらばだ……また会おう」

(『また会おう』？ この重量で極大に曲がった空間の中では、アー又とて無事ではあるまい？)

アシユマは空耳かと自分の耳を疑った。

アー又は漆黒の闇の中で身体を軋ませながら思った。

(そうか、我は……ワシは……思い出した……ワシは……)

アー又は何か重大な事を思い出していた。

時間が無い。

アーチェルをガルマインの魔の手からアーチェルを救わなければならぬ。

頭を直ぐに切り替えたアシユマは、コクピットのある所へ戻った。

アシユマはコクピットのある所へ戻ってきた。

そして、

「ガルマイン！ アーチェルを返してもらおうぞ！」

アシユマはガルマインに向けて言った。

『無駄だと言ったはずだ』

ガルマインは軽く手を動かした。

すると、蛇のような頭を持ち、くねる胴体を持ったビーム砲がアシユマを狙った。

また、ガルマインが軽く手を振った。

すると、ビーム砲群は一斉に発射された。

アシユマは一応警戒して念を強めた。

が、命中前に収束されたビームの束は意外な圧力でアシユマの念導境界面を破らんとした。

「ほうこれを凌ぐとは」

ガルマインは小さく呟くと、また手をわずかばかり動かした。するとビームの砲門が倍に増えた。

アシユマは念導境界面を破られまいとしてまた念を強くした。

収束されたビーム砲は更にアシユマを追い詰める

アシユマはたまらずバヴェルの表面を飛び回り始めた。

「ビームを収束させないつもりか」

それだけでなくアシユマは光の刃を放った。

だが、それはバヴェルの表面で弾かれてしまった

アシユマの渾身の光の刃も六百六十六億もの数を誇るエナジアが発生させる擬似念導境界面には敵わないのか？

その時、ふっと、バヴェルの念導境界面が、弱くなったような気がした。

アシユマは間を置かず特大の光の刃をバヴェルへとぶち込んだ。

アシユマの光の刃はバヴェルの念導境界面を突き破り、バヴェル表面に届いた。

バヴェルに大爆発が起こる。

が、それは巨大なバヴェルにとっては蚊に刺された程度だろうが。

「おのれ、アーチエル。そうまでしてワシに逆らうか！」

ガルマインは右手を軽く握る。

アーチエルが苦しみ始めた。

バヴェルの念導境界面が元に戻った。

（なんだったんだ？ 今のは……まさかアーチエルが！？ ……ア

ーチエルが危ない！）

アシユマはアーチエルの元へと急いだ。

三度邂逅することとなったアシユマとアーチエルとガルマイン

アーチエルはポロポロになっていた。

「貴様！！ アーチエルに何をした！？」

『うるさいハエめ』

ガルマインは再びビーム砲を向けた。

アシユマはそのビーム砲群に突っ込んで行った。

『馬鹿かアイツは。自ら突っ込んで行って』

遠目では蛇のように見えたビーム砲も近めで見ると砲の直径が十二〜三メートル以上もある代物だった。

アシユマは（一概には言えないが）魔導砲クラスのビーム攻撃を何百も何千も受けているのだ。

念導境界面が破られそうになって当然だろう。

そのビーム砲群に突っ込んで行ったんじゃない。

ちゃんと攻撃を展開していた。

鬼虎を振るって、光の刃で。

しかし幾百幾千幾万もある砲塔の内の一パーセントにも満たないだろう。

絶望的な数の差だった。

案の定、アシユマは包囲されて、段々と潰れてしまっただ。

念を極大まで強くしたのに、念導境界面が破られそうだ。

アシユマの念導境界面が処理できるエネルギーの総量を、外圧が上回るうとしているのだ。

（アシユマさま。……アシユマさまなら大丈夫です）

アシユマの頭の中に声が響く。

（アシユマさまはあの殻兵器の爆発でも帰っていらしたんですもの。今度は鬼虎があるんですもの）

（アーチエル！ アーチエルなのか）

（はい！）

（確か、アーヌが何か言っていた筈だ）

『……鬼虎はそれ自体が記憶素子であり、アシユマ、お主の身体自体がプラズマ化した時、お主の自我を保ちつつお主の身体構造を素粒子レベルで保持している。この時の情報はお主の意思である『念』と鬼虎の記憶素子とで、力場の状態を補完しあっている……』

いわばアシユマの身体自体が、念導境界面でありエネルギーの塊だった。

（あまり無理をなさらないで？ アシユマさま）

「わかっている」

『うおおおおおっ！！ ばかなっ！！ 有得ん！！ あれだけのビーム砲の直撃をまともに受けて、生きていられるなどと…… 有得ん！！』

「では今度はこちらから行かせてもらおうか？」

『おお！ 来るなら来い！ 今度こそ叩きのめしてやる』

ガルマインは気焰を揚げた。

アシユマは、すーっとガルマインの目の前にやって来た。

ガルマインは両の手を広げ、

『いけ！！』

そう叫んで全ての武器をアシユマに向けた。

移動式のビーム砲座。

半固定式のビーム砲座。

プラズマ放電。

鉄ミミズ。

全ての武器を使用してガリマインはもう一度アシユマを追い詰めようとした。

全ての攻撃がアシユマに集中する。

だがアシユマが自分と外部エネルギーとの関係に、真に気付いた今はもう、恐れるものは何もなかった。

アシユマは瞬間的に鬼虎の力を解放した。

アシユマの意思一つでスイッチが入るが如く。

瞬時にアシユマの周りに黒い膜が張られる。

全てがアシユマの中で渾然一体となしてエネルギーに変換された。

「どうした？ ガルマイン。この程度なのか！？」

アシユマはガルマインにそう言った。

「ではこちらの番だ」

アシユマはアーチエルのカプセル（コクピット）の上に来て硬質ガラスで出来ているカプセルの蓋をはがし始めた。

『や、止める！ メイン回路が傷む！』

「何がメイン回路だ！」

アシユマは体温を常温にした。

アーチエルに火傷を負わせないためである。

だが、未だアシユマ自身がエネルギーの塊であるということはいくらまで言ってもなかった。

アシユマは鬼虎を見た。

『システム本体に障害発生。修復しますか？ はい、いいえ』

アシユマは迷わず『はい』に触れる。

アシユマは蓋を引っぺがすとアーチエルに囁き掛けた。

「眼を開いて。アーチエル。愛しき人よ」

そしてアシユマはアーチエルに口付けをした。

口を解く

—— 暫し時間が流れた。

『……わはははは！ 死んだのだ！ 貴様のせいだな急激に『気』圧が下がったからだ！ 分かったら元に戻せ。メイン回路としての役には立つからな！』

アシユマはアーチエルが被らされてるヘッドギアをゆっくりと外した。

『や、止める！ そんな事したらインナーケーブルが引きちぎられて……？』

「ごろんと転がったヘッドギアにはそのようなものは無かった。

『ば、馬鹿な！ インナーケーブルに接続もせずに、主人であるワシの要求を、拒んでいたというのか！？ この娘は……』

アシユマはガルマインの話はさて置き、アーチエルの手足の戒めを解くとアーチエルを抱えあげた。

するとゆっくりとアーチエルが眼を覚ました。

アーチエルは暫くぼーっ、としていたがアシユマを認めると、

「アシユマさま！」
抱きついて来た。

『アシユマ・アトー。さらばだ。お前が、邪魔をしていた回路を除いてくれたお陰でバヴェルを自由に動かせるようになった。これから王宮市を取り戻す。そしてその次は世界だ！』

バヴェルは反転をし始めた。

進路を王宮市に向けている。

『漆黒の門、裁きの扉』を使うつもりだろう。

アシユマが、

「アーチエル、ガルマインを殺らねば王宮が……いや、世界が滅ぶ」
アーチエルに言った。

「相分かりました。それしか手が無いのならば……」
アーチエルも同意した。

「痛み入る。待て！ ガルマイン・デッド！ いざ尋常に、勝負！」

「なに？ 勝負だと？ 剣客風情のお前と王にまで登りつめたワシとが、何故勝負をせねばならんのだ？」

「問答無用！ 最早、戦うのみ！」

アシユマはそう叫んだ。

ガルマインは何かを確信したように、

「矢張りワシの野望を最後に阻む者はお主であったか、アシユマ・アトー……」

と、咆哮した。

「最早、言葉は要らぬ。刀を交えるのみ……」
アシユマも吼えた。

コクピットを降りその陰から出てきたのは、最早ヒトと呼ぶには程遠いモノ……これが現在のガルマインだった。

その姿はといえばチューブやケーブル、コード等でぐるぐるに巻かれ、それはガルマインの身長を遙かに超え強化外骨格の様相を呈し、背には禍々しくコードとチューブとケーブルで出来た翼竜の翼が与えられていた。

武器は右腕と同化していて刃渡り四尺超の諸刃の大鉈おおなたの様な物だった。

最早ヒトとしての要素は一欠片も無く、アシユマは

「哀れな……」

一言呟いた。

そのガルマインが

「いくぞ!!」

気を吐いた。

ガルマインの方が突込みが速く、のっけからアシユマを圧倒した。このときには、既にアシユマの身体は通常の状態に戻っていた。

「くっ!!」

アシユマが受けてそして圧された。

アシユマの後ろにはアーチエルがいる。

退くわけにはいかなかった。

アシユマは力任せにガルマインを押し戻した。

「ウゲッ!!」

ガルマインは大鉈を大上段に振り上げて、アシユマに斬り掛かった。

技・速さ・力どれを取っても見事な一振りだった。

が、アシユマはそれを掻い潜りガルマインの胸を抜いた。

「ガッ!!」

手ごたえは十分にあった。

アシユマは振り向いた。

ガルマインも振り向いた。

腹部を見ると、ぱっくりと肉が割れ、赤々とした傷口が見られた。だがその傷口はチューブやケーブルなどで埋められてしまった。

「くそっ!!」

アシユマは悪態をついた。

ガルマインは今度は横に薙いできた。

アシユマはそれを掻い潜り鬼虎を二閃して脚を斬り飛ばしてしま

った。

空中戦だからできる芸当である。

アシユマはまた後ろを振り返った。

すると、ガルマインがチューブやケーブルで脚を修復しているところだった。

「これではきりが無い」

そうアシユマは、こぼした。

「埒が明かん！」

アシユマは右の脇構えからガルマインに突っ込んだ。

すると、ガルマインは両腕を前に突き出した。

「？」

アシユマは何かを感じづき、自ら突進を止めた。

ガルマインは更にそこから数百本、数千本ものチューブやケーブルの触手でアシユマを包もつとした。

アシユマは間一髪、離れて難を逃れた

「ガルマインよ！ 最早、尋常な勝負はしない。そういうことか！？」

「くくく。戦いは勝てば良い。それが定石だ」

「そうか、そつちがその気ならこちらにも考えがある！」

「どうするのだ？」

「鬼虎の力を解放する！！」

「まだそんな青臭い事を考えていたのか？」

ガルマインはそう言って両手を広げると何千本もの触手がアシユマを取り囲んだ

「くうっ！」

「アシユマさまっ！！！」

アーチエルが叫ぶ。

「来るな、アーチエル！」

元来ならばアシユマの念導境界面でエネルギーに変換されるはずの触手群はアシユマの念導境界面を突き抜けて襲ってきた。

触手一本一本に念導境界面があるが如く。

「鬼虎よ！」

アシユマが触手に取り込まれようとするまさにその時、アシユマは鬼虎の黒い光の力を限定的に解放して難を逃れた。

「そうかおぬしにはそれがあつたな」

ガルマインが呟く。

「ならばこれはどうかの？」

ガルマインが触手を伸ばした先にはアーチエルがいた。

「きゃああああつ！！！」

アーチエルが悲鳴を上げる。

「アーチエルっ！」

アシユマが三日月を飛ばした。

触手はアーチエルの手前まで来たが根元から切られて崩れ落ちた。

「！」

アシユマはこれに何か気が付く所があつたらしい。

アシユマはアーチエルの側へ寄つた。

「大丈夫か？ アーチエル？」

「はい。大丈夫に御座います」

「ケリをつける」

「はい」

「ケリをつけるだと？ 出来るものならやって見るが良い！ 我が

肉体は不滅なり！」

ガルマインはそう、うそぶいた。

「ふっ！！」

アシユマは気合を入れて、秘剣三日月をガルマインに向けて放つた。

三日月は真っ直ぐガルマイン目掛けて飛んで行つた。

そしてガルマインの胴体を両断した。

だが、直ぐに触手同士が身体をつなげてしまった。

「わはははは！！ 言ったはずだ。我が肉体は不滅だと！ これで

ケリをつけるだと？　笑わせる！」

「アシユマさま……」

アーチエルが不安に戦くおのの

「大丈夫だアーチエル俺を信じろ」

アシユマはそう言って、アーチエルの不安を取り除こうとした。

（思ったとおりだ）

アシユマは何かを確信した。

「ならば今度はワシの攻撃を受けよ！！」

そういうと、バヴェル自身がプラズマ放電をし始めた。

その光はすさまじい明るさでマルル広場までをも照らし出した。

勿論、アーチエルの眼も眩む。

「これが人類を破滅へと追い込む『巨大な閃光』の正体か！？　我々は滅びなければならぬのか！？」

アルステインはマルル広場の地下でそう口を開いた。

アシユマは裏・閃光一刀・崩し、の構えをとった。

「ふっ！！」

そして気合を入れて秘剣、三日月を放った。

だが狙いは外れて……。

「くくく、どこを狙っておる？」

と、ガルマインに言わしめた。

が、その直後、

「！　ま、まさか！」

ガルマインは何か思うところがあつたのだろう。

後ろを向いて叫んだ。

「……うおっ！！」

外れたかと思われた光の三日月は曲線を描いてガルマインとバヴェルを結ぶケーブルの束を断ち斬った。

「うおおおっ！！」

「矢張りそこがまさに命綱であつたか」

同時にバヴェルのプラズマ放電が止む。

同時にガルマインの体が朽ちていく。

アシユマはガルマインの側へ寄り、

「何か話したい事があれば聴いておくぞ？」

そう言った。

「振り返りて見れば、貴様とは不思議な因縁で結ばれていたのう。

お主にはエヴァイブ・エブルの居所など教えなければ良かったわ…

…くくく…

「さらばだガルマイン。止めがいるか？」

「いや、要らん」

「そうか」

ガルマインは顔から何から朽ちて崩れて剥がれ落ちていった。

「アシユマさま……」

アーチエルが側にやって来た。

そして

「アシユマさま……バヴェルがまた動きまして御座います」

そう言った。

バヴェルは明らかに王宮市に向かって進んでいた。

「……さてどうするか？ 内部に入って鬼虎の力を使うか……」

「それは駄目！ 危険すぎます。『漆黒の門、裁きの扉』は余りに

も危険すぎます」

「大丈夫だよ。アーチエル。全にして無、無にして全」

「わ、わたくしも、危のうございます……」

「……そうか。これは気がつかなんだ。許せ。……一緒に潜るしか

ないか……いや、しかし……」

「こうなればアシユマさまと一緒に潜りまする」

「いつ、いや、やっぱりそれは……」

「男らしくありませんぞ？ だんなさま」

「……分かった。一緒に行こう」

二人は暫く飛んで、『漆黒の門、裁きの扉』の上に来た。

「いいか？ 中ではしっかり自我を保つ事。俺をしっかりとつかんで

話さないこと。宜しいか？」

「はい」

アーチエルは腕をしっかりと絡ませてきた。

真剣な表情だ。

いよいよ下へ潜って行った。

当初、上はまだ夜明け前の夜空を映していたが段々と闇が濃くなり次第に闇が支配する世界へと降りて行った。

アーチエルは怖くなりアシユマの腕をぐっと抱きしめた。

そうしないといられなかったからである。

周りがあるのは闇。

感じられるのはアシユマの腕の感触と声だけ。

後に残ったのは沈黙だけ。

だから、腕を抱きしめた。

「アーチエル」

「ひゃっ！ お、驚かさないで下さい……」

「すまん。着いた。ここだ、ここが中心だ。さあ、ここからが正念場だ、アーチエルしっかり自我を保っているよ？ いいな？」

「はい」

「鬼虎よ。今こそ、その比類なき力を我が前に示せ！」

鬼虎は最初こそ輝きを示したが直ぐに闇の中へ溶け込んでしまい鬼虎の力が発動しているのか、それともバヴェルの力に押し潰されたのか分からなくなったしまった。

「アシユマさま！」

「しっ！ 黙って」

避難民の密集する地下壕では、民衆が騒いでいた。

「こっ！ 今度は何だ！？」

「なんだ！？ あの黒い柱は！？」

「アシユマ君……鬼虎か？」

アルステイーンが眩く。

上空では……魔導機兵が上空を哨戒飛行中だった

『バヴェルらしい物体は今、黒い何かに覆われているようです。接触を試みましょうか？』

パイロットが言う。

『いや、危険ですから少し離れてください。妙な動きをしたら報告してください』

『分かりました。アルステイーン殿下』

(アシユマさま……)

暗い闇の中だ。

(アシユマさま……)

感覚が無い。

(アシユマさま……)

自分の体が明暗反転している。

(アシユマさまあ……)

段々と不安になってくる。

(あ、あああ……)

不安が極限にまで来た。

(アシユマさま！ アシユマさま！ アシユマさま！……)

パニック寸前になる。

(あああ……もう、駄目……)

アーチエルは自分を見失いそうになる。

(ああ……)

アーチエルは恐怖すら感じ始めていた。

(……) 駄目駄目。自我を失っちゃいけないんだ。アシユマさまの言うとおり自分を見失っちゃ、戻れなくなるわ……)

アーチエルは何か冷静さを保とうとする。
どのくらいの時間が経つたろう。

自我との対決を迫られ、我慢を強いられて、何とか耐えてきたアーチエル。

その時、俄かに光が戻る。

それは朝焼けの光だった。

暗く厳しい圧政に耐えてきた民の、希望の光でもあった。

(つつ！ 眩しい……)

「終わったよ。アーチエルよく恐怖に打ち勝ち自我を保てたね」

「いえ、私はそこまで大げさなものじゃないんです。ただ、アシユマさまの言い付けを守っただけで……」

「それでも大したものだ。えらいよ」

アシユマはアーチエルのおでこにキスをした。

アシユマは鬼虎を納刀し

「皆のところへ戻ろう」

そう言い、アーチエルは

「はい」

と、応えた。

バヴェルはこのとき最早この世界から存在を消していた。

「皆さん！！ ガルマインは去りました！！ 私達の勝利です！」

アルステインが言う。

民衆が勝利の鬨ときこゑの声をあげた。

民衆が一斉に地下壕から出てきた。

喜びを胸いっぱいにして希望の待つ地上へと出てきたのだ。

「アルステイン、アルステインはいるか!？」

アシユマ達は無事にマルル広場にたどり着いた。

アシユマはその脚でマルル広場の中、アルステイーンを捜して回った。

「アシユマ君、こちらです」

アルステイーンはアシユマを呼んだ

「アシユマ君、バヴェルは？」

「始末したよ」

「アシユマ君、月へ行く気ですね？」

「どうしてそれを？ ……そうか予言か！」

「はい」

「神人の正体がわかった」

「何ですって？」

「『聖櫃』と呼ばれるモノがその正体らしい」

「誰からそれを……」

「アー又さ」

「じゃあ、アー又とも戦つて……」

「ああ。あの状態では助からんだろう」

「そうですか……」

「では、俺は行く」

「皆に挨拶しなくて良いんですか？」

「そんな事をしたらまた話しがややこしくなる。ついて行くという奴が出てこないとも限らん」

アシユマはそうして、十数メートル先で避難民の怪我の治療を行っているアーチエルを目を細めて眺めた。

「アルステイーン……アーチエルには『野暮用』とだけ伝えておいてくれ」

「分かりました。……人類の命運、あなたに任せましたよ。アシユマ・アトー」

「よせよ。俺は俺なりの方法で、七賢人との決着を付けに行くだけだ。人類の命運なんて俺には重すぎる」

「それでもです。ルーンの黙示録の呪縛から人類を解き放つてくだ

さい」

「無茶を言う」

アシユマはそれだけ言い残して飛び立って行った。
アーチエルがとことこと歩いてきて、

「アルステイン様、アシユマさまはどちらに？」
尋ねてきた。

「ん？ ああ、『野暮用』があるんだそうです」
それを聞いたアーチエルは

「そうですか」

と、少し寂しげに言った。

アシユマは再び砂漠に出た。

遠くには黒く立ち昇る煙が見えた。

アシユマは煙の立ち昇る方へと飛んで行った。

砂丘の向うに黒く黒煙をはいているヌルを見つけた。

アシユマはヌルの頂上にコクピットを見つけた。

「これだな？」

アシユマは斜めに傾いたヌルのコクピットに腰掛けた。

(成る程、確かに操縦方法が頭の中に流れ込んでくる)

アシユマは思った。

小型サイコ・フライヤーを分離させてみる。

ゴクン！

と、重い音を立ててサイコ・フライヤーが本体と外れていく。

アシユマはある程度離れた所にサイコフライヤーを下ろした。

アーヌとの約束を果たす為である。

アシユマはヌルの真上に来た。

ヌルを包むようにイメージした

「鬼虎よ、その力を我が前に示せッ！！」

鬼虎の光がヌルを包む。

その時アシユマの脳裏にとあるイメージが映りこむ。

それはヌルにびっしり詰められた人間……いや、人間の死体が万単位で存在していたのだ。

（これは何だ？）

しかし、取り敢えずアシユマは、アーヌとの約束を守ることに専念した。

ヌルの全てを無に返し、冥福を祈った。

アシユマは小型サイコ・フライヤーに乗り込みアシユマは月へ向けて旅立った。

サイコ・フライヤーは、どんどんスピードを上げて大気圏を突破し、ぐんぐん月へと近付いていった。

加速感はまるで無い。

重力制御と言う奴だろう。

凄いスピード。

もう地球があんなに小さい。

月はもう目の前になった。

クレーターの内、幾つかが光を放っている。

ドームのようだ。

制動をかける。

高度五十メートルほどの所で接近を停止した。

背中を地面に腹を宇宙に向けて航行した。

先程のドームが近付いてきた。

何かがびっしりと詰まっているようだ。

サイコ・フライヤーを物陰に隠すように着陸させた。

アシユマはサイコ・フライヤーから下りた。

念導境界面があるとはいえ、生身で月面に降り立ったのは、人類史上アシユマが初めてではないか？

体が軽い。

跳ぶ様に歩く感覚に最初戸惑ったが、直ぐに慣れた。

ドームに近付いてきた。

ドームの縁からドームの中を覗いて見る。
するとそこに『在った』のは……、

(ヒトだ。いや、ヒトかどうかも怪しいものだ。イレギュラーナンバーなのかもしれない……。しかしそれにしても老若男女とばらつきがあるな)

確かにおびただしい程のヒトが縦横に横たわっている。

もしかしたら数は億単位かもしれない。

アシユマは縁を歩いていってドーム内に入れそうな入り口を見つけた。

どうやらエレベーターらしい。

アシユマはそこへ降りてみることにした。

アシユマはエレベーターに入り最下層のボタンを押した。

エレベーターは扉が閉まり最下層へ動き出した。

エレベーターが最下層についた。

エレベーターの扉が開く。

すると黒いフードつきのガウンを着た人間が五人居て、アシユマの到着を、拍手の下祝福した。

男なのか女なのか、年老いているのか若者なのか、分からなかった。

「!？」

アシユマはこの事態に警戒した。

「警戒しないで下さい。我々七賢人は本日この時を以って、貴方を七賢人に迎える事に相成りました」

「俺が七賢人になるということか？」

「そのとおりで御座います」

「……お前、ネリア・クーシ・カハデクサンだな」

「ここまで来て隠す事もございませんか。いかにも然様に御座います」

男はフードを取ると確かにネリア・クーシ・カハデクサンの顔が現れた。

「では始めに訊く。このおびただしい数の人間は一体何か？」

「神人様に御座います」

「かみびと……これが神人の正体か。神人とはなにか？」

「黙示録大戦前後に聖櫃に避難された方々……いわば、地球の正統な住まい主に御座います。新たな身体を生み出された所から新生人類とも言いましょうか。イレギュラーナンバーのノウハウも取り入れております」

「聖櫃に避難とはどういうことなんだ？」

「聖櫃にDNA構造と個人の人格・記憶・性格を記録させたのです。いわば鬼虎と一緒にですね」

「ここにいる人間はすでに人格が入っているのか？」

「いいえ、まだです」

「ここに居る人間をここに住まわすのか？」

「いえ、地球に住まわせます」

「何人の人間を？」

「凡そ五十億」

「そのような数の人間を住まわせておく余裕が今の地球には無いぞ？」

「はい。ですから滅亡していただきます」

「誰がそのような事をするんだ？ そのような兵器でもあるのか？」

「その為のアーヌでありバヴェルでありヌルでありました」

「それを俺が見事に粉碎してしまったというわけか」

「はい。ですからその役割を担っていただきたいのです」

「成る程。俺にそれをやれと。だから七賢人になれと」

「はい仰せのとおりで。その代わりと言ってはなんです、お望みのものを何でもかなえて差し上げましょう。地位でも名誉でも金でも女でも。ありとあらゆるものをかなえて差し上げます」

「良かるう………聖櫃を見て見たい」

「畏まりました」

「これが聖櫃か。この箱に何十億の人格が入っているのか」
アシユマは感心した。

ここはドームの中心部。

様々なケーブルが聖櫃に繋がっている。

アシユマは徐に鬼虎を抜き聖櫃に斬り掛ろうとした。

「！ 何をする！？ 仲間になったのではなかったか？ 貴方、自分は何をしようとしているのか解っているのか！？ 貴方は神を殺そうとしているのだぞ！？」

ネリアが叫んだ。

「それがどうした？」

アシユマはそう言い放った。

「離れよ、無礼者。余を何と心得る？ 刀を退いて下がらっしゃい！」

「喋る箱か。面白い。鬼虎を退く気など無い！ 覚悟せよ！」

互いの念導境界面が触れ合って火花を散らす。

バヴェルの時もそうだったが巨大すぎる念導境界面はどうやら反発しあうものなのか？

アシユマは鬼虎を大上段に振りかぶり斬る気配を見せた。

『ピギヤー！！』

聖櫃は奇妙な叫び声（？）をあげたかと思うと、いきなりコード類を引きちぎり上昇して逃げた。

「逃すか！」

アシユマはそう言い、呪文を唱えた。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に
そして散るかなこのわが身
禁忌を犯して我が翼となれ
ウイング！！」

アシユマは飛んで聖櫃を追った。

聖櫃は光弾をアシユマに向けて発射した。

アシユマはそれを避けた。

ドームの底で幾つか爆発する。

アシユマも鬼虎を横に薙いで光弾を発射する。

小賢しくも聖櫃はそれを避けてみせる。

光弾は横たわる人体郡に命中し何十体か潰しはじけさせる。

またも聖櫃が光弾を拡散して発射する。

アシユマは避けきれないと判断し念導境界面に念を集中させた。

何とそれでも数弾は念導境界面を突き破りアシユマの脇をすり抜けて行つた。

聖櫃はドームの天井を突き破って月の地上へと逃れた。

破れた天井の一部はすぐさまシャッターが降りて破れた部分を塞いだ。

アシユマも別の格子から突破をした。

「どこへ逃げた？」

アシユマは周りを見てみた。

気配はする。

これ以上は無いと言つ程。

気を追つて行つたほうが早いようだ。

アシユマは気を追つて行つた

途中、爆発の光を目前にした。

「くそっ！」

聖櫃はヌルの小型サイコ・フライヤーを、爆破して更に逃走をしたようだ。

「くそっ！ 一体どうやって帰ればいいんだ!？」

アシユマは余りにも逃走スピードが早い聖櫃をいったん諦めて、おびき出す作戦に変更した。

アシユマはドーム内に戻ってきた。

相変わらず人間が縦横に横たわっている。

アシユマはやたらめつたらに気弾を振るい始めた。

どっどん人の形をしたものを『破壊』していく。

ヒトガタが、もし生きていれば皆致命傷だ。

いや、致命傷どころではない。

頭が破裂する。

上半身、若しくは下半身が破裂する。

胸が抉り取られている。

様々な破損の仕方だ。

まさにこれは悪鬼の所業だな、と、アシユマは思いながら、鬼虎を振るった。

そう考えていたアシユマの形相も、十分に悪鬼の如く恐ろしいものだったが。

アシユマは数えていなかったが『死亡人数』が一千万を越えた頃、聖櫃が戻ってきた。

「アシユマ！ 止める！ まだ間に合う。考え直せ！ お前は同胞、同族を殺しているのだぞ!？」

「何をどう考え直せというのだ？ お前たちは俺にこれを地球上で行わせようとしたのだぞ？ それが月の民に代わっただけの事。違うか?」

アシユマは背後に気配を感じた。

アシユマは飛んで来た聖櫃を振り向きざま鬼虎で切り裂いた！

「あああああっ!！」

ネリアは大声を張り上げて、狂わんばかりに頭を抱えて、それを振り始めた。

聖櫃は煙を吹いて奥へ落ちて行った。

「ネリア・クーシ・カハデクサン。結局七賢人とはなんなのだ？」
「これだ！ 神人様に再臨していただき地上を神人様にお返しするのが我等の使命だったのだ。それを貴様は！！ 我らのこの千年の努力を無に帰して！！」

「そんな努力ならしない方が良い。何故共存の道を選ばなかった？ お前のしていることは、ただ、命を弄ぶに等しい行為だぞ？」

「……………」

「俺はここを破壊するつもりだ。脱出するなら、した方が良いぞ？ アシユマはネリアを傍目に見つつ、またドームを出て行った。

ネリアたち五人の七賢人はその場で呆然としていた。

アシユマは月の上空に来た。

月の遙か上空でアシユマは鬼虎にエネルギーを集めていた。

これまでに無いくらいに。

それはもう眩いほどに。

何故いつもの鬼虎の力を発揮しないのか？

それはこの月の地下構造が、複雑さが、鬼虎の力にそぐわなかったからだ。

だがこの極大なエネルギーの塊ならば、通路と言つ通路を全て焼き尽くすに違いない。

アシユマの極大なエネルギーで、月はこれまでに無く明るく照らされた……………」

「あそこにアシユマさまが……………」

アーチエルが悲しげに呟いた。

「ええ、言わずに済みませんでした」

アルステインは申し訳なさに言った。

夕闇が濃くなり、夜を引き連れてくる頃、月が明るく照らし出され、更に月よりも閃光が星のように眩く光っていた。

「あれがアシユマ……………」

と、オルバニアンが呟いた。

「おいあれを見るよ」

「何だあの月」

避難所の人間も気づきだした。

「アルステイン、アシュマはどうなるんだよ？ 予言の書にはな
んて……？」

オルバニアンが訊いた。

『巨大な閃光が見えた。』

是にて新生人類は滅亡する。

私はそれを見た。

我が予言もこれを以って成就する。

神は全てを見通せたり。

かくあるべし。

『ターシャン』

「……ですね」

「肝心な事載ってないじゃない！」

アルミナが半ば泣き声で訴えた。

「何とかならないの？ ヨディ」

仮の名で呼ぶのはエフアルだ。

「何とかしたいのは山々なんですけどねえ」

「アシュマ……私は宣言通りアビスを倒したぞ。お前も帰ってくる
ぐらいの事をして見せろ」

あまりに無茶な事を吐くので、皆リイナの方を見てみると、リイ
ナは泣いていた。

「あの巨大な閃光がお義兄様の作った閃光……」
キュポアは少し悲しげに言った。

アシユマは巨大な光球を投げつけた。

それはアシユマの意志の力が介入し、槍の穂先状になって月のドームに突き刺さった。

エネルギーは高温のプラズマを作り、通路と言う通路を細かい所まで網羅し、隣のドームまた隣のドームへと連鎖し、焼き尽くして行った。

結果、月にあった古代人の残したオーバーテクノロジーと共に、全てのドームを焼き尽くした。

そして、それは月の裏側にまで達した。

「はぁ……。これでやっと一仕事終わってたって感じだな。……さて、どうする？ どうしたら良いかな？ アーチエル……」

アシユマは呟いた。

ここで、我々は一つのカタストロフィを見た。

意識が無いとは言え新生人類五十億の破滅を見た。

しかしこれ程の所業を目の当たりにした者も多くはあるまい。

アシユマは月の上に漂っていた。

帰る手立ても無いままに……。

『あれ』から三ヶ月。

アーチエルは『毎日』『城の前の道を隔てた麦畑』に『通っていた』。

日がな一日ずーっと麦畑を見ながらぼーっとしたりしているのである。

そうした中、時になにやら思い出してはくすくす笑い出したり、時にはアシユマとの思い出に耽ったり、時にはアシユマのことを想いほろぼると涙を流す。

昼間には時たま、オルバニアンや、アルミナ、リイナ、キュポア

やアンなどが様子を見に来る。

しかしアーチェルの態度は頑なで、

「放って置いて下さい」

ヒトの話に耳を貸そうともしない。

ただひたすらにアシユマの帰りをそこで待つのである。

誰も、

「アシユマは死んだ」

そう言えないから、毎日アーチェルがそこに通うのを黙認してしまっ。

アーチェルは、そこに居させるといつまで経ってもずっとそこに居るので、毎晩毎晩エースティーが迎えに来て連れ戻す。

そして今日もアーチェルが麦畑にやって来た。

今、麦は、茎立ちの季節である。

冬を何とか凌いできた緑に力強さがあつた。

麦畑は青々としていた。

オルバニアンがアーチェルの様子を見に来た。

「アーチェル、まだこの季節は冷える事があるから、もう少し温かい格好をした方が良いんじゃないか？」

「有難う御座います。でも大丈夫ですから」

と、言うのみであつた。

オルバニアンは仕方なく帰る。

続いてアルミナがやって来る。

毛布を持って。

「アーチェル毛布持って来たよ」

「……有難う御座います。」

「……アシユマだって馬鹿じゃないんだからさ、お城の方に戻ってくるわよ。さ、お城にもどろ？」

「……もう少しここにいさせてください。」

「アーチェル？」

「お願いです……独りで居させて下さい」

アルミナは肩をすくめてポーズをとった後、戻って行った。
続いてキュポアがやって来た

「姉様、どうじゃ？ 義兄様の奴は戻ってきそうかえ？」

「キュポア……」

「……分かった。『独りにしてくれ』じゃろ」

キュポアの王宮内へ戻って行った。

昼時になってアンがやって来た。

「アーチエル様、お昼ご飯を持ってまいりました」

「……有難う。そこにおいて……」

「アーチエル様、昨日もそう言っただけで殆ど手を付けなかったではありませんか。今日はアーチエル様が全部食べるまで見張っております」

「お願い。独りにさせて、アン」

アーチエルは立て膝した膝こぞうに顔を押し当てて黙ってしまった。

肩が小刻みに震えている。

「アーチエル様……」

「皆が私を気にかけてくださることも分かるし、私の我侭だつてことも分かっているの。だけど、もう少しアシユマさまの帰りを信じて待つていたいの。だからこのままでいさせて。お願い」

アンもこう言うときはどうして良いか分からず、結局すごすごと帰るしかなかった。

暫くは誰も来なかった。

静寂の時間が流れた。

今日もアシユマとの幸せな日々を、思い出しては泣いていた。

不意に後ろに人の気配を感じ取った。

その気配は、ただそこに佇んでいると言った感じで、アーチエルの背後にいた。

アーチエルは、また誰かが連れ戻しに来たのかと思って、

「お願い！ 独りにしておいて下さい……」

今までとは違った強い口調で言った。

が、その気配は消える事がなかった。

「!？」

アーチエルは思うところがあつて振り返つてみた。そこには優しい表情のアシユマの顔があつた。

鬼虎を杖代わりにしている。

大分ボロボロだ。

今にも倒れそうである。

「ただいま、アーチエル。遅くなった。済まない」

と、だけ、アシユマは言った。

「アシユマさま!!」

アーチエルは愛しい人に向かってその名を叫んだ。

二人は抱き合った

麦が茎立ちした畑の縁で二人は抱き合った。

空は青く澄み渡り高く高く……。

終節 無想

ノリトレアではアルステイーン、ルーラン（オルバニアン）、どちらが王になるかで揉めた。

と、言っても普通のお家騒動とは何か違う。

一体何が違うのか？

「オルバニアン！ 素直に王位を継承なさい」

「やだよ！ アルステイーンこそ王位継ぎなよ。王位継承権第一位だろ？」

「私は元々他家の人間です。貴方が後を継ぐのが一番自然なのです」

「あー、もうめんどくさいな」

そう、二人とも王位を継ぐのを嫌ったのであった。

これは意外な形で決着を見た。

そう、オルバニアンが王位に就くのを嫌い、遁走したのである。

アルステイーンはお株を奪われた形になった。

「してやられましたよ……」

「これはこれで良いんじゃないの？ 貴方が治めなさいな」

エファールは言う。

「良いんですかねえ……？」

国民は何故か、どうと言うわけではなかった。

どちらが王位についても良いと考えていたし、王位を巡って権力争いをするわけでもなかったから。

仕方ないとはかりにアルステイーンは緊急事態なので略式で王位を継ぐと、先ず手を付け始めたのが被災地の復興である。

先ずはこれに手を付けた。

これは徹底して行われた。

仮設住宅、仮設医療機関、衣食の確保、職を失った人への職業の斡旋 E t c , E t c ……

その後、役人・貴族などの不正を糾し、不正な金は国庫に返却せ

しめた。

また税制を改革をし大貴族ほど税を重くし、それで集まった金は福祉政策と被災者復興施策へと当てた。

これは大貴族の反発のあったが国民の大多数が支持しアルステインも不転の決意で断行したので大貴族も反発する威勢を殺がれてしまった。

元より、アルステイン自体が王家の財産を国庫に組み入れたから誰も異議を唱える事など出来なかった。

エファールはどうしたかと言うと、晴れてアルステインと結婚して王妃となった。

これはアシュマが帰還した後のことだったので、皆祝福に参上した。

「おめでとう！ アルステイン、エファール」

先ず義弟のオルバニアンが祝辞を送った。

「有難う、オルバニアン」

アルステインが返す。

……が。

「爺！ オルバニアンを拘束ッ！！」

「いいっ！？」

驚く間も無くアベニが、オルバニアンをあっという間に拘束してしまった。

アベニ爺まだまだ健在と言う所か。

「朝飯前で御座る」

らしい。

オルバニアンは縄でぐるぐる巻きにされてしまった。

「これで僕の跡を継いでくれるね？ オルバニアン」

「ふがふがふが~~~~っ！！」

オルバニアンは芋虫状になって暴れている。

「こ、ここにオルバニアンの拇印を押せば」

「ふがふが~~~~っ！！」

「なにやつとるんじゃ！？ あんたらはっ！ 王族なのだから恥を
知りなさい！」

エファールがどう言っつて、スパンスパンと、アルステインとア
ベニ爺をスリッパで叩いた。

「はあ~~~~ビツクリしたあ、あにすんだお。ヨデイ！」

「ヨデイじゃあ、ありません。アルステインです」

「んなの、どっちだっつて良いや！ まだ、王位から逃げる事を考
えていたか！」

「どっちだっつて良いのは貴方のほうよ！ オルバニアン！ お目出
度い席で何みつともない事してるのよ恥かしいツたりゃありやしな
い……」

アルミナは言っつと、改めて、

「おめでどう、エファール、アルステイン」

そう言っつた。

「ありがとう、アルミナさん」

エファールが返す。

後はリイナやキュポア、そしてスコラからはミス・ケリー・サト
ウ（！）、ミカ、サクラコ、エミルらが祝福に来た。

続いてサーナリアとフェリアが祝辞を述べた。

「お義兄様、この度はご結婚おめでどう御座います」

「有難う。先の戦いではお二方の功績大なるかな。何か褒美を取ら
そう。何が良い？」

「……では、同性の結婚を許す法律を作っつていただきたく……」

「えっ？ いや、それは……」

ここで、アルステインは大いに困惑したと言っつ。

珍しいところでは、国際警察機構のドクワント・ネルゼイ警部が
祝辞（？）を述べに来た。

「この度はおめでどう御座います。陛下。」

「お？ 珍しく殊勝ですねえ。ネルゼイ警部？」

アルステインは知らない事を言っつてしまった。

「……目出度いは目出度いけどなあ……目出度いのはお前の頭の中だあ！！　いいか！　いつか尻尾挿んで、豚箱へ送り込んでやるからなあ！　覚えとけよなあ！　こらー！！」

が、衛兵に放り出されて、ネルゼイ警部、あえなく撃沈。

そして、最後にアーチエルとアシュマが祝辞を述べた。

「アルステイン陛下、エファール陛下、ご結婚、おめでとう御座います。末永くお幸せに」

アーチエルが言うと、

「有難う」

エファールが言った。

「死にぞこないましたねえ」

アルステインがアシュマに向かって揶揄した。

「まだ『あそこ』は俺の死に場所じゃあなかつたって事さ。縁起悪い事言うなよ。目出度い席だろ？　今日は。まあ、なんだ、兎に角良かった。おめでとう」

珍しくはにかんでアシュマがまとめた。

エファールは奥向きにはあまり口は出さない方だった。

結婚するまで、あんなに眼の色を変えて買っていたブランド物を殆ど買わなくなった。

エファールは時々……いや、頻繁にアルステインの事を

「ヨディ」

と、昔の名で呼ぶ事がある。

アルステインはたまらず、何故かと訪ねた事がある。

するとエファールは、

「私にとって貴方はヨディなの。この意味分かる？　私は素の貴方が好きなの」

と、言ったとか。

今ではお腹にアルステインの子供が宿っている。

男の子が生まれればアシュマ、女の子が生まれればアーチエル、と名付けようと思っている。

「モ二八、おいで。モ二八」

アルステイーンはモ二八を呼んだ。

「はいお義父様！」

「さて、今日は何をして遊ぼうかね」

モ二八はアルステイーン夫婦に引き取られ、穏やかな日々を過ごしているそう。

また、イルドリア地方を正式なノリトレアの領土として組み入れた。

この税収でかなり国は潤った。

この収入をヨデイは福祉・教育・医療費に存分に使った。

今では民主共和制に移行する為の準備をしている。

オルバニアンはアルステイーンの結婚後、一つの考えを持ってアルミナと共にエドス王にこう言った。

「エドスの王様。これでこのお城を……レキソタニアを辞去しようかと考えています」

「何故じゃ？ 折角そなたの兄君の婚儀も無事に終わったと言つに「だからなんです。以前からやりたい事があつて……今が一番良いから……」

とはアルミナだ。

「分かった。ではこれを持って行くが良い」

「王様、これは？」

「鑑札じゃ。これを持っていれば大抵の国に問題なく入国できるはずじゃ」

「王様……有難う御座います」

オルバニアンとアルミナは頭を垂れた。

で、二人は何をしたか？

オルバニアンとアルミナは、ギルドに属さない独立したバウンティ・ハンター（賞金稼ぎ）として生活を営んだ。

「チチチチ……さあ、出ておいで。子猫ちゃん……チチチ」
「ニヤア」

本人たちは賞金稼ぎだと言って憚らないが、実際はどぶ浚いから子猫探しまで何でもやる万屋よろずやと化している。
それでも何とか生計は立っているようだ。

リイナは一度スコラに戻った。
彼女曰く

「やり残しがあると気持ち悪い」
らしい。

キュポアはリイナに触発されて一念発起、スコラに入学した。

「わらわも、何か打ち込んで出切る事を見つけたいのじゃ。行かせたも」

と、エドス王に泣きついたとつかかないとか。

ミカやサクラコ、エミルとも学園で再会した。

「あつ、キュポアちゃん！」

「おお！ ミカではないか！」

「キュポア王女、リイナ」

「おおサクラコ！ エミルまでおるな。久しぶりじゃのう……と、言ってもあの戦い以来か……」

「うん、そうね。それよりもアシユマ先生帰ってきたんだって？」

「ああ、ボロボロだったそうじゃ。姉様が鬼虎で治癒させておったのう」

驚いた事にサクラコはユイノウと言う婚約をしたとか。

そして……、

「実は私も結婚するの……卒業後だけど」

ミカはそう言った。

「え……！」

これには全員驚いた

相手はもちろんミカの恋人ジークであるとか。

結婚後は矢張りバウンティ・ハンターになるらしい。ただしこちらはギルド（組合）に属すると言つ。

「キュポアちゃん、アーちゃんはどうなるの？」

ミカは訊いた。

「ん？ 今は結婚式の準備で忙しいのう。スコラ復帰は結婚後と聞いたぞ？」

「そう。アシユマ先生も？」

「そちらは不定期と聞いておる」

「あつ、リイナさん。こんな所にいらつしやったのですね？ 捜しました」

「？」

リイナは振り返つてみると、そこには優しい顔をしたレンヌが居た。

「あつ、あつ、れつ、レンヌ王子……こ、こんにちわ」

「こんにちわ、リイナさん。それに皆さん。始めましてレンヌ・アデュニです。この度スコラの学生と相成りました。どうぞ皆さん宜しくお願ひします」

レンヌが挨拶した。

（このお人か？ レンヌ王子と言つのは）

キュポアが声を潜めて訊いた。

（う、うん）

「お二人はどこまで進んでらつしやるの？」

エミルが訊いた。

敬語だ。

「ど、どこまで……といわれましても」

レンヌがしどろもどろになった。

「エ、エミルなんて事を訊いて……」

リイナが焦つた。

「お二人は結婚なさるの？」

エミルが矢継ぎ早に訊く。

リイナは頭が真っ白になった。

「ボクはそのつもりです」

これにはレン又ははつきりと答えた。

(え?)

リイナは信じられないと行った風でレン又を見た。

「いずれ正式に、プロポーズをするつもりですが……それまでは恋
び……おっ、お友達と言う事でお付き合いさせては、いただけない
でしょうか?」

リイナは両手で顔を覆い、ただ一言、

「はい」

と、言って顔を手で覆い俯いた。

どうやら泣いている様だ。

これは嬉しい時の涙だ。

「良いのう。春じゃのう。わらわにも春が来ないかのう」

キュポアがそう言った。

みんなの話しは尽きる事がなかった。

始業のチャイムが鳴り響いて慌てて教室へともどって行った。

「サーナリア様? お茶でも淹れましょうか?」

フェリアが言った。

「そうね。そうしましょうか」

サーナリアもそう応える。

「この間の結婚式はつましい中にも華やかさがありましたね」

「そうね。お義兄様、凛々しかったわ」

そう言ってサーナリアは遠い眼をした。

「んもう、サーナリア様!」

フェリアはサーナリアの二の腕を軽くつねった。

「いたっ! 何をするの? フェリア」

「アルステイン様の事を想っているサーナリア様なんて知りません」

サーナリアは王位継承権を捨て、王宮内でフェリアと同棲中。報道陣に付きまとわれる事もあるが、それなりに楽しい日々を送っているようだ。

「愛しています。結婚してください」

これはエースティー・アップルトンがアリア・エバスに対して言った言葉だ。

「……喜んで」

彼女は、まるでその言葉を待っていたかのように、快諾した。

ただし、諸手続きだのなんだのと色々あつて結婚は来年以降になる見通しだ。

これを機にエドス王は隠居をし、エースティーは即位して王となり、前王に負けぬ善政を布いて国のために心を砕く毎日だ。

エドス王は退位して隠居生活に入り、アシユマが道場主を務める事になっている新築の道場の出来具合を見に通う毎日だ。

道場が出来、アシユマが道場主となる日が来れば、エドスは毎日ここに通おうと思っっている。

アンは、これから移り住む新築道場に、足繁く通っては、アンなりに確認する毎日だ。

アンはすでに家政婦として、この道場件家屋に移り住む事になっている。

この道場はかなりの広さを持ち、王宮の庭の半分ほどもあるものだった。

道場は床は板敷き、窓は武者窓、全てイーハン造りで統一されていた。

生活する場は主に『はなれ』だった。

つまりアンの仕事場はここになると言う事だ。

一度は愛した人と曲りなりにも一つ屋根の下で一緒に生活するのである。

確認は怠らない。

職人はイーハンからアシユマが連れてきた。

事ある毎に、アシユマがチェックを入れては、直させると言う日々だ

職人は、

「かーっ！ あの旦那にや参ったね。何でも知ってるから手抜きも出来ネエや。まあ、する気も無いけどよ」

と、唸らせた。

それを聞いて（もちろん通訳つきだが）

（流石は私のアシユマさま）

アンは、鼻高々だった

そして城ではアーチェルの世話をする毎日だ。

そう言ってもアーチェルは、王宮での生活も残り少なくなっていた。

アベニ爺は引退……かと思うとさにあらず。

弟子を得て。自分の持てる技のすべてを伝授している毎日である。

弟子はなんとあのムラサキ。

「爺様、すこし休ませて下さい。体がもちませぬ」

「このくらいで音を上げるとは何たる未熟者か。ワシを見てみい！ 全くコレだから最近の若いもんはぶつぶつ……」

アベニ爺はそうは言っているが、この少女に中々の素質を見出し、成長を楽しく見守る毎日である。

「クララ〜！ 早く行こうよ〜！ 良い男見付かるかもしれないよ〜」

ミネア、ゴハク管理官はクララを誘った。

「そうどうぞ。いつまでも昔の男引き摺っていると新しい恋に出会えないぞう」

ラフェア、トーガイア艦長も誘った。

「早くしないと合コン始まっちゃいますう」

エメティア、ゴハク艦長は焦っているようだ。

「ごめん。わたし、パス」

「またあ？ クララそんなんじゃない駄目よ？ ヨデイ……もとい、アルステイン陛下に笑われちゃうわよ？」

「そう、あの人はもう、わたくしの手の届かない所に行ってしまったの。あの時あの方を手放さなかったら……いえそれは駄目だったわ。わたくしが、あの人に見合っつて無かったもの」

「だから、合コンにいく！」

「ちょ、ちよつとミーちゃん！」

しかし、ここでクララテリア・アルサ・エミルトンは生涯の伴侶を見つける事になる。

他の三人も仕事に恋に花を咲かせる毎日である。

ビッシュ・ノマンとフィナ・エマルの師弟コンビも晴れて結婚をするぞうだ。

そんな便りがアシュマの元に届いた。

そして空位になっているノリトレアの武芸指南役に付く事になった。

アリシアナ・コクレトはオロ・エバス『財団』の方から出向と言う事で国龍号を整備する毎日である。

最近は旦那と一人の子供もこっちに出向と言う事になって、家族揃ってノリトレアに骨を埋める気らしい。

オロは外交、内政、そして経営に頭を悩ます毎日である。
アリアの嫁ぎ先がレキシタニア。

オロは世界戦略を考え生さざるを得なかった。

(と、そこまで大袈裟なものではなかったが)

そして、アシュマ・アーチエル、二人の結婚式が行われることに
形式はタイン教の結婚式。

これは、アーチエルが、せがんでこうなったものだ。

タイン教は国教でないので教会は国外れに一棟あるだけだ。
白い建物で少し洒落ていた。

中にはタイン教の神父とシスターが新郎新婦を待っていた。
列席者は、

ノリトレア王国からアルステイン王とエフアール王妃。

オルバニアン・マグマイヤー、アルミナ・ラ・シア。

そして、ビツシュ・ノマンとフィナ・エマル。

アールヌー国からディーヌ・アデュニ第一王子、レンヌ・アデュ

ニ第二王子、師父サーズー・ウィー師。

オロ・エバス国からはオロ・エバス、アリア・エバス

スコラはミス・ケリー・サトウ、ミカ・タキオ、サクラコ・セタ、
エミル・フォルテ、

リイナ・アナン、ジークフリート・シュヴァイツァー。

内輪は、エドス・アップルトン前王、エースティーン・アップルト
ン王、キュポア・アップルトン王女。

曲が巖かに流れてきた。

最初に入ってきたのはノリトレア近衛兵団。

少ない人数で入ってきてバージンロードの両脇を陣取った。

近衛兵団とは名ばかりの気の良い人たちである。

今日のようなセレモニーの為に引つ張り出されてきたが皆いやな顔ひとつせず、寧ろ喜んで参加してくれた。

いつもはアシユマの開く道場に通ってくる連中である。

その近衛騎士団が曲の節目に剣を抜いて、

カジャツ！

と、剣のアーチを組み立てた。

壇上では新郎が待っている。

アシユマは髪を後ろに束ね燕尾服を着ていた。

アシユマが神父の前で佇む。

アーチエルが父であり前王であるエドスと共に入って来る。

アーチエルは質素だが品のあるティアラと白い半透明のヴェールを頭にかぶり、髪の毛は三つ編みにし、丸めてアップにし髪留めで固定させた。

ドレスは純白の長袖のもので裾は地面に着くか着かないか。

形は単純なものだが凜として品があった。

そして緊張して入って来るその顔はまさに人形そのもので、これまでに無いほど美形である様を見せ付けたのは初めてではなからうか？

アーチエルも剣のアーチを潜り抜けた。

二人は神父の前に来た。

良く見るとその神父はいつも剣術道場に通ってくるあの老人ではないか。

その神父がこういった

「そなたたちは剣と鞘。切れ味が良い時も、刃こぼれた時も、刃が曲がつて鞘に入らないときも、死が二人を分かつまで一緒にいることを誓いますか？」

「誓います」

アシユマが言った。

「ち……誓います」

アーチエルは少し間をおいて誓いを言った。

アシユマが隣を見るとアーチエルが涙を拭っていた。感動して泣いていたようである。

アシユマは微笑してみる。

アーチエルも涙を零したまま微笑して返す。

「指輪の交換を」

神父が言った。

最初はアシユマだ。

アシユマは指が緊張で震え最初上手く入らなかった。

（うふっ。アシユマさまでも緊張することあるのね）

アーチエルは思った。

（無想剣、無想剣……）

一方のアシユマは心の中で呟いた

すると、すいっ、とスムーズに指輪が嵌った。

次はアーチエルの番だ。

アーチエルは何の無理なく、すっと指輪が入った。

さっきのアシユマの一連の行動を見て緊張が解けたようだ。

「誓いのキスを」

これにはアーチエルのほうが緊張した。

「さ、力を抜いて」

アシユマは言う。

「今日は良い天気だね」

（え？ 何を言っているんだらう。この人は？）

そう思った瞬間にキスをされた。

（あっ）

と、思ったときはもう遅く、アシユマの温かく優しく包み込む様なキスに、アーチエルは涙した。

次は場所を変えて夫婦お披露目のパーティーになった。

場所はレキシタニア王宮の裏手の庭だった。

「アシュマ君おめでとう。もっと早くこうなればよかったのに」
アルステインが言った。

「有難う。アルステイン」

「おなか大きくなりましたね」

失礼にもアーチエルが言う。

「あら、やだ。目立つ？」

エファールが言った。

「良いことじゃありませんか？ それだけ大きく元気って事じゃないですか」

「そうね。きつとそうね」

「お名前、考えてあります？」

「男だったらアシュマ、女だったらアーチエルって付けようと思っ
ているわ」

「……………」

「……………」

「オッ、オルバニアンたちはいつ結婚するんだ？」

アシュマが珍しく頓狂な事を聞いた。

これを聞かれた二人は、思わず吹いた。

「あゝあゝ。汚いですネエ」

「だってよ兄ちゃん。アシュマの奴がいきなりあんなこと言うんだ
ぜ？」

オルバニアンが言った。

「オルバニアン、一国の王様に向かって『兄ちゃん』は少し礼節に
欠けるんじゃない？」

アルミナも言った。

「珍しく正論を言うなあ、お前」

「で、実際どうなのですか二人の仲は」

「二人の仲はってなあ……………」

「もう少し青春を謳歌してからって言うの………だめ？」
皆は押し黙ってしまった。

「おめでとう、アシユマ」

旧友ビツシュ・ノマンの祝いの言葉をアシユマは受けた。

「おめでとうといえは、お前たちもだな。ビツシュ。フィナと結婚したそうじゃないか」

「ああ、おかげさまでな。それにお前に推薦されてノリトレアの武芸師範にまでなれた。感謝する」

「感謝されるほどの事じゃないさ」

「いや、元来なればオルバニアン殿が、錬武館を引き継ぐはずだったのにな」

「いや？ 俺は、その話、棄ててないぜ？ 暫く賞金稼ぎをしつつ、武者修行も兼ねて各地を回って腕を磨くつもりだ。で、自分で納得いく腕前になったら、改めて錬武館を開くつもりだ」

オルバニアンが決意を述べると

「その言や良し！」

アルステイーンが励ました。

「アシユマあ……前から聞きたかったんだけどさあ」

「なんだい？ オルバニアン」

「鬼虎つて『銘』なの？ 『名』なの？」

「……最早俺にも、分かん」

「ふーん、そうなんだ」

「じゃあ、皆、堅固に」

「お大事に」

アシユマとアーチエルはそこから去った。

「おなかの赤ちゃんの名前考え直したほうがよくなかった？ ヨデ
イ」

エファールが言った。

「うーん」

アルステイーンは唸ってしまった。

二人は次にアールヌーの民たちのところへ行った。

「アシユマ殿」

「やあ、デイー又王子」

「こんにちはデイー又王子」

「これはこれはアーチエル王女。いらっしやい。おっと王女じゃないんですよ、もう失礼しました」

「いえ、良いんです。それにわたくしは一介の人妻になったわけですし。こんにちは、レン又王子」

「こつ、こんにちはアーチエル様」

「何女性に緊張してるんだか。リイナ嬢に恠気を起こさせるなよ。いずれお前の妻になる方だからな」

デイー又が揶揄した。

「本当ですか？ 兄上。初耳です」

「本当ですか？ デイー又王子様」

挨拶伺いに来ていたリイナが聞いていた。

デイー又王子は、ふふん、と鼻で笑い、

「そういうことになるね。あと少しすると二人とも年頃になるな。

そうすると双方とも美少年、美少女になるわけだ。そうすると周りがほおって置かない。二人は色々と衝突するけど結局は二人は結婚することになるだろうね」

デイー又王子はそう言い切った。

「そう、良かったわね。リイナ」

「うん……いえ、は、はい！」

「それにしても、アシユマ殿は良くやったね。あの時早まらなくて良かったね」

サーサー・ウィー師。

「はい。師のお陰です」

アシユマが頭を垂れた

「ですが神人……新生人類五十億を死に追いやりました」

「それは仕方ないね。でなければ滅んでいたのはこっちの方ね。そ

れに聞けば新生人類なる者、魂が入っていないかつたと聞いたね。悪戯に殺してよいとは言わないまでもそうなくても仕方なかった。悪いのは七賢人ね。悪戯に命を弄んだね。気に病むことじゃないね。我等が人類を救ったのだから」

「師にそう言っていただければ」

「それよりは貴方方だ。結婚したてで縁起でもないとと言われるかもしれないが、アシユマ殿にこれまでに無い暗雲が迫っている。最大級の危難と言っても良い。お気をつけて」

「デイー又王子が最後に付け加えた。」

「肝に銘じましょう」

アシユマは応えた。

次に二人はオロとアリアの所へ来た。

「オロ様お久しゅう御座います」

アーチエルは行った。

「ふん！ 別に私は来たくは無かった。妹アリアの顔を立てて来たまでだ」

「何を言うんですか、兄上。式では良きカップルだ。未永く幸せになつて欲しいと、漏らしていたくせに」

「なつ、ばつ、ばか！ 私はそんな事一言も言っていないぞ？」

「うるたえている所で兄上の負いで御座います。アーチエル様、私からもお祝いを言わせて下さいな。ご結婚おめでとう御座います」

「有難う御座います。来年の今頃は兄様と晴れてご夫婦になるのですね。そうするとわたくし達は義姉妹しまい。仲良く致しましょうね。アリアさん」

「はい、宜しくお願ひします。アシユマ様、アーチエル様」

二人は次にスコラの面々の所へ行つた。

正直言えばアシユマは行きたくなかった。

苦手な人間がいたからである。

そう、ミス・ケリー・サトウが。

アシユマはどうもあの人に頭が上がりません。

そして今も……

「アシユマ先生、チョツとこっちにいらっしやい」

お説教が始まるのであった。

「アーちゃん、アーちゃん」

ミカが呼ぶ。

「なあに？ ミカさん」

「学校にはいつ復帰するの？」

「うーん。引越した、何だかんだで……一ヶ月は掛かると思うから、多分その後になると思う。もう少し待ってて」

「まあ、焦らずにゆっくり地固めをしてそれからいらっしやいな」

サクラコが言う。

「もう、シタの？」

エミルが言う。

「エミル、何てこと聞くのよ！」

ミカが慌てて、エミルを制する。

が、当の本人のアーチエルがきよとんとして、

「何を？」

逆に訊いた。

(そーだった。アーちゃんはこの手の話題に疎いんだった)

ミカは改めて思っていた。

「全く、貴方はどっしり構えているように見えてふらふらと。良いですか？ 貴方はもう結婚して一家の主となったわけですから、ふらふらと、あちらこちらに行く事は許されませんよ」

「はあ」

「ちゃんと聴いてますか？」

「まあ、一応」

「全く、出来の良くない息子をお婿に出す気分ですよ全く。いいですか、アーチエルさんには迷惑をかけないように。言いたかったのはそれだけです。お行きなさい」

「はあ？」

「『はあ？』では無いでしょう。向うの親御さんに挨拶もしていないのでしょうか？ 言ってらっしゃい」

「はい」

アシユマとアーチエルは最後にレキシタニア王家に集う場所に来た。

「義親おやぢ父殿」

「おう、アシユマ殿か。今更じゃがアーチエルの事を……娘の事を頼む。この通りじゃ」

エドスが頭を下げた。

アシユマは

「どうぞ頭を上げてください、義親父殿」

そう言った。

「安心してください。アーチエルは私が必ず幸せにします。ご安心下さい」

アシユマが言い、そしてアーチエルが、

「お父様。アーチエルは必ずアシユマさまと二人で幸せになります。ご安心下さい」

と、言った。

「アーチエルよ……」

エドスは言うべき言葉を失った

「義兄様……」

見るとキュポアが号泣していた。

「だって義兄様が、義兄様が……義兄様が遠くに行ってしまう」

「何を言っておるのだ？ アシユマ殿の家はこの王宮の直ぐ隣。いつでも会いに行けるだろうに」

エースティーは言った。

「兄様。兄様は何も分かっておらん！ 義兄様あ……」

理由が何となく分かるアシユマとアーチエルは、なんとって良いか思案に暮れた。

今、この時、ここでキュポアの恋は終わりを告げたのである。

『その結婚待つネ……!!』

その声が聞こえてきたのは空からだった。

魔導機兵が一機パーティー会場のだ真ん中テーブルを蹴散らして降りてきた。

アシユマは先程の声に嫌々な予感を感じていた。

魔導機兵のハッチが開いて女性が出てきた。

「アシユマ！ その結婚待つネ！」

「リン……リン・シャオリン！！」

「そうネ！ 私、リンネ！ あなたの子種貰いに来たヨ！ さあ、

行くネ！ 今直ぐ行くネ！ さあするネ！」

「先ず一人目だ」

ディーヌ・アデュニ王子が呟いた。

アシユマは手首を掴まれ引つ張られていきそうになった。

「これで既成事実作ってしまえば、この結婚も御破算ネ！」

「そんな事よりリン、お前革命政府はどうした？」

「革命政府？ あんなものは、ほっぽり出してきたネ！ こっちの

方が大切ネ！ ……革命？ そう革命ネ！ ノリトレアの革命では

貸しがあつたネ！ その貸しを今ここで払って貰うネ！ 身体で！」

その前にアーチエルが立ち塞がり、

「アシユマさまを難儀な目に合わせるのは許しません！」

声高に言った。

「アーチエル、大丈夫だよ。どこにも行かない」

その言葉を聞いてリンは、

「う、うわああああん！ 何でこんな人好きになっちゃったんだろっ！」

泣き始めた。

こうして無事(?)パーティーも終わり夜も更けて行った。

アシユマの道場はほぼ完成していて母屋もほぼ完成していた。

二人はそこに泊まる事になった。

アシユマとアーチエルはひとつ床に就いていた。

「アシユマさま起きてらっしゃいます?」

「……ああ」

「これでわたくしはアシユマさまのお嫁さんになるのね……」

「そうだな……」

「……私、こここのこけら落としが済んでしまえばひとりでスクラに行かなきゃならないのね」

「……嫌なのかい?」

「いいえ」

「……不安なのかい?」

「……ええ、少しだけ……」

「俺も一月の間十日間は非常勤講師としてそちらに行く。大丈夫だ」

「……はい」

「まだ、心配なのかい?」

「……はい」

「何が心配なんだい?」

「色々……」

「そうか……」

「……」

「俺はアーチエルはアーチエルでいてくれれば言い。それだけさ」

「……」

「でも不安なんだね」

「ええ」

「大丈夫だよ。アーチエル。俺が保障する」

「……くすつ。アシユマさまも大変ですね。このような女子が嫁女よめむすめでもアシユマさまに保障してもらって、少しだけ安心しました」

「そうか……。アーチエル……お前はそういうが、俺は、お前が俺の伴侶で居てくれて良かったと思っているよ」

「アシユマさま……嬉しい」

二人は口付けを交わした。

その晩アシユマとアーチエルは抱き合って、そして寝た。

明け方アシユマはある気配を感じふと眼が覚めた。

服を着て鬼虎を落とし差しにし、出かける準備をした。

その気配にアーチエルが眼を覚ました

「アシユマさま、どうなさいました？」

「少し野暮用が出来た」

アーチエルは昨日のディー又王子の言葉もあり、なにやら不吉なものを感じ、

「少しお待ち下さい。お時間は取らせませぬゆえ、お一人にてお出かけにならぬよう」

支度を開始した。

「野暮用だと言うに」

アーチエルは急いで顔を洗い口を漱ぐと、下着をつけ髪の毛をまとめて縛り、簡単な服装にし、行く準備をした。

「お待たせしました」

「うむ。では行くか」

「はい！」

アーチエルはどこか緊張した面持ちだ。

アシユマが向かった先は宮殿の庭である。

アシユマの道場にも面している。

校庭のようにただ平らなだけ。

広さもそれ並みである。

被災したさいの避難場所にもなっている。

その庭へアシユマはやって来た。

庭の真ん中に誰か立っている。

それは重力の坩堝、『漆黒の門、裁きの扉』の中へ落ちて死んだはずのアー又だった。

「アー又様！！」

悲鳴を上げたのはアーチエルだった。

「アー又様、まさかアシユマさまとの決着を付けにここまでやって来たと……？」

「そのとおりだ。娘御よ」

「そういうわけだ。アーチエル、野暮用だ。部屋に帰って待っていてくれ」

「何が野暮用ですか！ デイー又王子が仰った『最大級の危難』じゃないですか！ わたし嫌よ、帰りません」

「避けて通るわけにはいかん」

「いいかな？ お二方」

アー又がそう言った。

「アー又よ。あのバヴェル上の戦いでお互いの決着がついたことにはならんか？」

「ならん。我が生きている以上、我とお主は切磋琢磨する関係。

どちらかが倒れるまで戦わねばならぬが運命さだめそれに今の我はアー又であってアー又でなし」

「どういう事ですか？」

アーチエルが首を捻った。

「奴の正体はエヴァイブ・エブルと言うわけだ」

アシユマが看破する。

「えっ？」

アーチエルが驚く。

「多分あの初めての戦いの後、他にナンバーズなどが居てアー又の身体を持って帰り今のアー又の身体に移植でもしたのだろう。その時に邪魔な記憶は封印された。それがバヴェル上の戦いの後、封印が解かれて元のエヴァイブ・エブルに戻った訳だ」

「いかにもその通り。見事看破したの。何故分かった？」

アー又のエヴァイブ・エブルが相槌を入れる。

「一度対戦した者の形を忘れたことは無い……が、分かんのがバヴェル上での戦いの後どうやって帰還したかだ」

アシユマが頭を捻る。

「我にも念導境界面と言うものはあるでな。それである重力の増埒から脱出したわけだ。ボロボロだったがな。それに一応我にも伴侶と言つ者がおつてな。そのものに身体を直してもらつたわけよ。これでいいかな？」

エヴァイブ・エブルが言う。

「成る程」

「なら、始めるか」

「記憶を取り戻しても尚、戦いに挑むかエヴァイブ・エブル」

「それが、剣者としての業よ。アシユマ・アトー」

「仕方なし、か」

「待つて！ エヴァイブ・エブル様！ 伴侶が居るなら何故その方の所で心静かに穏やかに暮らそうとは思わなかったのですか？」

「女子よの」

「女で何が悪いと言うのですか!?!」

「悪くは無い。女子は心穏やかな生活を望もうとする。男は逆に心に沸き立つ何かを探そうとする。それだけの事だ。さて、今度こそ始めるか」

「ああ」

アシユマが返事する。

「アシユマさま!」

「アーチエル。出るな」

「そうじゃ。男同士の世界故な……。さあ、アシユマよ最強の技で来るが良い」

「……………」

アシユマは腰を落とし鬼虎に手をかけて抜刀の体勢を取り半目になつた。

「矢張り居合いで来るか」

「……………」

「まあ、よかる」

エヴァイブ・エブルは天龍鬼を抜き八双に構えた。
アシュマは幾多の戦いを経て、無念無想の境地に至るまでになっ
ていた。

生死の狭間を超え一刀が万剣に成り万剣が一刀に帰る。
今、アシュマは辺りのあらゆる物と同化していた。
それを我思わずうちに行く。

明鏡止水、無想剣である。

アーチエルはただじつと戦いの行方を見守るだけだ。
季節外れの枯葉がハラハラと舞い降りてきた。

この枯葉が落ちきった時勝負が決まる。

枯葉はアシュマとエヴァイブ・エブルの間に落ちてきた。
かさり。

アシュマとエヴァイブ・エブルは弾かれたように前へ出る。
二人は生死の間仕切りをいとも簡単に踏み越えた。

(奥義！ 無想活殺！！)

アシュマは心の中で叫んでいた。

白い閃光がひらめいた。

思わずアーチエルが眼を瞑る。

あとは、一瞬の出来事であった。

アーチエルが恐る恐る眼を見開く。

暫くしてアシュマががくりと片方の膝を地に着ける。

「アシュマさま！！」

アーチエルが慌ててアシュマの方へ駆けつける。

「アシュマさまあ！！」

アーチエルがアシュマの元へ駆け寄った。

「無想剣、確かに拝見仕った……！！」

倒れたのはエヴァイブ・エブルの方だった。

「アシュマさま大丈夫ですか？」

「ああ、大分気を消費したがな」

「もう……慌てさせないで下さい」

「すまない」

アシユマは立ち上がってエヴァイブ・エブルの元へ歩いて行った。
「お師匠」

アシユマはエヴァイブ・エブルに声をかけた。

「我は、……………お前の師匠では、……………ない」

「いいえ。師匠です。俺の剣をここまで高めてくれたのはお師匠、
貴方が居てくれたからです」

「無想剣、……………お見事。よくぞあそこまで練り上げた」

アシユマの鬼虎は、見事にエヴァイブ・エブルの胸部を、凡そ心
臓の辺りまでを、切り割っていた。

致命傷だ。

「有難う御座います」

「では、……………逝く。……………骸は、……………流石にここでは、……………
まずかるうな」

「道場の脇に埋めましょう」

「頼む。……………最後に娘御よ」

「はい、エヴァイブ・エブル様」

「ア、……………アシユマを……………アシユマ・アトーを頼む。こやつ一人だ
けでは……………なんとも、心許ない」

「はい分かりました。アシユマさまの支えになれるよう精進いたし
ます」

「うむ。……………頼むぞ。……………青臭い、……………言い方だが、……………お主
達がいる、……………初めて保たれた……………平和だ。我が、言うのも、……………
お門違いじゃが……………言わせてくれ。……………有難う……………」

「師匠……………」

「エヴァイブ・エブル様……………」

「では、な……………」

「……………」

「……………」

「逝った」

「エヴァイブ・エブル様……」

二人は不世出の大剣豪エヴァイブ・エブルを道場脇の雑木林に埋めた。

「これで、エヴァイブ・エブル様も、心安らかに眠っていただけると宜しいのですが」

「然様だな。おいでアーチエル」

「はい？」

アシユマは突然に、アーチエルにキスをした。

アーチエルの好きな優しいキスを。

アーチエルもそれを受け入れた。

その時、庭に朝日が入り込んできて二人を包み込んだ。

この平和と幸せを守って行きたい。

そう思う二人であった。

いま二人は幸せの中にいた。

第十話 了

全刊 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5744f/>

デュエリスト アシュマ 第十話 無想剣

2010年10月8日14時53分発行